
無限の世界

蒼風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限の世界

【Nコード】

N7367T

【作者名】

蒼風

【あらすじ】

いくつかの世界がゲートと呼ばれる次元の門を通じて繋がる無限世界インテリワールド下

少年、風野刀弥かぜのうやは偶然にもそんな世界に渡ってしまう。

旅の魔術師リアと出会い、彼女と世界を巡る旅をすることになった。

旅によって出会い、もたらされるもの、それらを通じて刀弥はこの世界の住人へと変わっていく。

* 異世界成長系の物語です。剣術を使う主人公と魔術師のヒロインがメインです。

一章一話「無限の世界へ」(1)

声を掛けられ少年は振り返る。

青色の瞳が見つめる先には一人の少女が立っていた。

腰まで真っ直ぐ伸びた赤銅色しゃくどうじいろの髪が印象的で、それが風になびいて揺れていた。ぱちちりと見開かれた瞳には瑠璃色るりいろが宿っており、顔立ちも綺麗に整っている。

間違はなく美少女と呼ばれる類の人物だ。

周囲に立ち並ぶ木々が風の音と共にざわめいている。

少年は彼女をじっと見つめていた。

彼女も少年をじっと見つめていた。

何故、少年は彼女と出会ったのか。

物語は少し前まで遡る……

乾いた音が剣道場内に響いた。

艶のある床、陽の光を取り込む窓、それらの情景の真ん中で二人の人間が竹刀をぶつけあっていた。

一人は白のシャツと黒のズボンを着た短い黒髪の少年だった。まったくすぐ相手を見据えた青い瞳がとても印象的だ。

もう一人は少女。青い瞳や黒髪、そして顔立ちといった部分は少年と共通しているが、背中まで伸びたその髪が彼との違いを如実に示している。服装は白の服と黒のロングスカート。

少年の名前は風野刀弥^{かざのとうや}、少女のほうは風野紋乃^{あやの}。年齢は刀弥が一四歳で紋乃が一三歳。

両者は剣道場の中央で竹刀を斬り結んで押し合っていた。

互いに押し合っているため、ぶつかり合っている竹刀はどちらも小刻みに震えている。

けれども、やはりというべきか。徐々にだが刀弥のほうが始めていた。

己の不利を悟った紋乃はすぐさま後ろへと下がり、右足を前に竹刀を左へと引いた構えを作る。

この構えは……

紋乃の構えを見て刀弥がそう思った直後、彼女は右足で床を強く踏み、飛ぶような勢いで刀弥に迫ってきた。と同時に左へと引いていた竹刀を思いっきり振り抜いてくる。

風野流剣術『疾風^{しっふう}』

地を強く蹴って相手の傍ら^{かたわ}を通り過ぎる瞬間、速度を乗せた一撃を放つ剣技だ。

これに対して刀弥は防御を選択。

竹刀がぶつかり合い、その衝撃が竹刀を通じて刀弥の腕にも伝わってくる。

その勢いに体が下がりそうになるが、それでもなんとか刀弥は踏み止まった。

疾風を防がれた紋乃は通り抜けることができず、その動きが止まってしまう。

すかさず刀弥は突きを放ち、反撃に移る。

紋乃は身を傾けることで突きを逃れ、そのまま距離をとろうと後ろへ飛んだ。

しかし、逃がさないとはかりに刀弥が彼女を追いかける。

追いついた直後に縦の一閃^{いっせん}。その流れの早さに紋乃は思わず目を見開く。

完全に意表を突いた攻撃。にも関わらず、紋乃は何とかこれを受け止めることに成功した。

いい反応だ。

竹刀を結びあわせながら、刀弥はそんな称賛を頭の中で漏らす。

かつての彼女は、この手の意表を突いた攻撃に反応できず敗北するというパターンを何度も繰り返していた。

だが、今回は見事に止めてみせた。実力が伸びている証拠だ。それを嬉しく思いながら、刀弥は次の行動を始める。

竹刀を結びあわせているため、今、彼女の注意は上へと向いている。

故に彼は下、右足による足元を狙った蹴りを見舞った。

別に竹刀以外を使うのは卑怯^{ひきょう}ではない。これは剣道の試合ではないし、ルールも定めていない。予想外の動きに対応できなければ、それは相手の想定が甘いだけの話だ。

予想通り、上に警戒を集中していた彼女はそれ故に気付くのが遅れ、足元を崩される。

体勢を崩していく紋乃。そこを狙って、刀弥は再び竹刀を振り下ろす。

バランスを崩した状態で攻撃を受け止めるのは難しい。

けれども、紋乃は左手で傾いた己の身を支えようと、右手だけの竹刀でこの攻撃を受け止める。

刀弥の攻撃の重さに彼女の竹刀が若干押されるが、それでも彼女は何とかこの攻撃を防ぎきってみせた。

そして、その直後に反撃の足蹴りを繰り出す。

それを後ろへと飛んで避ける刀弥。だが、それは相手も想定済み。

刀弥が後ろに飛んだのを見計らって紋乃が起き上がる。

そうして今度は紋乃のほうから攻めてきた。

刀弥に近づき右から左、斜めに振り上げる剣戟を仕掛けてくる。

それを竹刀で防ごうと竹刀を右側へと運ぶ刀弥。

けれども、刀弥の竹刀に紋乃の竹刀がぶつかることはなかった。

彼女が攻撃を止め、新たな構えを作ったからだ。

さっきの攻撃は囷か。

仕掛けると見せかけ、こちらの防御姿勢をとらせたところで本命で空いた部分を攻める。いい攻撃方法だ。

新たな構えは右腕だけで持った竹刀を腰のバネを使って後ろへ回し引き絞るといふ、弓矢を連想させる構えだった。

そして、踏み込みと同時に矢のような刺突しとつを放ってくる。

風野流剣術『一突いっとう』

踏み込みの速度と腰のバネを使った突きの剣技。

狙いは竹刀から離れた左肩。防御は間に合わない。

瞬間の判断で回避を選択。反時計回りに身を回すことで一突いっとうから逃れる。だが、躲すだけで刀弥は終わらせるつもりはない。

身を回した体を利用して、横の一閃を紋乃に目掛け放つ。

技を放っている最中の彼女は避けることも防ぐこともできない。

そのまま、剣道場内に快音が響き渡った。

「はぁ、負けました」

溜息と共に紋乃は敗北の言葉を口にした。その顔には残念という感情がありありと浮かんでいる。

「技に頼りすぎだ。技は強力だがその分、癖が強い。使いどころを間違つと最後のようなことになるぞ」

それを聞いて彼女は表情をしかめた。

「それは……わかってるんですけど……」

自覚はあるが、中々直せない。刀弥にも覚えがあることだ。

「まあ、しっかり直せ」

そう励まして刀弥は紋乃の肩に右手を置いた。と、ここで先程の戦いの途中で抱いた感想を思い出す。

「あ、それと……途中、追撃の一撃を防いだところ。あれはいい反応だったと思うぞ」

それを聞いた途端、それまで沈んだ面持ちだった彼女が一転して嬉しそうな表情に変わった。

「本当ですか？」

「ああ、今までだったら食らってたしな」

その表情のまま詰め寄る彼女に押されつつも、刀弥は素直に肯定する。

すると、褒められた彼女はますます上機嫌になっていく。

「全く……」

その反応に呆れる刀弥だが、その面差しはどこか微笑んでいるようにも見えた。

そんなときだ。

剣道場の入り口が開き、そこから一人の女性が顔を覗かせた。

紋乃によく似た容貌ようめいに、どこか落ち着いた感じの雰囲気。顔立ちだけ見れば若く、初めての人が見れば二人の姉だと思ってしまうだろう。

だが、こう見えて二児の母親なのだ。

「母さん。どうしたんだ？」

自分の母親、風野智子とせこの姿を認めた刀弥が用件を問い掛ける。

「昼御飯ができたから呼びに来たのよ」

智子の返答に二人が時計を見ると確かに時間は正午を指している。どうやらかなりの間、熱中していたようだ。

「わかった。すぐ帰るから母さんは戻っていいよ」

「わかったわ」

刀弥がそう返事をする。智子は満足した表情を浮かべ、家へと戻っていった。

二人の家は剣道場の右隣にある。そのため気軽に行き交うことができるのだ。

「それじゃあ戻るか」

「はい」

そうして二人は竹刀を壁に立て掛けると、昼御飯を食べに家へと戻るのだった。

風野家の家は日本家屋で上から見た場合、L字型の形になってい

る。横線部分の一番右側が玄関で右上の空きは庭になる。白の壁と黒い瓦の屋根の家で縦線の内側部分が廊下という構造だ。

「「ただいま」」

玄関に上がった二人は帰宅の挨拶を述べると、靴を脱ぎそのまま居間へと向かう。

居間へと向かう途中、美味しそうな匂いが漂ってきた。そのことに気が付き、二人は少し顔を綻ばせる。

居間に入ってみると、既に昼御飯はテーブルに綺麗に並べられていた。どうやらメニューはご飯と野菜と肉の炒め物らしい。

「戻ってきたか」

料理に気を取られていると、そんな声が聞こえてくる。声の主は、先に席に着いていた二人の父親だった。

風野源治^{げんじ}。どこか厳格そうな雰囲気はあるが、これでも理解のある父親だ。あまり顔立ちが二人とは似てないが、それは二人とも母親のせいである。

風野家は源治と智子、刀弥、紋乃の四大家族だ。源治の仕事は以前は警察官だったが、今は辞めて剣道の道場を開いている。それ以外は割と普通の上手くいつている家庭だ。

「剣術の訓練をしていたそうだな」

「ああ、紋乃とな」

席に着きながら刀弥がそう答えると、同じく席に着いた彼女が首肯する。

風野家は代々祖先から続く剣術を伝承してきた。当然、刀弥たちにもそれは求められている。ただし、剣術さえ伝承し続けるのなら後は何をしても 当然、犯罪以外なら 問題ないので剣道場を継ぐ必要はない。

「そうか。それで紋乃の剣術はどうだった？」

剣術の訓練は主に源治が二人の指導をしているが、時折、今日のように刀弥が紋乃の指南しなんをするときがある。

紋乃は刀弥のほうが親切だと言うが、本人からすれば教えるほうはまだまだだと思っている。

「技に頼ろうとするところはまだ直ってないけど、実力は間違いなく上がってると思う」

尋ねられた刀弥は、思ったままの評価を口にした。その評価内容に思わず紋乃が頬を緩める。

「なるほど」

源治はそう呟き、当の本人にその視線を移した。視線が自分に向いたことに気が付いた紋乃は、慌てて表情を元に戻す。

そこに丁度、智子がやってくる。

彼女が席に座ると、四人はいただきますと言って昼御飯を食べ始めた。

「午後はどうするつもりだ？」

昼御飯を食べていると、源治がそんなことを尋ねてきた。

「ちよつと、本を買いに外に出るつもりだけど」

少し迷った後、刀弥はそんな返答を返す。

「それなら、私も行きたいところがあるので一緒に行きましょう」

すると、それを聞いていた紋乃がそんなことを言いだしてきた。

「ああ、いいぞ……」

「じゃあ、出掛けるときになったら言ってください」

「……本屋つてことは駅前まで行くのかしら？」

そうして二人で話していると突然、智子が話に入ってくる。

「そうだけど……何か買い物？」

駅前には智子がよく利用しているスーパーがある。刀弥もそのことは知っていたので、そう予想したのだ。

「ええ、メモを渡すからついでに買ってきて」

「わかった」

何でもないという様子で刀弥が頷く。

「それじゃあ、お願いね。あ、お金は返ってきてからでいいかしら？」

「ああ」

まだ財布に余裕があることを思い出しながら、頭を縦に振る。そうしてこの話は終了し、皆食事に専念するのだった。

やがて、昼御飯が終わり、皆が自分の食器を流し台へ運んでいく。そうやって食事が終わると、それぞれが思い思いの時間を過ごすのであった。

刀弥はというと食後の運動代わりにと、庭で素振りの練習をしているところだった。

庭と言っても土と雑草しかないのです、それほど綺麗な庭とは言えない。しかし、広さは十分にあるので素振りのような練習をするにはもってこいだ。

そんな場所で刀弥は一心不乱に竹刀を振っていた。竹刀が振られる度に風を斬る音が庭に鳴り響く。

メトロノームのようなそのリズムを聞きながら、ただひたすらに竹刀を振る刀弥。彼はそれを続けながら、竹刀を振る己の感覚に意識を沈めていく。

ほどなくして、彼は己の体の動き以外の全てを感じなくなった。

目に見えるものは黒。音もなく匂いもない。唯一感じるものは竹刀を振る己の感覚のみ。

そんな世界で彼は己の体の動きについて分析を始めるのだった。

客観的に見て、刀弥の素振りすぶりは十分速い。普通の人なら、まず反応することもできないだろう。

しかしながら、刀弥は己の動きに満足していなかった。

無駄な部分に力が入っている。体全体の連動が悪い。もっと必要な部分から力を引き出さないといけない。

それが彼の感想だった。

無駄な部分に力が入っていると、それが邪魔になって拳動が鈍り、結果、威力と速度の低下に繋がってしまう。

故にそれを改善することで、速度と威力の無駄な損失を減らそうというわけだ。

一方、体全体の連動はある動作の際に体の一部分だけを使うのではなく、体全体を同時に使ったり、次々と体の各部分を使っていく動作のことを言う。

これによって、体の負荷の分散や同時使用による動作速度の向上、各部分を次々と使っていくことによる力の損失の低下といった効果を導くことができるのだ。

どちらも僅かな変化だが、何事も積み重ねが大事。やっていく意味は十分にある。

だが、いずれも直していくのは中々難しい。こういうのは既に体が癖として覚えこんでしまっているためだ。

そのため、これを直す方法は基本的に理想の動きを何度も繰り返して、新たに体を覚えこませるしか方法がない。

まず刀弥は体の細部を一つ一つに意識を回して、ゆっくりと体を動かしていく。

意識を向けるのは腕だけではない。背中や腰、足もまた同じだ。

そうして意識が体の各部に向いたのを確認すると、今度は体の動きを理想的な動作へと体の動きを修正していく。動き出しの力の入れ方、腕と足を動かすタイミング、腕と肩との連動。思いつく限りの部分を彼は修正していった。

後はこの動きを繰り返し覚えこませるだけだ。しかし、そこで邪魔が入った。

突然、竹刀の叩く音と痛み、体が傾くのを刀弥が感じたからだ。それが原因で彼の意識が現実に戻ってくる。

痛みのするところをさすりながら背後を見ると、音の主が笑顔で彼の視線を出迎えた。

「油断大敵です」

「……何か用か？」

せつかくいい感じに気分が乗ってきたところで邪魔をされたので、刀弥の顔は不機嫌だ。

鋭い目付きで紋乃を睨む。

「えっと……そのもう二時頃ですけど、鍛錬たんれんに集中して出掛けるのを忘れていませんか？」

想定外の反応に紋乃は戸惑いつつも、なんとかそれだけは言い返した。

「え？」

彼女に言われて慌てて携帯で時間を確認してみると、確かに彼女の言う通り時間は二時を少し過ぎてている。
どうやら素振りに熱中しすぎてたらしい。

「やはり、また剣に熱中していたようですね」

微笑を浮かべそう言ってくる紋乃に、刀弥は少しだけ顔を赤くする。

「みたいだな。それじゃあ出掛けるからお前も準備してこい」
「はい」

嬉しそうな声で返事をする紋乃。

それを聞いて刀弥も己の準備を済ますために自分の部屋へと戻ることにするのだった。

一章一話「無限の世界へ」(1)(後書き)

07/05

見直してみたら文章に違和感を抱き少し修正。

内容を変えず文章表現だけ変えただけのつもりです。

ついでに年齢が間違っていることに気付きこちらも修正。

07/24

できる限り同一表現を省こうと修正。

12/13

Web向けに改行で文に間隔を空けました。

ついでに文の一部を修正。

12/18

指摘された箇所を修正。

一章一話「無限の世界へ」(2)

出掛ける準備といっても刀弥がしたのは、財布を持って黒の上着を白のシャツの上に羽織っただけの簡単な準備だけだ。

紋乃も服装はそのまま、白いハンドバックを持っただけの簡易なもの。

今、二人は並んで歩いていた。その横を車が何台か通り過ぎていく。

今日は二〇二〇年五月三日。ゴールデンウィークの初日だ。そのせいか、車や人の行き交いは多い。

空は大きな雲が多いが、概ね晴れで間違いないだろう。

「そっぴえばお前はどこに行く気なんだ？」

ふと、紋乃の行き先を知らないことに気付いた刀弥。彼は隣を並んで歩く彼女に訊いてみることにした。

「えっと……化粧品です」

少し恥ずかしそうな表情で、彼女はそう返事を返す。

「場所は？」

「本屋とスーパーの間ぐらいにあります」

記憶を探ってみると、確かに思い当たる店があった。

「じゃあ、俺、紋乃、母さんの順番で回るか」

「はい……ところで兄さんは一体、何の本を買ったつもりなんですか？」

首を傾げながら紋乃は刀弥の方を見る。

「何の本って普通にライトノベルだけだ」

「棚に並んでいる中で、何か新しいのがでたんですか？」

ライトノベルと聞いて紋乃が関心を持つ。彼が買っているライトノベルのうち、いくつかは彼女も読んでいるためだ。

「いや、面白そうなのが出たから買ってみるだけだ」

「では、機会があれば読ませていただきます」

それについて刀弥から特に返答はなかった。これはつまり別に構わないという意味だ。

貸し借りについて、二人の間に遠慮はない。

先程の会話のように彼女が刀弥のライトノベルを読むこともあれば、彼が紋乃の少女漫画を読みあさることもある。

もちろん、丁寧に使うことが大前提ではあるが、二人とも他人の物を適当に扱うほど大雑把な性格ではないので今のところ問題は起こっていない。

「それにしても、兄さんはそういうのをよく買いますけど好きなんですか？」

「まあ、俺的にはかなり面白かったしな。設定や登場人物の内面がわかるのもよかったし……」

刀弥がライトノベルに興味を持ったのは、中学二年生の頃からだ。なんとなく表紙に惹かれて買って読んでみたところ、翌日にはそのシリーズを全部買ってしまった。

そうして中学三年になった今では、数も増えて今や棚を埋め尽くそうとしている。

これでも飽きた本は古本屋などに売りに言ってるのだが、実際はそれよりも買う本のほうが多いので棚の本の数が減らないのだ。

紋乃の質問はそんな状態を見て、『自分の兄はライトノベルがそんなに好きなのか?』と言っているのだと刀弥は解釈した。

しかし、彼女は首を横に振る。

「いえ、そういう意味ではなく……兄さんが買う本は戦闘ものが多いので、そういう内容が好きなのかなと……」

「ああ、なるほど」

それを聴いて、刀弥は先の質問の意味を理解した。

事実、刀弥が購入するライトノベルの内容は、そういうものが多い。好きか嫌いかと訊かれれば好きだと答えるだろう。

「まあ、好きだな」

「それは、物語で実際に戦う登場人物たちに自分を重ねているからですか?」

新たな問いに、少し熟考する。

その指摘通り、そういう面がない訳ではない。しかし、正直にそのことを言うのも何だか恥ずかしい。

「……まあ、ないとは言えないな」

しばらく刀弥は悩んだが結局、正直に話すことにした。

とはいえ、やはり恥ずかしいものは恥ずかしい。口に出しながら、顔が赤くなつていくのを感じる。

そんな彼に、紋乃が新たな問い掛けを投げ掛けてきた。

「兄さんは将来、剣術が活かせる道にいきたいと考えてるのですか？」

「は？」

いきなり話が大きく変わったような気がして、思わず刀弥歩みを止めてしまつた。

それを見て紋乃もまた足を止めた。

「何でいきなりそんな話がでてくるんだ？」

落ち着きを取り戻し、再び歩を進める刀弥。

ライトノベルの話が将来の話とどう繋がるのかわからず、彼は首をひねるしかない。

そんな彼の疑問に紋乃が恐る恐る答えた。

「その……兄さんがそういう内容の本を買うのは、兄さんの理想がそこにあるからだと思っていたので……」

「つまり、お前は俺が『剣術で大暴れしたい』とかそういう感じの願望を抱いていると思つてたわけか？」

自然と目が半目になつていく。

そんな刀弥を見上げながら、紋乃が申し訳なさそうな顔をしながら頷いた。

その反応に刀弥はつつい溜息が出てしまう。

「別に俺はそんなこと、思っていないんだがな」

「ですが、どれだけ剣術の才能があるうとも何の意味も成さないのが今の現実です」

そうこぼす紋乃の顔はどこか悔しげだった。

それを見て刀弥は苦笑してしまう。

「それはそれで平和なことなんだから、いいことだと思うけどな」

「それはわかってます」

とはいえ、その表情は納得しきれていないという様子だ。

仕方なく刀弥は話につき合うことにした。

「まあ、剣術は好きだし、せっかく磨いてきたものだ。それを活かせる道にいききたいという思いはある」

そこは否定しない。それが率直な気持ちだからだ。

「しかし、だからと言って『剣術で大暴れしたい』とは思っちゃいない」

「そうなんですか？」

その問いに刀弥は首を縦に振る。

「大体、お前はとうなんだ？」

「え？」

「『え？』じゃないだろ。お前だって俺ほどじゃないけど、いろいろ読んでるじゃないか。そう言うお前のほうが、そういうことを考えているんじゃないのか？」

「そ、そんなことは……」

慌てた様子で紋乃が否定を返した。

「なら、俺だってそんなこと考えちゃいない。これでこの話はおしまいだ」

「……はい」

何とも言えない表情のまま、彼女は承諾する。

そんな雰囲気を払拭する意味もあってか、刀弥は新たな話題を振ることにした。

「大体、将来の職業よりも今は高校受験の心配のほうが先だろう？」

「それもそうですね」

今更ながらそのことに思い至り、思わず紋乃は苦笑してしまう。

中学三年生の今年、刀弥は高校受験が控えていた。

勉強はそれなりにでき成績も悪くはないが、やはり人生の大きなイベントということもあって多少の緊張はある。

「確か、近所の高校を受けるつもりなんですよね？」

「ああ」

できれば公立へ行きたいと刀弥は考えている。あまり両親に金銭的な負担を掛けたくないという思いがあるからだ。

「部活動は何かやるつもりなんですか？」

「できたら、剣術の訓練に専念したいんだけど……」

その辺は少し悩んでいる。

そういう思いがある一方で、部活動に興味がないわけではない。

もし入るとしたら、剣道部だろうか。

他の部活にも興味はあるが、やはり剣に惹かれるものがある。

二人が通っている中学校には剣道部がなかった。もっとも、あったとしても入っていたかどうかはわからなかったが。

というのもも中学に入った当時は剣術の訓練が厳しく、部活に通う余裕などなかったからだ。

今でこそ、それらも余裕でこなせるようになったが、あのときはかなり大変だった。

訓練自体は小さな頃からしているが、中学に上がったと同時にいきなりその量と難易度が上がったのを刀弥は覚えている。

紋乃のときはまだマシだったが、刀弥はかなり厳しい訓練を課せられていた。

恐らく、それだけ期待されていたのだろうと今になって思う。

「もし、入るとしたら何部ですか？」

「剣道部のような気がする」

思ったままのことを口に出した。

すると、紋乃は予想通りという顔を浮かべる。

「そう言うお前だったらどこにするんだ？」

その反応に少しむっとし、仕返しとばかりに尋ね返す。

「私もきつと剣道部ですね」

「なんだ。同じじゃないか」

その指摘に、紋乃もむっとした顔を見せる。

「いいじゃないですか。別に……」

「別に馬鹿にした訳じゃないんだけど……ただ、考えることは同じなんだと言いたかっただけだ」

「……そうですか」

その言葉を聴いて彼女は機嫌を直した。

やがて、紋乃が新たな話題を振ってくる。

「そういえば兄さんは休みの間、ご友人たちとどこかに出掛ける予定はないのですか？」

「ないな」

はつきりとした口調で刀弥は断言した。

「……思ってますけど、兄さんってあまり交友関係が広くありませんよね？」

「ほっとけ」

そのことについては、刀弥自身も自覚している。

剣術の訓練を優先していたせいもあって、刀弥はあまり人付き合いが良くない人間だと周囲から認識されていた。

本人もそれをどうにかするつもりがなかったので放っておいた結果、今の状況と言う訳だ。

現状、友人と呼べるような付き合いのある人間は数えるほどしかない。

「第一、全くいない訳じゃないだろう？」

「私の知る限り、兄さんと交友関係があると言えるほどの付き合いがあるのは、幼馴染の双葉姉妹ふたばと従姉の高峰さんたかみねぐらいなんですけど……どちらか女性なのはわかってますよね？」

「……………」

どちらも付き合いは長いのは厳然たる事実なので、一応間違っていない。しかし、女友達しかいないと思われていたのは刀弥としては不本意だ。

「他にもいるぞ。神永かみながの奴とか……………」

「……………ああ、父さんの友人関係の子ですね」

少し思い出すそぶりをした後、紋乃がそう返してきた。

時折、刀弥たちは父、源治に連れられて彼の武術関係の友人に会いにいつている。その目的は剣術の訓練もあるのだが、相手方の子供との交流もその中に含まれている。どちらかと言えば、従姉の高峰もこちら側の付き合いと言える。

歳の近い者同士、仲良くなって互いに切磋琢磨しあう。それが大人たちの考えた目論見だ。

実際、そうやって仲良くなって個人的に交流している人もいる。

先程、名前を挙げた神永という人物もその一人だ。

ただ……

「そういえば、そちら関係では兄さんは人気者でしたね」

「まあ、意味は違うがな」

その言葉の意味を考えながら、刀弥は苦笑気味に答える。

その理由は、刀弥が彼らと行った試合の戦績と関係があった。

全試合全勝。

刀弥は、今まで同年代相手の試合では負けなし連勝を維持している。そのため、次こそは勝とうと多くの者たちがリベンジに燃えているのだ。

源治やその友人たちにとっては目論見通りの展開なのだろうが、当人としては少し困りものだ。

なにせ会えば毎回『勝負だ！』と仕掛けられるのだから……

「……つと見えてきたな」

そんな話をしているうちに、目的地である本屋が見えてきた。

「さて、さっさと買って他の用件も終わらせるとするか」

「あ、待ってください」

これ以上、この話題でからかわれるのも嫌だったので刀弥は話を切り上げ、本屋へ急ぐことにした。

そんな彼の後を、紋乃が慌てて追いかける。

そうして兄妹は本屋の中へと消えていくのであった。

一章一話「無限の世界へ」(2)(後書き)

07/05

文章表現を若干修正

07/24

できる限り同一表現に対して修正を実行。

12/18

指摘された箇所を修正。

一章一話「無限の世界へ」(3)

「あれ、紋乃に刀弥さん。こんなところでどうしたんですか？」

紋乃の買い物を終えた直後、二人を呼ぶ声が耳に入った。

声のほうへと振り向くと、そこには瓜二つの容姿をした少女たちが二人立っていた。

「梨絵、梨花」

「久しぶりだな。双葉姉妹」

紋乃は嬉しそうな、刀弥は、なつかしそうな声で少女たちに声を掛ける。

「刀弥さん、久しぶりです」

「……お久しぶりです」

片方の少女は明るく、もう片方の少女は静かに二人に挨拶をしてきた。

双葉梨絵と双葉梨花。先程の話に出てきた幼馴染の双子だ。明るいほうが姉の梨絵。静かなほうが妹の梨花だ。

刀弥から見れば一っ年下の妹みたいな存在で、同じ学校に通っている。紋乃とは同じクラスの友人らしい。

「元気そうだな」

「刀弥さんも元気そうで」

「……二人とも、買い物？」

挨拶もそこそこに梨花がそう問い掛けてきた。

「はい」

自慢するかのように紋乃が上機嫌に頷く。

「それなら丁度良かったです。私たち最近オープンしたお洋服屋に行こうと思ってたんですけど、よかったら一緒にいきませんか？」

「え？ それって皆が噂していたあそこですか!？」

興奮した様子で紋乃が反応するが、そこで母親の用件を思い出したようだ。表情が固まってしまう。

「全く……行って来いよ。母さんの買い物は俺が済ませて帰るから」

そんな彼女を見て刀弥は溜息を吐くと、そう言って助け舟を出すことにした。

「ですが……」

兄に用件を任せて、自分だけ楽しむということが心苦しいのだから。

紋乃が困った様子で悩んでいた。

「気にするな。洋服屋なんて俺が言ってもつまらないだけだし。第一、俺が行っても荷物持ちにしかない。そんな面倒を押し付けられるくらいなら、母さんの用事を済ませて先に帰ってるさ」

そうして刀弥はその場から去ろうとする。

「それじゃあな。あんまり遅くなるなよ。双葉姉妹もな」

「はい、また」
「また」

梨花や梨絵の別れの言葉を聞きながら、刀弥は母親の用件を終わらせるべく早足でスーパーへと向かうことにするのだった。

買い物済ませた刀弥は帰途についていた。

メモを渡されたときに内容を確認してなかったので気が付かなかったが、量がかなり多い。

ひよっとしたら、紋乃と買い物に行くということが多めに頼んだのかもしれない。

「まあ、それはどうでもいいか」

少々重いが、きついというほどではない。その程度には体を鍛えている。

空を見上げてみると太陽は既に西に大きく傾いており、大きな雲の多かった空は今や雲ひとつない空へと変わっていた。

そんな空を見上げなら、刀弥は歩く。

ふと、刀弥は行きに紋乃と交わした会話を思い返した。

「『剣術で大暴れしたい』か……」

先のときに言ったように、刀弥はそんな思いを持ってはいない。ただ、少し、ほんの少し現状を残念に思う心があるのは確かだ。

剣術が用を成さない時代……

銃がその力を示す現在、どれだけ剣術を磨いたところでそれが必要とされることはもはやない。

そのことは、剣術が好きな者として残念に思っていた。

「はあ、考えたところで無意味だな」

思いと共に大きく息を吐き出す。

そんなことを考えて現状が変わるわけではない。

それに、どれだけ意味のないところで自分が剣術を好きであることは事実だ。

ならばそれでいいじゃないかと、刀弥はそう結論をする。

ふと、正面を見ると、公園の入口が視界に入ってきた。

「……少し休むか」

そう呟くと、刀弥は公園へと向けて歩を進ませる。

肉体的にはまだ平気だ。

ただ、先程の考え事のせいか、気分が少し重かったたので精神的に少し休憩をしたいと思いますっていたところではあったので丁度良かった。

そうして彼は公園の入口前に立つ。

そこは小さな公園だった。

遊び場はブランコとすべり台と砂場と僅かな上、その遊具すらも小さいという有様だ。そのせいなのか、夕方だというのに閑散としている。

寂しい公園だなと、刀弥は辺りを見回しながらそんなことを思った。

幸い、ベンチが一つだけがあった。

そこで休もうと思い、彼は公園の中へと入っていく。

その時だった。

突然、刀弥の視界が真っ白に変わる。

何だ？

いきなりの事態に、彼は反射的に手をかざした。

遮った手の隙間から眩しさが漏れる。どうやらこの白は光のよ
うだ。

一体、何がこの光を生み出しているのか？

そんな疑問を考えている間にも光はその光量を増していく。
もはや手で遮っていても、目を開けていられないくらいだ。

そして、光に全身を包まれたと思った瞬間

刀弥は、足元の地面の感触が消えたことに気付いた。

「え？」

何の前触れもなく地面の感触が消えたことに刀弥は驚く。

落ちるといふ感触はない。それは幸いなことなのかもしれないが、地面から離れたことなどない人からすれば浮いているという状態だけでも不安と恐怖が生まれてくる。

一体、何が起こったのか？ どうしてこうなったのか？

そんなことを考えながら刀弥の意識は暗闇の中へと落ちていくのだった……

鳥の囀りが聞こえてくる。

「ん……」

その音に誘われるように、刀弥の意識は覚醒していった。目を開けて最初に見たのは、緑色と水色。青々とした木々と空の色だ。

ここは？

気だるさを感じながら、刀弥は己の記憶を探る。

そして公園で自分の身に起きたことをはたと思い出すと、その途端、彼はその身をガバッと起こした。

おかげで意識は完全に覚醒。目覚めた瞳で刀弥は辺りを見回す。

そこは森の中だった。

右を見ても、左を見ても、前を見ても、後ろを見ても森、森、森

……

視界は木々や茂みによって遮られ、ほとんど遠くまで見ることはできない。

いきなり見知らぬ森の中にいるという事実には、刀弥は呆気にとられてしまう。

空を見上げると、天気は快晴で小さな雲が青の海を漂っていた。

陽の光は丁度いい温かさで、時折吹く風は心地良い、思わずまた眠りたくなるような環境だ。

しかし、今は眠気よりも驚きのほうが勝っている。

何故、自分がこんなところにいるのか。地面の感触が消えた以降の記憶がないため、何が起ってここにいるのかわからない。

あれからどのくらい経ったんだ？

偶然にもそのことに気が付いた刀弥は携帯の時計を見て、そして驚いた。

携帯の時間は一九時を指していたのだ。しかし、上空の空はまだ昼だと言われても違和感のない明るさ。

何がどうなっているのかわからず、刀弥は混乱する。

ともかく現在位置を探ろうと、さらに携帯を操作するが返ってきたのは圏外という絶望。

その結果に刀弥はますます焦りを募らせてしまう。

これからどうするかと思案していた、そのときだった。

「どうしたの？ 大丈夫？」

背後から見知らぬ声が聞こえてきた。

その声に振り返ると

そこには一人の少女が立っていた。

見た目からして年齢は同年代。腰まで真っ直ぐ伸びた赤銅色の髪が印象的で、それが風になびいて揺れていた。ぱっちりと見開かれた瞳には瑠璃色が宿っており、顔立ちも綺麗に整っている。

間違いなく美少女と呼ばれる類の人物だった。

服装は上は白い服の上に緋色を基調とした上着を羽織っており、下は赤を基調としたチェックのスカートをはいている。右腰にはウ

エストバッグ。

何より目につくのは、彼女が両手で持っている碧あおの宝石のついた金色の杖だ。

杖の長さは少女の肩ぐらいまであり、先端はU字状になっている。宝石はそのU字の間に挟まるような形で取付けられていた。かなり凝った装飾だ。

周囲に立ち並ぶ木々が、風の音と共にざわめいていた。

刀弥は少女をじっと見つめている。

少女もまた刀弥をじっと見つめていた。

「えーと、意識はある？」

こちらが反応しなかったのを訝しんだのだろう。心配そうな声で少女がそう訊いてきた。

「え？ ああ……」

彼女に見惚れていた刀弥は、その一言で我に返った。

見惚れていたことが恥ずかしくて、ついついばつの悪い顔になってしまふ刀弥。

しかし、彼女は気にせず言葉を続ける。

「一体、何があったの？」

その言葉に、刀弥はどう答えたものか迷ってしまった。

自分自身も何が起こったのか全くわからず、混乱しているのだ。

そう聞かれてもどう答えたらいいのかわからない。

「あ、もしかして警戒しちゃったかな？ 大丈夫。怪しい人じゃないから」

そんな風に刀弥が迷っていると、少女は答えない理由をそんな風に勘違いしてしまったようだ。

「私はリア・リンスレットっていうの。よろしくね」

刀弥の返事も聞かずに彼女は自身の名前を名乗った。

やはり、日本人じゃなかったか。

日本人離れた容姿だったのでひょっとしたらと思っていたが、案の定そうだったようだ。

とりあえず刀弥も名乗り返すことにする。

「よろしく。風野刀弥だ」

「風野刀弥……変わった名前だね」

刀弥の名前を聞いて、リアがそんな感想を返してきた。

その感想に刀弥は疑問を得る。

ここが日本ならこんな名前、嫌になるほど聞くはずだ。しかし、彼女は変わった名前だと言った。

一瞬、何となく嫌な可能性が刀弥の頭をよぎる。

「悪いんだけど、ここがどこかわかるか？ 気が付いたらこんなと

ころにいて、場所がわからないんだ」

その思考を頭を振って振り払うと、ともかく情報を集めようと刀弥は場所を訊ねることにした。

疑問は後だ。場所さえわかれば、最悪海外でも帰ることはできるはずだと心の中で自分を励まして……

しかし、事態は悪い方向で刀弥の想像通りだった。

「ここはフォースレイのエセドニア王国内にある東側の森だよ」

どこだ！？ そこは！！

全く聞き覚えのない国名、地名に刀弥は思わず心の中で叫んでしまふ。

しかし、これで刀弥は確信した。

何となくそんな気はしていた。ただ気のせいだと思いたかった。

ここは、俺の知っている世界とは違う世界だ。

その事実にも刀弥は思わず膝をついてしまふ。

「え？ ちょっと、どうしたの？」

予想外の反応にリアは驚き、刀弥に声を掛ける。

「ははは……」

しかし刀弥は放心状態になっており、もはやリアの声も耳に届いていないようだった。

「うわあ、ちよっとまずいかも……」

事態を重く見た彼女は、ある決心をすると彼の背後に回り……

「えい」

両手で持っていた杖で、彼の頭を殴った。

鈍い音が響き、刀弥はそのまま前のめりに倒れる。

「ん……」

やがて、殴られた箇所を撫でながら刀弥が起き上がった。

「ごめん。痛かった？」

リアが申し訳なさそうに謝って、刀弥に近付いてくる。

「ああ……」

殴られた痛みで正気に戻った刀弥は、そう言いながら首を左右へと振る。

頭の後ろが少し痛いがそれ以外は問題ない。どうやら大丈夫のようだ。

「一体、何があったの？」

刀弥の無事を確認すると早速、リアが心配そうに訊ねてきた。

一人で溜め込んでも仕方ないか。

ここは打ち明けて相談したほうがいろいろとわかるかもしれない。そう考えた刀弥は、自身の身に起こったことを簡潔に彼女に説明することにしたのだった。

一章一話「無限の世界へ」(3)(後書き)

07/05

文章表現を修正。

07/24

できる限り同一表現の修正を実行。

一章一話「無限の世界へ」(4)

「渡人か……」
わたりにびと

刀弥が説明を終えると、リアは第一声にそんな言葉を呟いた。

「渡人？」

「外の世界から何らかの方法でやってきた人たちのことを、私たちはそう呼んでるの」

「やっぱりここは、俺の知っている世界じゃないのか」

彼女の口からそう言われたことで、ようやく刀弥は諦めがついたようだ。若干、固かった表情が和らいでいる。

「刀弥は、ここが自分のいた世界とは違う世界だと自覚してるんだね？」

「聞いたことない国だったし、その前にフォースレイとか言ってたしな。あれは何だったんだ？」

「あれは世界の名称」

「世界の名称？ ここはそんなにいくつも世界があるのか？」

場所を述べるくらいでいちいち世界名を付けるということは、そうしないとどこにいるのかわからないということだ。少なくとも二つ以上の世界があることが前提になる。

しかし、そう考えたとしても刀弥にすれば信じられないことだった。

別の世界に来たことすら彼にとっては驚くべきことなのに、その上、他にも世界があると言うのだから無理もないだろう。

「うん。ゲートって呼ばれている世界と世界を繋ぐものがあるんだけど、それを使って他の世界へ行き来することができるの」

特に自慢する様子もなくリアが説明をしてくれた。

その様子から、彼女たちにとってゲートとはあつて当たり前^{インフイニティワールド}の存在なんだということがわかる。

「そうして、ゲートで繋がった世界群のことを、私たちは無限世界インフイニティワールドって名付けてるの」

「無限世界……」

小さな声で刀弥はその言葉を繰り返した。

「それでゲートの中には、ときたま出現してもすぐ閉じちゃう不安定なゲートがあるんだけど……」

「つまり、俺もそのケースの可能性が高いわけか」

彼女の言う通りなら、公園で目の前に現れたあれが不安定なゲートなのだろう。

「うん。そうだね。それが渡人が生まれる大半の原因だから、まず間違いないと思うけど」

よくある現象というよりも、誰もが知っている基本的な知識なよううだ。

複雑そうな表情でリアがそう説明する。

「一応、聞いておきたいんだが帰る方法とかはあるのか？」

駄目元で聞いてみる刀弥。だが、答えは予想通り、否定だった。

「少なくとも私は知らない。渡人は物語や詩とかにきたたま登場するけど、大体が居つく終わりだったし……」

「……そうか」

それを聞いて、刀弥は覚悟を決める。

帰ることは事実上不可能。ならば、この世界で生きていくしかない。幸い会話ができるのでどうにかなるはずだ。

そこまで考えたとき、ふと刀弥はその奇妙な事実気が付いた。

「というか、よくよく考えたら何で言葉が通じるんだ？」

「あ、それはバベルの言のおかげ」

そのことに疑問を覚える彼に対して、特に不思議そうな顔もせず
にリアが理由を解説する。

「言葉や文字を理解する概念といえいいのか？ 実際のところ
私は自分の国の言葉で話してるんだけど、刀弥には自分の国の言葉
で聞こえてるよね？」

「ああ」

確かにその通りなので、刀弥は頷くしかない。

「相手の言葉を解読して自分にわかる言葉に変換するシステムって
言っのかな？ それがバベルの言なの」

「言葉のほうはわかったけど、文字はどうなるんだ？ 相手の書いた
文字が自分のわかる文字に変換されるのか？」

その質問にリアが頷きを返す。

「ちなみに、相手の言葉や文字をそのまま聴きたいと思えばそのまま聴けるし、自分の言葉をそのまま伝えたいと思えばそれで伝わるから……」

「意味があるとは思えないが、とりあえず覚えてはおこう」

利用するとしたら相手に言葉を教えたり、教わったりするときぐらいだろうとそんな思考が刀弥の頭を巡った。

「他に質問はある？」

リアが笑みを浮かべながら顔を傾け、そう訊いてくる。

「そうだな……今は特にないな」

腕を組んで少し思案した後、刀弥はそう返事を返した。

「そつか。それじゃあ次は私からの提案なんだけど……刀弥、一緒に旅をしない？」

「え？」

彼女からの予想外の提案に刀弥は驚いてしまう。

「だって、帰れない以上はここで暮らすしかないでしょ？ 刀弥が構わないなら、一緒にいていろいろ教えてあげるよ」

そう言って彼女は微笑む。

確かにこれからどうするか、悩んでいたのは事実だ。右も左もわ

からない以上、リアからの提案は刀弥にすればまさに渡りに船。

しかし、彼女からすれば余計な荷物が増えるだけでメリットなどないはずだ。

故に、刀弥はその辺りのことについて聞いてみることにした。

「なんでまた、そんなことをしようと思ったんだ？ リアにメリットなんてないだろ？」

この疑問に彼女はあっさりと答える。

「あるよ。刀弥が住んでいた世界がどんなところか興味があるの。だから、ときどきでいいから刀弥の世界の話聞かせて」

なるほど、と彼は納得した。その気持ちがあんなにわかつたからだ。

「……そんなに面白くないぞ？」

「どんな世界で、どういう生活を送ってるのかっていうのが知りたいただけだから、そんなに心配しなくてもいいと思うよ」

確認するように訊ねる刀弥に、リアは笑みを返す。

「で、どうする？」

「……わかった。一緒に行こう」

迷ったところで仕方ない。

彼女がどんな人間かまだよくわからないが、これまでのやりとりから信用しても大丈夫だろうと判断する。

「それで、これからどうするんだ？」

「少し行けば町があるの。たぶん、今からなら夜までに……」

そこでリアが言葉を切った。すぐさま彼女は周囲へと視線を巡らす。

どうしたのだろうかと刀弥が不審に思っていると、突然、木々をかき分ける音と共に複数の男たちが二人を取り囲むような形で姿を現した。

彼らは皆、毛皮のような服を着ており、その手には剣を握り締めている。

ガラの悪い顔と汚い笑み、何よりリアの警戒度合いから刀弥は相手を敵と定めた。

「おお、この嬢ちゃん。綺麗じゃねえか。こりや高く売れそうだ」

「ですね。兄貴」

「だけど、その前にしっかり楽しまないと」

男達は下品な話を交し合っている、それを聞いて刀弥は顔をしかめた。

どうやら盗賊の類らしい。数は七人。一人で相手をするにはかなり厳しい状況だ。

加えて刀弥には実戦の経験がない。真剣で試合をしたことはあるが、それでも怪我をしないように配慮された試合だ。命を掛けた戦いとはとても言えるものではない。

一方の相手は、どう見てもそんな甘さを持ち合わせてる性格には見えない。

剣の構え方から見て素人に違いないだろうが、その辺の意識の違

いが戦いにどの程度影響を及ぼすかわからない以上、自分がかなり不利だと考えるべきだ。

だが、だからこそ刀弥は覚悟を決める。

自分たちの敗北によって、リアの身を晒す訳にはいかない。

知り合ったばかりとは言え、自分に親切にに応じてくれた相手が酷い目にあうのは刀弥としても許せることではないからだ。

故に彼女を確実に守るため、相手を殺すことへの躊躇^{ちゆうちゆう}を一切切り捨てようと心に決める。

そうしてまずはどうやって相手の剣を奪おうかと、考えていたときだった。

突如、リアが周辺の盗賊たちに聞こえるように大きな声で警告を促したのだ。

「警告します。帰るのならば見逃します。ですけど、このまま刃を向けるのであれば抵抗させてもらいます」

その警告を耳にした盗賊たちは、一旦互いに顔を見合わせると一斉に笑い出す。

「ぶはははは……ガキ二人で何ができるってんだ？」

「警告？ それはこっちの台詞だ!!」

「小娘。お前のほうこそ大人しくしてるんだ!!」

彼らは口々にそんなことを叫んだ。

「……そうですか」

彼らの反応を聞いて、リアは残念そうな顔をする。だが、それも

次の瞬間には真剣な眼差しに変わっていた。
その顔で彼女は盗賊たちに叫ぶ。

「では、全力で抵抗させてもらいます」

その直後、彼女の周囲にいくつもの炎の珠が出現した。これに刀
弥と盗賊たちは驚く。

「くそ！？ この女、魔術師か！！」

その叫びと共に盗賊たちは動き出し、炎の珠は彼らに向かって飛
翔していった。

着弾した炎の珠は爆発。付近にいた盗賊二人が爆発の炎に飲まれ
た。

爆発に飲まれた彼らは、炎をまとい叫び声を上げながら倒れてい
く。

予想外の成り行きに刀弥は呆然としてしまっていた。だが、すぐ
さま気持ちを切り替えると手近な盗賊のもとへと走っていく。

刀弥の接近に気が付いた盗賊は、彼を殺そうと斬りかかる。

だが、遅い。悠々とその斬撃を左ステップで避けると、がら空きの
顎にアッパーを入れる。

ややカウンター気味に入ったアッパーに相手は脳震盪を起こし、
剣を落としながら崩れ落ちていった。

それを横目に見ながら刀弥は剣を拾う。日本刀よりも重い剣に多

少戸惑いつつも彼はそのまま別の盗賊たちのもとへと駆け抜ける。

剣を持った刀弥が近づいてくるのを見て、盗賊たちが彼を迎え撃とうと取り囲む動きを見せた。

リアの炎の珠で二人、脳震盪で一人。残っているのは四人。そのうち、刀弥の背後にいた盗賊が彼の背に剣を振り下ろそうとする。

しかし、振り向いた刀弥が剣で斬りつけるほうが早かった。

振り向きざまに体の回転を利用した水平斬り。

手に伝わる嫌な感触と共に、胴を斬られた相手が血飛沫をあげて倒れこんでいく。

これで俺も人殺しか。

倒れていく相手を見つめながら、刀弥はそんなことを冷静に考えていた。

戸惑うかと思っていたが、心は予想以上に平静だ。そのことになからず彼は驚く。

ともかく、これでもう引き返すことはできなくなった。ならば、後は進むだけだ。

その意志と共に、彼は他の盗賊のもとへと駆けていく。

先の動きから相手が只者でないと感じたのか、明らかに盗賊たちは怯えた様子を見せていた。

刀弥の接近に、彼らは及び腰で迎え撃とうとする。

けれども無論、そんな状態で刀弥の動きに対応できるはずもない。案の定、地を強く蹴って急接近する刀弥に相手は反応できなかった。

風野流剣術『疾風』

すれ違いざまに速度の乗った一閃が、相手の脇腹を裂く。

「ぐあ!？」

声を漏らし相手は脇腹を抑えるが、溢れ出る血を止めることはできない。そのまま膝から崩れ落ちていく。

後、二人。

崩れ落ちる相手に見向きもせず、刀弥は残り二人となった盗賊たちに視線を向ける。

既に彼らは共に動き出していた。どうやら、二人同時に攻撃するつもりらしい。

さすがに一齐に襲われては対処は難しい。

故に刀弥はそうならないように、自分の身を二人の直線上の位置に置く。

こうすれば二人同時に相手をすることはない。

後ろの相手がこちらに剣を届かせるためには一旦、味方を避けて回りこむ必要があるためだ。

その間に片方を倒すことができれば、晴れて一対一。

既に刀弥は相手に近づき剣を振っている。狙いは左から右の斜め

気味の振り上げだ。

しかし、この剣戟を相手はなんとか剣で防いだ。

急いで剣を引きつつも、己の身を先程と同じように回りこんでくる相手から届かない位置に移動させる。

もう一人の仲間は、今、戦っている相手を避けるために逆時計回りに回り込んでいた。

そのため、刀弥もまた逆時計回りに移動する。

そうして今度は突きを放った。だが、相手はそれを左へ逸らす。どうやら守りに入り、仲間と共に一斉に襲うつもりのようなのだ。

今、剣は左に逸らされている。このままでは右に回れない。一度、後ろへ下がる必要がある。

だが、それは相手に間を与えることを意味していた。そうならば相手は後ろに引いて仲間との位置取りを調節するはずだ。

かといって、このままではやはり、二人同時に相手をするようになる。

どうする？

刀弥が判断を迷わせた。そのときだった。

「伏せて!!」

聞こえた叫びに反射的に刀弥は身を伏せる。

伏せた刀弥の向こう、そこには複数の風の矢群を従えたりアの姿があった。

盗賊たちがそれを認識した瞬間、風の矢群がリアの命令に従い一斉に放たれる。

二人の盗賊を倒さんと一斉に殺到する風の矢群。

この攻撃を受けて一人は体を貫かれ、もう一人は右腕を撃ちぬかれた。

体を貫かれた盗賊は絶命し地面と倒れていく。

それを見たもう一人の盗賊が腰を抜き、撃ち抜かれた右腕を抱えながら脇目も振らずに逃げ帰っていった。

刀弥もリアも、それを追うようなことはしない。

二人の目的はこの場から助かることであって、盗賊たちを殲滅せんめつすることではないからだ。

そうして戦いは終わった……

その後、刀弥の攻撃で気を失っていた盗賊が目を覚ました。

彼は周囲の惨状から自分たちが負けたことを知ると、途端に一目散に逃げ出していく。

後に残ったのは刀弥とリアと五人の死体のみ。

やがて、盗賊の姿が見えなくなると、安心したとばかりに刀弥は大きく息を吐いた。

だが、その途端、彼の体が震え始める。

慌てて刀弥が震えを止めようと体に力を入れるが、震えが止まる様子はない。

そのうち震えは手に持つ剣にも伝わり、金属の擦れる小さな音が何度も刀弥の耳に響き渡る。

そして次の瞬間、いきなり刀弥の平衡感覚が消失した。

ぐらりと崩れていく刀弥の体。

慌ててバランスをとって刀弥は倒れるのを防ぐが、気を抜けばあっという間に倒れてしまうような状態だ。

気が付けば呼吸も荒くなっている。息苦しい。まるで胸が締め付けられているかのようだ。

日中であるにも関わらず寒気も感じている。

どうしてこんな状態になっているのかわからず、刀弥は戸惑ってしまっていた。

「刀弥、大丈夫？」

そんな刀弥にリアが走り寄ってくる。その表情に怯えや苦しみはない。

「心配するな。ちょっと、足を滑らしただけだ」

そのことに安堵しながら、刀弥はそう言って気丈に振る舞おうとした。

「本当に？ そんな風に見えないけど……」

けれども、リアは納得しない。かなり心配そうな表情で刀弥のことを見ている。

何故、彼女はこんなにも心配しているのだろうか。刀弥はそのことが気になり尋ねてみる。

「一体、なんでそんなに心配しているんだ？」

すると、彼女は少し迷った後、おずおずといった様子で口を開いた。

「だって、刀弥凄く苦しそうだよ。汗もかなりかいてるし……」

そうして彼女の視線が剣のほうに向けられる。

つられてそちらのほうへと目をやると、相変わらず剣は小さな音をたてて震えていた。

「手……震えてるよ？」

「大丈夫だ。実戦は初めてだったから、少し緊張しただけだ」

誤魔化すように刀弥はそう答える。だが、それは失言だった。

「実戦は初めてって……それじゃあ……」

その言葉に刀弥は己のミスに悟るが時既に遅し、リアがさらに詰め寄ってくる。

「ねえ、それって人を殺したことに苦しんでることじゃないの？」

「そんなことない!!」

慌てて大きな声で否定する刀弥。まるでそうであってほしいと願っているかのように……

「斬ったときには何も感じなかった。だから、それは違うはずだ」

そう言いながら彼は思い返す。確かにあのとき、自分は何も感じなかった。

剣を通じて伝わる柔らかい肉の感触、溢れ出す血の鮮やかさ、そして、死への恐怖から怯えや苦しみを浮かべる相手の顔。それらを目にしても何も

「……え？」

そのとき、刀弥の視界が大きく揺れる。

気が付いたときには彼は地面に膝をついていた。

急いで起き上がろうとするが、膝に力が入らない。よく見ると膝が僅かに震えている。

「どっして……」

思わず漏れてしまったそんな疑問。

その疑問にリアが答えた。

「何も感じなかった訳じゃないと思うよ。ただそのときは生きることに精一杯で、そんなことを考えている余裕がなかっただけ」

そう言って彼女は刀弥の目の前に屈み込むと、彼に言い聞かせるように言葉を続ける。

「戦いが終わって余裕が戻ったことでようやく刀弥の心が、人を殺したという事実を受け止めたんだと思う。体が震えているのもそのせい」

笑みを浮かべて手を差し出してくる彼女。その手を刀弥は掴んだ。

「だから、刀弥は自分を偽らず、しっかりとそのことを受け止めるべきだよ」

彼女が刀弥を引き上げ、ようやく彼は立ち上がる。

けれど、勢いがつき過ぎた。まだ平衡感覚の戻っていない刀弥は前のめりに倒れそうになる。

そんな彼を受け止め支えるリア。

そのまま彼女は刀弥の体を己の腕で優しく抱きしめる。

「リ、リア？」

予想外に出来事に刀弥は戸惑うしかない。

「誰だって、初めて人を殺すのは怖いよ。私もそうだったもの」

しかし、リアは構わず話を続ける。

「だから、隠さなくていいよ。辛いなら辛いって言って、悲しいなら泣いて、だって……」

一呼吸の間、それだけの時間において彼女は刀弥にその一言を告げたのだった。

「私たち、これから仲間になるんだもの」

抱きしめられているため彼女の顔を見えない。だけど、間違いない今、彼女は優しく微笑んでいるだろう。

気が付けば震えはなくなっていた。寒気もどこかに消えている。今、彼にあるのはどこか安らぐような暖かな気持ちだった。

「……ありがとう」

彼女を助けられて本当によかった。

礼の言葉を口をしながら、刀弥は純粋なその思いを心の中で呟く。

震える刀弥をリアが優しく諭し、支えてくれた。彼女のお陰で刀弥は己を偽らず苦しまずに済んだ。

そんな彼女を助けることができた。そのことに刀弥は思わず安堵してしまっただの。

そうこうしているうちに、彼の鼻をリアの匂いがくすぐった。

それで刀弥は自分たちがかかり密着している状態だということを感じ出す。

体を感じる柔らかな感触。思わず刀弥はこのままでもいいと思ってしまうが、それをなんとか理性で振り払う。

「リ、リア！？ も、もういいぞ」

うわずった声で刀弥がそう叫び、ようやく彼は彼女から開放されたのだった。

「刀弥。顔赤いよ?」

「気にするな。もう平気だ」

こちらの顔を覗き込んでくるリアにどきまぎしつつも、何とか刀弥は平常心を取り戻していた。

「そう? ならいいけど」

そう言って少し離れるリア。

そのことに刀弥は心中、残念がる。と、同時に先程の感触を思い出してしまった。

慌ててそれを忘れようと必死になる刀弥。

だが、それ故に彼は気付かなかった。リアもまた若干、頬を赤く染めていたことに……

ようやく二人が元に戻ったのは、それから少し経ってからだった。

「……そういえばさっきのあれは何だ?」

突然、なにかを思い出したのか刀弥がリアに問い掛ける。

「あれ?」

なんのことかわからず首を傾げて尋ね返すリア。

「炎の珠を出したり、風の矢みたいなのを放った奴のことだ。あいつらはリアのことを魔術師とか言ってたけど」

「ああ、魔術のこと？」

それで納得したらしい。何度も頷きながらリアが答えを返した。対し刀弥は彼女が口にしたワードに首をひねる。

「魔術？」

「うん。マナを使った現象操作を行う技術のことなの。あ、マナっていうのはあらゆる世界に存在する人や動物や植物、大地、大気、水といったものが作り出す目に見えないエネルギーのことで、無限世界じゃ、大半の世界の文明がこれを動力にしているの」

「だけど、そんなに使ってマナ不足とかにならないのか？」

自分の世界で起こっているエネルギー資源事情を思い出し、ついそんなことを聞いてしまった。

「大丈夫。サイクル以上のマナを消費し続けなければ尽きることはないし、そういうのは大規模な奴だけ。皆が使う小規模な奴は、自身の体内で生成されているマナを使うの。ちなみにそういった道具のことを私たちは魔具まぐと呼んでるの」

「皆って、俺でも使えるのか？」

「使えるよ。後で魔具や魔術、試しにやってみようか？」

そう言っただけリアは、服の内側から何かを取り出した。

どうやらそれはペンダントのようで、透明な紺碧色こんへきいろの宝石が首から伸びた糸にぶら下がっている。

「それは？」

「これはオーシャルって言って、周囲の静止した風景を立体的に保存して、再生もしてくれる魔具なの」

自分の世界でいうデジタルカメラの立体保存版みたいなものと、そんな感想を抱きながら刀弥は彼女が持つそれを眺める。

「っと、そろそろ出発しようか。盗賊のせいで時間食っちゃったし」「そうだな。そういえば、町から先はどうするか決まってるのか？」「その町にゲートがあつて、そこから次の世界に行こうと思ってるんだけど、その前に刀弥の分の道具とかを揃えないとね」

何気なく出てきた疑問にリアがそう答えた。

だが、その言葉に刀弥は自分が今一銭も持っていないことを思い出す。

「……金はどうする？」

「心配しないで、余裕はあるから」

安心させるように笑みを見せる彼女。その答えに刀弥は申し訳ない気持ちで一杯になってしまった。

「悪い」

「気にしない。ともかく行こう。困ったことがあれば、そのとき考えればいいし」

そう言ってリアが励ましてくる。

「……そうだな」

その言葉に頷く刀弥。

そうしてリアが歩き始め、その後を追うように刀弥もまた歩みを
進ませる。

こうして二人の新しい生活が始まったのであった……

一章一話「無限の世界へ」(4)(後書き)

07/05

表現を少し修正。

07/24

できる限り同一表現を修正。

09/12

戦闘直後のやり取りをかなり変更。本当は無自覚の恐怖(人を殺したことへの)という感じの演出をしたかったので……

一章二話「新たな生活」(1)

「何とか着いたね」

「そうだな」

日が沈み空が黒く染まりかける頃、刀弥とリアの二人はようやく町に辿り着いた。

暗闇でよく見えないが、白く四角い形をした建物があちこちに見える。どうやらこの町ではこれが標準的な建物なようだ。

「刀弥。早く行こう」

その声に振り返ればリアが先へと進んでいる。

どうやら付近を見回していたせいで気付かなかったらしい。

慌てて刀弥は彼女の後を追いかける。

「目的地は？」

「もちろん宿屋。道具とかの買出しは明日にして早く部屋をとって寝よ」

早口にそう告げる様子から、早く寝たいというのは本当のことなのだろう。

道中、聞いた話ではこの町に来るまで二三日ほど野宿生活だったらしい。ならば、ベッドで眠るのが恋しくなるのも無理はないだろう。

目的の建物は、看板のお陰ですぐに見つかった。
早速、中に入る二人。

「いらっしやい」

中に入ると元気な声が二人を出迎えた。

二人を出迎えたのはかつぶくのいいおばさん。受付から優しそうな表情で二人のことを見ていた。

「すみません。二人なんですけど、部屋は空いてますか？」

「はいよ。ちょっと待ってね」

そう言っておばさんは宿帳をめくる。恐らく宿泊記録から、部屋が埋まってないか確認してるのだろう。

「二人部屋なら一つ空いてるけど、どうする？」

「じゃあ、それをお願いします」

「え!?!」

特に悩む様子もなく、あっさりと承諾するリアに刀弥は思わずそんな間抜けな声を出してしまった。

「ど、どうしたの?」

その反応に彼女は不思議そうな表情で尋ねてくる。

「……俺の世界じゃ、男女が同じ部屋で寝るのはいろいろ言われたりするんだが、こっちの世界じゃ違うのか?」

確認するように伺う刀弥。

彼の問いにリアはいつも通りの顔でこう返す。

「それは、こっちの世界でもあるよ」

「……なら、何で一緒の部屋にしたんだ？」

「今から他の宿屋に行くのが億劫だったのと、刀弥なら大丈夫かなって思ったから」

その理由に、刀弥は頭を抑えて唸ってしまった。

信頼してくれるのは正直、嬉しい。しかし今回の場合、自身への危機だけでなく周辺への醜聞という問題がある。彼女はその辺りのことをどう思っているのだろうか。

ちらりと刀弥はおばさんのほうを見る。

彼女は意味深な笑みを浮かべて、刀弥たちを眺めていた。まず間違いない自分たちの関係を誤解されたと見るべきだろう。

思わず刀弥の口から溜息が出てしまった。

「ほら、鍵をもらって早く部屋に行こ」

一方のリアは本当に気にしていないのか、おばさんのほうへと向き直ると彼女から部屋の鍵を受け取る。

鍵を受け取るのにも躊躇いが無い。どうやら本当に大丈夫だと思っっているようだ。

とはいえ、宿泊代は彼女持ち。その彼女がここでいいと決めた以上、従うしかない。

自分にできることはといえば、彼女の信頼に応えることだけ。もはや覚悟を決めるしかないのだ。

「もらってきたよ。部屋は二階の一番奥だつて」

鍵をもらつと早速二人は部屋へと向かうことにした。

その途中、ふと刀弥は壁を触つてみる。

触るとひんやりとした石のような感触が返ってきた。継ぎ目が見当たらないので、実際に石という可能性は低いだらう。

一瞬、どんな素材を使つてるんだらうかと興味を持ったが、すぐにどうでもいいかという結論が出てしまった。

やがて、目的の部屋に到着し、リアがドアを開ける。

中に入つてみると、部屋は思いの外、綺麗だった。

白の床と壁と天井。天井には明かりが点いていた。奥に窓があり、その傍にベッドが二つ、小さな箆笥を挟んで横に並んでいる。部屋の右側にはテーブルと椅子が二つ。材質は木のようにだ。テーブルの上には時計と思わしき物が置かれている。部屋の左側には扉があった。

中を覗くと脱衣所のようで、その奥の部屋には浴槽らしきものも見える。どうやら風呂場のようにだ。他にはトイレもある。

「この明かりも魔具なのか？」

「そうだよ。ほら、あれを見て」

明かりを見上げながら首をひねる彼に、リアが景色を眺めつつある一点を指差した。

それを見て刀弥は彼女の隣に並び、指の指す先、窓の外の景色を見る。

暗闇と明かり、黒と黄が支配する光景。その中に青緑に光るものがあつた。

目を凝らしてみる刀弥。すると、それは巨大な岩だった。巨大な岩が透き通るような青緑の光を放っていたのだ。遠目からはまるで巨大な宝石のように見える。

「あれはこの村が管理しているマナの収集装置。あれがこの一帯にあるマナを集めて町中の家や施設に送っているの。前に説明したでしょ？ サイクル以上のマナを消費し続けられない限りは大丈夫だって……」

「ああ、そんなことを言っていたな」

そのときのことを思い出しながら、刀弥は相槌を打つ。

「でも、使える上限が決まっている以上、どこがどのくらい使うかは決めといたほうがいいよね？ だから、国同士が相談して使えるマナの量を取り決めるの。後は国がその量内になるように村や町とかに分配する感じだね」

「そしてあの装置で決められた量だけ集める訳か。当然、あの装置以外でマナを集めようとすれば犯罪になるんだな？」

「もちろん。大体、どこの世界でも体内以外からマナを集める装置は無断で作るのも使うのも犯罪になるかな」

「しかし、分配された量だけで足りるのか？」

その辺がなんとなく刀弥は気になった。

刀弥は自分たちの世界を思い出す。自分たちの世界では時代が進むごとに電気を使う道具が増え、電気の需要が伸びていった。この世界だって時が経てば、便利な魔具が作られるだろう。そうなれば当然、多くの人たちが使いたがる。次第に、一人一人が必要とする

マナの量が増えてくるはずだ。

そんな彼の疑問にリアはもちろんとばかりに肯定を返す。

「足りるよ。どう使うかは自由だけど、主な使用目的は明かりと温度調整と食べ物の保存とかだし」

「それだけ？ 他の魔具はないのか？ 例えば、通信とか洗濯とか」

意外と使われている魔具の種類が少ない事に刀弥は驚いた。慌てて彼は新たな疑問を投げかける。

「通信や洗濯の魔具はあるよ。でも、そっちは個人のマナで十分動くタイプだから」

「ああ、そういうことか」

それで刀弥は納得した。

つまり、分配されたマナは生活にあつたほうが遥かに便利だが個人のマナでは負担が掛り過ぎるような魔具などを使うときだけ使われているということだ。

他の魔具は、そんなものを使わなくても個人のマナを使うことで十分事足りるのだろう。

「納得した？ それじゃあ私、お風呂に入って寝るね」

「あ、ああ、悪いな。邪魔をしてしまったみたいで……」

お風呂というキーワードに思わず刀弥はどぎまぎしてしまつが、彼女はそれに気付くことなく扉の向こうへと消えてしまった。

一人になってしまった刀弥はすることもないので、とりあえずベ

ツドに座ることにする。

そのまま暇を持って余っていた彼だが、あることを思い出し自身のポケットに手を伸ばした。

そこから出てきたのは無限世界に渡る前に彼が買っていたライトノベル。買った直後にポケットに入れていたのを今まで忘れていたのだ。

ちなみに買い物用品が入ったビニール袋は、目の前が真っ白になったときに手を放してしまったので向こうの世界に落ちたままだと思われる。

せつかくなので、刀弥は彼女が上がるまでその本を読むことにした。

リアが風呂を終えたとき、刀弥はライトノベルを読んでいる最中だった。

「ん？ それ何？」

湯気を立ち昇らせつつ、さっぱりした顔の彼女は刀弥が何かを読んでいることに気が付くと、興味津々という顔で彼に近付いてくる。

「こっ、こっちに来る前に買った本だ。暇だったから読んでたんだ」

リアが近付いてきたことで、石鹸の匂いがほのかに刀弥のほうへ

と漂ってきた。そのことに彼は内心焦り、慌てて彼女の質問に答える。

「ふうん……ねえ、読んでもいい？」

好奇の眼差しを隠そうともしないリア。そんな彼女を見て、刀弥は内心苦笑した。

「ああ、俺も風呂に入ろうと……」

そう言って自身も風呂に入ろうとした。その時だった。

突然、刀弥のお腹から腹の虫が鳴り響いたのだ。

それでようやく彼は未だ晩御飯を食べていないことに気が付いた。

こっちに来たのが一九時。本来ならその時間には晩御飯を食べていたはずだ。

しかし、異世界に來たり盗賊に襲われたりでそのことに気を回す余裕がなく、結果的に刀弥はそのことを忘れてしまっていた。

「……そういえば晩御飯がまだだったね」

彼の腹の音を聞いて、彼女もようやく気が付いたらしい。

眠ることに頭がいつぱいで、そこまで気が回ってなかったのだろ
う。

「ちょっと、おばさんに何か作ってもらえないか聞いてくるね」

そう言いつつ、リアは急ぎ足で部屋から出て行った。

遠ざかる足音。その音を聞きつつ刀弥は今、自分の世界が何時ぐ

らいなのか少し気になった。昼過ぎから夜なのだから、結構な時間が経ったはずだ。

急いで携帯をポケットから取り出す。

携帯に映った時間は1時一五分を指していた。大体、六時間程経過したことになる。

「そりゃあ、かなり腹も減るな……」

そんな感想を漏らしつつ思い出すのは、ここに来るまでにリアから聴いた時間に関する話。

いろんな世界がある以上、世界によって一日や一年の時間が異なるのは当然の成り行きだ。そのため、生活のリズムを作るための時間とは別に時の流れを共有するための時間を設ける必要が出てきた。

これは基準時間と呼ばれ、その時間はある世界が基準となっているらしい。その世界では一日と一年をそれぞれ三六〇に分け、一日の方はティムという単位を付けている。

テーブルの時計を見てみる。ちなみに無限世界の時計は一周で一日らしい。

時計の針は六分の五程回っていた。この世界は三〇〇ティムで一日が経過するという話だから、今は大体二五〇ティムということになる。

後でもう一度、携帯の時間と時計の時間を確かめて計算すれば自分の世界の時間との比率がわかるな。

ふと、出てきたそんな考え。だがその直後に彼はそんな思考をす

る自分に内心笑ってしまった。

そんな事を今更知ったところで意味がないからだ。

「やっぱり、俺はまだ自分の世界に未練があるんだらうな」

正直、心残りが無いといえは嘘になる。

突然、自分がいなくなったことで家族は自分のことを心配しているだろう。

特に妹はあそこで別れなければと、悔やんでいるに違いない。

それは刀弥にとっても心苦しいことだった。

できることなら、どうしようもないことだと諦めたほうがいい、気にしないほうがいい、忘れたほうがいい、刀弥自身もそう思っている。

だが、やはりどうしても気になってしまっただ。

そんな思案をしていた時だった。突然、ドアをノックする音が聴こえてきた。その音に刀弥は我に返る。

「ごめん、刀弥開けてくれる？」

ノックの主はリアだったらしい。刀弥は立ち上がり、ドアを開けに行く。

ドアを開けると、リアがお盆を持って立っていた。

「おばさんに頼んだら、こんなものでいいならってスープを作ってくれたの」

彼女の言う通りお盆には湯気の立ったスープが皿に盛られていた。

皿の傍にはスプーンもある。

スープの中には肉や野菜と思わしきものが入っており、とりあえず腹は膨れそうだった。

刀弥は身を退けて、リアを部屋の中へと上がらせる。

部屋に入った彼女はそのままお盆をテーブルのところまで運んでいくと、スープの入った皿をテーブルの上へと置いていった。

「それじゃあ、食べようか」

「ああ」

そうして、二人は食事になりつく。

スープはお腹が空いていたこともあつてか、かなり美味しかった。あつという間に二人はスープを食べ終えてしまう。

二人が食事を終わると、リアが食器を返しに部屋を出ていった。

その間に刀弥はお風呂に入ってしまう。

風呂場は井戸の水を汲み上げ浴槽に貯めた後、魔具で温めるといふ仕組みだった。

ぬるかったお湯を温め直すために、刀弥は魔具を操作して温度を調節する。

風呂から上がると、刀弥は脱いだ服を着直した。本当なら別の服にしたいところだが、着替えがない以上どうしようもない。

部屋に戻ると、リアが刀弥のライトノベルを読んでいた。

刀弥が風呂から上がったのを見ると彼女はライトノベルを返し、二人は就寝につく。

二人とも疲れていたこともあって、眠りがあったという間にやってきたのは言うまでもないことだった。

一章二話「新たな生活」(1)(後書き)

07/25

できる限り同一表現を修正。

一章二話「新たな生活」(2)

晴れやかな空の下、人々がせわしなく行き交っている。

荷物を運んでいる人、買い物物に出ている人、自分たちと同じように町を巡っている人、皆思い思いの目的を持って歩いていた。

「人が多いな」

辺りを見渡していた刀弥が、驚嘆の声をあげる。

「まあ、ゲートが近いからね。渡る人、来る人、それ目当てに商売をする人とかが集まってここまで大きくなったんじゃないかな」

「……なるほど」

二人は今、町を歩いていた。

目的はもちろん刀弥の分の道具を買い揃えることと町を散策することだ。

この世界にやってきて始めて人のいるところに来た刀弥としては無論、どんなところなのか気になるところではある。

朝食を済ませると、すぐに二人は出掛けることにした。

まず二人が向かったのは市場。

市場には見たことのない食べ物やものが溢れていた。当然、刀弥は興味を持つ。

結果、刀弥が『これは何か?』とリアに尋ね、それにリアが応えるという構図が何度も繰り返された。

そうこうしているうちに二人はある露店に辿り着く。

そこは紫色の丸い宝石がいくつも並んでいるお店だった。

「それはスぺーサー。ものを格納するための魔具。巨大なものや重いものを空間圧縮して持ち運べるようにするの。私も持つてるよ」

そう言って、リアはウエストバッグからそれを取り出すと刀弥のほうへと見せてくる。

「値段が違うけど、入れれる容量でも違うのか？」

彼の言葉通り、各スぺーサーに貼られている値札はものによってそれぞれ異なっていた。一番安いものと一番高いものを比べたら、なんと一〇倍も差がある。

「刀弥の言うとおり、圧縮できる質量に限界があるの。圧縮できる質量が高いほど値段が高くなる傾向だね。私の場合、テントや食料、食器みたいな急いで出す必要のないものをそこに入れてるかな」

「逆に武器や薬とか、何かあったときにすぐに必要なものはスぺーサーに入れずに持っているわけか」

「うん、展開や格納に時間が掛かるからね。とりあえず一番安いので十分だから、それにしとこうか」

そう言ってリアは一番安いスぺーサーを手に取ると店の人にお金を支払った。

「はい。なくさないでね」

そうしてリアは刀弥に買ったスぺーサーを手渡す。

刀弥は手渡されたスぺーサーをしげしげと見つめた。スぺーサー

事態は指で摘める程小さな物こんな小さな物にいろんな物が入ると言う。刀弥からすれば、空想みたいな話だ。

そんな感想を心の中で抱きながら、彼はそれを上着のポケットの中に入れる。

「後は薬とか保存食とかとそれを入れる鞆とかか？」

「そうだね。じゃあ、行こうか」

その問いに頷くりア。

そうして彼女に促され、刀弥は次の場所に向かって歩き始めるのだった。

あらかじめ必要な道具を買い揃えたその帰りだった。

武器屋の前を通り過ぎたときにふとそれが目に入り、刀弥は思わず歩みを止めてしまう。

「刀弥？」

隣を歩いていたりアが不思議に思い呼びかけてくる。

だが、刀弥は気付かない。そのまま彼は誘われるように店の中へと入っていく。

武器屋の棚にはいろいろな武器が置かれていた。

剣や弓、銃に恐らく攻撃系の力を持った魔具。それらが綺麗に棚の上に並べられている。

刀弥の目的物はその棚の上に置かれていた。

彼が店の外から見つけた物。それは刀だった。

日本刀を彷彿とさせる細身で僅かに剃りのある刀身。取手や柄は全く違う形状だが、それでも刀弥にしてみれば十分日本刀と呼んで差し支えない物である。

試しにと刀弥は刀を持ってみた。

多少違いはあるが、重さは殆ど同じだ。

次に刀を振ってみる。

若干、違和感はあるものどこか懐かしい感触を感じることが出来た。

現在、刀弥が使っている武器は盗賊たちから奪った剣。

剣と刀。両者にそれほど大きな違いはない。だが、これから先、何が起こるかわからない以上、できるなら使い慣れた武器を持つておきたい。それが刀弥の本音だった。

とりあず刀を元の場所に戻す刀弥。丁度その時、店に入ってきたリアが彼に声を掛けてきた。

「刀弥、どうしたの？」

声を掛けられた刀弥は彼女の方へと振り返る。その時、武器に付いていた値札がちらりと刀弥の視界に入った。かなりの高額だ。

高いな……

それが値札を見た刀弥の感想だった。

宿屋代に薬や魔具などの必要な道具は、全てリアが払ってくれている。これ以上彼女の負担を掛けるのも気が引ける上に、そもそも買えるだけのお金があるかもわからない。

しばらくはこれで我慢して、貯まったときにどこかで買つか。

「いや、なんでもない」

そう結論してなんでもないという風を装って出て行くこととする刀弥。しかし、名残り惜しげにその刀に視線を向けたのが失敗だった。

「……もしかして、それが欲しくてここに入ったの？」

目敏く視線に気が付いたリアが、刀弥に尋ねてくる。

ずばりと言われ、刀弥は返答に詰まってしまった。

だが、それは肯定と言っているようなものだ。

しかし、こんな値段のものを彼女に頼るのは如何なものかという思いもまた、彼の中にはある。

どうするか悩む刀弥。やがて彼はある結論に達し、それをリアに相談してみることにした。

「リア、金を稼ぐために少しここに留まってもいいか？」

「え？」

その内容に、リアは驚きの表情を浮かべる。

「さすがにこれは他のものと違って俺個人のわがままだし、値段が値段だ。だから、自分でどうにかしたいと思うんだけど……無論、急ぎなら、今回は諦める」

そう懇願しながら彼女の顔を伺う刀弥。

それが彼の結論だった。欲しいものを相手に買わせたくないのなら、自分の手で買うしかない。簡単な話だ。そのためには自分の手で金を稼ぐしかない。

問題は期間だ。何か時間的な制約があるのであれば、さすがにどうしようもない。

故にその時は先程考えていた通り潔く諦める。そう彼は決めた。

一方のリアは彼の話の話を聞いて、少し考え込む。だが、やがて顔をほころばせると彼に向かって次のような言葉を返した。

「それじゃあ、何か稼げるところがないか探そうか」

それはつまり彼の頼みを聞き入れたということだ。

「悪いな」

「気にしない気にしない。ほら、行こ」

そう言って刀弥を励ますリア。

そうして二人は武器屋から出ていくのであった。

「頼んだ俺が言うのも何だけど、本当によかったのか？」

武器屋を出てすぐに、刀弥はそんなことを訊ねる。

自分のわがまままでリアに迷惑を掛けているのではと考えると、心

が痛んだからだ。

「うん。むしろ、丁度良かったぐらい。実を言えば残金、割と危なかったし……」

「……本当にすまない」

そんな状況を生んだのは、間違いなく自分が原因だ。思わず刀弥は目を伏せて謝ってしまう。

彼の言葉によやくリアは自分の失言を悟った。

慌てて彼女は先の言葉をなんとか誤魔化そうとする。

「そ、そんなに気にしないで。そ、それより、ほら何かお金が稼げるところがないか、いろいろ探してみよ？」

そうしてリアは刀弥の手を掴むと、そのまま彼は引っ張り走りだした。

「お、おい、行くなってどこかあてがあるのか？」

柔らかい彼女の手の感触に当惑しつつ、刀弥は己の疑問を口にする。

「そんなの総当りに決まってるじゃない。飲食店、薬屋、酒場いろいろ回ってみるの」

「うおっと!?! わかった、わかったから引っ張るな。バランスが崩れる」

そんな叫びが通りに反響こだましたのだった。

そうして二人はどこかに仕事がないか探すため、いろんな店を総当りで探すことになった。

だが、どこの店も人手が十分か、やってもらいたいことがないという残念な返事ばかりでお金の稼げそうなところは見つからない。

「次はあの酒場だね」

しかし、彼女は諦めることなく、次へ次へと店をまわる。

「あれだけ断られているのに、よく続くな」

そのことに感心する刀弥に、彼女は当たり前のようにこう答える。

「実際、どこもこんな感じだよ？ 働き手を探してるなんてほとんどないに等しいかな？」

「……そんな状況で探してるのか？」

そんな話を聞いて、刀弥はますます彼女に対して後ろめたい思いを感じてしまった。

「でも、諦めずに探し続けてたら、どこかの店が善意で適当な仕事を見繕ってくれたりもするんだよ？ だから、気にしないで」

「と、言われても現実、リアに余計な負担をかけてるのは事実だからな……」

気にしないというほうが無理なのだ。

その返事に、リアは少し困ったような表情を浮かべてしまう。

そうこうしているうちに、二人は酒場に辿り着いた。

酒場の中もまた宿屋の部屋と同じように、天井も壁も床も白い。

席はカウンター席とテーブル席の二種類があり、テーブル席は一階と二階の二箇所があった。

客は昼頃なものもあってが多く、店員たちが忙しく行き交っている。

中に入るとアルコール特有の匂いが部屋中に充満しており、その匂いに刀弥は思わず顔をしかめてしまう。

マスターと思わしき人物は、カウンターでコップを洗っているところだった。

リアはマスターに仕事がないかを尋ねるため、彼のいるカウンターまで歩いて行こうとする。しかしどうしたのか、その歩みが途中で止まってしまった。

「どうしたんだ？」

足を止めたことを、不審に思い刀弥は彼女に近づいていく。

すると、リアは刀弥の方に顔を向け、壁のある一点を指差すのだった。

刀弥がそちらに視線を向けてみると、そこには絵と数字の書かれた張り紙が貼られてあった。

内容は町長からのお知らせらしい。

「何々、最近、街道でフォレストウルフの被害が増えていることを受け、町をあげて被害を抑えるための活動を開始します。つきましてはその一環としてフォレストウルフに懸賞金を掛けることにしました」

さらに張り紙にはフォレストウルフと思わしき絵と懸賞金の額、懸賞金を受け取るための条件が書かれていた。それによると懸賞金はフォレストウルフの首と交換するらしい。

首ということで刀弥は少し嫌悪感を感じてしまったが、よく考えると昔の自分の国も似たようなことをしていたことを思い出す。もっとも、そのときは同じ人間に対して行っていたが……

「どうするんだ？」

リアのほうへ首を戻し刀弥は問い掛ける。
すると、リアは笑みを浮かべてこう返してきた。

「もちろん、これに決定」

こうして、二人のお金稼ぎの手段が決まったのだった。

「とりあえずは昼食を済ませて出発だな」

「じゃあ、ここで済ませちゃおう」

折角、酒場にいるのだそれでいいだろう。

そうしてそのまま二人はカウンター席に座り、料理を注文してい

った。名前を聞いてもよくわからないので刀弥は料理も飲み物もリアと同じものを頼んだ。

やがて、マスターが注文した料理を運んでくる。

「なあ、少し聞きたいことがあるんだが……」

少し聞きたいこともあったので、刀弥は料理が届いたのに合わせてマスターに質問を試みることにした。

「なんだい？」

「あの張り紙に書いてあるフォレストウルフだけど、どんな奴なんだ？」

彼が聞きたかったこと。それはフォレストウルフに関する情報だった。

「お客さん。あれ、やるつもりなんだ。そうだな……強さ自体はそれほど強いわけじゃないよ。ただ、最近は群れで襲ってくるようになっていいるから厄介なんだ」

「最近つてことは、今まではそうじゃなかったってことか？」

「ああ、それまではせいぜい二〜三匹が関の山。だから、あいつらの変化に町中が驚いているのさ」

「へえ」

マスターの話す情報に、リアが感嘆の声を漏らす。

「おまけに連中、賢くなっているって話も聞くからお客さんたちも気をつけなよ」

「助かった」

「ありがとう」

二人はそれぞれそう礼を言って料理を食べ始めた。料理の味は思いの外美味しく、自然と食べることに夢中になっていく。

そして、口の中を洗い流すように一緒に届いた飲み物を口に含み

突然、刀弥が吹き出した。

これにはマスターも隣で食べていたリアも驚く。

「ど、どうしたの？」

咳き込む刀弥を眺めながらリアが尋ねてくる。

そんな彼女に刀弥はこう訊ね返した。

「これ……もしかして酒か？」

そうとわかったのは、一度だけ飲んだことがあるからだ。

あれは源治の知り合いのところに行ったときだ。

晩御飯と一緒に食べたときに、水と思って差し出されてそれを飲んだ。

最初に飲んだときは変な味の水だなと思って飲み続けていたのだが、次第に体中が熱くなって気が付いたら布団の中で寝ていた。

後で聞いた話では、知り合いのちょっとしたお茶目だったらしい。源治が知り合いを叱ったのは当然の結末だ。

「うん。そうだけど……」

リアのその応答の様子から、元々知って頼んだらしい。

油断した……

普通に一八歳未満はお酒は禁じられていると刀弥は考えていたの
で、何も言わない以上普通のジュースか何かだと思っていた。

どうしてそう考えたのかと彼は自分を叱りつけたい気分だ。

「もしかして、お酒駄目だった？」

これまでのやりとりから、そう推測したのだろう。心配そうな顔
で聞いてくる。

「別に駄目という訳じゃない。ただ、俺の世界じゃこの年齢だと禁
止されてるから、単純に驚いただけだ」

「そうなんだ。じゃあ……どうする？ お酒じゃないのを頼む？」
「……頼む」

新しく頼むのは彼女に悪い気がしたが、無理して飲んで酔ってし
まうのも困りものだ。

「ここはおとなしくリアの厚意に甘えることにした。

程なくして、お酒ではない飲み物が刀弥のもとに届けられる。

「じゃあ、これは私が飲むね」

そう言ってリアは、彼が飲んでいた飲み物に遠慮なく口をつける。

間接キスを意識してしまう刀弥だが、そんなことを気にせず飲む彼女を見ていて、ひよっとして自分が気にしすぎてただけなんじゃないかという思いが頭の中に浮かんだ。

そんなことがありながら、二人の昼食の時間は過ぎていくのであった。

一章二話「新たな生活」(2) (後書き)

07/25

できる限り同一表現を修正。

一章二話「新たな生活」(3)

昼食が終わった二人は酒場を出ると、早速街道に向かった。

街道の左右には森が広がっており、道はその森を割るように真っ直ぐ伸びている。

二人はそんな森へと入っていく。

森の中は小鳥の囀り、気持ちのいい風が駆け抜けていた。太陽は熱を帯びているが、空気が湿ってないのでそれほど暑さを感じることはない。

二人は特に苦勞することなく森の中を進んでいた。

先頭はリア、その後ろを刀弥という並びだ。

「とりあえずこんな風に、フォレストウルフと遭遇するまで動き回る方針でいいのか?」

「というか、それしかないからね。一番いいのは巣を見つけることだけど……見当もつかないし、マスターの話通りなら、見つけたとしても数できついんじゃないかな?」

その意見に刀弥は納得した。

数で押されたらこちらが二人である以上、辛いのは目に見えてい

る。今回の目的はお金稼ぎだが、だからと言って無理をするほどのことでもない。で、あるなら堅実にいくのがベストだろう。

「手馴れてるな」

素直にそんな感想が出てきた。

「まあね。こういう仕事も結構あったし……」

「どんな仕事をやってきたか教えてもらってもいいか？」

これからのことを考えると一応、知っておきたい話なので刀弥は訊いてみることにした。

その問いに、リアは笑顔で頷く。

「飲食店や酒場とかじゃ店員や売り子さん。皿洗いや調理の手伝いとかもあったかな？ 宿屋じゃ掃除や洗濯をしたり、薬屋だと材料の調達が多いね。薬草だったりある獣や牙や身だったり……後はたまに行商の護衛を引き受けたり、今回みたいな賞金稼ぎをしたりもするし、場合によっては腕を買われて盗賊や今回みたいなモンスター狩りを頼まれたり……」

「モンスターか。獣とは違うのか？」

「基本的にはモンスターも獣なんだけど、一般的にはその獣の中で人に害や大きな損害を与える存在をモンスターって呼んでる状態かな」

その定義で行くと自分の世界ではライオンやサメ、猪や熊などがそうだろう。そんな考えが刀弥の頭に浮かんだ。

「たぶん、刀弥もいろいろ体験することになると思うよ」

「そのときはいろいろ教えてくれ」

「了解」

そんな楽しい会話をしながら二人は歩を進ませていた。

だが突然、リアが何かに気が付いて足を止めたかと思うと、おも

むろに近辺を見渡し始める。

刀弥もまた周辺から聞こえた複数の足音に、警戒を高め右手を腰の剣に持っていく。

やがて、茂みや森の奥から緑色の狩人たちが姿を現した。

獲物を見据える獰猛な目。その獲物を食らうための鋭い牙と爪。そして獲物に気づかれないよう森に紛れられるその緑色の毛皮。姿は狼によく似ている。

記憶にある張り紙の絵とぴったりと重なった。間違いない、フォレストウルフだ。

数は九匹。それが二人の周囲を取り込んでいる。

「……困まれるまで全く気が付かなかったな」

「確かに気を付けたほうがいいかも」

剣を抜く刀弥と杖を構えるリア。二人は背中合わせになって周囲を見渡す。

用意周到に困んできた彼らに、二人が気を抜くことはない。

フォレストウルフたちは静かに一歩、また一歩と二人に近づいていく。

対して二人は、それぞれ武器を構えたまま相手を見据えるだけだ。

一瞬、森を支配する冷たい静寂。けれども、それはすぐに破られた。

先に仕掛けたのはリアだった。

炎の珠をいくつも生み出し、周囲にいるフォレストウルフたちに目掛けて放つ。

『フレイムボール』

それが合図となり戦いが始まった。

フォレストウルフたちが走りだし、炎の珠を潜り抜ける。

彼らのいないところに着弾した炎の珠が爆発を起こすが、傍にある茂みや木々に爆発の炎が燃え移ることはない。どうやら魔術はそういう制御もできるようだ。

くぐり抜けたフォレストウルフたちは、それぞれ狙いを絞らせなためか、ジグザグの軌道で二人に迫る。

そのまま二人に近づいた彼らは、まずリアに襲い掛かった。

リアの左側から一匹のフォレストウルフが彼女に飛び掛ってきたのだ。

だが、それをさせまいと刀弥が飛び出し、そのフォレストウルフを叩き斬る。

直後、彼の正面から別のフォレストウルフが突っ込んできた。

ステップで右に避けると同時に、刀弥は身を回して背後から相手を切り裂く。

回る視界。その中で彼はリアのほうを見る。

彼女は丁度、新たな魔術を発動させているところだった。

『エアアロー』

風の矢が生み出され、周りへと放たれる。

その速度と先程よりも距離が近いこともあってか、三匹のフォレストウルフが避けることができずに貫かれた。

残り四匹。

ところが、そう思ったのもつかの間だった。

枝を踏み鳴らす音が聴こえたかと思うと、二人の頭上から新たなフォレストウルフが姿を見せたのだ。

「な!？」

「嘘!？」

これにはさすがの二人も意表を突かれた。

そのまま頭上のフォレストウルフは口を開き、リアにその牙を突き立てようとする。

寸前のところで、リアは杖を使ってフォレストウルフを殴り払った。

杖で殴られたフォレストウルフは態勢を崩して地面に投げ出されるが、ダメージは浅かったのかすぐに起き上がる。

さらにそれとは別に新たなフォレストウルフが五匹、仲間たちのもとに駆けつけてきた。

「これで合計一〇匹だね」

「奇襲か……マスターの言った通り、獣がする事とは思えないな」

酒場のマスターの警告が頭を過ぎるが、今更思い出しても仕方がない。

今度は刀弥が先に動いた。

彼は手近な相手に近づくと、その首元目掛けて剣を振り下ろす。倒した直後、背後から別のフォレストウルフが跳びかかって来るが、彼は身を縮めてその下を潜るように躲す。と、同時にそのから空きの腹へ剣を突き、そのまま斬り裂いた。

切り裂かれたフォレストウルフは血と中身を漏らしながら地面へと落ちる。

けれども、刀弥はそれを確かめない。彼の目は別の方を向いている。

彼が見ていたのはリアの方へと向かって走っていくフォレストウルフたちの姿だった。数は六匹。さすがにきついだらう。

急いで戻ろうとする刀弥。だが彼の前に、残り二匹のフォレストウルフが立ち塞がる。

どうやらこちらの足を止めている間に、リアを倒す腹積もりらしい。

刀弥は舌打ちをする。二匹で足止めができると判断されたということがその要因だ。

「二匹で足止めか……やれるものならやってみろ!!」

そうして刀弥はフォレストウルフを倒すために駆け出していくのであった。

一方、リアは自分に迫る六匹のフォレストウルフたちに対して、新たな魔術で迎撃しようとしていた。

『アースランス』

突如、大地より鋭い槍状の土群が盛り上がる。

これに対してフォレストウルフたちは回避を選択。しかし、三匹のフォレストウルフが回避しきれず大地の槍に貫かれてしまった。

残りは見事に回避することができたが、今度はリアの身長よりも高さのある土の槍群が壁となってしまう進むことができない。

飛び越えることもできそうにないと判断したのか、彼らは土の槍群を避けて回り込むことにしたようだ。

けれども、その行動はリアの想定内だった。彼女は意識内に魔術式を組み、機を待つ。

やがて、フォレストウルフたちがアースランスの群れから飛び出してくる。

この瞬間、両者の間に隔てるものは何もなくなった。

そのタイミングに合わせて彼女は魔術を起動させる。

『エアロブラスト』

瞬く間に周囲の風が彼女の前方に集まったかと思うと、それが風

の砲撃となつて撃ちだされた。

砲撃はあつという間にフォレストウルフたちに迫り、彼らを飲み込む。

凄まじい衝撃が彼らを襲い、フォレストウルフたちは遙か彼方へと吹き飛ばされた。恐らく絶命したいるはずだ。

「ふう」

六匹を退けたと判断し、リアはほつと息をつく。しかし、それは間違いだった。

いきなり、アースランスの陰から何か飛び出してきた。

それを見てリアは驚く。飛び出たのがフォレストウルフだったからだ。

その事実には彼女は一瞬、エアロブラストを放ったほうへと視線を向ける。

砲撃の向こう、倒れているフォレストウルフの数は二匹。どうやらあれを避けてアースランスの陰に隠れていたらしい。

急ぎ迎撃しようと魔術式を組もうとするが、どう考えてもそれより先に向こうの攻撃が届くほうが早い。

ともかく杖で防ごうと腕を動かすが、それよりも先に向こうが飛び掛ってくるのが早かった。

リアに抗う術はなく、ただ相手が迫る瞬間を見つめているしかない。

だがそのとき、二つの音がリアの耳に飛び込んだ。

一つは風を切る音、もう一つは何か刺さる音。その何かを彼女は見ていた。

剣だ。見覚えのある剣が、急に飛んできてフォレストウルフの首元に突き刺さったのだ。

フォレストウルフの牙はリアに届かず剣の勢いに押され、その身が横へ流れていく。

慌てて、剣が飛んできたほうへ顔を向けると、そこには見知った顔がゆっくりとこちらに近づいてくるところだった。その後ろには、二匹のフォレストウルフの死体が転がっている。

「なんとか間に合ったな」

「刀弥!!」

急ぎ彼のもとに駆けるリア。

よく見ると彼の左腕部分の服が僅かに裂け、そこから血が出ている。

「心配するな。かすっただけだ」

そんな彼女を見て苦笑する刀弥。確かに彼の言う通り傷自体はそれほど深くはない。

「ちょっと、じっとしてて」

彼の傍にまでやってきたリアはそう言ってそっと杖を彼の傷口に近づける。

『キユア』

対象の治癒力を高めて傷口を塞ぐ魔術だ。
傷があつという間に塞がっていく。やがて、傷は完治した。

「これで良し。後は……」

リアは傷が完治したのを確かめると、すぐさま新たな魔術を使用する。

刀弥には何が起こったのかわからない。
しかし、僅かに視線に近い何かを彼は感じ取ることが出来た。

「……もしかして、周辺にフォレストウルフの姿がないか探したのか？」

その感触から、刀弥は彼女が何をしたのか推測し口にする。

「ひょっとして、サーチに気付いたの？」

彼の推測にリアが瞳を大きくして驚いた。

「どうやら当たりだったらしい。」

推測が当たっていたことに、逆に刀弥も驚いてしまう。

そうこうしているうちに、サーチの結果が出たらしい。

「よかった。他にフォレストウルフはいないみたい。だったら、今のうちに首を集めて休憩しようか？」

「そうだな」

激戦の後で休息がほしいのは確かだ。リアの提案を刀弥が否定する理由はない。

そうして二人はフォレストウルフたちの首を集め、スパーサーに入れると休憩に入るのだった。

二人は今、木に背を預けて座っていた。

少し疲れたのか眠気が刀弥を襲うが、こんな危険地帯で眠るわけにはいかないとはかりに首を振って眠気を振り払う。

太陽の日差しは眩しく降り注いでいるが、二人は日陰にいるため彼らのもとに日差しが届くことはない。

そうして休んでいると、やがてリアが口を開きお礼を言った。

「さっきは助けてくれてありがとね」

「ん？ ああ、仲間を助けるなんて当たり前だろ？ 礼を言われることじゃない」

リアから礼を言われ、刀弥は遠慮がちにそう答える。

「むしろ礼を言うのは俺のほうだ。傷を治してもらったり、周りを探ってもらったり魔術っていうのは本当、便利だな」

それよりも先程のことを思い出し、刀弥は感心する。どちらも刀弥にはできないことだ。

「そんなに褒めるほどの事じゃないよ」

褒められた彼女はそう言って謙遜するが、これまで彼女がしてきたことを考えると、かなりの働きをしていると言えるだろう。

「確かに魔術はいろいろできるよ。というよりそれこそが魔術の最大の特徴だからね。だけどその分、欠点だってあるの。例えば、魔術を発動するために魔術式と呼ばれるものを意識内で組まないといけないんだけど、これが結構時間が掛かっちゃうの」

「つまり、急な対応は難しいと？」

「そういうこと。まあ、この速度は練習や慣れで短くしていくことはできるけど零にはできないからね。後は魔術の性能そのものは術者の能力に比例しないことが挙がるかな」

「？ どういうことだ？」

言葉の意味がわからず、刀弥は首を傾げる。

「ある魔術式が持つ魔術の性能は術者の実力に関係なく一定なの。実際は全開まで引き出せないから相性や慣れ、コンディションによって変化があるように見えるけど、それはそう見えるだけ」

「なるほど、それで？」

相槌を打ちつつ、彼は話の続きを促す。

「要するに、強くなるためにはその分、強力な魔術式を取得する必要が出てくる訳だけど……当然、強力な魔術式はその分、魔術式が

複雑で規模も大きいから……」

「さらに発動させるために時間が掛かるといふことか」

彼女が説明の続きを言うよりも先に、結論の出た刀弥が口を開いた。

「そういうこと」

「となると、魔術師にとって重要な能力は魔術式を組む速度と魔術式を取得する技術力、そしてマナの生成量の三つということか。無論、強力な魔術式はその分、必要なマナの量も増えるんだろ？」

早く発動させることができるようになれば、突然の動きにも対応できるようになるし、より強力な魔術式も早く発動させることができる。

また、強力な魔術式の取得にはそれ相応の難易度があり、当然そのために技術力が必要になってくるだろう。

そして強力な魔術式ほど、必要となるマナ量も多いはずだ。マナの生成量は重要な能力となるはずだ。

それ故に、これら三つは魔術師にとって大事な能力だと判断したのだ。

「……魔術式とマナの必要量については概ねそうだね。生成量が足りないとい供給に時間がかかっちゃうから。でも、あれだけで、もうそこまでわかっちゃったんだね？」

彼の話聞いてリアが驚き、尊敬の眼差しを向けてくる。

「僅かな情報から相手の特徴や欠点を探りだすのは、戦いにおいて基本的なことだと教わったからな」

これは源治から教わったことだ。
相手を知ることが勝つために重要なことだ。そうすることで相手の利点や弱点を見つけ、自分を有利に相手を不利にするための戦術を編み出す。

刀弥はそれを同年代同士の試合などで実践してきており、その重要性を十分理解している。

「まあ、確かに私もそんな話を教わったな」

「教わったって誰に？」

「先生から」

「先生？ この無限世界にも学校みたいな何かを教えるための施設があるのか？」

先生という言葉が気になった刀弥は、思い切って訊ねてみることにした。

「うん。世界によっていろいろあるんだけど……私の場合は魔術師を養成するための学院に通っていたの」

「皆通うのか？ 後、いくつぐらいから通えるんだ？」

興味を持った刀弥は、矢継ぎ早に質問をとばす。

「残念だけど試験に受かった人だけ。通うのは一〇歳ぐらいからかな。あ、基準時間での話だよ？ 年の周期が違うから、多少誤差はあるけど……で、約四年と少し学ぶことになるかな」

「リアの世界の時間ならどのくらいなんだ？」

「それなら丁度四年。私の世界のほうが、基準時間より一日の時間や一年に掛かる日数が長いからそうなっちゃうの」

「いろいろと面倒だな」

これが世界の違いということなのだろう。

刀弥は一人苦笑する。

「リアって、今いくつくらいなんだ？」

「基準時間で最近一五歳になったばかり。刀弥は……って、そういえばわからないんだっただね」

「ああ。時間の比較は済んだから後は計算するだけなんだが……たぶん、リアと同じくらいのはずだ。しかし、一五歳か。卒業してすぐに旅に出たとしても、まだ一年未満ということになるのか」

「うん、そうなるね。実を言えばこれって私の学院の伝統行事でね。卒業生は皆、一人前の魔術師になるために、修行として無限世界中を旅することになるの。大体、基準時間で一〜二年くらいかな？

そうして帰った後、皆いろんな職業に就くの。中にはそのまま旅を続けたり、旅先で暮らす人もいるんだけど」

「リアはどうするつもりなんだ？」

「私はできたら旅を続けたいとは思ってる」

「旅が好きなのか？」

「うん。知らないことや知らないものと出会えるのが、楽しいって言えばいいのかな？」

「それで俺なんかに興味を持ったのか」

最初のリアの誘いを思い出す。そういうことならあの言葉も納得だ。

「うん。まあね。刀弥の世界はどうなの？」

「そういう施設はある。目的は知識を教えることになるんだろうな。期間は小学校が六年、中学校が三年、任意で高校が三年。大半の人

間はこれだけの期間は学ぶな。望めば、さらに上の学校もあるし、仕事に関係することを教える専門の学校もある。一応言っておくけど、年数は俺の世界での時間の話だからな」

「すごい。そんなに長い間、学んだ」

「感心することじゃない。むしろ、当たり前前すぎて皆、学ぶ意欲を亡くしているのが実態だ。始まりは大体、六歳くらいだな」

感心の目を向ける彼女に、刀弥は苦笑を返す。

「剣術はいつから？」

「物心つく前からかな。家が剣術を代々伝える家だったから……」

「あ、そこは私と同じなんだ」

その言葉に、リアが仲間を見つけたかのような反応を見せた。

「私も魔術師の家系で物心つく前から魔術を教わっていたの」

「そうなのか。意外な共通点があったな」

「そうだね」

自然と互いに笑いが込み上げてくる。

「さーてと、休憩終わり。続きを始めようか」

「そうだな」

あれから結構な時間が経過している。

体も心も十分休まり、続きを始めるには丁度いいタイミングだ。

「ただ、気を付けないとな」

「わかってる」

さっきのフォレストウルフたちの動きから、油断できないのは間違いない。

気は抜けないな。

二人は立ち上がると、森の更に奥を目指して進んでいくのであった。

一章二話「新たな生活」(3) (後書き)

07/25

できる限り同一表現を修正。

09/18

魔術あたりの説明を含めて、少々修正。納得いく説明を書くのは難しいものです。

一章二話「新たな生活」(4)

森の中を歩いているときだった。

遠くのほうから、こちらへと向かって走ってくる足音が聞こえてきた。その足音に二人は足を止め、耳を澄ませる。

足音は複数。方角は全方位。どう考えても、先程とは比べ物にもならない程の数が迫ってきている。

逃げることはできないと、判断した二人は互いに背中を預けて身構えることにした。

やがて、フォレストウルフたちが姿を現す。予想通りその数は先の時と比べると馬鹿馬鹿しいと思えるほどの数だ。

そうした大集団の中、一匹だけ異彩を放っているものがいた。

他のフォレストウルフと比べて倍ほどもある巨大な体？。己が王者だと言わんばかりの傲慢なその瞳は、値踏みするかのように二人に注がれている。

こいつらのボスだ。

自然と刀弥はそう確信した。

ボスのフォレストウルフはそうしてしばらくの間、二人を見下ろしていた。が、やがて興味を失ったのか周囲の仲間たちに聞こえるように大きな声で吠え始める。

それが合図となりフォレストウルフたちが、一斉に襲いかかってきた。

その瞬間、リアの魔術が発動する。

『ウォールストーム』

突如、竜巻が生まれ、それがフォレストウルフたちの接近を阻む壁となる。

その竜巻を強引に突破しようとするフォレストウルフたち。だが、竜巻は近付いてきたものたちを次々と飲み込むと、遙か彼方へと吹き飛ばしてしまった。

どうやら突破できそうにないな。

そのことを確信した刀弥は安堵の息を吐く。

「助かった」

そうして刀弥は自分を守ってくれた仲間らに感謝の言葉を述べた。

さすがに、あの数を対処するのは厳しい。リアの魔術がなければ物量で押し負けていただろう。

「礼を言うのは助かってからにしよう」

「そうだな。で、問題はこの数を相手にどうするかだな」

あれから、相手が飛び込んでくる様子はない。恐らく切れるまで待つつもりだろう

「この魔術。どのくらい持つんだ？」

「術者の精神力次第。私の場合、九ティムぐらいかな」

ちなみに朝方、時計と携帯の時間を確認し計算した結果、一ティムが三分四五秒という比率だとわかっている。
すなわち、約三〇分ほど持つということだ。

「なるほど。とりあえず全部を相手にするのは無理。となると、自然と狙いはあいつを倒すことになるな」

あいつ、つまりボスのフォレストウルフのほうを見て、刀弥はそう告げる。

それに対してリアも頷いた。

「そうだね」

「問題はこの群れを突破して、どうやってあいつを倒すかだな」

「一撃で決めないとまずいよね？」

倒すのに時間を掛ければ、他のフォレストウルフたちに襲われてしまう。当然の判断だ。

「それ以外にありえないな」

問題はその具体的な方法だ。

ただ突っ込んだだけではフォレストウルフたちが邪魔になって、ボスのもとに到達するのに時間が掛かり過ぎてしまう。

「何かいい魔術はないのか？」

魔術に頼りすぎているような気もするが、自分の力ではどうする

こともできない以上それを利用するしかない。

「エアロブラストならフォレストウルフたちを押しつけてボスに届くとは思うけど、殺傷力は低いから一撃という保証がないんだよね。フレームブラストも同じようなことはできるけど、遅い分避けられる恐れがあるし……」

「つまり届かすことはできるけど、仕留めきれぬ確証はないということか」

「ごめんね」

「謝ることじゃない。それを言ったら俺のほうで役立たずだし……」

とはいえ、生き残るためには今ある手札を上手く使って切り抜けるしかない。

刀弥は思案する。

届かす方法はある。難点は仕留め切れないということだ。

仕留めることができれば、待っているのはフォレストウルフたちの一斉攻撃という痛みの地獄。

「エアロブラストの連続発動とかっていうのは無理なのか？」

「技術があれば並行して魔術式を組むとかできるようになるけど、今の私には無理かな。一応やってみてもいいけど……」

「いや、さすがにそこまで負担を掛けられない」

本当に自分は役立たずだなと刀弥は思った。

出来る事なら自分でもうにかしたい。

しかし、フォレストウルフたちが邪魔でボスのもとに行くことすら……

そこまで考えて刀弥はふと、あることに気が付いた。

「リア、エアロブラストなら他のフォレストウルフたちを押しつけて、ボスのもとまで届かすことはできるんだよね？」

「え、うん。でも、一撃で倒せる保証はないよ？」

刀弥の確認の問いに、リアは残念な事実で答えを返す。

だが、その言葉を聞いて刀弥が笑みを見せた。そうして彼は、次のようなことを言い返していく。

「問題ない。追撃は俺がする」

「え？」

一瞬、何を言っているのかわからず、彼女は呆けた顔をしてしまった。

「リアがエアロブラストを撃って、その直後に俺がボスのもとに突っ込むということだ」

「そんな!？」

「邪魔な連中はエアロブラストで退かせて、ボスまで一直線に向かう。足には自信があるから穴が埋まるまでにはボスのところへ辿り着けるだろうし、ボスが倒れていなくてもエアロブラストで傷ついているはずだから、勝機は十分にある」

彼女が何を言いたいのか大体わかる。

空いた穴が埋まってしまう前にボスのもとに行けるのか？ そして、ボスと一対一で勝てるのか？ そう言っているのだ。

だから、先にその反論を潰してしまう。

「でも……」

それでも何かを言おうとして、彼女は口ごもってしまふ。

「どの道このまま何もしなくても結果は一緒だ。心配するな。やれるぞ」

安心させるように刀弥は笑う。

それを見て、それまで不安そうな表情だったリアが決心した顔を見せた。

「……わかった」

「よし、タイミングは任せた」

いつでも飛び出せるように姿勢を整える刀弥。

「魔術式は準備完了。ウォールストームを解除したら、すぐに撃つね」

それに対して刀弥は頷く。

直後、竜巻の壁が跡形もなく消え去った。

風の壁が消えたことで、それまで見えづらかった壁の向こう情景じょうけいがより鮮明に見えるようになる。

周囲には虚貌な顔つきを見せるフォレストウルフたち。

だが、刀弥は彼らを見ていない。

彼が見ているのは、倒すべき相手のみ。

そして遂にリアがエアロプラストを発射した。

エアロプラストは獣の壁を突き抜け、彼のための通り道を作り出

していく。

それに合わせて刀弥は走り始めた。

足に自信があるのは、嘘ではない。風野流の剣術の真髓しんずいは足、すなわち移動速度にあるのだから。

重い剣を持った姿勢のまま、彼は短距離選手並の速度で走る。

既に道には、フォレストウルフたちが空いた空白を埋めるように押し寄せてきていた。

だが、彼は気にせず、ただひたすらゴールへと向かって駆け抜ける。

恐怖がない訳ではない。

どんなに自信があっても、不安や恐怖は付き纏う。

だがしかし、それ以上に彼の内にあるのは必ず成功させるという強い意志だ。

視線の先、エアロブラストがボスのフォレストウルフと衝突する。大気のぶつかる音と共にボスが吹き飛ばされる。だが、ボスはすぐに体勢を整え直すと綺麗に地面へと着地した。

やはり、リアの予想通りエアロブラストでは仕留め切れなかった。しかし、だからこそ自分が走っている。

既にボスは、己に迫る刀弥の姿を認識しているようだ。

彼を振り返りにするべくボスは飛び上がると、その左足の爪を彼の眼前へと迫らせる。

けれど、刀弥もまたそれを迎え撃つべく動いていた。

剣を水平に腰を使って左後ろへ回し、そして、右足が地に着いた瞬間……

彼は大地を強く蹴った。

風野流剣術『疾風』しつぷう

視界の流れが早くなり、ボスの左足が左へと通り過ぎていく。僅かにかすったのか、頬に傷が生まれるが彼は止まらない。

悪いが死ぬつもりはない。

そうして、その先にあるのは無防備なボスの胴体。

迷わず彼は、そこに己の全てを叩き込んだ。

胴体の半分以上を切断されたボスは、痛みの咆哮を上げる。されど、かのものにできたのはそこまでだった。後はただ力を失い、倒れていくだけ。

ボスが倒れたことで他のフォレストウルフたちは動きを止め、一斉に己の主の方へとその首を向ける。けれども、かのものが再び起き上がることはなかった。

それを確認すると、フォレストウルフたちは一目散にその場から去っていく。

後に残ったのは、物言わぬ遺体と少年と少女の姿だけ。

「刀弥！！」

フォレストウルフの姿がなくなったのを見計らって、声を上げて刀弥のもとに駆け寄ってくるリア。その呼び声に刀弥は振り返った。

「大丈夫だ。怪我はない」

「……頼。怪我してるよ」

「え？」

その指摘に慌てて、左手で頬の辺りをさする刀弥。それを見てリアは失笑した。

それから彼の傍まで歩み寄ると、魔術でその頬の傷を治す。

「悪い」

「気にしないで。それで、これも一応帰って帰る？」

そう言って背後、ボスの方へと視線を向ける。

「そうだな。一応帰って帰るか。できれば賞金とかも増えてくれればいいんだけど……」

「その辺は、私が交渉してあげる」

そうして二人はボスの首を回収すると、町へ戻るべくその場を後にするのだった。

一章二話「新たな生活」(4)(後書き)

07/25

できる限り同一表現を修正。

一章二話「新たな生活」(5)

結果から言えば、二人はかなりの報酬を手にするようになった。

ボスの目撃情報は度々報告されていたようで、二人が説明するまでもなくボスの首を見た途端、町長は二人に感謝し、これで被害は大きく減るだろうと喜んでいた。

リアが交渉するまでもなく高額懸賞金が二人の手に渡され、それを持って二人は町長の自宅を後にした。

さすがにくたくたで、その日は宿屋に戻って休もうということになった二人。

そして翌日……

「刀弥。似合ってるよ」

「……そうか？」

剣の代わりに刀をさし、ウエストバッグを腰に着けた刀弥の姿を見て、リアが嬉しそうに褒めてきた。

それがこそばゆくて、刀弥はつい視線を逸らしてしまう。

「そうだ。記念にオーシャルで撮ろうか」

「べ、別に、そこまでしなくてもいいだろ!？」

さすがにそれは恥ずかしい。

刀弥は遠慮しようとするが、リアはそんな彼を無視して首元からオーシヤルを取り出す。

「それじゃあ、撮るよ」

「だから、いって」

「どうして？ せつかくのスタートなんだから記念に撮ろうよ」

「スタート……」

その言葉を聞いて刀弥は考え込んだ。

無限世界に来たのは一昨日。

だが、旅の本当の意味でのスタートとなると、まさしく彼女の告げたとおり今日と言えるのかもしれない。

それはつまり……

ようやく俺の新しい生活が始まるということだ。

これから先、何が起こるのかわからないが、良い事も悪い事も待っているのは確かだろう。

それでも自分が選んだ以上後悔はないし、これからも後悔のない選択をしていくつもりだ。

そんな風に彼は心の中で決心する。

「隙あり」

と、そのとき、思考に没頭していた刀弥の顔を見てリアがオーシヤルを使用した。

「え？」

オーシヤルが一瞬、点灯する。それが撮られた証だった。

「リア……」

「いいじゃん。記念、記念。中々いい顔してたし」

恨めし気に見る刀弥に、リアが笑顔を返す。

「それじゃあ、撮り終えたしゲートに行こっか？」

「……そうだな」

まだ、何か言い足りなさそうな刀弥だったが、結局何も言わずゲートのほうへと向かうことにするのだった。

「……………」

刀弥は呆然とした面持ちでそれを見つめていた。

行き交う人、路上で物売る行商。そして武器を持ち周辺を警戒する二種類の兵士。

それら人々の先に刀弥が見ているものがあつた。

それは光の球体だつた。

大きさとしては刀弥の身長の二倍ぐらいだろうか。それが一定の間隔で僅かに大きさを變えて脈動していた。

人々がその球体に触れると、その途端、人が光に分解され球体の中へ吸い込まれていく。

逆に球体から光が溢れ出たかと思うと、それが集まり人の形となる。

それは人だけに留まらず、馬車や魔具の乗り物でも同様だ。

「……あれが……ゲートか」

「うん、そう。あれで次の世界に行くの」

「……そういえば、次の世界ってどんなところなんだ？　というか、どこに行こうとしているんだ？」

ここに来てようやく刀弥はリアがどこを目指しているのか、教えてもらっていないことに気が付いた。

「次の世界はファルセンっていう極寒の雪と山がほとんどを占めている世界。そこを通過してリアフォーネに行こうとしているの」

「極寒の雪と山がほとんどって……そんなところにも人が住んでるのか？」

そんな厳しい環境に人が暮らしているという事実には、刀弥は驚く。

「元々は無人の世界だっただけで、鉱物資源が豊富に採掘されることがわかって、それ目当てに人が集まったの。今じゃ国が出来るまでの規模になつてるよ」

「そういう歴史なのか」

「寒さを凌ぐために採掘で掘った穴を広げて、そこに町を作ってるって話だよ。掘った坑道が町と町を繋ぐ道にもなってるみたいだし……」

「へえ……」

彼女の解説を聴いて、刀弥の好奇心が刺激される。自然と、どんなところなのか見てみたいという気持ちが芽生えてきた。

「あ、ちよつと待ってて」

と、説明している途中で何かに気が付いたのか、リアがそう言っ
て路上で店を開いている行商のもとへと駆けていく。

しばらくして、彼女が戻ってきた。その手には二つのフードが抱
えられている。

「これ、さっきも言ったけど、この先は寒いからね。何も着ていな
いよりはマシでしょ？」

「ああ、悪い」

刀弥はそれを受け取り、自分の分のお金を彼女に渡す。
リアは遠慮する様子もなく、それを受け取った。

「それで、ゲートを渡るためには、まずはあそこで何かしらの検査
を受ける必要があるってことか？」

彼が見つめる先、そこでは自分たちと同じくゲートを利用しよう
とする人たちが、兵士達から荷物検査やいくつかの質問を受けてい
るところだった。

「そうだね。あっちの国だって入ってこられたら困る人や物もあるからね。そういうのをここで止めちゃうの」

なるほどと刀弥は納得する。

来て欲しくない物がある場合、一番いいのは入る前にそれを止めてしまうことだ。そうすれば実質的な被害が起こる前に確実に防ぐことができる。

空港みたいなものだな。

一人そう考えて刀弥は頷いた。

「それじゃあ、俺たちもさっさと検査を済ませるか」

そうして二人は検査を受ける。

荷物はスパーサーも含めて検査するということなので、全て兵士たちに預けた。

身体検査を終え、荷物検査を待っている間に今度は別の兵士が二人に質問をしてくる。何の目的で渡るのか。どこを目指しているのか。

リアがリアフォーンに向かっていている旨を伝えると、親切にもそこに向かうのに比較的安全なルートを教えてくれた。

それが終わるとタイミング良く荷物の検査も終わり、二人は荷物を受け取るとすぐさまその場を後にした。

荷物を確認して、なくし物がないのを確かめると二人は奥にあるゲートに向かって歩いて行く。

間近で見るとゲートは自分よりも遙かに大きく、光の鼓動を肌で感じる事ができた。

無意識に刀弥の足が止まってしまふ。

周りの人々は何の躊躇いもなくゲートに触れるが、何分、刀弥にとっては始めてのことだ。

安全なのだろうか。事故は起こらないだろうか、何となしにそんな不安が込み上げてきてしまふ。

と、そんなことを考えていると、不意に隣のほうから忍び笑いが聴こえてきた。

「……リア」

「いや、だつてね。刀弥ったらゲートを見て不安そうな顔をしてるんだもん。それが可笑しくって……」

非難するような刀弥の視線にリアは笑い声を堪えたまま言い訳を返してくる。

しかし、そんな彼女を見て刀弥の中にあつた不安はどこか彼方へと吹き飛んでしまった。

おかげで決心がついた。

「……よし、いいぞ。行こう」

「うん」

そうして二人はゲートに触れる。

触れた瞬間、刀弥は目の前が真っ白になったかと思うのと同時に体に浮遊感を感じた。それは以前、この世界に来たときに体感した

ものと同じ感じのものだ。

やはり、あれもゲートだったということか。

そんなことを考えながら刀弥は次の世界へと渡るのだった……

一話終了

一章二話「新たな生活」(5) (後書き)

ようやく二話が完成しましたので投稿致しました。

一話一話をこんな感じの量で書いていきたいと思っておりますので時間が掛かるとは思いますが、読んでくだされば幸いです。
がんばっていきますのでどうぞお楽しみください。

07/25

できる限り同一表現を修正。

一章三話「命の抗い」(1)(前書き)

連絡事項：6月23日 仕事のほうが忙しくなり、今の仕様のまま
だといっ投稿できるのかわからないので、20ページから4〜6ペ
ージ程度変えようと思ってます。

それに伴い、1話2話のほうも切り分けることに致しました。

故にこの話から今回、新しく投稿された話です。

一章三話「命の抗い」(1)

気が付くと目の前に白と灰色の世界が広がっていた。

白い平原とゆっくりと舞い降りる雪たち。辺りを見渡すと雪の降り積もった灰色の山々が壮大に佇んでいる。

それら見回してから刀弥は正面を見た。

視界の先ではゲートから現れた人々が一直線に出口を目指し歩いていった。

途中、兵士たちが彼らを止めて検査をしているが、行きるときと比べると簡素な検査だけで済まされているようだ。

逆にこちらに向かう人たちは先程、自分たちが受けた検査と同じものを受けているが見える。

よく見ると、並んでいる人の多くが馬車を引き連れられたり、大きな荷台を運ぶ乗り物に乗ったりしている。

荷物は大半が木箱でそれがいくつも積み重ねられて載せられている。動くときの様子から、かなり重たいものであることがわかった。

鉱物資源が豊富だという話なので、恐らく輸入目的か転売目的でそれを買った商人たちだろう。この世界はそうやって、金銭を得ている訳だ。

ふと、体が冷えてきた。

先程、リアからフードを受け取ったことを思い出した刀弥はすぐさまそれを着ることにする。

「それじゃあ、刀弥行こうか」

フードを着ると隣から見知った声が聞こえた。
振り返ってみると、声の主はリアだった。

「ああ」

そうして、二人は出口に向かって歩いて行く。

少し進むと、一人の兵士が二人に声をかけてきた。

兵士たちの格好は鎧ではなく、代わりに毛皮と思わしき白い上着とズボンという防寒を重視した服装だ。

「すみません。念のため簡単な検査をさせていただきます。ご了承ください」

「わかりました」

素直にそう答えると、他の兵士たちが二人のボディチェックをしていく。

「こちらには観光で？」

「いえ、リアフォーネを目指して」

「リアフォーネ……つまり、ラーマスを目指しているんですね」

ラーマス。そこにリアフォーネに繋がるゲートがあるのだろう。

後でリアにどのくらい掛かるのか聞いてみようと、刀弥は頭の隅でそんなことを考えた。

「はい。そうです」

「道はわかりますか？」

「あちら側の兵士さんから聞きましたので」
「では、大丈夫ですね。一番近い町であるファルスはあの洞窟の中
です」

兵士の指差す少し先、そこにはぽっかりと大きな穴が空いていた。

「ありがとうございます。刀弥行こ」

リアに連れられ、刀弥は彼女と共にその洞窟へと向かうのだった。

洞窟に入った途端、寒さを感じなくなった。

「あれ？」

そのことに気付いた刀弥が背後を振り返る。すると、雪が途中で
遮られているという光景が彼の目に入った。

「寒さと雪の侵入を遮っているのか。だとするとこれも魔具の力か
?」

「刀弥。どうしたの？」

背後を振り返って呟くに刀弥にリアが歩み寄ってくる。

「ん？ ああ、寒さと雪の侵入を防いでるなと思って……」

その言葉にリアも刀弥の見つめている先を見る。

「あ、本当だ。きつと、魔具の力だね。雪と寒さの遮断と一定温度の維持、後この明かりとかも町自体が分配のマナを使ってやってるんだろっね。どれも町自体に必要なものだし」

言われ天井を見上げると、確かにほのかに明かりを灯している物が天井にぶら下がっていた。

「ほら、見上げてばかりしないで、先へ進もう」

「あ、悪い」

そうして歩いていると、やがて二人は広い場所に出てきた。

「うわぁ」

「リアの言ったとおりだな」

リアが感嘆の声を漏らし、刀弥は感心の声をあげる。

『寒さを凌ぐために採掘で掘った穴を広げて、そこに町を作ってるって話だよ』

この世界に来る前にリアが言った言葉。

その言葉のとおり、町は洞窟の中にあつた。

広く掘り広げられた洞窟の中に、建物が密集して並んでいる。町の中央は広く開けており、そこにマナの収集装置が置かれていた。

天井の一番高いところにはかなり大きな明かりがあり、太陽と見間違うほどの光を町に降り注がせている。

そんな中で、人々は通常の暮らしを営んでいた。

リアが思わず駆け出していくが、途中でクルリと身を回すと町を眺めたままの刀弥に声を掛ける

「ほら、刀弥も早く!!」

「わかったから。大声を出すな」

そう返して早足で彼女を追いかける刀弥。

町に入った二人は、そのまま町の中を散策することにした。

「鉱物資源が豊富とは聞いていたけど、宝石も結構採れるみたいだな」

刀弥がそう思ったのは露店の中にくつつも宝石を取り扱っているお店があったからだ。

透明なケースに入れられた色とりどりの宝石。中にはかなり高い値札の付いた宝石まである。

女性たちは皆、目を輝かせてそんな宝石を眺めていた。

男性も幾人かが興味深く覗いているが、時折、何かを考えているようなそぶりを見せていることからその動機は女性へのプレゼントだと推測できる。

そんな中、リアは彼女たちのように宝石に見とれることはなかった。

時々、宝石を前に足を止めたりはするが、それは物珍しさからであって、宝石だからという理由では決してない。

「リアは宝石とかには興味がないのか？」

それを不思議に思った刀弥が思い切つて尋ねてみることにした。

「ん、ない訳じゃないけど、あの人たちみたいそこまで惹かれる物でもないかな」

彼の質問にリアは苦笑を浮かべて答える。

まあ、確かに全ての女性が宝石に色めき立つとは限らないだろう。刀弥は一人納得して、二人は歩み続ける。

次に二人が着いたのは、鉱石を取り扱う市場だった。

馬車や乗り物に箱詰めした鉱石を乗せる男たち。遠くのほうでは競りでもやっているのか、いくつもの大きな声が聞こえてくる。

そんな市場の中を二人は歩いていった。時折、二人の傍を馬車や乗り物が通りすぎていく。

「活気があるな」

「そうだね」

熱気のあるその雰囲気、二人は思わず呑まれそうになる。

辺りには大きな箱がそこら中に置かれている。恐らく、中身は全て鉱石だろう。

既に関手がついたものなのかはわからない。だが、いずれはどこかに運ばれ様々な物になって、人々に利用されることになるのだろう。

自分たちはその始まりにいる訳だ。

そう考えると感慨深いと思いにさせられる。

そうこうしているうちに、二人は市場の終わりまで辿り着いてしまった。

その先からは、酒場や飲食店の看板が立ち並ぶ飲食街のようだ。それを見て刀弥は、お腹が減っているのを自然と自覚した。

「……そういえばそろそろ昼頃か」

「まあ、こつちじゃ夕方みたいだけど」

リアの視線の先にある時計を見ると、時計は四分の三ほど回っていた。中央に三二〇タイムという値が書いてあることから恐らく、この一日は三二〇タイム（二〇時間）なのだろう。

そうになると、この世界の現在時間は二四〇タイム。確かに彼女の言うとおり夕方だ。

「基準時間はまだ朝方なのにな」

腕時計を眺めながら刀弥は呟く。

刀弥のしている腕時計は準備のときに買ったもので、基準時間の時間と日付が刻まれている。

日付は一六二と表示され、針は一八分の五。つまり一〇〇タイムでかなり朝早い時間帯だ。

とはいえ、朝だろうが夕方だろうが昼御飯を食べていない刀弥たちがお腹を空かせていることに変わりはない。

「何かを食つか」

「そうだね」

食事をするという選択肢が出てくるのは当然のことだった。

とりあえず目についた飲食店に入る二人。席に座ると二人は適当なものを注文した。少して料理が運ばれてくる。

運ばれてきたのは、茹でたイモ類と豆のシチューとパン。それを二人は食べ始める。

「で、これからどうする？」

食事をしながら、刀弥が質問を投げかけてきた。それはさっさと次の場所へ行くのか、という意味だ。

町は夕方だが、自分たちにとっては起きてからそれほど時間は経っていない。

眠いという感覚にはまだ程遠い。だから、このまま一気に次の場所まで行くのかと聞いた訳だ。

しかし、リアは首を横に振る。

「ラーマスまで一四日程掛かるから、こっちの時間に合わせるつもり」

「じゃあ、宿屋で部屋をとって休むのか？」

「そのつもり」

笑顔で返すリア。

そうしているうちに食事は終わり、二人は宿屋を求めて町を彷徨うのだった。

宿屋はあっさり見つかった。というより、見渡せばどこかに必ずあるといえるような状態だった。

行商など利用者は多いのだろう。

差別化を図るためか、寝心地の良いベッドを使っているとか、高級の料理を出す食堂があるなどのアピールがあちこちの看板に書かれている。

「どれにする？」

「……普通でいい」

せつかくベッドで寝るのであればできれば気持よく寝れるベッドがいい。しかし、高いところは金の関係で避けたい。その妥協の結果だ。

「私も同感」

どうやらリアも同じ考えだったらしい。

丁度、その条件に合致しそうな宿屋があった。

二人はその宿屋に泊まることにしたのだった。

「いらっしやませ」

宿屋に入ると受付に座っていたおばさんが声を掛けてきた。

「すみません。二人ですが部屋は空いてますか？」

「一人部屋二つと二人部屋どっちも空いてますけど、どっちします？」

「一人部屋二つでお願いします」

すかさず刀弥がそう答えた。

さすがに二人部屋は前回、何事ともなかったとはいえ、できる限り避けたいところではある。

手続きを終え、差し出された鍵を受け取ると早速二人は部屋に向かうことにした。

だが、ふと視線を感じ、刀弥は足を止め背後へ振り返る。

「どうかしたの？」

そう問いながら、リアもまた彼が振り返った方向に視線を向ける。けれども、視線の先には何もいない。

「いや、誰かがじつと見ていたような気がしたんだが……気のせいだったみたいだ」

「そっか。じゃあ行こう」

そうして二人は再び歩き始める。

そして部屋に辿り着くと、二人は一旦そこで別れた。

中に入ってみるとそこは温かみのある部屋だった。

紅緋色の壁紙べにひいろと白の天井、床には赤橙色あかたいたいいろのカーペットが敷かれている。

窓側にあるベッドに触れてみると、柔らかな感触が返ってくる。

十分満足できるレベルだった。

隣には浴室やトイレに続く脱衣所。

前回の宿屋と比べてそれほど部屋の構成に違いがないことから、この構成が標準的なようだ。

「刀弥。いる？」

と、そこにノックと共にリアの声が聞こえてきた。

「ああ」

返事をする、彼女がドアを開けて中に入ってくる。

「どうした？」

「暇だったから来ただけ」

用件を訊いてみると、リアは笑みを浮かべてそう答えた。

考えてみれば、眠るまでまだ十分時間がある。かといって暇を潰せるようなものを刀弥は何も持っていない。

一緒に持ってきた本は、既に読み終えてしまった。
ならば、残るのは話をするだけとなる。

「リアは今まで暇なとき、どうしてたんだ？」

「今まではすることもなかったら、荷物を整理し直したり魔術の勉強や修行とかしてたかな」

「それは建設的だな」

その話で刀弥はこここのところ剣術の修行をしていないことを思い

出した。

明日、起きたら修行をしようと思は心に留める。

「でも、今度からは話相手もいるからね。訊きたいこととかいろいろあるし……」

「なるほど。で、何が……」

何が聞きたいんだと言おうとしたそのとき、ドアをノックする音が二人の耳に入った。

二人は顔を見合わせる。

「さっきの人かな？」

「他に心当たりないしな。何の用だろう？」

ただ、ノックの音が随分と低いところからしたのは気のせいだろうか。

とりあえずドアを開けてみることにする。

だが、ドアを開けてみると、目の前に誰の姿もなかった。

「あれ？」

慌てて左右を見回してみるが、やはり誰もいない。

イタズラかと思っただけだ。

「……あの……こっちはです」

「え？」

声の聞こえた下へと刀弥が目を降ろしてみると、そこには小さな女の子が立っていた。

歳のは一〇歳くらいだろうか。肩まで伸びた本紫色の髪。花色の幼い双眸は見開いたまま、じつと自分のことを見上げている。

服装は寝間着のようで、その腕には何かのぬいぐるみが抱かされていた。

「えっと、何か用かな？」

予想外の訪問者に、とりあえず刀弥は用向きを聞いてみることにした。

それを聴いて彼女は少し逡巡したが、やがて、何かを決意したかと思うと次のようなことを質問してきた。

「えっと、お兄さんたちは旅の人ですか？」

「……まあ、そうだな」

嘘を言っても仕方ないので正直に答える。しかし、それが一体どうしたのだろうか。

すると、それを聞いて少女が言葉を続けようとする。

「あの……その……えっと……」

けれども、口ごもってしまい中々言い出せない。

そのうち、中々終わらない来客に疑問を持ったのか、リアが二人のもとに近づいてくる。

丁度そのときだった。

少女が大きな声で頼みごとをしてきた。

「あ、あのお話聞かせてください!!--」

「……はい？」

それが刀弥の感想だった。

一章三話「命の抗い」(1)(後書き)

07/26

できる限り同一表現の修正。

一章三話「命の抗い」(2)

「……えーと、名前はリユーネ。さっきの受付に座っていたおばさんの娘さんで、私たちから他の世界の話とかが聞きたいんだね?」
「は、はい」

リアの確認の問いにベッドに座り込んでいた少女が頷く。
その様子から、若干緊張しているのが伺えた。
見知らぬ人にあんなことを頼むのだから物怖じしない性格かと思っ
っていたが、どうやらそうではないらしい。

「……いいよ」
「本当ですか!？」

迷うことなくリアが彼女の頼みを受け入れると、途端にリユーネ
は嬉しそうな顔を見せた。

「うん。私たち暇だったし、実は丁度今からそこのお兄ちゃんの世
界の話とかを聞くところだったんだから」
「そうなんですか?」
「まあ、そうだな」

視線を向けて尋ねてくる彼女に、刀弥は安心させるように穏やかな表情で答える。

「だから、リユーネも興味があるなら一緒に聴く?」
「はい!！」

強い口調と共に、彼女は何度も首を縦に振った。

そうして、刀弥は自分の世界のことについての話を始める。
主に電気を動力とした文明であること。それを生み出すために化石燃料、自然エネルギーや原子力と呼ばれるものを利用していること。

特に一般的に使われている道具や娯楽品の話になった途端、興味を持った二人が次々と質問をしてきて、かなり時間が掛かった。
最後は自分が暮らしていた国や大まかな世界の話をして気が付くと、かなりの時間が経過していた。

「もうこんな時間が」

時計の針は、今の時間が二八〇タイムであることを示していた。
大体四〇タイム（二時間半）程も話続けていたことになる計算だ。

「さすがに、お母さんが心配するんじゃないか？」

「あつう、そうですね。そろそろ部屋に戻ります」

そう告げてリユーネは、ベッドから飛び降りる。

ところがその直後、急に彼女が倒れて膝をついたかと思うと突然、苦しそうに咳き込み始めた。

激しい咳は何度も繰り返され、リユーネの顔が苦しさに歪む。

「おい、リユーネ。大丈夫か？」

その様相に不安を抱いた刀弥がリユーネの名を呼ぶが、彼女の咳は激しさを増すばかりで止まる気配がない。

ようやく咳が止まったのは、それから少し経ってからだった。

「すみません」

彼女はそう謝ると、ヨロヨロと立ち上がるうとする。だが、立ち上がって歩こうとしても足元がふらつき、傍から見ても危なく感じる。よく見ると顔も赤い。

「乗れ。部屋まで送る」

見かねた刀弥がリユーネのほうに背を向け、背負う姿勢を見せた。

「すみません。ありがとうございます」

礼を言っただけで彼女は刀弥の背中に乗ると、刀弥は彼女を背負って立ち上がった。

リアがドアを開け、三人はリユーネの案内に従って彼女の部屋を目指す。

「病気か？」

その途中、彼女の様子が気になった刀弥が己の疑問をぶつけてみる。

「……生まれつきの病気で、そのせいでほとんど外に出たこともないんです」

「……話を聞きたがったのはそのせいかな」

緊張しながらも、あんな頼みをした理由。

病気の彼女は外に出られない。

だけど、外で遊ぶ同世代の子供たちを見て、外への強い憧れは持

っていたのだろう。

故に、宿屋に泊まるお客から外の話を書くことでその思いを埋めていたという訳だ。

「私、病気が治ったらずは外でいっぱい遊んで、大きくなったらいろんな人から教えてもらったところに出掛けるのが夢なんです」

「……そうか。叶うといいな」

「はい」

刀弥の返答に、リユーネは満面の笑みで応えるのだった。

リユーネに案内され彼女の部屋に行ってみると、タイミング良く彼女の母親と出くわした。

「リユーネ!？」

刀弥が背負っている彼女の姿を見て、母親は慌てて駆け寄ってくる。

「……お母さん」

顔の赤い彼女はどこかつらいのか、鼻声だ。

「あなた……また咳がでたのね？」

彼女の様子に母親は、何があつたのか見当がついたらしい。

ともかく彼女をベッドに寝かせるべく、母親は彼らを彼女の部屋へと招き入れる。

部屋に入つてみると中は部屋中、ぬいぐるみや人形であちこち溢れかえっていた。彼女が抱いていたぬいぐるみも、この中の一つなのだろう。

「仕事もあつて、この子には寂しい思いをさせてるので……」

リユーネをベッドに寝かせた母親が、二人の視線に気が付いて説明をする。

「わざわざ娘を運んでいただいて、ありがとうございます」

「いえ、お気遣いなく」

母親の礼に刀弥はそう返す。

「その様子ですと、娘がそちらに伺つたのではございませんか？」

「ええと……」

一応その通りではあるのだが、どう答えたらいいかわからず刀弥は言葉を濁してしまふ。

「やはりそうなのですね。申し訳ございません。うちの娘が失礼なことをして……」

「別に気にしていませんから、謝らないでください」

謝罪をしようとする母親。それをリアが止める。

「ところで、娘さんはどういふ病気なんですか？」

話を変える意味もあって、つい刀弥はそんなことを訊ねてしまった。

刀弥の落ち度に気が付いたリアが慌てて膝について彼を注意するが、既に時遅し。

「すみません。失礼なことを聞いてしまつて」

「いえ、むしろ娘がお世話になりましたし、旅の方でしたら別の手段を知っているかもしれませぬ。お話しします」

ミスを悟り刀弥が謝るも、彼女はそう返してリユーネの病気について話し始めるのだった。

「生まれつきあの子は体の抵抗力が弱かつたため、鉱石に含まれている微量の毒に抵抗できずにずっとあの病気にかかっています。激しい咳と熱を発するのが特徴ですが、やがて時間が経てば……」

その先を告げることなく母親は嗚咽する。

その様から、その先の言葉はなんとなく見当がついた。

「それだけ聞くと、違う世界に移れば治りそうな気がするんですが……」

この世界で採れる鉱石に含まれている微量な毒物が原因である症状が出ているのであれば、そこから遠ざけるのが一番の対処はずだ。

ところが母親は残念そうに俯く。

「確かに別の世界に移り住めば毒を吸うことはなくなります。ですが、体内に溜まっている毒を取り除かなければ病気が治ることはありません。しかし、取り除く方法は難しく今は症状を抑えるのが精一杯です。そしてその知識を持つ医者はこの世界にしかないのです」

「なるほど。あちらを立てればこちらが立たずという訳か」

そうなるが一番いいのは、毒を取り除くこと。

そうすれば後は別の世界に行くなりすれば、病気が再発することもない。

難しいと言っていたので、方法がない訳ではないのだろう。

「ちなみに毒を取り除く方法というのは？」

「解毒薬を作り飲ませることです。けれども、問題はその材料です……」

「材料？」

「はい。詳しくはわかりませんが、ロックスネークの血が必要だということですよ」

「難しいってことは、そのロックスネークってというのは強いということですか？」

首を傾げてリアが、母親に尋ねる。

その質問に母親が首肯した。

「はい。ロックスネークのこの近辺では有名なモンスターで、岩のような鱗を持った大きな蛇なのです」

「蛇？ こんな寒いところに蛇がいるんですか？」

これだけ寒い環境で、蛇が活動できるとはとても思えない。

下手すれば、死ぬまで冬眠をしなければならぬようなところだ。だが、その疑問は母親が解いてくれた。

「ですから、外には出ず殆どを地中の中で過ごします。余り動くことはなく、ある程度広い穴を掘って巣を作るみたいで、ときたま坑道を掘っているとロックスネークの巣に繋がったという話を聞きます。最近、近くでロックスネークの巣が見つかったという話を耳にしたんですが……」

最後のほう、悔しげな声で母親は呟く。

娘を助けられるかもしれない存在が目の前にいるというのに、どうすることもできないという彼女の無念さがありありと二人に伝わってきた。

「あ、すみません。こんな話をしてしまって。もう時間も時間ですね。お話を聞いてくださってありがとうございます」

そのことが恥ずかしかったのか、決まりが悪そうな顔で彼女はそう言つと頭を下げる。

相手がそう告げる以上深入りもできない。なので、二人は立ち上がったって部屋を後にすることにした。

ただし……

「明日、発つつもりですが、その前に彼女に顔を見せに来てもいいでしょうか？」

最後にこれを確認することだけは忘れない。

「それはこちらからもお願いします。あの子も喜ぶと思うので……」

母親は断ることなく、逆にこちらに頼んできた。

「はい。では、おやすみなさい」

「また明日」

「ええ、おやすみなさいませ……」

そうして刀弥はリユースの部屋のドアを閉じるのだった。

一章三話「命の抗い」(2) (後書き)

ストック分。見直しと修正が終了しましたので新たに投稿致しました。

07/26

できる限り同一表現の修正。

一章三話「命の抗い」(3)

この世界では町が洞窟の中にあるため、朝日が町に射すことはない。

代わりに、洞窟の天井にある明かりが太陽の代用となる。

明かりは動くことはない。なので、その明るさで人々は一日の間を把握していた。

その明かりが灯り始める頃、刀弥は町の中を走っていた。走り始めたのは二〇タイム(一時間一五分)頃前からだ。

昨日、心に留めていた修行の一環だ。

刀を振れそうな場所がないため、今回はマラソンによる体力トレーニングを行っている。

ただし、ただ延々と走り続けている訳ではない。

時折、地を強く踏み込み急速に移動する動作を何度も繰り返し彼は走っていた。

刀弥の家では『縮地』と呼ばれている技術で、自分の家に伝わる剣術の中では基本中の基本となる技術だ。

『我が身は野を駆ける風の如く』

これは家に伝わる言葉で、風野流剣術の有り様を述べたものだ。

高速移動とそれを利用した急加速と急停止による急接近、回避を

重点に置いた戦い方。それが風野流の剣術だ。

そのため、急速な移動を行う技術である縮地はこの剣術に置いて、なくてはならない大切な技術となる。

その証拠に、縮地は疾風や一突といった技の中でも用いられている。

それだけにこれが未熟だと、風野流剣術はその力を十分発揮できなくなってしまう。

逆に言えば、縮地を鍛え伸ばすことは風野流剣術、すなわち刀弥自身の向上を意味するということになる。

刀弥が縮地を行う際に意識するのは、踏み込む足の筋肉。

ふともも、ふくらはぎ、足首など、それらを瞬間的に強く同時に動かすよう意識する。

身を低くして体を前に倒すようにすれば、体が安定してさらに速度を出すことも可能だ。

また、速度や距離こそ落ちるが、正面だけでなく左右や後ろへも使用することができる。

最初の頃は中々大変だったが、今ではすっかり慣れて自由自在に使えるまでに上達している。

そんな風に修行をしながら刀弥は町中を走りまわっていた。

そうして一通り走りを終えると、彼は宿屋に戻ってくる。

部屋へ戻るために入り口を開けたそのとき、聞き覚えのある叫び声が彼の耳に入ってきた。

それは昨日の母親の声だ。

声はどこか焦りを帯びていた。聞こえる方向からしてリユーネの

部屋からのようだ。

そこまで考えたとき、刀弥の頭の中にある可能性が浮かびあがった。

まさかと思い、急ぎ部屋に向かいノックもせずドアを開ける。

そこで彼が見たものは、激しい咳に苦しむリユーネと彼女が寝るベッドに必死に呼びかける母親の姿だった。

「リユーネ！！　しっかりしてリユーネ！！」

母親は、何度も何度も揺すりながら娘の名前を叫ぶ。

無我夢中なのか、揺すり方が激しくそれが逆にリユーネの苦しみを強めているように見える。

「落ち着け！！　そんなに強く揺すっても逆に彼女が苦しむだけだ」

見かねた刀弥が駆け寄り母親の手をとって諭す。

急いでたこともあって、つい地の口調が出てしまっていた。

彼の指摘でようやく母親はそのことに気が付いたらしい。

目を見開き、慌てて手を娘から話す。

リユーネは未だに咳を続けている。その強さは昨日、見たものよりもひどい様相だ。

「これまで、こんなに強い咳をしたことはあるんですか？」

口調を改めて刀弥は母親に問い掛ける。

「いえ、始めてです」

だからこそ、彼女はあんな反応をしたのだろう。

「ともかく、医者のところへ……」

「そ、そうですね」

刀弥の提案に母親が頷くと、刀弥はベッドに近づきリユーネを抱き上げる。

そして、二人は医者のもとへと急いだのだった。

「……結論から申しますと、かなり危険な状態です」

それがリユーネを見た医者の言葉だった。

彼らがいるのは小さな病室。

宿屋の部屋とは違い、清潔感のある白い壁と床と天井。小さな窓には明るくなつた町並みが見える。

入口側の隅には机が、窓側の隅にはベッドがあり、ベッドには小さな患者が寝ていた。

医者はその傍に立っており、それを眺める形で刀弥と母親が入り口前で並んでいる。

医者のもとに連れてきた二人は、医者に言われるままリユーネをそのベッドに寝かせた。

その後、リユーネが落ち着いたのを見計らって医者が診察を始め、

今へと繋がっている。

現在、リユーネは静かに眠っており、その寝顔は先程まで苦しんでいたとはとても思えないほど安らぎに満ちたものだった。

「これまで、彼女の病気が進行しないように薬を飲ませてそれを抑えてきました。ですが、抑えるだけなので遅らせることはできません。進行そのものを止めることはできません」

医者は淡々と事実を告げていく。

その平淡な口調に、思わず刀弥は苛立ちを感じてしまった。

「……つまりは死ぬまで時間がないということか？」

もはや口ぶりを直す気も起きない。

彼の問いに医者は首を縦に振る。

「……そ……んな……」

その途端、母親が崩れ落ちた。

無理もないだろう。大事な娘がそうしないうちに亡くなると聞いて、平静でいられるはずがない。

悲しみの声を漏らし俯く母親。

しばらくの間、刀弥はその様子を見ていた。

そんなときだ。寝ているはずのリユーネの声が彼らの耳に届いた。

「……ん……お……か……あさ……ん」

「リユーネ!？」

娘の声に急ぎ、彼女のもとに駆け寄る母親。

「……私……死ん……じゃう……の？」
「そ、それは……」

医者の話が聞こえたのだろうか。突然の問いに、母親は戸惑い返答に詰まってしまう。

けれども、その態度が何よりの証拠となってしまう。

「そうなんだ……」

彼女の顔はどこか達観しており、まるで己の運命を受け入れたかのように見えた。

だが、それは違った。その証拠に彼女の目にはうっすらと涙が浮かび上がっている。

「…………や」

「……リユーネ？」

弱々しい口から小さな言葉が溢れる。

小さすぎたせいで何を言ったのか聞き取れず、母親が聞き返す。

「……死ぬなんて嫌。私……まだ……まだ何も叶えてないんだよ……
……お外で遊んでもいない……お客さんたちから聞いた場所にも
行っていない……まだ全然何も叶えていないのに死ぬなんて……
……嫌だよ……」

それは小さな子が、自分に訪れるであろう運命を拒絶する言葉だった。

母親はそれを聞いて彼女の願いを叶えられない自分に涙し、医者もまた己の無力さに齒噛みしていた。

そんな中、刀弥が口を開く。

「ところで、聞きたいことがあるんだが……」

「……なんででしょうか？」

「ロックスネークの目撃情報。どこかで巢を見たという話を耳にしたんだが誰が言っていたかわからないのか？」

その質問に医者は眉を寄せ、母親は顔を上げる。

両方共、彼が何を意図しているのか、わかったからだ。

「病の原因である毒を取り除けば、少なくとも今の病気は治って死に至ることはなくなる」

「た、確かにその通りです。ですが、問題はその素材となるロックスネークがとんでもなく……」

「御託はいい。俺が今知りたいのは、ロックスネークがどこにいるかだ」

医者の言葉をピシヤリと刀弥は遮る。

「……本気ですか？」

それでも医者は何とか口を開き、そう訊ねてくる。

「本気だ」

間髪入をれずに刀弥がそう返す。

その言葉に迷いは不安はない。

あるのはただ、ロックスネークを倒すという強い意志だけだ。

「……………」

そんな刀弥を医者と母親はじつと見つめていた。

まもなくして、医者は大きく息を吐くと机に向かいメモに何かを書き込んだ。

そうしてメモに何かを書き終わると、彼はそれを持って刀弥のもとに近付いていく。

「ここにその情報を書いておきました。恐らく、ロックスネークはまだいるはずです」

「なんだ。知ってたんじゃないか」

そのメモを受け取りながら刀弥は、皮肉げに言葉を返す。

「私は医者です。助かる可能性があるなら、私だって助けたいと思っています。この情報もそのために集めておきました」

少なくとも彼は、助かってほしいと願っている。

そのために、できる限りのことはしていたのだろう。

「なら、今がそのときだな。それじゃあちよつと、素材集めに行ってくる」

そうして彼は急いでその場を後にするのだった……

刀弥は町の中を駆け抜ける。

通りを歩く人々の姿はまばらだ。
だが、それでも時折姿を見せ刀弥の障害となる。

されど、彼が止まることはない。

ステップと急加速、急停止を駆使して彼らの間を通り抜ける。

人々は驚いて通り抜けていく正体を確かめようと、過ぎ去ったほうへと目を向ける。しかし、そこに彼の姿はない。

やがて、彼の視界に宿屋が見えてきた。

一瞬、頭の隅にリアのことが思い浮かぶ。

あいつには一応、知らせておくか。

余計なことをして時間をとらせてしまったことを悪いと思う一方、死にそうな子を見捨てることなどできないという思いもある。

彼女ならわかってくれる。

漠然とだが、そんな信頼があった。

丁度そのとき、その彼女が宿屋から出てきた。

視線がまっすぐこちらを向いていることから恐らく、「こちらに気付いて出てきたのだろう」

「刀弥!」

彼女がこちらの名前を呼んで近づいてくる。

刀弥の側までやってきたリアは、そのまま彼の隣に並んで走りだした。

「悪い。リア、実は……」

「ロックスネークの巣に行くんでしょ？」

刀弥が事情を話そうとした直前、リアがそう言って彼の言葉を止める。

「あの子が、お医者さんのところに運ばれたっていうのは聞いたし、刀弥ったら宿屋に戻るにはすごい勢いで走ってるんだもん。何となく何をしようとしているのかわかつちゃった。だから、私も行くよ」
「……………」

想像以上の結果に刀弥は呆然としていたが、すぐにその顔が笑みとやる気に満ちたものに変わる。

「私だって、助けられるかもしれない子を見捨てることなんてできないもの」
「……………そうだな」

彼女も自分と同じ抱いているという事実にも、自然と嬉しさが込み上げてくる。

そうして二人はメモに書かれている場所を目指し町を出るのだった。

一章三話「命の抗い」(3)(後書き)

とりあえず、手持ちのストックは使いきりました。

後は新たに書くだけです。

時間は掛かるかもしれませんが、読んでくだされば幸いです。

皆さんが気に入ってくださるよう頑張りますので、よろしく願
いします。

07/26

できる限り同一表現の修正。

11/12

瞬歩を縮地に変更

一章三話「命の抗い」(4)

自分たちの足音が、壁に跳ね返って耳に入ってくる。
リアと刀弥たちは今、洞窟の中を走っていた。

元々坑道だったのを交通の便から拡張して、多くの人や乗り物が通れるようにしたものらしい。そのため、それなりに広い。

明かりは洞窟の天井を支える柱に時折、目印としてついているものだけ。それが二人を照らしている。

「メモによると、じきにロックスネークの巣に繋がる坑道が見えてくるはずだけど……」

握りしめたメモを眺めながら、刀弥が呟いた。

こうしている間にも、時間は刻一刻と進んでいく。
心なしか刀弥の顔に焦りが見える。

「刀弥。落ち着いて」

そんな彼をリアは落ち着かせようと話しかけた。

心情としてはリアも理解できる。しかし、ここは戦いのためにも冷静になってもらわなければいけない。

「岩のような鱗を持つようなのが相手なんだから、冷静にならないと」

「……そうだな」

勇んで出てきたはいいがロックスネークについて知っていること
といえば、岩のような鱗を持っていることだけ。

岩のようなというのだから、かなり固い可能性がある。と、なれば刀弥の剣がまともに通じるかは怪しい。そうになると、リアの出番ということになる。

彼女が習得している魔術の中に、そういう相手でもダメージを与えられる魔術がある。

故に、倒せないということはない。

「仮に固い相手だったとしても、私が何とかする。だからお願い。刀弥はできるだけロツクスネークの注意を引きつけて」

「わかった」

彼女の頼みにパートナーは強く頷いた。

その返事に、リアは満足な顔を見せる。

と、突然一匹のモンスターが奥の曲がり角から姿を現した。手足はなく長く伸びた胴体の先、顔に当たる部分のほとんどが口で埋め尽くされているという生き物だ。

「……ミミズか？」

その言葉の通り、それは巨大なミミズだった。

咄嗟に足を止めて、臨戦態勢に入るリア。

ところが、刀弥は立ち止まるどころかそのまま巨大なミミズへと突っ込んでいく。

「と、刀弥!？」

この行動にリアは驚き、彼を呼び止めようとする。

けれども、その直後、巨大なミミズが口から何か液体を吐き出した。

液体は刀弥に目掛けて飛んでいく。

当たる。そう思われた攻撃。しかし、刀弥はそれを見事に躲した。前進しながら僅かに左へと飛び、身をひねってそれを避けたのだ。空を切った液体は、地面へと落ちる。

地面に落ちた液体は、音と煙をたてて落ちた地面を溶かし始めた。恐らく消化液か何かだったのだろう。

避けた刀弥はそのまま身を回しながらミミズに近づくと、その勢いのままミミズを横に斬りつけた。

斬られたミミズはその部分から血を噴き出し、倒れていく。

それを確認することなく、刀弥はそのままその場を走り去った。

あつという間の攻防にリアはぼうつと見惚れてしまっていたが、刀弥が先に行ったことに気が付くと慌てて彼の後を追いかけた。

その後も、時折モンスターたちが姿を現すが、刀弥は歩みを止めることなく次々とモンスターたちを倒していった。

リアは、その様子を後ろから眺めているだけだ。

歩みを止めないのは、時間が惜しいという思いからだだろう。だから、走ったまま相手の攻撃を避けて一撃で倒すという手段を選んだ。

すごいのは全てが初見のモンスターであるにも関わらず、刀弥に怯えないということだ。

初めて見るということは、どのような戦い方をするかわからない。

その未知に大半の人は怯える。だが、刀弥にはそれが無い。相手が経験した、しないに関わらず迷わず相手に突撃していく。

未知の相手に怯えるのは悪いことではない。それ故に相手を警戒し、情報を得ようと出方を伺うためだ。むしろ、本来であれば刀弥の行動の方が無謀なのだ。

にもかかわらず彼はモンスターの攻撃に反応して、見事にそれらに対処していく。ときには刀で相手の腕を斬り、ときには足と身を使って避け、ときには相手の攻撃を逸らして……

そうして対処した後、急加速して相手に一気に接近し、相手の急所と思われる部分に一撃を入れる。

高い反応速度と対処能力によって為せる技だ。
特に目を見張るのが、その対処能力だ。

刀弥から彼の世界の話を聞いた限り、彼がいた国は争いのない平和な国のようだ。

モンスターとの戦いはもちろん、実戦経験すら積んでいないはずだ。ここに来てからそれほど日も経っていない。

それなのに、彼は熟練者のような動きをみせている。

それはつまり、彼の対処能力は経験といった知識面ではなく別の面からきていることを意味していた。

考えられる可能性があるとするれば……一つは感、もう一つは分析力だ。

分析力は得られる全ての情報を元に、ある答えを推測する能力だ。これが高ければ相手の能力をより詳細に知ることができるし、場合によってはまだ知らぬ相手の切り札を予測することもできる。

これら二つによって、刀弥はどうするのが最善なのかを判断しているのだろう。

「……凄い」

思わず感嘆の声が漏れてしまう。

「ん？ どうした？」

その声を聞き取り刀弥がリアのほうへと振り向いた。

「初見の相手に対して、あれだけ対処できるのは凄いなって思って

……」

「そうか？」

本人は、あまりあの結果を特別なことだとは思っていないようだ。

「何が来るかわからないのに、構わずに接近するなんて普通はできないよ」

「まあ、これが普通るときだったら、俺もしなかったな」

どうやら今回が特別だったらしい。随分と無茶をするものだと、リアは内心苦笑する。

「ただ、自信はあった。何となくだけだな」

「そうなんだ」

そうこうしているうちに、別れ道が見えてきた。

一つはこれまで通りの道。もう一つは木材で塞がれた穴の道。そこらには木材の中央に立ち入り禁止を意味する張り紙が貼ってある。

あそこかな？

刀弥のほうを見ると彼が頷きを返す。どうやら当たりのようだ。

そのまま刀弥が刀で邪魔な木材を斬って道を作ると、二人はその穴へと飛び込んでいった。

明かりが届かなくなってきたのを見計らって、リアは魔術で明かりを灯すと二人は先へと進む。

そうして、二人は広い空間に辿り着いた。

「ここがロックスネークの巣か……」

そう言って、刀弥は周囲を見渡す。

高い天井と広大な領域。

ファルスには負けるが、それでも十分広いと言える空間だ。

「こんなところにロックスネークがいるんだ」

辺りを見回しながら、リアがそんな感想を呟く。

そんな時だ。

二人の耳に、何か巨大なものが這ってくる音が聴こえてきた。

「……来たみたいだな」

音の方向へ身を構え、刀弥が告げる。

やがて、二人の視界に目的の敵が姿を見せた。

「岩のような鱗か……まさしくその通りだね」

二人の見つめる先……そこには巨大な岩々の塊がこちら向かって近づいてくる姿があった。

岩のようなでこぼこの鱗。それらが連なることで、まるで岩々の塊のように見える。目は赤く光っており、まっすぐ二人を見ていることが遠目からでもわかった。

「あれが、ロックスネークか」

見るからに強そうなその姿に、自然と二人の気が引き締まる。

自分のテリトリーに侵入されたことを怒っているのか、ロックスネークは咆哮を上げ、そのまま二人に向かって突進を繰り返してきた。

すぐさま二人は左右それぞれに飛んで突進を避けると、刀弥はロックスネークに接近しリアは魔術式を組み始める。

刀弥がまず狙うのは鱗と鱗の隙間。

ここは可動を持たせるための部分のため、鱗そのものよりかは斬りやすい部分のはずだ。

しかし、結果は甲高い音をたてて刀が弾かれるだけだった。

舌打ちをする刀弥。

一方のロックスネークはその間に向きを刀弥のほうへと変え、彼に襲いかかろうとした。

だが丁度そのとき、リアの魔術が発動する。

『ボルトライトニング』

彼女の眼前に電撃が生まれ、それがロックスネーク目掛けて走っていく。

電撃はロックスネークにぶつかり、ロックスネークは感電を起こしてのたうった。

「なるほど。電撃か」

確かにそれなら相手がどれだけ硬かろうが関係なく、ダメージを与えられるだろう。

電撃が収まり、むくりと起き上がったロックスネークは電撃を放った相手を鋭い視線で睨みつけた。

ロックスネークが彼女に向けて動くよりも先に、刀弥はロックスネークの正面に回りこむと今度は体の下、顎辺り目掛けて刀を振り上げる。けれども、今度もぶつかった音がただけで刀が食い込むことはない。

だがしかし、相手の注意を引く効果はあったようだ。

ロックスネークの視線が、リアから刀弥へと変わった。

直後、ロックスネークの口が大きく開かれ彼を飲み込もうとその顔を迫らせる。

寸前のところで後ろに飛んだことで、何とか避けることができた。すぐさま反撃のために近づき、その瞳に目掛けて渾身の突きを放つ。

風野流剣術『一突』

己が出せる最大の踏み込みと腰のバネを使った最高の一撃は、しかし、その瞳を貫くことはなかった。

「これでも駄目か」

手の痺れを感じながら急ぎ、後退する刀弥。

ダメージを受けることはなかったが、さすがに今度の攻撃にはロックスネークも怒ったようだ。

叫び声をあげ、刀弥に噛み付かんとその牙を向けてくる。

襲い来る牙を次々と躲す刀弥。

その猛攻に、反撃する暇もない。

けれど、問題はない。反撃は自分がする必要はないのだから……

その期待通り、リアが新たな魔術を発動させる。

現象が起こったのはロックスネークの真上。そこに巨大な雷が現れたかと思うと、それがロックスネークのいる空間へと落ちたのだ。

一瞬、凄まじい音と落雷の光が広大な領域に満たされる。

ロックスネークの空間に落ちた落雷はかなり太く、例えるなら鉄槌のようだった。

『ボルトハンマー』

大規模な電撃を生み出し、広範囲に落とす範囲殲滅向けの魔術だ。

「刀弥。大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

心配そうな声で訊ねてくるリアに刀弥は無事であることを示すために大きな声で答える。

そんなやり取りをしている二人だが、その視線がロックスネークのいる地点から離れることはない。

視線の先にはロックスネークが倒れ伏しているが、二人ともあれで死んだとは思っていない。

そしてその予想通り、ロックスネークがゆっくりと起き上がった。

「……さっきの魔術のダメージはしっかり入っているみたいだな」

ざっと見たところ、ロックスネークに傷らしい傷はついていない。けれども、最初と比べると僅かではあるがふらついている様子がある。そこからの判断だ。

やはり、理想は自分が注意を引き、リアがダメージを与えという形。

しかし、相手とて一応は脳のある生き物。同じパターンがいつまで続くか……

その不安は見事に的中する。

起き上がったロックスネークは、リアのほうへとその首を向けると彼女のもとへその巨体をつっ込ませたのだ。

ロックスネークの注意を引こうと、刀弥が回りこんで攻撃を仕掛ける。だが、ロックスネークが刀弥のほうへと向くことはない。どうやら、ダメージを与えることのできない刀弥を無視することにしたようだ。

そのまま口を開き、リアに襲い掛かるロックスネーク。

それを右へと飛んで避けるリア。そんな彼女をロックスネークの口が追いかけた。

なんとかそれらの攻撃をリアは避け続けているが、魔術式を構築できるほどの集中をする暇がなく反撃する手立てがない。

一方の刀弥はロックスネークの注意を自分のほうへと向けるべく様々な剣戟を試みるが、全てロックスネークの固い鱗に阻まれてしまっていた。

風野流剣術『疾風』

速度と一撃を合わせたこの必殺の一撃もやはり、ロックスネークの鱗を突破するには至らなかった。

現状、ロックスネークに唯一ダメージを与えることのできるリアが封じられ攻め手を欠いている状態だ。

こちらに決定打はなく、しかし相手の攻撃はこちらをあっという間に終わらせるほどの威力。

このままでは、いずれこちらが潰されてしまうだろう。

この状況を打破する方法があるとしたら、それは刀弥自身がロックスネークに有効打を与えられるようになることだ。

そうなればロックスネークは刀弥にも注意を割かざるを得ず、自然とリアが魔術を使えるだけの隙を晒してくれるようになるはずだ。

最もこれが簡単ではないのは、当の本人だつてわかっている。

けれども、できなければリユーネを助けられないばかりか自分やリアの命も危なくなる。

刀弥は己の刀を見る。

何度もロックスネークの体に弾かれているが、それでも刃こぼれ一つ起こしていない。

中々に丈夫らしい。これなら多少の無茶をしても折れることはないだろう。

やるしかないな。

静かにそう決意すると、再び刀弥はロックスネークへと向かって疾走を開始した。

狙うのは最初と同じ鱗と鱗の隙間。放つのは飛び上がった己の体重を乗せた真つ直ぐな振り下ろし。

が、この一撃もやはり弾かれてしまった。

それでも構わない。すぐさま刀弥は次の攻撃に入る。

今度も同じ飛び上がった体重を乗せた振り下ろし。ただし、今度は先程と違って若干体の捻りを加えた斜め気味の斬撃。

やはり、拒絶される。

ならばと今度は、手首の動きを若干変えてみる。

そうして彼の攻撃は繰り返されていった。

この姿勢ならどうだ。このタイミングなら上手くいくか？ もっと速度を乗せてみよう。

いつしか刀弥は己の攻撃の練磨れんまに意識を研ぎ澄ませていった。

無駄な力がある。それを取り除こう。

体の連動でもっと威力が上がるはずだ。ならば、そうしていこう。まだ、足りない。もっと体の制御に意識を集中して引き出せ。そうやって、繰り返し修正されていく刀弥の斬撃。

その斬撃はやがて、ロックスネークの意識を彼に向かせるまでに至った。

まだ、ロックスネークの体に傷はない。だが、彼の本能がこの人間は危険だと警告を告げていたのだ。

故にロックスネークは本能に従い、自身の体を使って彼を押し潰そうとした。

巨大な体と固い皮膚を持つ相手ののしかかりだ。まともに喰らえばあつという間に死んでしまうだろう。

しかし、刀弥はその攻撃をあつさり避けた。そして、ロックスネークの赤い瞳を狙うべく飛び上がる。

赤い目は、刀弥が近づくに連れて大きくなっていき……

そこに刀弥の一撃が放たれた。

これまでで最高の攻撃。それがロックスネークの瞳を切り裂いた。

瞳を斬られたロックスネークは口を開き、痛みの咆哮をあげる。

斬り裂いた刀弥はそのまま追い打ちをかけるべく、着地と同時に未だ咆哮をあげているロックスネークへと向かって疾走を開始した。それに気が付いたロックスネークが彼を迎撃するため己の尾を横からの軌道で振り抜く。

刀弥は既にかなり近くまでロックスネークに迫っていた。今から下がったとしても尾の範囲から逃れるのは不可能だ。

当たる　　そう思われた攻撃。だが、その攻撃をリアの魔術が止めてみせた。

再び発動させたボルトハンマーで、ロックスネークを押し潰したのだ。

ボルトハンマーの威力と電撃によってロックスネークの体が一瞬、硬直。

その隙を突いて刀弥がロックスネークの側まで接近、距離を詰めたところで『疾風』を使用する。

疾風の瞬間、刀弥は踏み込む右足に己の意識を集中させる。

もつとだ。もつと強く踏み込め。

その強い思いに応えるように、彼の右足が爆発的な脚力を生みだした。

今までの己を超えた速度。その速度を持って刀弥はロックスネークに迫る。

そしてロックスネークとの交差の瞬間、刀弥は最高の速度を乗せ

た全力の一撃をロックスネークの首元へと見舞った。

ロックスネークの首は呆気無く切り裂かれ、そこから大量の血が溢れる。

ロックスネークは最後の力で頭を天に向けると雄叫びをあげ、そのままその身を地面へと傾けていった。

巨体が倒れたことで地響きが鳴り、地面が沈む。

それらが収まると、後に残ったのはロックスネークの死体だけだった。

「刀弥。早くロックスネークの血を……」

「そうだな」

リアの促され、刀弥は急ぎロックスネークに歩み寄る。

見るからに血はかなりの量がロックスネークの体外に溢れ出していたが、幸いにも体内にまだ結構な量が残っていた。そのため、集めることに苦労することはなかった。

血を一通り集め終わると、この血を急いで届けるべく二人は走ってこの場を後にするのだった。

一章三話「命の抗い」(4) (後書き)

07/26

できる限り同一表現の修正。

「一章三話」命の抗い（5）

「……ひとまず、これで一安心です」

注射と思わしきものをリユーネに射つた後、医者はこちらを見てそう告げてきた。

「……そう……ですか……」

その一言で母親が安心して膝をついた。そして彼女はゆっくりと立ち上がり刀弥たちのほうへと向き直る。

「ありがとうございます。なんとお礼を言っているのか」

そうして彼女は礼を言っただけで頭を下げた。

「いえ、気にしないでください」

刀弥はそう言って、彼女の面を上げさせようとする。

「いえ、娘の命を救っていただいたのです。むしろ、これだけでは足りないぐらいだと思っています」

しかし、それでも彼女は頭を上げようとしなかった。どうしたものかと刀弥とリアは顔を見合わせる。

「まあ、お母さんもそれくらいでいいでしょう。娘さんが寝ていますし……」

すると、そんな様子を見かねたのか医者がそんなことを言った。

その言葉に母親は顔を上げ、刀弥たちと共にベッドに眠るリユーネのほうを見つめる。

どこか楽しそうな表情で眠る彼女。

時折、楽しそうな寝言を呟いていることから、とても楽しい夢を見ていることだけは簡単に想像ができた。

「そうですね」

「とはいえ、彼女の気持ちは私もよくわかります。私のほうからもお礼を言わせてください。後、これを……」

そう言って、医者が差し出したのは布袋だった。それを刀弥が受け取る。

袋を開いてみると中身はお金だった。それもかなりの額の。

驚いた二人が医者の方へと見やると、医者が口を開き布袋の身についての説明を始めた。

「それは、ロックスネークの血を取りにいつてくれたことへの報酬です。大体、それくらいが相場になっています。ご遠慮せずにお受け取り下さい。受け取ってくださいさらなければ、私がいろいろと知られてしまいますので……」

そう言われてしまうと、刀弥たちも受け取らざるを得ない。

とりあえず刀弥が布袋を収める。

「あの……それでこれからどうなさるつもりですか？ できればいろいろとお礼をしたいのですが……」

報酬を受け取ったのを見計らって、母親がそんなことを言った。

それを聞いて二人は再び視線を交わす。

本来であれば、二人は今日発つつもりだった。

今は昼頃なので、今から経ったとしても遅いということはないだろう。しかし……

「とりあえず、今日は泊まって、明日リユーネの様子を見てそれから発とうと考えてます」

刀弥は母親にそう答えた。

自分たちの関わったことだ。

最後まで付き合うことはできないが、それでもある程度までは見届けたい。

それが二人の偽らざる本心だった。故に二人は出発を一日伸ばすことにしたのだ。

「ありがとうございます。娘も喜びます。お代に関しては結構です。もちろん、昨日の分も……これも私からのお礼です」

「……わかりました」

そこまで言われると、何も言い返せない。

大人しく彼女の厚意を受け取ることにする。

「それでは、私は仕事がありますので……」

そう言い残して、彼女は病室を後にした。

「……ここにいっても仕方ないし、私たちも出ようか」

「……そうだな。それでは失礼します」

そうして二人もまた病室を後にした。

夕方、二人が宿屋に帰ってみると、リユーネの母親がかなり張り切ったようで夕食はかなり豪勢だった。

食べきれるか不安だったその夕食を食べきった二人は、戦いの疲れもあつて部屋に戻るとすぐに眠りの中へと落ちていったのだった。

翌日の朝……

刀弥とリアは病室の前にいた。

刀弥がドアをノックする。

「はい。どうぞ」

元気そうな声が部屋の中から返ってきた。

その声を聞いて刀弥がドアを開けると、そこにはベッドの上で体を起こした少女の姿があった。

「お見舞いに来たよ」

そう言っつてリアが病室に入り、手に持っていたお見舞いの品を彼女に見せびらかす。

「うわぁ、ありがとうございます」

お見舞いの品を見てリユーネが喜ぶ。

「体はどうなんだ？」

ベッドに近づいていきながら、刀弥が容態を訊ねた。

「まるで自分の体じゃないくらい元気です」

嬉しそうに告げるリユーネを見て、二人は顔をほころばせる。

「どうやら本当に大丈夫なようだ。」

「これならそうしないうちに退院できるだろう。」

「お母さんから聞きました。私がこんなに元気になったのはお兄ちゃんたちのおかげだって……」

「そんな大したことはしていない」

そう言っつて謙遜する刀弥。

自分がやったこととはいえ、手に入れるのが難しい素材を代わりに取りにいったということだけだ。

「これだけなら他の誰かでもできるはずだ。」

「……あの聞いてもいいですか？」

そんなことを考えていると、ふとリユーネが何か聞きたそうな顔でそう訊ねてきた。

「何だ？」

「どうして助けてくれたんですか？」

それが不思議でならなかったらしい。

つぶらな瞳が、じつと刀弥を見上げていた。

「一つは、自分ががんばれば助けられる命だと思ったから……」

死ぬしかない命が自分の手で助けられるかもしれないのなら、助
けたい。そう思ったのは本当だ。

自分の力が誰かの役に立つ。

自分がいた世界ではあまり考えられないことだ。だからこそ、己
の磨いた剣術で誰かの命を救えた事実、刀弥は内心嬉しさが込み上
げていた。

けれども、その動機以上に自分が彼女を助けようと思った動機が
ある。それは……

「もう一つはリユーネが、死にたくないと言ったからだな」

自身にやって来るであろう運命を彼女は拒んだ。

それは言葉だけで実際に運命を変えることなどできない。だけど、
それは確かに彼女の選んだ選択だ。

だからこそ、彼女の代わりにその選択を叶えたいと思った。

「それが俺の動機だな」

そう言ってリユーネの頭を撫でた。

撫でられたリユーネは気持ち良さそうに目を細め、もっと撫でて

とばかりに頭を寄せてくる。

そうしてしばらくの間、刀弥は彼女の頭を撫でていたが、やがてその手を止め彼女の頭から離す。

「それじゃあ、そろそろ行くか」

既に荷物は、二人とも持っている。

ここに来る前にリユーネの母親には別れを済ませ、最後にここへ来たのだ。

彼女は既に店をたたむための準備を始めており、リユーネの退院と同時に別の世界に渡って新たな生活を始めるつもりだということだ。

「もう行くんですか？」

寂しそうな顔で、彼女が問ってくる。

「ああ」

それに対して刀弥が大きく頷く。

「寂しいです」

「なら、大きくなったら俺たちを追ってくればいい」

「え？」

刀弥の返事にリユーネは、少し呆然とする。

「とりあえず病気を治す目処がたったんだ。すぐに全快とはいかな

いだらうが、それでも外で遊ぶという夢も夢物語じゃなくなった。なら、努力次第じゃ『いろんな人から教えてもらったところに出掛ける』という夢だって叶えられるんじゃないか？ そうしたらついでに俺たちを探すことだってできるはずだ」

その言葉に彼女の瞳が大きく揺れた。

「……そうでした。私……もう家の中でじっとしていなくてもいいんですよ……」

彼女の頬に水滴が伝う。

自分が皆と同じように過ごせるようになったことをようやく理解し、嬉しさのあまり涙が出てきてしまったのだ。

「……あー！ そうだ。せっかくだからオーシャルで撮ろうか？」

そんな空気を変えるためなのかはたまたただ単純に思いついただけなのか、突然リアが手を叩いてそんな提案をしてきた。

「……そうだな」

せっかくの出会いを忘れないように、何かに残そうというのだ。反対する理由はない。

「ほら、リユーネも涙拭いて。せっかく撮るのなら笑顔で撮らないと」

リアに言われ、リユーネは急いで己の腕で涙を拭く。

刀弥はいつも通りの表情で佇み、リアはオーシャルを取り出し微笑む。

そして涙を拭いたリユーネはにこやかな笑顔を浮かべて、オーシヤルを見つめていた。

「それじゃあ、撮るよ」

その言葉の直後、オーシヤルが点灯。撮影が完了したことを彼らに伝えた。

「はい。終わり」

「あの、どんな風に撮れたか見てもいいですか？ 変な顔だったら恥ずかしいので……」

「うん。いいよ」

そう答えてリアはオーシヤルを起動。彼女たちの目前に先程撮られた情景が、小さく立体的に映しだされる。

それはとても微笑ましい光景だった。

白い病室で少女たちが笑い、少年もどこか平然としながらも口の端が僅かに上がって笑みを見せている。綺麗とは少し違う。どちらかというと明るいという言葉がよく似合う、そんな情景だった。

「うん。いいんじゃない？」

「悪くないな」

「そうですね」

三者三様にそれぞれ感想を述べる。

「それじゃあ、これでいよいよお別れかな」

オーシヤルで映しだした情景を消しながら、リアは名残惜しそう

に告げた。

「はい。お元気で」

「それじゃあ、ばいばい」

「またな」

そんな別れの挨拶を口にして二人は病室を後にした……

「さて、よつやく出発だな」

医者の家を出た二人は、その足で町の出口へと向かう。

「悪いな。余計な時間をとらせてしまって……」

「気にしないの。私だって刀弥の立場だったら同じことをしていたと思うし……」

刀弥の謝罪にリアがそう励ます。

「そうか……ところで、次はラーマスまで一直線か？」

「ううん。次はテシエラって町。ここからだと大体二日ほど掛かるかな？」

そう言って彼女が地図を見せてくる。

地図を見ると、ファルスとラーマス間に五つほどの町々がある。これらを経由してラーマスに向かうということだろう。

「二日掛かるということは、一日は洞窟で野宿か」

「刀弥。見張りの時間に寝ないでよ」

「……気を付ける」

言われ、初めての野宿だということを目覚める。

複数人で旅をする場合、片方が寝てもう片方が見張りをするのが基本だ。

何故なら、そうすることで身を守ること、疲れ癒すことの両方が叶えられるからだ。

そのため、見張りをする側の人間の責任は重大だ。自分だけでなく仲間の命も自分に働きに掛かっているのだから……

「まあ、あまり気負い過ぎると逆に疲れが溜まって眠くなっちゃうから、適度にリラックスするのがベストかな」

刀弥の反応を見たりアはそう助言を告げて、刀弥の肩の力を抜かせようとする。

「なるほどな」

それに刀弥が苦笑で応えた。

そんな会話をしながら歩いているとやがて、二人はテシエラへと続く洞窟へと辿り着いた。

「忘れ物はない？」

「ない。必要になりそうな物は？」

「お金の換金はまだ大丈夫だし、明かりは刀弥の分は既に買って、私は魔術があるから問題なし。薬はまだ持つはずだし、特別持って

おいたほうが良さそうな薬草もないから……うん。全部ある」

基本的に通貨は国ごと、世界ごとで異なる。しかし、大方の国は同じ世界内の通貨やゲートの先の隣国の通貨であれば使用できるのが通例だ。

ファルセンの場合、世界そのものが一つの議会制の国という形をとっている。

定期的に町長や代理人が集まっては、ファルセン全体の行く末や法律などを決めているということらしい。

故に、二人が今持っているフォースレイのエセドニア王国の通貨はまだファルセン内では使用可能ということだ。

「なら、大丈夫だな。通貨はラーマスに着いたら換金しないとな」

「そうだね。リアフォーネまで行っちゃったら、使えなくなっちゃうもんね」

「その辺、気を付けないとな」
「だね」

そんな会話をしながら刀弥はふと、これまでのことを少し思い返す。

リアと出会い、彼女に誘われ旅をすることになった。

それに対して、どうなるかという不安は確かにあった。

けれども、たった数日だが旅を楽しんでいる自分がある。

何よりこの世界では、自分の世界で誰からも必要とされてなかった自分の剣術が誰かの役に立てる。

刀弥にとってこれほど嬉しいことはない。

思いの外、自分に向いていたようだ。

「どうしたの？ 刀弥。何か考え込んでるみたいだけど？」

そんな刀弥の様子に、気が付いたのだろう。

不思議そうな顔で、リアが訊いてくる。

「いや、意外にも今の生活が自分に合ってるみたいだなんて思って……」

素直に、考えていたことを話す刀弥。

「そうなんだ」

「リアはどうなんだ？」

「私？ 楽しいよ。一人より誰かと一緒にのほうがいろんなことを言い合えるしね」

そう言って、リアは嬉しそうな笑顔を見せた。

「ほら、こんなところで話ばかりしないで行こう」

「そうだな」

そうして二人は歩き出す。自分たちの道を……

二話終了

一章終了

一章三話「命の抗い」(5)(後書き)

これで一章は終了です。

二章はプロットなど練る必要があるため、少々時間が掛かりますが頑張りますのでどうぞよろしくお願いします。

07/26

できる限り同一表現の修正。

二章二話「銃使いの少女と付添の少年」(1)(前書き)

二章プロットが完成しましたので、これより二章の開幕です。
どうぞお楽しみください。

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」(1)

そこは暗い洞窟の中だった。

洞窟は狭く、光が入ってくるような穴もない。唯一の明かりは、天井を支える柱に取り付けられたランプ状の灯りだけ。

そんな暗闇と僅かな光の中で、動く影があった。

影の正体は少年だ。歳は一四歳ぐらい。服装は黒の上着の下に白のシャツ、そして黒いズボン。

青い瞳は虚空何もない空間を見つめ、そこに彼、風野刀弥は刀を振る。

振り下ろし、振り上げ、水平斬り、そして突き。様々な剣戟を虚空を相手に繰り出していく。その度に空を斬る音が洞窟内に響き渡る。

そんな動きを見せていた刀弥だったが、時間の経過と共にその動きに変化が見られてきた。

それまで腕の力だけで振っていたように見えた斬撃が、次第に体全体を使った斬撃へと変わっていったのだ。

体を捻ったの回転斬り。その勢いを利用した溜めから繰り出される突き。身を前へと倒しながらの振り下ろし。逆に上へと飛び上がりながら振り上げ。そういった攻撃を、存在せぬ相手に幾度となく刻んでいく。

そうして一通りの攻撃を出し終わると、彼は刀をピタリと止めた。

風が通り抜け、刀弥の頬と刀を撫でて過ぎ去っていく。

やがて深呼吸と共に刀を鞘に収めると、刀弥は近くに置いておい

た水筒を手に取り、それを口に含んだ。ひんやりとした水の冷たさが、喉を通り抜けていく。

そのまま彼は水を飲み続けていたが、やがて口を離し蓋を閉めると腕時計を確認する。

そして予定の時間が過ぎていることを確かめると、刀弥はある方向へと振り返った。

そこには一人の少女が、壁にもたれて眠っていた。

年齢は刀弥と同じくらいだろう。鮮やかな赤銅色の腰まで伸びた髪が印象的で、その顔立ちも端正だ。

衣服は赤い上着と白い服、そして赤を基調としたチェックのスカーフ。

そしてもう一つ印象的なのは、彼女の両腕に抱かれた碧の宝石のついた金色の杖だ。少女の肩ぐらいの長さを持つそれは、少女の呼吸と共に上へ下へと僅かに揺れていた。

そんな彼女、リア・リンスレットのもとへ刀弥は歩み寄る。理由は簡単、彼女を起こすためだ。

けれども、起こそうとして、ふと彼は彼女の顔を覗き込んでしまった。

安らかに寝ているが故に浮かべられる、無防備な寝顔。元々、綺麗な容貌だけに見入ってしまっただけの魅力がそこにはある。

その魅力に刀弥は引き寄せられてしまう。けれども、刀弥はなんとかその誘惑を自力で振り払うことができた。

首を左右に大きく振って誘惑を断ち切ると、リアを起こすべく彼はその肩を掴んで強く揺する。

「リア。リア」

「……ん……」

何度か呼びかけていると、程なくしてリアが目を覚ました。

まだ、完全に覚醒していないのかうつろな瞳が辺りを彷徨うが、徐々にその焦点は刀弥へと固定されていく。

「……あ、刀弥。おはよう」

「おはよう、リア。それじゃあ、朝食にするか」

そうして二人は朝の挨拶を交わすと、朝食の用意を始めるのだった。

魔具であるスパーサーから食器や調理器具を出すと、早速二人は調理に取り掛かった。

こちらの素材や調理法を知らない刀弥は基本的にリアの調理を手伝う形だ。

もっとも調理と言っても実際に料理をするわけではなく、既に加工済みの食べ物を温め直したりして食べられる状態にするだけの話。刀弥の世界でいうチルド食品のようなものだ。手軽ということ、旅人たちの間では好まれているらしい。

そうこうしているうちに、朝食が出来上がった。

今日の朝食は、細かく刻んだ肉と穀物をスパイスで絡めたもののようなものだ。

口に運んでみると、スパイスの辛さと肉の柔らかさ、そして穀物

の味が丁度良いバランスでとても美味しかった。

自然と刀弥は食べることに夢中になる。

そんな中で、リアがふと呟いた。

「ファルスを出て五日か」

「そうだな」

その言葉に、食べ物を飲み込んだ刀弥が反応する。

二人は現在リアフォーネという世界に向かうため、ここファルセ
ンという世界にやってきていた。

ちよつとした予定外の事態でファルスという町で二日程過ごして
しまったが、それ以降は特にトラブルもなく概ね順調に歩みを進め
ている。

町も既に二つほど通過し、野宿もこれで三回目だ。

見張りは前日しつかり寝れていたこともあって、特に問題もなく
こなせていた。今日は後半の見張りで、見張りがたら剣の稽古まで
していたくらいだ。

「しかし、五日も経つと、さすがにこの狭くて暗い光景にも飽きて
くるな」

そんなことを言いながら、刀弥は周囲を見渡す。

岩の天井と壁と地面。元は坑道だったのを拡張したものだ。

最初こそ全く違う生活様式のために物珍しかったが、さすがに日
が経つと珍しさが消えて、ただの狭苦しい道にしか見えなくなった。

「まあ、旅なんてそんなものだよ」

「だから、新しい刺激を求めてどんどんいろんなところに向かうってことか？」

それに対して、リアは苦笑を返すだけだった。

「旅に飽きちゃった？」

「それとこれとは話が別だ」

その質問に首を横に振る。

「今の光景は見飽きたけど、だからって旅に飽きたとは思ってない。まだ二つ目の世界しか見てないしな」

「そうだね」

それに同意して、リアは食事を口に運ぶ。

「リアフォーネという世界も期待していいのか？」

「うん。たぶん刀弥なら喜ぶと思うよ」

その返答は自信に満ちている。そこまで断言するとなると、期待してもいいのかもしれない。

「なら、期待して待つとするか」

「どうぞ、どうぞ。私は、刀弥が目を見開くのを楽しみにしているから」

そんな会話をしていると、自然と両者に笑みが零れ始める。

そんな笑い声の中、刀弥は今の生活をとても楽しいと感じていた。

この世界に来てある程度、日数が経ち刀弥もこちらの生活にも慣れてきた。むしろ、やっていけると自信がついているくらいだ。

ファルスを出てからの道中、ときどきモンスターたちが姿を現しては二人に襲いかかってきているが、それもリアの魔術と刀弥の剣術で見事に撃退していつてる。

無論、上には上がいるだろう。ファルスでのロックスネークなどがいい例だ。そのため、気は抜けない。しかし、自分の剣術が通じないのではという不安は消えていた。

大丈夫だ。俺の剣はこの世界でやっていける。

この時、刀弥は心の中でそう思っていた。

その後、二人は朝食を終え、後片付けを済ませるとすぐさま出発した。

二人の行く先には、代わり映えのない洞窟の光景が続いている。

ときたま、地図などを見て自分たちの現在位置を確認しているの道に迷っているという可能性は低い。

しかし、この光景を見ていると本当に終わりが来るのだろうかという不安が脳裏をよぎってしまう。

洞窟に迷いこむ物語を読んじることがあるが、彼らもそんな気持ちだったのだろうかそんなことを刀弥は考えてしまった。

リアのほうを見てみると、彼女はただ淡々と足を進めている。
これが慣れた者の姿なのかと、そんな感想を抱きながら刀弥は彼女の後について行く。

「そういえばさ。刀弥って何人家族だったの？」

そんなとき、リアがいきなりそんな話題を振ってきた。

「何だいきなり？」

突然、話が振られたことに驚いた刀弥は答えを返すよりも先に疑問を返してしまった。

「あ、いや、その……歩いてばかりで暇だったから」

「……なるほどな」

どうやら、ただ淡々と歩くことに飽きたらしい。ただそれは刀弥も同じだったので、丁度良かったと言える。折角なので彼女の話に付き合うことにした。

「俺のところは父さんと母さん、そして妹の四人家族だな」

「そうなんだ。妹さんはどんな人なの？」

「名前は紋乃。性格は基本的に真面目だけど、ときたまお茶目なことをやらかすところがあるな。俺と同じように風野流の剣術を学んでいたけど、技に頼る癖があったな」

そんな話をしながら刀弥は少し目を閉じ、最近のことを思い浮かべる。

剣道場での試合、素振りに熱中していたところを後ろから襲ったこと、一緒に買い物に出掛けたこと。

あの時は、まさか今生の別れになるとは刀弥も思っていなかった。

今更ながら、刀弥は一日一日の大切さを痛感するのだった。

あいつ。ちゃんと剣術の訓練しているんだろうか？

ふと、そんな心配が脳裏に浮かぶ。

父親と母親に関しては大丈夫だろう。父親は見た目通りそうそう揺らぐことはないし、母親もああ見えて結構しっかりしている。

ただ、紋乃は明るそうに見えて繊細なところがある。あそこで別れなければと、悔やんでいるとしたら尚更だ。

「……刀弥？」

話の途中で考え込んだせいだろう。物思いにふける彼を不審に思い、リアが呼びかけてきた。

「……悪い。ちょっと家族のことを考えてた」

「……家族のこと心配？」

その問いに刀弥は少しの間、悩むそぶりを見せたが、しばらくして首肯を返す。

「そうだな。いきなりこっちの世界に来たから、きっと向こうは大騒ぎだろうしな。紋乃とは直前まで一緒にいたから、自分のことを責めてないかっていう心配もある。まあ、気にしたって仕方ないんだけどな」

肩をすくめる刀弥。

それを聞いて、リアの表情がすまないという顔になった。

「……ごめん。私が家族の話なんてしたから」
「気にするな。それよりリアの家族はどうなんだ？」

暗くならないよう、できるだけ明るく努めて刀弥は尋ねる。
こちらの意図を察したのだろう。リアもまた、それに応えるように明るい声で彼の問いに答えた。

「私のところはお婆様にお父様、お母様、お姉様にお兄様。それと弟と妹で八人家族だね」
「結構多いんだな」

刀弥の感覚からすれば、八人というのは大家族といえる。

「そうかな？ あ、後はメイドたちも私にとっては家族かな」
「……確かリアの家って魔術師の家系だって言ってたな？ 実は結構有名な家系なのか？」

すらりとリアの口から出てきた意外な単語。その単語を聞いて刀弥は思わずそんな問いかけを投げかけてしまった。

「え、えーと……実を言えば……そうかな。御免、隠してて」

刀弥の問いかけにリアは肯定を返すと、そう言って詫びてくる。

「いや、別に責めてる訳じゃないから謝らなくていい」

そんなリアに刀弥はすかさずフォローを入れた。

「別にリアの家が有名なところだろうが、俺は構わないしな。むしろ

る、俺の態度がリアの気に触ってないか、そっちのほう心配だ」

軽口を入れ雰囲気やを和らげようとする刀弥。

すると、それを聞いてリアの顔がほころぶ。どうやら上手くいったらしい。

「なら、今まで通りでお願い。私もそのほうが気楽だし……」

「わかった。それじゃあ、これまで通りで……」

刀弥がそう言うと、その途端、リアは安堵の表情を浮かべる。

恐らく無意識なのだろう。だが、それだけ気にしていたという「とだ。」

そんな彼女を見て、刀弥は思わず微笑を浮かべてしまうのであった。

「……ちよつとあ、刀弥、何で笑うの？」

そんな彼を見て、リアがむくれだす。

「いや、なんでもない気にするな」

「その顔で言われても説得力ないよ。一体何で笑ったの？」

微笑のまま誤魔化そうとする刀弥にリアがそれを指摘する。

「それは……内緒だ」

人差し指を口の前に置いて刀弥がそう告げると、彼はそのまま彼女を追い抜いて駆け出した。

「あ、こら待て〜」

彼を追いかけるために走りだすリア。

「断る」

そうしてリアと刀弥の追いかけてっこが始まった。

二人共全力で走っているという訳ではない。余力はしっかり残しているし、そもそも本気で追いかけてっこをしているつもりもない。ただ単純に互いにふざけあっているだけだ。

ふざけあって笑い合って、嬉しさを分かち合う。

そんなやり取りを刀弥は心の底から楽しんでいた。

「……楽しいな」

「え？」

足を緩めながら、刀弥がそんな感想をポツリと漏らす。

「楽しいなって言ったんだ。こんな風に話したり、笑ったりしてるのが……」

「……そうだね」

「ファルスを出るとき、リアが言っていたことの意味が少しわかった」

『私？ 楽しいよ。一人より誰かと一緒のほうがいろんなことを言い合えるしね』

それが彼女の告げた内容だった。

一人だけでは、思いや感想を己の内だけで完結してしまう。しか

し、誰かと一緒にいるなら、互いの思いや感想を交換し共有することが出来る。

それは新しい発見を生み、同時に新たな喜びも与えることになる。結果、一人のとき以上の喜びや楽しさをもたらすことになるということだ。

「確かに一人じゃ、こんな風に楽しむことなんて出来ないだろうな」「うん。だから、私も刀弥と一緒に旅ができて良かったと思ってるよ」

ニツコリと笑みを見せる彼女を見て、刀弥の頬も自然と緩む。

「ほら、行こ」

先を急かすリア。刀弥は、それを早歩きで追いかけるのであった。

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」(1)(後書き)

08/17

文章表現修正。

10/09

内容を一部変更。

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」(2)

しばらく二人で洞窟の中を進んでいるときだった。

「音？」

刀弥の言葉通り、二人の向かう先から音が聞こえてきたのだ。

何かが撃たれる音、ぶつかる音、咆哮、爆発、それらの音が混じり合い二人のところまで響いてくる。まず間違いなく戦闘音だ。

そのことを確信した二人は互いに顔を見合わせると頷きあい、急ぎ音のほうへと駆けていくのであった。

そうして、二人はその現場へと辿り着く。

そこは二人が通ってきた洞窟よりも、少しだけ広い空間だった。天井は岩ではなく金属製の人工物、そしてその天井を支える柱もまた同じく金属製の人工物だった。おかげで落石の心配がない。恐らくここは、崩落の際の緊急避難所も兼ねた休憩用の空間だったのだろう。

その証拠に、休憩用の椅子と思わしき瓦礫がいくつも転がっていた。

何故、瓦礫なのか。その答えは簡単だ。モンスターたちが破壊したからだ。

刀弥たちの目に映ったもの、それはモンスターの群れだった。圧倒的と言える程の数の大群が二人の目の前に広がっていたのだ。

その多さに二人は息を呑む。

大群のモンスターたちは皆、ある一点を見ていた。そこに視線を動かしてみると、なんとそこにはモンスターの大量相手に奮戦する二人の人間の姿があったのだ。

年齢は刀弥たちよりも少し上だろうか。一人は桜色のポニーテールの髪をした少女、もう一人は褐色の髪をした少年だ。

使っている武器は銃のようで少女は左右の両手に銀色を基調とした、少年は両手で赤を基調とした拳銃を握っていた。

少女のほうはそれを踊るように振り回し、近づいてくるモンスターたちに銃弾の雨を浴びせている。

放たれたのは透明色の弾丸。大気が揺らぎ、塵が僅かに避けていく。恐らく、風を圧縮して弾として放つ力を持った魔具なのだろう。

透明色の弾丸は定められた目標に向かって飛翔すると、モンスターたちの体を貫き倒していく。

銃弾を受け倒れていくモンスター。それでも稀に少女の戸に到達するモンスターもいたが、それらも拳銃の銃身を使った打撃やゼロ距離射撃によって瞬く間に打ち倒されていった。

よく見ると背後からの襲撃にもすっかり反応しており、まるでどこにも死角がないかのようだ。

かなりの手練だ。彼女のその動きから刀弥はそう判断した。

一方、少年のほうは両手でしっかりと拳銃を構え、確実に相手を狙い撃っていた。

銃口から飛び出すのは赤く揺らめく弾丸。真っ直ぐ目標に向かって飛んでいくそれは、着弾と同時に爆発。こちらは炎を圧縮した弾

丸のようだ。着弾すれば爆発する点はリアのフレイムボールに近い。彼の動きは少女ほど華麗ではないが、それでもしつかりとした動作で確実にモンスターたちを倒している。

どうやら、状況的には彼女たちが追い詰められているという訳でもないらしい。

鮮やかな手並みで戦っていることから、恐らくかなりの場数を踏んできているのだろう。

とはいえ、刀弥たちもこのまま黙って眺め続けるつもりもない。相手はかなりの数だ。万が一の可能性もあり得る。

リアのほうを見ると、彼女も同じ結論だったようだ。アイコンタクトでそのことを確認し合うと、迷わず二人はその身を目前の戦場へと飛び込ませていくのであった。

突然の助けに最初、少年は驚くが、それに構わず刀弥は戦場を駆け抜ける。

そして手近なモンスターに接近すると、彼は鞘から刀を抜き放ちそのモンスターに斬りかかった。

斬られたモンスターは、雄叫びを上げて平伏していく。

倒れたモンスターの鳴き声によってそれまで二人組のほうを襲っていたモンスターたちは新たな獲物の到来を知った。

新たに現れた餌に対し、彼らは己の欲望を満たすため、争うようにして新たな獲物へと一斉に群がるのだった。

刀弥は巧みな位置取りで一斉に襲われるのを避けると、一番手近にいたモンスターに向けて刀を振り下ろす。

体をまるごと斬られたモンスターが前のめりに倒れ、群れの中に飲まれていく。

突然、現れた障害物に先頭集団が足を乱し、結果、刀弥との間に距離が生まれた。

その時だ。別の方向から回りこんでいたモンスターが刀弥へと迫ってきた。

迫るモンスターは刀弥を押し潰そうとまっすぐ刀弥へ飛び掛かる。

対し刀弥は横へと体をずらしモンスターの攻撃線上から逃れると、刀の刃をその線上に置く。

その結果、襲いかかってきたモンスターは自身の速度によって刀に裂かれ、そのまま崩れ落ちていった。

崩れ落ちていく相手に見向きもせず、そのまま刀弥は別のモンスターに斬りかかる。

相手が倒れたその直後、刀弥の背後から触手が伸びてきた。

直前に気付いた刀弥は身を低くすることでこれを回避。そうして振り返ると同時に触手を斬り裂いた。

そのまま回転の勢いを止めずに回ると、その勢いを利用して捕らえようとしてきたモンスターに向かって斬りかかった。

回転の勢いの乗った斬撃を受けて相手が斬り裂かれる。

刀弥が相手を倒したその時、別の方向から回りこんできた集団が刀弥に向かって迫ってきた。

さすがに、これだけの数を同時に相手をするのは難しい。故に、そう判断した刀弥は後ろへと飛んで彼らから離れようとする。

そんな彼の後をモンスターたちが追いかけようとした　その瞬間だった。

刀弥を追いかけようとしたその集団が、炎の砲撃に飲み込まれた。業火がうねり、灼熱の炎が飲み込んだモンスターたちを跡形もなく焼き尽くしていく。

やがて砲撃が収まると一帯に少しの間、静寂が訪れた。

砲撃の撃ちこまれた場所は未だに業火が姿を残しているが、最初の頃と比べるといくらかその規模は弱くなっている。そんな中、砲撃の主が姿を見せた。

炎の砲撃の主はリアだった。使ったのは『フレイムブラスト』という魔術。

刀弥が下がったのは、彼女の砲撃に自身が巻き込まれないようにするためだ。

撃ち終えた彼女は既に新たな魔術式を組んでおり、それを丁度今、発動させる。

『アースランス』

地面より大地の槍が多数生み出され、モンスターたちを足元より

貫いていく。

何とかアースランスを避けたり、範囲から逃れたモンスターたちはリアへの危険度を高め、彼女へと殺到していく。

けれども、彼らの進行を刀弥が妨害した。

彼はリアへと向かうモンスターたちの死角から接近すると、急所に刃を入れ次々と倒していったのだ。

リアに気を取られていた彼らは迎え撃つこともできず、ただ彼の刃の餌食となっていく。だが、それだけでは終わらない。

なんと刀弥によって倒されたモンスターたちが今度は障害物となって進行するモンスターたちの足を止める効果を発揮したのだ。

死体の障害物によってモンスターたちは思うように進めなくなる。加えて刀弥自身も死体を壁や視界を遮る障害物として積極的に利用して攻めてきており、状況はモンスターたちにとって不利になる一方だ。

そうして時間を与えてしまったモンスターたちは、リアの新たな魔術を受けることになってしまったのだった。

『フレイムボール』

生み出されたいくつもの炎の球が、あちこちへと飛んでいく。

大半の火球が何かしらのモンスターにヒット。爆発を起こし彼らを倒していく。

そんな中を刀弥が駆け巡る。

彼は爆発で生まれた死角を利用し、モンスターに近づいていくと首や腹に一閃を見舞っていく。

だがその最中、刀弥の第六感が危険信号を告げてきた。

急ぎ危険を感じるほうへと顔を向けると、そこにはトカゲの姿をしたモンスターが大きく息を吸い込む様子が見えた。その視線はまっすぐ刀弥を見ている。

まさか、遠距離攻撃か!?

直後、予想通りの攻撃が飛んできた。

トカゲのモンスターが口から火球を吐き出したのだ。

予感に従い体を動かし、火球から逃れる刀弥。

だが、トカゲの攻撃はそれで終わらない。

当たらなかつたとみるや、トカゲのモンスターは次々と火球を放ってきたのだ。

刀弥の周りの大地が火球を受けて爆ぜる。そんな中を刀弥は生き残るために避け続けていた。

以前、ミミズの姿をしたモンスターが消化液を飛ばしてきたことがある。けれども、あのときの攻撃はそれほど飛距離を持っていなかった。

しかし、今回はかなり離れた距離から放たれている。ここまで距離が空いてしまっていては縮地でも一気に距離を詰めるのは難しい。

けれども、相手の放つ火球が止む気配はなく、中々近づけるだけの隙を見つげられない。

幸いなのは他のモンスターたちが火球に巻き込まれることを恐れ

てか、刀弥に近づこうとしない点だ。

そのため、刀弥は火球の対処にだけ集中することができた。かといって、このままではジリ貧になるのは確実だ。

どうする？

そんなことを思案していたせいだろう。突然、刀弥は足を取られた。

「!？」

慌てて足元に目をやる。

すると、そこにはモンスターの肉片を踏んで滑った自分の足があった。

「しまっ……」

目をトカゲのモンスターのほうに戻してみると、丁度トカゲのモンスターは刀弥に向けて火球を吐き出そうとしているところだった。

足を滑らせた刀弥に、この攻撃を逃れる術はない。

反射的に彼は刀を前に出した。

もちろん、この程度の防御でダメージを軽減できるはずもない。だが、それでも僅かでも生き残れる可能性があるならやるべきだと、そんな思考が頭の中にはあった。

それが生きることを諦めなかった者の答えだった。

そしてトカゲのモンスターの火球が吐き出されようとしたその直前。

一発の透明色の弾丸が、トカゲのモンスターの頭部を貫いた。

貫かれたトカゲのモンスターは火球を吐き出すことなく倒れ、刀弥は無事難を逃れる。

攻撃が飛んできた方向へと見ると、そこには桜色の髪をした少女の姿があった。

彼女は少しの間刀弥のほうを見ていたが、近寄ってくるモンスターの気配に気が付くとそちらのほうへと視線を移してしまう。

戦い始める少女を刀弥はしばらくの間、眺めていた。だが、刀弥を食らおうと接近してくるモンスターの影に気が付き迷わず彼女から視線を外す。

口を開き飛び掛ってくるそれを後ろへと飛んで逃れると、即座に前へと切り返しその顔面に縦の一閃を与える刀弥。

他のモンスターに気を配りながら、彼はそのついでに少女のほうへ視線を向けた。

少女は相変わらず踊るような身のこなしでモンスターたちを倒していた。その動きにつられて、桜色のポニーテールが右へ左へと揺れる。

遠くから攻撃しようとしてくるモンスターたちにもしつかり対応しており、発見しだいすぐさま撃ち抜いている。

遠距離の攻撃手段を持たない刀弥には、不可能な対応だ。

そんな感想を頭の隅に思いながら彼は突然、身を仰け反らせた。仰け反った直後、モンスターの爪が刀弥の目の前を通り過ぎていく。それを確かめると、すかさず彼は襲ってきたモンスターの首を斬り飛ばした。

改めて彼女へと視線を戻すと彼女は自分の回りだけでなく、もう一人の少年の方もしっかり見ているのがわかった。

少年が対応しきれない状況に陥りかけると、すぐさま援護の射撃を放って度々彼を助けてるのがその証拠だ。

広い視野と巧みな動き、そして攻撃範囲に優れる銃という武器。それが彼女の強みのだろう。

「刀弥」

そんな考えにふけて戦っていると丁度そこへ、リアがやってきた。

「ごめん。援護が間に合わなくて」
「気にするな」

さっきの、足をとられたときのことを言っているのだろう。
だが、それも仕方ない。

魔術式を構築する必要のある魔術では、すぐさま助けに入るといふのは中々難しいことのはずだ。だから、あの時援護できなかったことをリアが悔いる必要はないのだ。

「でも……」

「なら、次の町のご飯はリアの奢ってもらってことで手を打とう」

とはいえ、リアのせいではないと言ったところで、彼女は自分を

責めるだろう。

戦いの最中に気持ちを沈めては、状況的にマイナスにしかならない。

ならば、あえて形だけの罰を与えることで彼女の罪悪感を取り払うのが正解のはずだ。

事実、彼女はそれを聞いて少しだけ表情を晴れやかにする。

「うん。刀弥がそれでいいなら」

「ああ」

そうして二人は辺りを見渡す。

いつの間にもやらの二人の周囲をモンスターたちが取り囲んでいた。

「一気に行くぞ。俺が壁になる」

「わかった」

その了承と同時に、リアが魔術式の構築に入る。今度のはかなり長い。

嫌な予感を感じたのか、モンスターたちがリアに襲いかかろうと一斉に動き出す。

そんな彼らの前に刀弥は立ち塞がった。

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」(2)(後書き)

08/02

頭上を頭部へと修正。

一部表現の修正。

08/17

文章表現の修正

10/15

文章表現の修正

11/12

瞬歩を縮地に変更

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」(3)

「ようやく終わったな」

「全く……数多すぎだろ。何でこんなにいるんだ」

刀弥の呟きに呼応するように、褐色の髪をした少年がそんな愚痴をこぼす。

戦闘が終わったこともあってよく観察してみると、彼は黒いシャツと深緑色の上着とズボンという服装をしていた。

「まあ、確かにかなりの数だったな」

周辺を見渡しながら刀弥は彼の言葉に同調する。

彼らの周囲、そこにはいくつものモンスターの死体が転がっていた。全て彼らが倒したモンスターたちだ。

「……ってそつだ。ありがとう。本当、助かった」

そこで刀弥たちが助けしてくれたことに思い至ったのか、少年が実色の瞳を刀弥たちに向けお礼を述べてきた。

「割と余裕そつな気はしたんだけどな」

その言葉と共に刀弥は、もう一人の少女のほうへと顔を向ける。

「ああ、シエナは別格だから……」

少女はシエナと言うらしい。彼女は新橋色のミニスカートと白の

半袖シャツと青色の薄地の上着という動きやすそうな服装をしていた。拳銃は左右の腰にあるホルスターに収まっている。

シエナと呼ばれた少女は戦いが終わってすぐに少年の傍まで歩み寄ると、そこから先はずつと黙ったままだった。

撫子色の瞳は刀弥たちに向けられているが、視線を感じることはない。まるでここではない別のどこかを見ているかのようだ。

「俺は風野刀弥」

「私はリア・リンスレット。よろしくお願いします」

「アレン・ギリアス。彼女はシエナ・リンブルト。まあ、ちょっと変わってるけど悪い奴じゃないんで気を悪くしないでくれ」

刀弥とリアが名乗ると、少年アレンがそう名乗り返してくる。しかし、シエナという少女は自分の名前を告げるどころか今だ一言も発するそぶりも見せない。

「えっと……とりあえずさっきの戦闘では助かった。おかげで命拾いをした」

ともかく、先程助けしてくれたことへのお礼を言ってみるが、やはり反応なし。

さすがにどうしたものかと、彼女を熟知しているはずの人物に助けを求める。

「……シエナ」

「何？」

刀弥の視線を受けて、アレンが溜息と共に彼女の名前を呼ぶと、それまで黙っていた彼女がすぐさま反応を返した。

「前にも言っただろ？ 呼ばれたなら知らない人でも反応ぐらいはしろって」

「アレ、前と違うことを言ってる」

「あれは、怪しい勧誘だっただろう！？ ああいうのは無視していけど今回は駄目なんだよ！！」

「……わがまま」

その一言に、アレは『あー』という呟きと共に天井を仰ぐ。

それを見て、刀弥は思わず同情の念が湧いてしまった。今のやり取りで彼女がどのような人間か大体見当がついたからだ。

「……大変だな」

「……全くだよ」

もはや否定する気もないらしい。がっくりとうな垂れるアレ。

「シエナ。挨拶しろ」

「シエナ。よろしく」

アレに言われ、シエナは抑揚のない声で挨拶をしてきた。

刀弥たち存在なんてどうでもいいという態度に思わず内心苦笑しつつも、ともかく刀弥たちも返事をする。

「よろしく」

「よろしくね」

「悪い。本当に……」

申し訳なさそうな顔で、アレが謝罪をしてきた。恐らく、何度も繰り返されてるのだろう。どこか手慣れている感があった。

「私たちは気にしてないから。ね、刀弥」
「ああ」

むしろ、刀弥はアレンに対して哀れみの気持ちすら湧いていた。

「アレン。がんばって」

そんなアレンを、その原因が肩に手を置いて励ます。

原因が言っても、励ましにならないだろうに……

そんな刀弥の思いをアレンも持っていたようだ。手が置かれた肩が徐々に大きく震えだしていく。

「……………お・ま・え・が・い・う・な!!」

どつやら怒りが頂点に達したようだ。刀弥たちがいるにも関わらず、アレンの怒気を含んだ大声が洞窟中に反響した。

「そういえば、アレンさんたちの目的地はどこなんですか?」

アレンの怒りのボルテージが下がったのを見計らって、すかさずリアがそんなことを訊ねた。

「イメース。氷の像の祭りがあるって聞いて……」

けれど、それに答えたのは意外にもシェナだった。どうやら目的地は彼女の希望だったらしい。

「リア、イメースってどこにあるんだ？」

「確か……ラーマスの先だったかな」

思い出す仕草をしながらリアが応じる。

前に地図を見せてもらったとき、確かファルスからラーマスまでの道は一本しかなかったと記憶している。シェナたちの目的地がラーマスの先ということは、ラーマスまでは同じ道に行くことになる。

「ラーマスが目的地？ てことはリアフォーネに行くんだ」

「はい。そうだ。折角ですし、良かったらラーマスまで一緒にしませんか？」

リアからの提案に、アレンはシェナのほうへと顔を向ける。

「どうする？ シェナ」

「アレンに任せる」

どうでも良さそうな声でシェナが返事をする。ただ、その表情は若干膨れているように刀弥には見えた。

「それじゃあ、せっかくだから一緒に行こうか。よろしく」

「はい。よろしくお願いします」

「よろしく」

「……よろしく」

そうして四人は挨拶を交わした。シェナの声がやや不機嫌なのは気のせいにしておく。

「とりあえず、先へ進むか。いつまでもこんな所に居たいとも思わないしな」

「……それは言ってる」

周囲のモンスターの死体を見てアレンが頷く。普通に考えて、こんな場所に長い間居たいと思う人などまずいないだろう。

「まあね」

リアも同意し、ともかくこの場所から離れようということになり四人はその場を急いで去っていくのであった。

「ところで、どうしてあれだけのモンスターの数と戦うことになったんだ？」

先へと歩みを進めている途中、刀弥はふと気になっていたことを訊いてみることにした。

あれだけの数のモンスターと戦うことなんて、滅多なことではなはずだ。実際、これまで刀弥たちもモンスターと何度か戦ってるが、一度にあれだけの数のモンスターと戦ったという記憶はない。

もしも原因がわかってるのなら、一応、回避方法を知りたいと思っただ。

「さっきのところで休んでたら、壁が崩落してね。そこからぞろぞろと……どうやらモンスターが掘ってた道と繋がったみたいで……」
「ああ、なるほど」

それなら避けようがない。

けれども、アレンのその発言からふと気になることを思い出す。

「だけど、それならその穴。塞いだほうがよかったんじゃないの？」

少なくとも、先程の戦闘で穴を埋めた記憶はない。ならば、穴は空いたままのはずだ。放っておけば、またそこから別のモンスターが出てくるかもしれない。そうなれば、ここを通る人たちや町の人たちに被害が及ぶ可能性もある。

しかし、刀弥の懸念に何かを思い出したのか、アレンが疲れた顔を浮かべてこう返してきた。

「……それなら二人が来る前に爆破して塞いだ。あのままだったらどンドン来るんじゃないかと思って……」
「……大変だったみたいだな」

アレンの表情から、事情を察した刀弥がそう声を掛ける。

「ああ、あのモンスターの群れを突破して、その繋がった通路に爆破用の魔具を仕掛けないといけなかったからな。通路からモンスター

「が現れないか冷々したよ」

「そんな物。いつも持ち歩いているのか？」

彼が言っているのは爆破用の魔具だ。普通に考えたら、そうそう必要になる状況などなく持ち歩く必要などのない代物のはずだ。

しかし、その理由はすぐに判明した。

「まあ、研究用に自分で作ってる物をな……」

特に自慢する様子でもなく、アレンは淡々とそう告げる。

けれど、彼のその告白に刀弥とリアは目を丸くした。

「魔具を作れるのか？」

「すごいじゃない」

そう言って、二人とも感心の目でアレンを見つめる。

その視線に対して、アレンは両手を上げて謙遜の言葉を返した。

「そんな凄いわけじゃない。個人の趣味レベルだし、とても自慢できるほど……」

「私たちが使ってる銃もアレンが作ったの。他にもいろいろあるわ。例えば……」

ところが、そんな彼の言葉に被せるようにシエナが代わりにアレンの作った物を説明しようと口を開いた。

これにはアレンも驚き、慌てて彼女に駆け寄ってその口を塞ごうとする。

「シエナ。お願いだから余計なこと喋らないでくれ」

「何で？ 二人ともアレンのことを褒めてる。私は事実を言ってる

だけ。何を困ることがあるの?」

不思議そうな顔でシエナは首を傾げる。

「それは……」

返答に窮するアレン。

そこにリアが助け舟を出した。もっとも、それが助け舟と呼べるのは刀弥にしてみれば怪しいところであったが……

「アレンさんはシエナさんに自慢されるのが恥ずかしいって言うんだと思いますよ」

「……そうなの?」

視線をリアからアレンに戻しシエナが訊く。

何とも言えない顔で、アレンはシエナから目を逸らす。その反応がリアの言う通りだということを証明していた。

「リア」

「えっと……ごめんなさい。アレンさん」

刀弥が相棒の名前を呼ぶと、さすがに知り合ったばかりの相手にやり過ぎたと自覚していたようですぐにリアがアレンに謝った。

「その……やりすぎちゃったみたいで……」

「えっと、まあ……」

アレンも返す言葉が思いつかず、曖昧に答えるだけだ。

「まあ、それにしても個人レベルとはいえ、魔具を作れるのは凄い

と思うけどな」

アレンを助ける意味もあって、刀弥は先程の話題をもう一度掘り起こす。

「そんなことないない。俺の世界じゃ割と皆やってるしな……なあ、シエナ」

「そうね。でも、私が満足できる銃を作ってくれたのは……」

「……わかったから、それ以上はいい」

うんざりした様子でシエナを止めるアレン。

どうもシエナはアレンのことになると、彼を持ち上げようとするところがあるようだ。

「私のところは魔術の発祥の世界ってこともあって、魔術の勉強と
かする子が多かったな」

アレンの話を聞いて触発されたのか、リアが自分の世界の様子を
思い出すように話し始めた。

「魔術の発祥……ってことはマグルカ？」

「やっぱり、わかっちゃいますか」

「そりゃあ、有名だし……」

どうやらリアの世界は、かなり有名な世界らしい。

その後もアレンとリアは随分と楽しそうに話をしていた。それぞ
れの世界の特徴や歴史で二人は盛り上がっている。

その辺のことを知らない刀弥は、ただその様子を眺めることしか

できない。

とはいえ、つまらないということはない。知らないことを知るの
は好きだし、今回は世界の話ということで興味を惹かれる話題でも
ある。特に世界の特徴や大まかな歴史は思いの外おもしろかった。

そんな話に耳を傾けながら何気なくシエナのほうを覗いてみると、
彼女はどこか面白くなさそうな面持ちでアレンとリアの会話を見つ
めていた。

やがて、我慢の限界に達したのかシエナはアレンに近づき彼の袖
を引いた。

「どうしたんだ？」

袖を引かれたアレンは話を中断してシエナのほうへと振り向く。

「……別に何も無いわ」

「ご機嫌斜めであることを隠そうとせず、ツンケンな態度で彼女は
そう告げる。しかし、その返事にアレンは少しイラッとしたようだ。

彼は顔をしかめ、シエナに詰問する。

「だったら、何で呼んだんだ？」

「なんとなく、そうしたかったから……」

変化のない声色での返答。

ある種、我儘とも言えるその内容にますますアレンは苛立ってい
く。

「お前なあ……」

「まあ、落ち着け」
「そうそう」

声を荒げるアレンを止めるために、刀弥とリアが二人の間に割って入ることにした。

「私は気にしてませんから……」
「だけどなあ……」

横目でシエナを睨むアレン。睨まれたシエナは眉を吊り上げながら知らん顔をする。

そのやり取りにリアは苦笑するしかなかった。

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」(3) (後書き)

08 / 17

文章表現の修正

10 / 28

文末などの修正

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」(4)

「……そろそろ野営の準備をするか」

しばらく歩いた後、刀弥が腕時計を見てそんな提案を他の三人にしてきた。

四人がいるのは洞窟内のため、町のように天井の光量で時間の流れを把握することができない。そのため、腕時計で時間を確認しなければならぬ。

ただ、刀弥の腕時計は基準時間での時間しかわからない。そのため、その時間経過から今が夜なのかを判断する必要があるのが難点だ。

ちなみにリアの腕時計は、基準時間と設定した時間の両方がわかるタイプ。ただし、刀弥のと違って日付までは知ることはできない。

「刀弥の時計は、基準時間しかわからないのか」

刀弥の腕時計を見て、アレンがそんな感想を漏らした。

「ああ、小さな町で買った奴だったしな。何せ、いきなりこっちの世界に来たからな……」

それほど日が経っていないはずなのに、リアと出会ったのが随分昔のことように感じられる。

そう思えるほど濃密な日々を刀弥は過ごしたという訳だ。自然と感慨深い思いが刀弥の内に溢れてくる。

「こつちの世界？」

彼の漏らした言葉にアレンが反応を示す。

「……ああ、言っていなかったな。俺は渡人なんだ」

そうして刀弥は、自分の身の上を二人に話すことにした。
その説明にアレンもシエナも驚愕の顔を浮かべる。

「なんて言えはいいのか……」

話を聞き終えた後、アレンは困惑した表情を浮かべて言葉を濁した。

「まあ、来てしまった以上はいろいろ楽しみながら生きるさ。とりあえず今は野営の準備だ」

話の中心であった刀弥がそう言うと、それを合図に皆が野営の準備を始める。

まずは夕食の準備のために食器や調理器具、食べ物。加えて暖と明かりのための魔具も取り出し、起動させる。

そうして食べ物を調理していく。
やがて、夕食が出来上がると、四人は暖の魔具を囲んでそれらを食べ始めるのであった。

その夕食の最中、意外にもシエナが刀弥に話しかけてくる。

「ねえ」

「何だ？」

「刀弥の世界ってどんなところ？」

どうやら刀弥が渡人だと知って彼の世界に興味を持ったようだ。気のせいかわ女の瞳が一際輝いているように見える。

やはり未知の場所というのは皆、興味をもつものらしい。その気持ちは刀弥もわかるだけに特に何も言わない。

ともかく彼女に請われるまま、刀弥は自分の世界について話し始めるのだった。

内容は前回、ファルスの宿屋で話した内容と変わりはない。けれども、話す相手が違っていると興味を持つところが違うということもあって、詳細に話す部分は大きく異なってくる。

シエナの場合、特に食らいついたのは銃火器に関する話だった。本人が使っていることもあって興味を持っているのだろうかとそんなことを頭の片隅で考えながら、刀弥は自分の知っている範囲で話していく。

ときたま、個人的な推測や感想も混ぜてみたが、意外と彼女に好評だったことに刀弥はほっとした。

「……と、まあ以上だ」

「ありがとう。面白かったわ」

説明を終えると、シエナがそうお礼の言葉を口にす。

この頃には既に四人とも食事を終えており、彼らの回りには食べ終えた食器だけが残っていた。

「満足してくれたなら、こっちとしても話した甲斐がある」

「悪いな。元の世界の話なんかさせて」

その礼に対して刀弥はそう応答を返すと、アレンがそんな風に謝ってくる。

帰れない元の世界を思い出させるようなことをさせてしまって、すまないと思っっているのだろう。

「気にするな」

自分の世界への思いを思い出さないと言えば嘘になるが、それを彼らに言う必要はない。

とりあえず刀弥はその思いを払拭する意味もあって、新たな話題として先程から気になっていることについてアレンに聞いてみることにしたのだった。

「……ところでそれは何なんだ？」

訝しむ刀弥の視線はアレンの前に置かれたある物に向けられている。

持つためのグリップと銃身があることから銃に類する物であることは一目でわかった。だが、かなり大きい。

銃身は上下二つに割れており、さながらレールのように見えた。グリップは上部に取り付けられているようで、仮に持つとしたら逆手でそれ自体を引き上げる感じで持つことになるだろう。

だが、グリップの大きさから考えてもこれは片手持ち。片手でこれだけの大きさの物を持ち上げられるのか。それが刀弥には疑問だった。

「今、製作中の魔具の銃。高出力の雷と風を放出する力を持たせようと思ってるんだけど……」

どうやら、新しい魔具を作っている最中だったらしい。

始めて見るその作業に、自然と刀弥の視線は吸い込まれていく。

銃の近辺には別の魔具らしき物がいくつか置かれていた。どうやら計測器のような役割を持っているようだ。その証拠に彼の傍の何もない空間に様々な情報が浮かび上がっている。

それらに目を通しながら、アレンは銃の内部を弄ったり部品を交換したりなどして制作を続けていた。

魔具はマナを動力として使った装置ではあるが、その構造は多岐に渡っている。

大半は、術式回路と呼ばれる魔術式を回路のように事前に組んだものを組み込むのだが、中にはそれに科学文明の技術を混合させたものまである。

結果、多少の出力調整ができたり、複数の効果の並列化、プロセス化を自動制御にすることで扱いやすさの向上させるなど魔具の利便性を向上させることに繋がった。

アレンが製作している銃がどういう構造のものかは魔具に関する知識を全く持たない刀弥にはわからない。だが、かなり高度な知識と技術が必要なだけはなんとなくわかった。

けれど、一つだけ気になることがある。

「だけど、それ。持てるのか？」

大きさから考えても、片手で持つには結構重たいような気がする。こんな物を本当に持てるのか、それが気になったのだ。

だが、刀弥の問いにアレンはこう答える。

「ある程度軽くしているとはいえ、俺じゃあ無理だな」

「じゃあ、それを使うのは……」

自然と刀弥の目がシエナのほうへと向かう。

彼に見つめられたシエナは、何事かとばかりに首を斜めに傾げた。

「そういうこと。こう見えても俺より力はあるからな」

気のせいか、その口調に嘆きの色が混じっているように刀弥には感じられた。

だが、次の言葉にはその色はもう混じっていない。

「まあ、おかげで多少の無茶な魔具でも作れるからな。その辺は感謝しないとな」

「じゃあ、明日は私の大好物の……」

「調子に乗るな」

シエナの頭を軽く殴るアレン。痛くなどないはずだが、それでも彼女は痛がる表情をみせた。

そんなやり取りを刀弥とリアは笑みを浮かべ仲良く眺めていたのであつた。

そうして四人は就寝の準備に入る。

見張りは四人ということ、二人ずつの交代。前半は刀弥とリアが、後半はシエナとアレンが担当することになった。

魔具が照らす明かりの中、刀弥とリアが並んで座っている。明かりの向こう側ではシエナとアレンが寄り添いあうように　シエナから一方的にだが　眠りについていた。

「楽しかったね」

「そうだな」

今日の出来事の感想をリアが呟き、それに刀弥が同意する。

242

「アレンもシエナもどっちも凄かったな」

「そうだね。アレンさんが魔具作れるつても凄かったけど、シエナさんも凄かったね。クルクル回りながら撃って相手をほとんど寄せ付けてなかったし」

そのときの様子を目に浮かべたのか、リアの顔がうつとりとしていた。

「私たちも、がんばらないとね」

「……そうだな」

刀弥の返事が微妙に遅かったが、そのことにリアは気が付かない。

「私の場合、まずは新しい魔術の取得かな？　刀弥は？」

「俺の場合、遠距離の対応だろうな。今日のようなことにならないようにしないとな」

遠距離攻撃を持たない刀弥の場合、考えられる手段といえば相手の攻撃を避けながら近づくとということになる。

しかしながら圧倒的な弾幕を相手にした場合、進むどころか回避することすら至難の業だ。

堅実なのは障害物に隠れながら少しずつ進むことだが、ならば障害物がない場所での状況に陥ったとき、どうするのかと言われると思いつかない。

そもそも刀弥の世界では既に銃が優秀な武器として認知されており、今や剣や刀は基本的に美術品としてしか価値のないのが実情だ。

それは……剣では銃に勝てないということの証明ではないのか？

一瞬よぎる、そんな思考。思わずそんなことはないかと否定しようとするが、それを否定しきれない自分がいることに刀弥は気付く。

「刀弥？ どうしたの？」

様子がおかしい事に気が付いたのだろう。リアが刀弥の顔を覗き込もうと近寄ってきた。

「何でもない。ちょっと、どうやって対抗しようか考えてただけだ」

弱腰な考えを悟られなくなかった刀弥は、とっさにそんな嘘をついてしまう。

「そっか」

どうやらリアは刀弥の嘘を信じたようで、そう言っただけで彼女は元の場所へと戻っていった。

それを見送った後刀弥は明かりへと目を移し、それからその向こう側を注視する。

あどけない顔で眠る銃使いの少女を……

— 話終了

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」(4)(後書き)

これで二章一話が終了です。

次は二話です。

どうぞお楽しみに……

08/17

文章表現の修正

10/30

文末などを修正

二章二話「不安と信じる答え」(1)

「刀弥！！ 後ろ！！」

その叫び声に、刀弥は我に返り慌てて後ろを振り返った。

振り返った視線の先、サソリのようなモンスターが刀弥に目掛けて尾を振り降ろしていた。回避は間に合わない。

尾はそのまま刀弥の左腕に刺さる。かに思えたその直後、大きな音が響き渡りそれと共にモンスターの尾が宙を舞った。

すぐさま刀弥はそのサソリのようなモンスターに接近。その頭部に刀の刃を突き立てた。

モンスターの体が大きく跳ね上がる。だが、刀弥は構わずそれを力尽くで抑えこんだ。

そうしてモンスターが動かなくなると刀弥は刀を引き抜き、背後から迫る新たなモンスターに水平切りを放つ。

斬られ後ろへと倒れていくモンスター。それを尻目に今度は右から襲いかかってくるモンスターの爪を刀の刃で弾く。

それから相手に懐まで潜り込むと振り上げて相手の胴体を切断。すぐさま膝を曲げて身を低くする。

直後、彼の頭上を大きな猫のようなモンスターが後ろから通り過ぎていった。

それに合わせて刀弥は背後へと飛ぶと、とりあえず手近なモンス

ターを斬りつける。

押し寄せる敵たちを躲しては斬り、弾いては突いてを繰り返す刀弥の姿は、見事としか言いようがない。

そんな最中、刀弥は他がどうなっているかと思ひ視線を巡らした。

リアは丁度、『アースランス』を発動させ周囲にいたモンスターを一扫しているところだった。

大地の槍群がリアを護るかのように周りに現れ、彼女に仇なすものたちを貫いていく。

大地の槍は矛という役割だけでなく、彼女への進行を阻む盾としての役割も全うしていた。

おかげで、モンスターたちは彼女に近づくことができない。

一刻、確保した安全。それを利用して、リアは新たな魔術式を構築する。

『ボルトハンマー』

彼女の敵に、雷の鉄槌が振り下ろされた。

膨大な雷のエネルギーによって、範囲内にいたモンスターたちはあっという間に感電死を迎える。

どうやら、リアのほうは大丈夫なようだ。

そのことに安堵しつつ、次にアレンのほうをしてみる。

彼は魔具の拳銃を使って、着実にモンスターたちを倒していた。

周りに気を配りつつ、敵としっかり距離をとって銃を撃つ。無茶はをしない堅実な対応だ。

そんな彼のもとに、一体のモンスターが突進してくる。

それに気が付いた彼は素早く拳銃をそのモンスターへと向け、引き金を何度も引く。

いくつもの赤き銃弾が銃口をより飛び出しモンスターに接触した瞬間、爆発を起こしていく。

何十発とダメージを与えたところで、彼に向かって突進しようとしていたモンスターの足が止まり、グラリと横に倒れた。そこにはもはや生氣はない。

そんな彼に今度は三体のモンスターが襲い掛かる。さすがに、これは彼では対処しきれない。

だが、対するアレンは懐からある物を取り出すと、それを襲ってくるモンスターたちに投げつけた。

その途端、それは大爆発を起こし、襲いかかろうとしていたモンスターたちは爆発の炎に焼かれ焼死した。

アレンが投げつけたのは、彼自身の手によって作られた爆破効果を持った使い捨ての魔具だ。

彼はそれをもう一つ、今度は背後の集団に目掛けて放り投げる。

大きな音と巨大な炎が、その集団を飲み込むのが刀弥の位置からでも見る事ができた。

最後に刀弥はシエナを見やる。

彼女は相も変わらず、踊るような動きでモンスターたちを倒して

いた。

雨のように次々と放つ透明な銃弾は、彼女を囲むモンスターたちを次々と撃ち抜いていく。

その猛攻にモンスターたちは為す術もない。

だが、その状況に一石を投じるモンスターが出現した。

硬い皮膚と人よりも少し大きな巨体。そんなモンスターがシエナに向かって突撃を繰り出してきのだ。

迎撃しようとシエナが銃の引き金を引くが、その攻撃は硬い皮膚によって阻まれてしまう。

地響きをたてながらシエナに迫るモンスター。

シエナはただ銃を撃つだけだ。一発、二発、三発、四発……すると、八発ほど撃つたところでモンスターに変化があった。

モンスターがいきなり膝をついて倒れたのだ。走っていた勢いが残っていたせいで、モンスターは砂煙を巻き上げながら体を滑らせる。

理由はすぐにわかった。モンスターの右前足に銃傷がある。それが原因でモンスターはバランスを崩したのだ。

シエナはただ闇雲に撃っていた訳ではない。ひたすらモンスターの右前足を狙い、撃ち続けていたのだ。それも僅かな誤差もなく。それがどれほどの難しいことなのかは、銃を扱ったことのない刀弥でもすぐにわかった。

倒れたモンスターは動けないまでもまだ生きていた。何とか起き上がるうと、もがき続けている様子だ。

そんなモンスターにシエナが近づき、その銃口をその頭部に合わ

せる。そして、彼女は躊躇うことなくその引き金を三度引いた。

響く音は一発。けれども、それは余りにも早すぎて一発にしか聴こえなかったせいだ。

なんと、彼女は三発の銃弾を一瞬にして連射したのだ。

至近距離で三発も同じ箇所を撃たれば、さすがに固い皮膚も防ぎきれなかったらしい。弾は皮膚を貫きモンスターに死の宣告を下した。

力を失いゆつくりと頭を下ろすモンスター。それを見て刀弥は思う。

相変わらず、凄い技量だな。

銃という武器だけでは、こうはいかないだろう。そこに彼女の技量に加わって始めてあれだけの戦果を生み出しているのだ。それはこれまでの戦いを見ていれば、嫌でもわかる。

そんなシエナの戦いを刀弥は複雑な表情で見っていた。自分の周囲の警戒を怠るほどに……

「刀弥！！」

誰が叫んだのか、わからない。

だが、そんなことを考えている暇は刀弥にはなかった。今、彼の頭は体中に伝わる激痛を堪えるので精一杯だったからだ。

突然の痛みと共に地面の感触が刀弥の足元から消える。その直後、彼の視界が高速で移り変わっていった。

そうして次に感じたのは体を引きずられる痛み。痛みは背中や太

股など、体の後ろの部分から伝わってきた。

やがて、痛みが収まる。響く痛みを抑えながら刀弥はゆっくりと起き上がった。

どうやら攻撃を受けて吹き飛ばされたらしい。彼は最後に立っていた場所からかなり離れた場所に倒れていた。

立ち上がりながら彼は自分が立っていた場所を見据える。そこには刀弥はここに飛ばした本人が立っていた。

刀弥を飛ばしたのは、トカゲの姿をしたモンスターだった。けれど、その姿は以前火球を放っていた奴とは少し違う。

一番の差異はその尻尾の大きさだ。全長の半分くらいがその大きな尻尾で占められているのだ。大方、あの尻尾に打たれたのだろうと刀弥は予測をつける。

体を一つ一つ確認していく。右腕が大きく痛むが、それ以外は大したことはない。

大丈夫だと結論を下して、刀弥は相手に視線を戻す。

すると相手は尻尾をしなせながら、刀弥に向けて近づいてくるのが見えた。

刀弥は、それを迎え撃つ形で身構える。

そして両者の距離が体二つ分ほどになった時、双方が動いた。

トカゲのモンスターは己の体ごと大きく回し、刀弥に向けて尻尾を叩きつけるように振り回してきた。尻尾が長いこともあって、そのリーチは刀弥よりも長い。

一方の刀弥は『縮地』を使い、一気に己の間合いまで急接近する。

迫りくるモンスターの尻尾。けれど、それが届くよりも刀弥が間合いに入るほうが早かった。

胴を狙った振り下ろし。抵抗する術のない相手はそのまま、胴を断たれる。

切り口から血が漏れ、断たれた体と共に地面へと落ちていく。

そうして新たな敵を探すために、刀弥は辺りを見回す。

けれども、もはやモンスターの姿はどこにもなかった。どうやら、刀弥が倒したのが最後らしい。

「ああー！！ 終わった！！」

アレンの歓喜の声が刀弥の耳に届いた。

それを聞きながら、刀弥は己の刀を鞘へと収めていくのであった。

「刀弥！？ 大丈夫？」

そんな刀弥のもとへ、リアが心配そうな表情で駆けつける。息を切らせているあたり、かなり急いで来たようだ。

「右腕が痛むが、問題ない。大丈夫だ」

左手で右腕を触りながら、刀弥はそう答えた。

実際、彼の衣服に血が浮き出ているところはない。その事実によりアは安堵する。

だが、すぐさまその顔が疑問に変わった。

「でも、どうしたの？ 二回も危ないところがあったし、そもそも今日は動きもあんまり良くなかったよね？」

その途端、刀弥は苦虫を噛み潰したような顔つきになった。

その指摘は刀弥も十分自覚していた。二度にも渡る余所見と考え事による周囲への不注意。それが危険を招いた原因だ。

「私も同じことを思った。なんて言うか、元気がない」

そこにシエナがやってくる。その顔は無表情だが、若干心配の聲が混ざっているように聞こえるのは気のせいではないだろう。

「まあ、そういうときもあるさ。それよりもさつきはすまない。助かった」

何でもないといいながら、話を変えようと先程助けくれたことへの礼を述べる。

最初の窮地のことだ。あとき、シエナが一瞬で複数の銃弾を撃ってサソリのモンスターの尾を切り離したのだ。

「気にしないで。それじゃあ」

シエナはそれだけ言うと、アレンのほうへと歩いていった。

「凄いよね。シエナさん」

離れていく彼女の背中を眺めながら、リアがポツリと漏らす。

「そうだな。三発の弾丸をほぼ同時に撃つたり同じ箇所にはほとんど誤差もなしに狙い撃つなんて、俺の世界じゃ物語上ぐらいでしかあ

りえないな」

それだけ、彼女がやったことは人間離れしているということだ。刀弥としては、まさに夢かと疑いたくなるほどの技量だ。

「私たちも、彼女くらい強くならないとね」

「何だ。リアは人外を目指してるのか？」

意外という顔つきを浮かべて刀弥が冗談を返した。

彼の一言に、リアは顔を膨らませる。

「もう、刀弥の意地悪」

「ははは……悪い」

軽い笑い声を出しながら、刀弥は謝る。

丁度そのとき、アレンたちが二人のところへ近づいてきた。

「それじゃあ、さっさと行こう。いつまでもここでじっとしているわけにもいかないしな」

「……そうだな」

また、モンスターの集団と戦うのは刀弥も御免被る。

そのため、四人は簡単な処置を済ませると急いでその場から離れていくのであった。

「アレン。私、それよりもこっちが食べたい」
「だ・か・ら！！ 駄目だって言ってるだろ！！ これ高いんだぞ
!?!」

その日の夕方。夕食の準備をしている最中、洞窟内にアレンの怒号が反響した。

そんなやり取りを横目に刀弥とリアは自分たちの夕食の準備に取り掛かっている。

アレンの怒号の理由はシェナの我侷だ。どうやらシェナの大好物はかなり高価なものらしい。

おかげで、アレンは中々それを使おうとせず、それがシェナには不満だったようだ。

毎日、懲りもせず彼女は『食べたい』とせがんでいた。

「今日はどうなるかな？」

「一昨日はアレンが根負け。昨日はシェナが諦めた。微妙なところだな」

刀弥が言っているのは、これまでの戦績だ。

アレンたちと出会ってから三日が経過していた。おかげで、彼らが大体どんな人間かわかってきた。

戦いにおいて凄まじい実力を持つシェナ。だが、その実態は戦い以外のことになる。と全く駄目と言っていい程の駄目人間だった。

アレンが皿を並べると言えば、何故か鍋を並べる。彼女曰く、皿も鍋も食べ物を入れるものだと言うことだ。

他にはアレンから聴いた話だが、この歳で一人で着替えることもできないらしい。

しかし、そうになるとアレンが着替えさせることになるわけで……

それを聞いたとき、リアが非難するような視線を向け、慌ててアレンが弁解するという珍しい事態になったのは記憶に新しい。

その点以外にも、基本的に彼女は何でもかんでもアレンに頼る癖があるようだ。それを彼への甘えと見るか、墮落と見るかは人次第だろう。

そんなことをしているうちに、夕食が出来上がった。

アレンたちのほうを見てみると、どうやら今日はアレンの勝利で決着がついたようだ。アレンが調理した夕食を盛っている傍ら、シエナがどこか不満そうにそれを見ている。

そして準備が整うと、四人は夕食を食べ始めた。

刀弥とリアは豆と芋のスープだった。

スプーンですくって、それを口に運ぶ。

スープの甘さが口に広がり、まるでスープの暖かさが体中に伝わってくるようだった。一口で食べられる芋と豆の大きさも丁度良く、食べやすい。

一方、アレンたちの夕食は、小魚の盛り合わせとパンだった。

黙々とそれを食べるアレンと、未だに不満顔のシエナが随分と対照的だ。

「シエナはまだ怒ってるのか？」

「気にするな。いつものことだ」

刀弥の問いにアレンが即答する。もはや、彼女を相手にするつもりもないようだ。

ある意味、それが正しい対処かもしれないと刀弥は思った。

全部の我俣に付き合ってたら、彼も身がもたないだろう。きつと、旅の最中もこんな感じのことを何度も繰り返してきたに違いない。

やがて、食事が終わり刀弥とリアは就寝に入る。今日の見張りはシエナとアレンが前半で刀弥とリアが後半になっている。

明日は予定通りなら、町に辿り着く予定だ。食料の買い足しに散策、やることは一杯ある。ならば、早く休んで明日のための体力を確保するべきだろう。

「じゃあ、見張り頼む」

「ああ」

「おやすみ。刀弥、リア」

アレンとシエナの返事を聞きながら刀弥はまぶた瞼を閉じると、すぐに眠りの中へと落ちていくのであった。

「二章二話」不安と信じる答え「(1) (後書き)

ようやく二章二話の開始です。

主人公の悩みとその答えを上手く表現出来ればなと思っています。

では、また次回で……

08 / 18

文章表現の修正

11 / 12

文章を若干修正

瞬歩を縮地に変更

二章二話「不安と信じる答え」(2)

翌日の朝……

いつものように刀弥は剣術の修行をしていた。

傍には、一緒に見張りの番をしているリアが座り込んで彼の修行風景を見学している。

本日は素振り。風を斬る音が、何度も洞窟内に響き渡る。

反響するその音を耳にしながら、刀弥はただ一心不乱に刀を振り続けていた。まるで己の内にある不安を振り払うかのように……

己の剣術が銃に敵わないのではないか。

そんな不安が刀弥の中で日に日に大きくなっていった。

先日の戦闘で動きが鈍ったり注意が散漫になっていたのもそれが原因だ。

刀弥の世界では銃の誕生と発展と共に剣はその存在意義を失い、徐々にその姿を消していった。

それ故に、彼の中には剣が銃に劣っているのではという考えが密かにあった。

何度も否定しようとしたが、否定しても時間が経てばまた浮かび上がってくる。まるで切ればまた生えてくる植物のように……

そして、シエナたちと出会ったことでその不安が一気に膨れ現在の状態になったのだ。

特に高い技術を持つシエナは刀弥にとっては決して超えられない壁のように見えていた。

そんな精神状態では彼の意識が体を動かすことに集中することなどできるはずもない。当然のように体の動きは悪くなる。それは今の素振りも同様だ。

体が重く感じる、息がすぐに上がる、何より集中を維持できない。いつも通りに振っているだけのはずなの、進歩どころか後退しているように感じてしまう。

その事実に関心焦りどうにかしようと力を入れるが、それがさらに動きを悪くするという悪循環に刀弥は陥ってしまっていた。

「刀弥。大丈夫？」

彼の顔色が悪いことに気が付いたリアが立ち上がり近寄ってくる。その声に刀弥は我に返った。

「あ、ああ……」

そう返事をしながら刀弥は汗を拭う。心なしか、いつもより汗の量が多い。

「……心に不安がある」

そこに突然、刀弥でもリアでもない声が響いた。

声のほうへと振り返ると、そこには寝ているはずのシエナが目を開けて体を起こしているところだった。

「起きていたのか」
「さつき、起きた」

そう告げながら彼女は起き上がる。

「刀弥に不安があるって言っていたけど……」
「不安が彼の心を縛っている。だから、体も心の影響を受けて動きが悪くなっている。私にはそんな風に見えるわ」

その指摘に刀弥は一瞬、シエナに自分の不安を知られてしまっているのではないかと勘ぐってしまった。

実際そんなはずはない。恐らく、彼女の指摘はこれまでの経験や感からくる推測だろう。彼の心の中のことまで彼女が知っているはずがない。

だが、それでも刀弥は何とも言えない冷たい感覚を全身で感じていた。

「……刀弥」

彼女の言葉を聞いて、リアが刀弥のほうへと顔を向ける。その視線に思わず刀弥は目を逸らしてしまった。

「……それじゃあもうすぐ時間だし、アレンさんを起こして朝食の準備をしようか」

彼の態度を見てリアは溜息を一つ吐くと、アレンを起こすために立ち上がるうとした。

「それは私がやる」

しかし、シエナがそう言っていてリアよりも先にアレンを起こしに行ってしまう。

「それじゃあ、シエナさんお願いします」

そんな彼女にリアは苦笑しつつ、アレンを任せる。

そんな様子を刀弥は申し訳なさそうに眺めているだけだった。

アレンを起こし朝食を食べ終わると、四人は先へと進むことにした。

「だけど、何て言うか……こつ洞窟の中ばかりだと外の光景を眺めなくなるな」

歩いている最中、アレンがそんなことを言ってくる。

確かに彼の言う通り、洞窟の壁や天井ばかりを見続けていると、外つまり雪や山々の光景を無性に見たくなってくる。

「次の町までの我慢だ。それも、もう時期だ」

「それは、わかってるんだけどな……」

そう答えながら、アレンは洞窟の先を見据える。

「アレン。町に着いたら……」

「わかった、わかった。何でも好きなもの食べればいい」

町というワードに反応してシエナが何か言おうとする。しかし、内容を察したアレンが先に返事を返してしまった。おかげでシエナは最後まで言えずじまい。

けれども、好きなものを食べていいと許しが出たせいか、彼女の表情はご機嫌だ。

それがおかしくて、刀弥もリアもつい笑ってしまった。

「そういえば二人は同郷とは聞いたけど、具体的にはどんな関係なんだ？」

「え？ ああ、幼馴染だ」

刀弥の問いに、アレンがそう返す。

「ってことは……随分と苦労したんだな……」

その様がありありと目に浮かび、つい刀弥はアレンに同情の目を向けてしまった。

「それを、否定できないのが残念だ」

彼の意見に、アレンはうなだれる。

「よしよし」

そんな彼の頭をシエナが撫でるが、どう考えても逆効果にしかないだろうと刀弥は思った。

「……一緒に旅をしてどれくらい経つんだ？」

「かれこれ、基準時間で二年近くは経つだろうな。二人は？」

「俺は基準時間なら一二日だな」

「私は半年と少しです」

アレンの質問に、刀弥とリアがそれぞれそう返答する。

「そうなんだ。それで？」

「旅をしている間、どんなことがあったのかと思って……」

続いての刀弥の質問に、アレンはしばし考えるそぶりを見せる。

「いろいろあったな……大半は彼女が勝手に首を突っ込んだのが原因で巻き込まれたものばかりだけど……」

目を細めたアレンがシエナのほうを見るが、彼女は視線を合わせようとせず、あさつての方向へ目を向けている。

「まあ、何となくそんな感じの旅になるんじゃないかという予感と一緒にいくと決めたときからあったからいいんだけどな」

「どうやら、とっくの昔にその辺のことは覚悟してあるいは諦めていたらしい。」

「なるほど……やっぱり昔からそんな感じだったのか」

最早、刀弥としては苦笑するしかなかった。

「ああ、何て言うか……鋭いのか鈍いのか、俺でもときどきわから

なくなることもある」

頭を掻きつつ、アレンが吐息を漏らす。

「シエナは、自分のことをどう思ってるんだ？」

試しに刀弥は訊いてみることにした。

刀弥の質問にシエナは、少し考えこむ仕草をする。

「……考えたことない」

しかし、結局返ってきた返事はそれだった。

「お前なあ……一体、さっきの考え込んだ仕草は何だったんだ？
考えてたんじゃないのか？」

その返事に、アレンが呆れ返ってしまふ。

彼の問いに対して、シエナはこう答えた。

「思い出そうとただけ」

「思い出そうとしても無意味だということとは、俺が保証してやる。
もしお前が自己評価をしているなら、こんな状態にはなっていない
はずだからな」

そのアレンの言い分に、思わず刀弥もリアも納得してしまふ。

「……確かに」

「……あはは」

「……アレン。酷い」

シエナはアレンの言い分にいじけてしまつが、さすがにそこは慣れた者。アレンは怯む様子を見せない。

「酷いのはお前だ！　毎回、毎回……お前は勝手に首を突っ込んでトラブルを起こして……お前の尻拭いをいつとも俺がしてるんだぞー！！」

悲痛な叫びが、洞窟内に広がっていく。

その叫びに、シエナも目を丸くして驚いてしまった。

「……ごめん」

さすがに少し反省したのか、彼女は目を伏せて謝ってくる。

それでアレンも少しは溜飲を下げたようだ。

「まあ、それでいいか。それで許してやる。ほら、行くぞ」

大きく息を吐いてシエナを許すアレン。

それを聞いて、それまで目を伏せていたシエナはパツと顔を明るくし、いきなり跳び込むようにアレンに抱きついてきた。

「アレン。大好き！！」

「お、おま！？　な、何を突然、い、言ってるんだ。ほ、他の人がい、いるんだぞ！？　つてか、離れる！！」

突然のシエナの告白にアレンは仰天し、顔を赤くしながらも何とか彼女を振りほどこうともがく。だが、彼女のほうが腕力が強いので

で振りほどくことができるはずもない。

そんな二人を刀弥とリアは、後ろから眺めて互いに笑みを交わし合っていた。

そんなことがあったりしたが彼らは何事もなく歩を進め、町に辿り着いたのは昼を過ぎたあたりだった。

「二章二話」不安と信じる答え「(2) (後書き)

08 / 18

文章表現の修正

11 / 27

文末を少し修正

二章二話「不安と信じる答え」(3)

この町も基本的の他の町と同様だった。洞窟の中に建てられた街並みに、人口の太陽。ただし他の町と違うのはこの町では石炭を利用しているという点だ。

刀弥がそのことに気が付いたのは、トロツコー一杯に積まれたそれを発見したからだった。

「あれは何だ？」

ラーマスで見た鉱石と違う種類の鉱石に刀弥が疑問の声をあげる。

その疑問に他の三人が彼の視線の先を眺めた。

「ああ、石炭のことか」

答えを返したのアレン。彼は驚くでも珍しがるわけでもなく、ただ淡々と疑問の正体を口にした。

「石炭？ こつちにもあるとは聞いてたけど……」

それはシェナに、自分の世界のことを話していたときのことだ。刀弥の世界のエネルギー事情の説明をしていたときに、その話が出てきた。

それによると、石炭や石油を始め刀弥の世界で採れるいくつかの資源は無限世界でも採れるらしい。

事前に聞いていたこととはいえ、実際に自分の知っているものが

目の前にあるというのは何というか感慨深い気分させられる。

辺りを見回してみると、それによって動いているであろう乗り物や機械がいくつか視界に入った。大半は蒸気機関で動いているようだ。

知っている物とはいえ、刀弥の世界では既に過ぎ去った文明というところもあり、やはり興味が出てくる。

再び歩き出した後も、そういう機械や乗り物の傍を通る度に刀弥の目はついついそちらへと目移りしてしまっていた。

そんな風に町を巡る一途。すると突然、シエナがアレンの袖を引っ張ってきた。

「アレン」

「なんだ？」

顔を彼女の方へ向けるアレン。その顔はどこか嫌そうな表情を見せている。

「あれがほしい」

シエナが指差す先、そこには縫いぐるみを取り扱う露店がたっていた。店には可愛らしいデザインの縫いぐるみが綺麗に並び立てられている。シエナの指はそのうちの一つに向けられていた。

「シエナ？ ふ・ぎ・け・る・な！！」

「ふざけてないわ」

笑みのまま、小さな声でアレンが怒鳴るが、シエナはケロリとし

たまま彼に応じる。

「俺たちには、いらぬものだろうが!!」

「私が欲しいからいるものよ」

ああ言えばこう言う。そんな二人のやり取りは次第にヒートアップ
主にアレンだけが熱くなって、シエナは平静だが　　してい
き、その騒ぎを聞きつけ人が集まってきた。

さすがにこれ以上目立つのはまずいだろうと思い、刀弥は二人の
間に割って入ることにする。

「アレン。人が集まってるから、そろそろ落ち着いたほうがいいぞ」

刀弥の一言にアレンは我に返り、慌てて周りを見た。

「いつそのこと、ジャンケンで決めるってのどうだ？」

「……わかった」

「それでいいわ」

これ以上、説得に手間取っても周囲と刀弥たちに迷惑だろう。

そう判断したのか、刀弥の提案にアレンが素直に頷いた。それを
見てシエナも同じく了承する。

そうして始まった縫いぐるみを巡る戦いは、思いもつかぬ展開と
なった。

四十回連続引き分け。その激しい戦いに、周囲の人々さえ固唾を
飲んで見守っていたほどだ。

そして四一回目。遂にその戦いにピリオドが打たれた。その結果、

シエナが縫いぐるみを手にすることになった。

観客たちは　お店の人も含めて　祝福の拍手を送り、負けたアレンはうなだれる。そんな彼の肩に刀弥はそっと手を置くのであった。

縫いぐるみを抱いてご機嫌なシエナが先頭を歩いている。時たま、縫いぐるみを顔の傍まで持ち上げては頬ずりしているのか、ポニーテールの後ろ髪が左右に揺れるのが見えた。どうやら、かなり気に入ったようだ。

一方、アレンは諦めがついたのか、溜息を吐きつつも上機嫌な彼女を喜ばしそうに見つめていた。

「シエナの奴、縫いぐるみが好きなのか？」

「可愛い物に目がないのほう为正しいな。小さいときもそういう生き物を見つけたら捕まえようとよく追いかけてたし……」

刀弥の問いに、アレンは肩をすくめる。

その姿がありありと想像できたので、刀弥は苦笑するしかない。

と、そこへ……

「あ、御免。ちょっと先行って」

今度はリアが近くにあった露店へと駆け出していった。

何だろうと刀弥が追いかけてみると、そこは絵を売っている露店だった。リアの瞳はその中のある絵に向けられている。

それは黄色い花が一杯に咲き乱れている絵だった。空は青々と澄んでおり、雲一つない。遠くの方には灰色の尖った山々がそびえ立っている。

刀弥から見ても、それは見惚れる光景だった。

「これください」

リアは迷わずその絵を購入。受け取ったそれをスペーサーの中に収めていった。

「絵が好きなのか？」

「むしろ風景が好きって言ったほうがいいかな。絵以外にもオーシヤルの中身を写した写真とかでも気に入ったのがあれば買っちゃうし」

アレンたちのところへ戻りつつ、二人はそんな会話をする。

「ってことは、さっきの奴以外にもいろいろ持ってるのか」

視線を彼女のスペーサーが入っているウエストバッグへと向ける。

「うん。機会があったら見る？」

「ああ」

他の世界に、どんな光景があるのかというのは刀弥としても興味

があつた。それが綺麗な風景なら尚更だ。迷わず刀弥は首を縦に振る。

そうして二人が、アレンたちに追いついたときだった。

ふと、刀弥が横のほうへと視線を動かす。すると、そこに小さな店があつた。

身長の倍ほどもある大きな棚。その中には埋め尽くされるまで詰め込まれた本がずらりと並んでいた。棚の傍には、上の本をとるための梯子もある。

「本屋か」

その眩きと共に、刀弥はその店のほうへ歩いていった。

「刀弥？」

「悪い。すぐ戻る」

そう断りを入れて中に入ると、彼は手近な本を手にとる。読んでみると内容は誰かの手記のようだ。基準時間と共に手記の主の体験したことが書かれていた。

それを閉じて本棚に戻すと、今度はその隣の本を取り出して開いてみる。今度のは冒険記だった。両親を亡くし祖父のもとで剣の修業に明け暮れた少年が旅をしているいろいろなトラブルを解決するという内容のものだ。読んでみると戦闘するシーンも多く刀弥好みの内容だ。

それを刀弥は購入することにした。

お金を払い店を出ると、店前で三人が待っていた。

「待たせた」

「うん。そんなに時間経ってないし……」

「俺たちも、いろいろ買ってたしな」

「うん……」

リアは首を横に振り、アレンとシェナは互いに顔を見合わせてそんなことを言ってくる。

「刀弥は本が好きなの？」

「ああ。物語とかは好きだな」

そうやって刀弥は本の表紙を見せびらかすとその後、その本をスパーサーの中にしまい込む。

「それじゃあ、今度こそ宿屋に行こうか。まだ寄る所がある人はいないよね？」

その問い掛けに、誰も頷く者はいない。そうして彼らは、宿家探しを再開するのだった。

「すみません。部屋空いてますか？」

宿屋に入ってすぐにリアが、元気な声でカウンターに向かって訊ねる。

「二人部屋なら、二つ空いてますよ」

「あ、じゃあ、それで」

そうして鍵を受け取ったリアが戻ってくると四人はそのまま、部屋へと向かう。

部屋に辿り着くと刀弥とアレン、リアとシエナに別れて部屋に入っていく　筈だった。

「……アレン」

部屋に入る直前、シエナが相棒の名前を呼んだ。その途端、アレンの体がピクリと大きく震える。

一体どうしたのだろうか。刀弥とリアが二人の様子を見守っている
と……

「私、アレンと一緒に部屋がいい」

唐突にシエナが、そんな衝撃的な発言をしてきた。

その発言に刀弥とリアは目を見開き、アレンのほうへ問いの視線を投げかける。

「え、え〜っと、これはだな……」

アレンはどうかにか刀弥たちに説明しようとして口を開くのだが、上手い言葉が見つからないのか、しどろもどろになっている。

仕方なく、騒動の原因を作った本人に直接理由を訊ねることにした。

「シエナさんは、どうしてアレンさんと一緒の部屋がいいんですか？」

するとシエナはこう答える。

「アレンのほうに安心するから……」

なんてことない。ただ、単純に安心できる人の傍で眠りたかっただけらしい。

しかし、だからといってアレンとシエナを一緒の部屋になるのを刀弥は許す訳にはいかない。それは同時に刀弥とリアが、一緒の部屋に泊まることを意味しているからだ。

「だけどな　!?!」

そうして刀弥が口を開こうとする。しかし、その口をいきなりリアに塞がれてしまった。

突然のことに驚く刀弥。だが、すぐさま彼はリアの意図に気が付いた。彼女はアレンとシエナを同じ部屋にしようと考えているのだ。

何を考えてるんだと思いつつ、急いで刀弥はリアの拘束から逃れようと抵抗する。けれども、リアもまた抑えこむのに力を込めているのか中々逃れられない。

そうこうしているうちにリアはアレン達のほうを見ると、刀弥の予想通りの言葉を彼らに向けて発するのだった。

「そういうことなら、アレンさんとシエナさんと一緒に部屋に止ま

ってください。久々に二人っきりで話したいこともあるでしょうし……」
「え、いや、でも……」

彼女の提案に迷うアレン。だが、その間にも話はどんどん進んでいく。

「リア、ありがとう」
「いえいえ」

アレンを置いて女性二人の間で決められていく新たな部屋割り。こうなると元の部屋割りに戻すのは難しいだろう。

結局、男性二人は共に溜息を吐いて彼女たちの決定を受け入れるしかなかったのであった。

「全くお前は……」

男女一組ずつに別れた後、自分たちの部屋に入ったアレンはぶつぶつと文句を漏らしながらベッドに腰掛けた。

ベッドに横になっているシェナはそれを耳に入れるだけで反応は返さない。どうせじきに収まることはこれまでの付き合いで既にかつていることだからだ。

「あれ、絶対誤解されてるぞ」

その意味についてシエナは少し考える。そうして出てきた結論は別に構わないというものだった。

「別に構わない」

「いや、お前なあ」

呆れるアレン。だが、シエナとしては本当にどうでもよかった。

大事なのは自分とアレンが互いにどう思っているのかのその一点のみ。他の人が自分たちのことどう見ていようと彼女にしてみれば関係ないのだ。

「ああ！！ もういい」

突然、叫んで座り込むアレン。彼は座り込むと同時にスパーサーから以前製作していた魔具を取り出した。

恐らく以前の製作の続きをするつもりなのだろう。

そんな彼の作業をシエナは起き上がって眺めることにした。

「どうなの？」

どうなのとは、もちろんその魔具の製作の進捗状況のことである。

「もう少しで形にはなるな。そこから先はテストと調整の繰り返しだ」

作業を続けながら、アレンがシエナの問いに答えた。

大抵、ほとんどの道具は設計、製作、テストと調整をえて完成する。現在はその製作を終えようとしている段階だということだ。

「明日までは完了させたいところなんだが……徹夜になりそうだな」
そう呟きながら時間を確認するアレン。その表情はどこか楽しそうだ。

「……アレン。頑張ってる」

無茶をしないのではシェナは言わない。彼はシェナのためにできる範囲の限りで精一杯頑張っているのだ。

自分のためにそこまでしてくれる。その事がシェナにとっては嬉しかった。

だから、心配はしない。その代わりに彼が頑張った分だけ自分がそれに報いる。そうシェナは心に決めていた。

「ああ、できたらテストは頼むな。使ってみた感想も」
「わかってる」

彼が作り、自分が使う。自分が彼を守り、彼が自分を支える。それが二人の関係だ。今までも、そしてこれからもずっと変わることのない自分たちの関係。

「……アレン」

唐突にシェナがアレンの名前を呼んだ。それと同時に彼女はベッドから降りて立ち上がる。

「何だ？」

名前を呼ばれ、アレンが首だけシエナのほうへと振り返った。視線が外れているにも関わらず作業の手が止まる様子はない。その辺は既に手馴れているということなのだろう。

「これからもずっと一緒……」

そう言ってシエナは膝を曲げて高さをアレンに合わせてと、そのまま後ろから彼に抱きついた。

一緒にいるのが当たり前の関係。それがシエナが望む彼との関係だった。

愛や好きというものがどういうものなのか、彼女にはよくわからない。

けれども、これだけは、はっきりしてる。アレンとはずっと一緒にいたい。それだけは嘘偽りない彼女の本心だった。

「何を言ってるんだ？ 当たり前だろ」

彼女の行為にアレンは特に驚いた様子もない。ただいつも通りの声色でそう返すと、再び視線を作業している手元へと戻した。

それを聞いてシエナは嬉しそうな顔を浮かべる。

そして彼女はおもむろに体を離すとそのままゆっくりと立ち上がった。

「刀弥たちに、アレンは籠もるって伝えてくる。ついでに夕食何か持ってきてもらえるものがないか見てくる」

「ああ、悪い頼む」

アレンの言葉にシエナは頷きを返す。

そうして彼女は部屋から出ると雑音が中に入ってこないように己が開けたドアをゆっくりと閉めるのだった。

刀弥たちの部屋へと向かうシエナの足音がアレンの耳に届く。

「全くあいつが、そんなことをしようとするなんて……今夜は雪でも降るかな。ってここは常に雪が降ってるんだっただな」

そんなことを呟きながら、アレンは作業を続けていた。

作業に熱中しながらアレンはふと、過去を思い返す。それは二人が旅立つ少し前の話だった。

その頃はまだ自分がいるんな世界を回るなんて夢にも思わず、ただ普通の生活をしていくものとはかり思っていた時だった。

そんなある日、シエナが自分に話があると言ってきたのだ。

常日頃から高い実力を持ってど、何を考えているかわからない幼馴染が話があるという事態にアレンが驚いたのは言うまでもない。

興味本位もあって、アレンは彼女の話聞いてみることにした。まさか、その話が自分の人生に大きな影響を与えるとは思ってもいないで……

そうして彼女が話してきたのは、いろんな世界を巡る旅をしようと思っていること、その旅にアレンも一緒に行かないかという内容だった。

当然、アレンは当惑した。彼女が旅に出ようという話にもビックリしたが、何よりその旅に自分も誘われたということに彼は意表をつかれたのだ。

何故、自分を誘うのかとアレンはシエナに尋ねた。彼女の實力なら、いろんな世界を旅することは不可能ではないだろう。だが、自分がいては足手まといを増やすことになり、リスクだけが增える。彼女だってそれはわかっているはずだ。

その疑問の答えはシンプルだった。アレンがいないと、何もできないからだそうだ。これにはアレンも脱力した。けれども、考えてみれば当たり前だ。

戦闘能力こそ高いが、それ以外下手すれば一般常識すら疎い彼女を散々アレンがフォローしてきた。彼女が一人で行ったところで、その部分で問題が生じる可能性は十分あり得るだろう。

そのことに呆れると共に、彼女が自分を必要してくれるという事実アレンはつい喜びを感じてしまった。

時間を貰い、いろいろ悩んだ末に出した返事はイエス。その返事にシエナは嬉し泣きまでして喜んだのは言うまでもない。

そうして今……

いろいろと大変な事もあったが、アレンとしては楽しい日々を過ごしていた。

シエナの方面では結構苦勞しているが、もはやここまでくると諦めるしかない。

長い付き合いだ。これからも溜息を吐きたくなくなるような事態を自ら巻き起こしていくのだろう。

けれども、そんなシエナとこれからも一緒にいたい。そんな思いをアレンは抱いていた。

ふと、アレンは手を止めて自分が制作している魔具を見下ろす。

シエナに誘われ悩み抜いたあの時、一つだけ己に誓ったことがあった。余りにも恥ずかしくすぎる内容でシエナにも語ったことはない。けれども、アレンがその誓いを忘れたことはこれまで一瞬たりともなかった。

いつか必ずこの誓いを果たす……

その思いを彼はずっと胸に刻んでいた。

そういえば、シエナの銃の定期チェック。もうじきだな……

思いがけず思い出したその事。

シエナの銃は彼女の使い方に対応できるようアレンの手によってチューンナップされ、ているので、そう簡単に壊れることはない。だが、それでも通常の使い方と比べると部品が磨耗する頻度は高く、部品交換の回数も多い。

もし戦闘中に銃が壊れれば、その瞬間シエナは追い詰められてしまっただろう。

そうならないように定期的にチェックしているのだが、その定期日がもう時期だということだ。

最近、かなりの数のモンスターと戦っているので、銃はかなり磨耗しているはずだ。今回はやらないという選択肢はない。

「やることが多いな」

一旦、体を伸ばすアレン。次に体を捻ってみると、関節の鳴る音があちこちから聞こえた。

「さあてと、続きを始めるか」

そうして彼は製作の続きを始める。

それから少しして、シエナが夕食を運んできた。どうやら自分の分も持ってきたようで夕食は久しぶりに二人っきりで食べることになった。

その後、シエナは風呂に入って眠りにつく。だが、アレンは眠ることなく、そのまま作業を続けていた。

明かりはついたままの上、作業の音も抑えているが多少漏れてい

る。だが、シエナが起きる気配はない。

以前からこういうことは度々やっていたので、シエナのほうも慣れてしまっているのだ。おかげでアレンの方も気にせず作業を続けることが出来た。

さすがに刀弥と同じ部屋だった場合、こんなことはできなかっただろう。その点では彼女の我儘に感謝するしかない。

結局、アレンの作業は朝方まで続くのであった。

「二章二話」不安と信じる答え「(3) (後書き)

本来ならもうちょっと短くなるはずが、少し話を加えたらかなりの
ボリュームになりました……

おかげで、シーンを一つずらすことになりました。

08 / 18

文章表現の修正

12 / 06

文末の修正と文章の修正。

特に部屋に入った後のアレンとシェナのシーンを何とかアレン視
点とシェナ視点に分けました。

二章二話「不安と信じる答え」(4)

薄暗い明かりの下、宿屋の周囲を刀弥は走っていた。

今日は『縮地』の修行。ただ今回は以前とは少し違う。縮地の移動距離がかなり短い上にその距離は長かったり短かったりと不規則おまけに縮地終了直後に方向転換やステップなどを挟み再び縮地を行うといった動作を何度も繰り返している。そのため、彼の動きは長さの違うジグザグ軌道を描いていた。

これは銃弾などの遠距離からの攻撃をくぐり抜けるために、刀弥が考えた移動手法だ。

最短距離を縮地で一気に詰めているだけでは、移動先や軌道を読まれ狙われる可能性が高い。

そのため、それを避けるために短距離の縮地を方向転換しながら繰り返すことで相手の狙いをつけづらくして、相手との距離を詰めていこうと考えたのだ。

縮地の移動距離に変化をつけたり、縮地終了直後に時折ステップを混ざるのも同様の理由だ。刀弥にとって相手が狙いづらいほうがいいに決まっているのだから、出来る限りのことは全てしておくべきだろう。

しかし、刀弥の不安は消えない。

相手が狙いづらい状況を作ることではできたが、それも完璧ではないからだ。

相手の実力によってはそれでも狙いをつけて撃ってくることも考えられるし、狙うことを諦めて数任せに攻撃を放ってくる可能性も

十分あり得る。

そうだったときの対策がまだ不十分なのだ。

この間のトカゲの火球のように遅い弾なら反応して避けられるだろうが、シエナの銃のような速い弾の場合、今の刀弥では反応して避けることなど到底できるはずもない。そういう意味では現状、当たる軌道で弾が放たれた時点で刀弥は詰むのだ。

やはり、無理なのか……

そんな思いが口から出そうになる。何とか唇を噛み締めて声が出るのは防いだが、それでその思いが消えるわけではない。

天を仰ぐ刀弥。と、そこで彼は宿屋のある部屋から灯りが漏れていることに気が付いた。

確かあの部屋は……

アレンとシエナが泊まっている部屋だということを記憶から掘り起こす。

それと共に昨日、魔具の製作作業に専念するためにアレンが部屋に籠もるといふ話をシエナがしていたことも彼は思い出した。

夕食もシエナが部屋に持って行って二人で食べてたようだ。運ぶシエナの姿を行きと帰りの両方を見ているので間違いない。そのおかげで、刀弥たちのほうも久々に二人っきりの時間を過ごすことになった。

その部屋の明かりが、今も点いているということは十中八九徹夜をしていたのだろう。どうやら製作にかなり熱中しているようだ。

今日は出発する日だって言っのに……

一晩休んだあとの今日は、食料などの補給を終えればすぐに出発する予定だ。

寝ずに作業していたとなると、かなり疲れも眠気も残っているだろう。

溜息を一つ吐くと、刀弥は修行を終了して宿屋の中へと戻っていくのだった。

「刀弥だ」

ノックと共に、自分の名前を告げる刀弥。やがて、ドアが少し開き、そこからアレンが顔を出した。

「なんだ？」

背後を気にしながら尋ねるアレン。その仕草からシエナはまだ寝ていることがわかった。

「これだ」

刀弥が差し出したのは湯気の出たカップだった。

「コーヒーだ。昨日の夕食のときに知ったんだが、丁度店の人も起きてたから頼んできた。眠気覚ましに丁度いいだろう」

両手に持っていたカップの内、左手に持っていたほうを刀弥はアレンに差し出す。

「入ってくれ」

両手の塞がった刀弥の代わりに、アレンがドアをゆっくりと開け刀弥を招き入れた。

それに促され刀弥は部屋へと入る。

部屋に足を踏み入れて最初に刀弥が目にしたのは、ベッドの上で安らかに眠るシエナの寝顔だった。

頬が緩み、まぶたも綺麗なカーブになっている。どうやらいい夢を見ているらしい。ときたま、寝言でアレンの名前を呼んでいるのは気のせいだということにしておく。

部屋を見渡してみると、部屋の大部分を製作作業用の魔具で埋め尽くしているという状況だった。

「よくこんな状況で、シエナは寝れたな」

感心した顔を浮かべて、刀弥は寝ている彼女を見つめる。

「それは俺も不思議に思うんだが、どうやら気にせず眠れるらしい」

欠伸を一つしながらアレンが答えた。そんな彼に刀弥は左手の力ツプを手渡す。

受け取ったアレンは、早速それに口をつけた。

「……苦い」

「それがコーヒーだしな」

コーヒーを飲みながら、刀弥が苦笑いを浮かべ返事を返す。

「まあ、確かにこの苦さなら目も覚ますだろうな」

そうしてコーヒーを飲み終えた二人はカップを置くと、刀弥が床に転がっている魔具へと視線を向ける。

「で、どうなんだ？」

「とりあえず製作は完了。後はテストと調整を繰り返すだけだ」

体全体を伸ばしながら、アレンは徹夜の成果を語った。その顔には一段落ついたことへの満足感がある。

「ってことは、次の戦闘からはこれを使うのか？」

「まあ、相手によるな。ぎりぎりの戦いでどう転ぶかわからない武器なんて刀弥たちだって御免だろ？」

「確かに……」

素直に同意する刀弥。アレンの言う通り、そんな戦いで未知数の武器を使われるのは刀弥としてもたまったものではない。できれば使わないでくれというのが彼の本音だ。

「だから、楽そうな相手かテストができそうなスペースを見つけない限りは使うつもりはないから、安心してくれ」

「そうか」

とりあえず、そのことに刀弥は安堵する。
そうして二人が話しているうちに窓の外も明るくなっていき、やがてシエナが目を覚ました。

「シエナ。起きたか」

「おはよう。シエナ」

彼女の起床に気が付いたアレンと刀弥がそう挨拶をする。

「おはよう。アレン、刀弥……………刀弥？」

挨拶を返してから数秒後、ようやくシエナは何故、刀弥が部屋の中にいるのかという疑問を得たようだ。虚ろな瞳のまま首を傾ける。

「ああ、悪い。邪魔してる」

彼女の疑問の声に刀弥がそう返事をする。が、シエナは聴いていないのか彼女は左右を見回し、やがてアレンが作業していた魔具へとその視線を止める。

「終わったの？」

「ああ、終わった」

その言葉を聞いて途端にシエナが微笑んだ。そして、フラフラと立ち上がりアレンの傍まで近寄ると彼女はアレンに抱きついて慰労の言葉をかけた。

「お疲れ様。アレン」

「あ、ああ……………」

戸惑ったアレンは、チラリと刀弥のいる場所へと目を動かす。

一部始終を見ていた刀弥は呆然とそれを見ていたが、アレンの視線と合うと、彼はあーと発しながら視線を外す。そして……

「それじゃあ、俺はそろそろ戻る。リアの様子を見に行ったほうがいいだろうしな」

そう言って彼は、アレンとシエナを置いて自分の部屋へと戻っていくのだった。

部屋に戻ってみると、丁度リアが目を覚ましたところだった。

「おはよう。刀弥」

「おはよう。リア」

ベッドから出る途中で刀弥が部屋に戻ってきたことに気が付き、リアが朝の挨拶をしてくる。

「シエナやアレンも起きているから、急いで荷物をまとめないとな」

「ひょっとしてアレンさんたちのほう、見に行ったの？」

既に二人の起床を知っている刀弥にリアが目丸くした。

「外で修行をしていたら、部屋の明かりが点いていたからな」

「え！？ そんな状況で部屋に行ったの！？」

刀弥のその言葉に突然、隣の部屋に聞こえるのではないかというぐらい大きな声で、リアが驚愕した。

「な、なんだ？ 一体どうしたんだ？」

そこまで驚く理由がわからない刀弥は彼女の驚愕に戸惑ってしま
う。

「だ、だって」

「何をそんなに慌てるのかわからないが、俺は徹夜で製作作業を
していたアレンにコーヒーを持っていっただけだ」

慌てて何か言おうとするリアを落ち着ける意味もあって、刀弥は
先に自分の訪れた理由を告げることにした。するとそれを聞いて、
それまで慌てていたリアがピタリと動きを止めた。

「製作作業？ 徹夜？」

「昨日、シエナが言ってただろ？ アレンがこの間、作業していた
あの魔具。あれの続きをするために籠もるって」

刀弥の言ったキーワードに首を捻るリア。

そんな彼女に対して刀弥は補足を入れることで、彼女の忘れてい
る内容を思い出させようとした。

「……あー、そういえば言ってたね。あはは……」

それを聞いてリアは思い出したようだ。苦笑を浮かべて刀弥に返
答を返す。

「全く、一体何と」

勘違いしたんだと言うとした刀弥。だがふと、ある可能性を思いつき固まると、次の瞬間、彼は顔を赤くしてリアのほうを見た。

「……気付いちちゃった？」

彼の反応にリアもつられたようで、彼女もまた若干頬を赤く染めていた。

「……ああ」

リアを直視できず、刀弥は目を伏せてしまう。それはリアも同じだったようで彼女もまた視線を逸らしていた。

気まずい沈黙が、二人を包み込む。

何とかこの状況を脱さなければと刀弥は考えるが、焦っているせいか妙案が思いつかない。

その間に時間が進んでいく……

時間？

何かを忘れていているような気がして、刀弥はそのことに思考を巡らす。

そうして彼はここに来たときにリアに告げた言葉を思い出した。

「……っとそうだ！！ アレンたちはもうとっくに起きてるんだっ
た。早く行かないと」

「そ、そうだった。急がなきゃ」

思い出した刀弥がそのことを口にするとりアもそれに相槌を打ち、二人は大慌てで出発の準備をする。

おかげで先ほどのやり取りについて、二人は綺麗さっぱり忘れることができたのであった。

二人が待ち合わせの場所に行ってみると、そこには刀弥の予想通りアレンとシエナが待っていた。

二人と合流すると、四人は宿屋から出ていく。

朝食は周辺の食堂で済ませると、彼らは食料などの買い出しを始めた。

そうして必要な物を揃えて準備が整うと、四人は町から出ていくのであった。

道中は特にモンスターに襲われることもなく、出会ったものといえは途中で行商人とすれ違ったくらいだ。

昼食後もそれは変わることはなく、時間と距離だけが刻々と進んでいく……

やがて、夕食の時間が近づいてくると、四人は野営の準備を始めた。

本日の刀弥とリアの夕食は、焼き魚と茹でた芋を細く切って特製ソースに漬けたもの。アレンとシエナは、何かよくわからない食材

がまぶされたパスタだった。

「その料理は何て言うんだ？」

「これ？ アジエスのパスタだ？」

「アジエス？」

「ん〜。野に咲く花の実なんだが……とりあえず、味がすっぱいとで有名なんだ」

自分の世界に梅干しのパスタがあったという記憶があるが、味はそれに近いのだろうか。

ともかく、なるほどと刀弥は頷くと、彼らの食べている様子を見ながら自分も食事を続けることにした。

そんな食事を続けているときだった。

「あ、シエナ。拳銃、少し預けてくれないか？」

ふと、アレンがシエナに向かってそんなことを言い出した。

「どうかしたのか？」

「いや、シエナの拳銃の定期点検をしようと思って」

刀弥の疑問に、アレンがその理由を述べる。

それを聞いて刀弥は納得した。と、同時に自分は武器の手入れ等を全く何もしていないことに気が付く。

しかし、手入れをしようにも道具がない以上、どうしようもない。結局、次の町で買い足そうという結論に落ち着くのであった。

「……わかった」

一方のシェナは、アレンの理由を聞いて首を縦に振ると腰から二丁の拳銃を引き抜き、それをアレンに差し出す。

「確かに。じゃあ、見張りついでにやっておくから今日は先に寝ておいてくれ」

「じゃあ、今日は前半を俺とアレンが、後半はリアとシェナに別れるか」

「それがいいかな」

「わかった」

こうして見張りの順番が決まり、夕食が終わったところで四人は就床に入るのだった

「二章二話」不安と信じる答え「(4) (後書き)

思いの長くなり急遽、これで出すことに……

08 / 18

文章表現の修正

11 / 12

瞬歩を縮地に変更

二章二話「不安と信じる答え」(5)

暖の温もりを感じながら、刀弥は町で買った本を読んでいた。アレンは向かい側でシエナの拳銃を分解している最中だ。

分解された拳銃をざっと見た感じ、かなり細かなパーツがいくつも組み合わさってできているようだ。その数は一目見ただけで刀弥が数えるのを諦めたほどだ。

「魔具の銃って結構、細かなパーツで構成されてるんだな」

本からアレンの作業に視線を移した刀弥が、そんな感想を口に出した。

「その辺は魔具によって違うだろうけど、俺たちの世界じゃこれぐらいは普通だな」

「なるほどな……」

一つ一つパーツを摘んで目の前まで持ってきては、目を細めてパーツを様々な角度からチェックするアレン。それが終わると、見ていたパーツを右か左の陣地に分けて置いていく。恐らく、交換する必要があるかどうかで分けているのだろう。

「いつもシエナの拳銃のチェックは、アレンがやってるのか？」

「ああ、あいつはあんなんだしな……」

そう言ってアレンはチラッと一瞬、寝ているシエナを見る。

確かにシエナにこんな細々な作業が、できるとは刀弥も思わない。ただ口にするのは、はばかられたので刀弥は答えの代わりに苦笑

を浮かべるに留めた。

「全く……普段はこんな感じなのに、戦いになると凄いとしか言えないくらい強いんだからな……」

溜息混じりに愚痴を零すアレン。だが、その顔には羨望の感情が見える。

ふと、初めてあったとき、彼の口調に嘆きの色があったときの言葉が刀弥の頭の中に蘇った。

『そういうこと。こう見えても俺より力はあるからな』

もしかしたら……という考えが刀弥の頭をよぎる。それを確かめるために、彼はその疑問を口にすることにした。

それは本来、訊ねるべきではない疑問。けれども、今の刀弥にとってはどうしても聞いておきたい事だった。

「……なあ、アレン……アレンはシェナの実力に嫉妬しているのか？」

その途端、アレンの手が止まった。

周囲が静まり返り、洞窟を通り抜ける風の音が二人の傍を通り抜けていく。

「……ないと言えは嘘になるな」

数十秒の沈黙の後、作業を再開したアレンが閉じていた口を開い

た。

まるで今まで溜め込んでいたものを吐き出すかのように、彼は己の思いを次々と言葉へと変えていく。

「あいつが銃に興味を持ったのは、俺が作った凄い簡単な魔具の銃をプレゼントしたときだった。あいつ、凄く喜んで毎日、練習場で撃ってたのを今でも覚えてる……」

懐かしむような声で、彼は話を続ける。

「ずっと飽きもせず練習を続けて、気が付いたときにはあんなに強くなってた。男としては複雑だったな。もっとも、きっかけが俺のプレゼントだから嫌かと聞かれたら嬉しくはあるんだけど……」

そう言って、彼は乾いた笑いを見せた。

「正確に言えば、嫉妬というよりも羨ましさだな。俺もあんなに強かったらなって思うことはある。そうしたら俺もあいつと肩を並べられるのってな……だけど、まあ最近はそれとは別に、こつも思っているんだ」

そこでアレンは、大きく息を吸い込んで間を作る。

刀弥は、彼が告げるであろう新たな言葉をただじっと待つだけだ。そうして、アレンはその言葉を刀弥に語った。

「今まで俺は、あいつの得意なことに羨ましいって思った。でも、あいつにだってできないことはある。そう考えたら、さっきの悩みなんて馬鹿らしくなってな」

それが彼の出した答えだった。あまりにも当たり前で、だけどだ

からこそ見落としがちな答え。

「確かにあいつの銃は凄い。だけど、代わりにあいつはそれ以外のことが全くと言っていいほど駄目だ。下手したら、それが理由で酷い目にあうかもしれないくらい」

力強く公言するアレン。刀弥はただ黙って聞いているだけだ。

「だから、俺はその部分であいつを助けるさ。生活や魔具の製作や調整。少なくともその部分で、俺はあいつの支えになれるのは確かだからな」

「だが、それは他の誰もができることだ。お前じゃなくても……」

あまり言っていないことではないと思っただが、それでも刀弥はそのことを指摘せずにはいられなかった。

彼が言った部分は別にアレンでなくてもいいはずだ。確かにシエナは戦い以外の部分は駄目だが、そのフォローはアレンだけができることではない。

その指摘は、アレンにとって予想通りの反応だったらしい。彼は怒る様子を見せず、逆に微笑んでいた。

「まあ、確かにな。だけどそれでもいいんじゃないか？ 誰もが皆、特別なわけじゃないんだから。第一、あいつならこう言うんじゃないか？ 『アレンのほうがいい』って……」

シエナを真似たアレンのその言葉に、刀弥は思わず吹き出してしまった。確かに彼女なら、そう言いそうな気がしたからだ。

「それなら、確かにアレンだからこそ、できることになるのかもし

れないな」

他の誰でもできること。だけど、それを受ける人物が受け入れて
いるのはたった一人。ならば、その者しか彼女を支えることはでき
ない。そういうことだ。

「俺は、そこまで特別に拘ろうとは思わないけどな。ただ、あいつ
の力になれば……俺としてはそれで満足だし」

最後のほう、恥ずかしそうにアレンはそう口にする。それがおか
しくてつい刀弥は笑ってしまった。

「笑うな。本当に恥ずかしいのはこれからなんだから……」

「……悪い。それで、本当に恥ずかしいことってのは？」

ようやく笑うのをやめて、刀弥は続きを促す。

「旅にはあいつに誘われて行くことにしたんだが、そのときに密か
に誓ったことがあるんだ」

「誓ったこと？　なんだ？」

「諦めずに魔具の技術を磨いて……いつかあいつにとって最
高の武器を作ってみせるって」

それがあの日、自分を必要としてくれた彼女に対してアレンが誓
ったことだった。

彼女と一緒にいるためには、それくらいの事をしないといけない
ような思いが当時、彼の中にはあったのだ。

いろいろと悟った現在、その誓いに当時ほどの強い思い入れはな
い。けれども、その誓いは己の目標として、今なお彼の心に残り続

けている。

現在、作っている魔具もその一環だ。まだ最高にはほど遠いが、それでも確実に一歩ずつ進歩しているとアレンはそう思っている。

「こんな答えでいいか？」

「むしろ、十分すぎだ。悪いな、変なことを聞いて。おかげで助かった」

いろいろな話が聞けて、刀弥としては十分満足のいく話だった。不躰な質問をしたことを刀弥が謝り、アレンが両手で制する。

そうして二人の話は、終わりを告げたのだった。

翌日の朝、皆と少し離れたところで刀弥は素振りをしていた。

今の時間帯の見張りはリアとシェナ。刀弥はまだ寝ていてもいい時間帯だが、剣術の修行もあるのでいつもこの時間で起きてしまっている。

虚空相手に剣を振りながら刀弥が思案するのは、昨日のアレンとの会話だ。

シェナの実力に羨望を感じながらも、自分のできることを見つけそれをやっていこうとしているアレン。

あいつの力になれば……か……

それこそが彼の原動力なのだろう。それがあからこそ、彼は頑張り続けられる。

なんだかんだと言って、互いが互いを必要としているんだな。

シエナはその辺を自覚しているのだろう。素直な性格なので、それがあの態度になっている訳だ。なんとなく微笑ましく思い、つつい刀弥の顔がほころぶ。

「刀弥？ どうしたの？」

そんな時、意外な人物の声が刀弥の耳に入った。

素振りをやめて、彼は振り返る。

そこには、やはりというかシエナが立っていた。

「いや、なんでもない。そういうシエナこそ、どうしてここに来たんだ？」

自らアレンの傍から離れて自分のところに来てきたという事態に、刀弥は不思議に思い首を傾げる。

「刀弥に訊きたいことがあったから……」

「俺に？ 何だ？」

シエナが質問とは珍しいと思いながら、刀弥はその内容について訊ねてみる事にした。

「刀弥はどうして剣の腕を磨いているの？」

その問い掛けに刀弥は少し考え込む。

「どうして……か」

幼少より剣術を教わっていた刀弥にとって剣術はごく身近なものだった。竹刀を振り足を鍛え、他の人たちと手合わせをする。

そんな日々が彼にとって当たり前であり、同時に飽きることもない楽しい日々でもあった。

「……そうだな。楽しいからだな」

負けないために剣術を磨き、勝っては喜ぶ。リベンジを叫ばれてはそれを受けることで負けたくない思いを強くし、その思いがより一層の努力となる。

そうやって自身の成長を実感すると嬉しくなって、もっと上を目指そうと修行に熱中していく。そんな繰り返しだ。

「楽しい……」

刀弥の返答を聞いて、リアは小さな声でその言葉を反芻する。

この問いがシエナにとってどういう意味があるのか刀弥にはわからない。けれども、彼女にとっては何か意味があるのだろう。

「そう言うシエナこそ、どうして銃を磨こうと思ったんだ？」

この問いの答え自体はアレンとのやり取りで大方、想像がついている。それでも尋ねたのは本人の口から直接確かめたいと思ったからだ。

無論、シエナの返事は彼の予想通りのものだった。

「アレンが、銃をプレゼントしてくれたから。それが嬉しくて、だから上手く使えるようになった……」

「それで、あの成果か」

彼女に聞こえないように刀弥はポツリと漏らす。愛は偉大だという感想が頭に浮かんだ。

「まあ、何にしてもシエナは凄いな。あれだけの動き、広い視野がないととてもできるものじゃない」

「そう言う刀弥だって、かなり速い。私じゃあんな風に動き回ることなんてできない」

シエナから賞賛の言葉に思わず刀弥は失笑してしまう。

「褒めてくれるのは嬉しいけど、銃相手だと勝つことすら難しいのが現実だ」

あまり場が重くならないように軽口で刀弥が返す。けれど、彼の言葉にシエナが首を斜めにした。

「何故、勝てないと思うの？」

「……間合いから仕掛けられたら、反撃できないから防戦一方。近づこうにも、数任せに撃たれたらそれも難しい。そもそもシエナの銃弾並みの速度の場合、当たる軌道で撃たれた時点で反応できないからそれで詰むんだ」

両手を上げて考えられる問題点を次々と挙げていく刀弥。

正直言えばシエナにそういうことを話すのは刀弥にとって口惜しい思いがあった。

何せ当の銃使いに自分の弱点を晒しているのだから当然といえば当然だろう。

しかし、刀弥の挙げた点に対してシエナは答えは簡潔だった。

「それは、それは刀弥の努力が足りないだけ」

その簡潔な返答に刀弥は愕然とする。

「努力が足りないって……ふざけるな!!」

これまでの自分の必死の模索が否定されたみたいに聞こえ、思わず刀弥は激昂してしまった。

「これでも、どうにかできないかといろいろと手段を考えてみた。だが、これ以上どうしようも……」

その勢いのままシエナに掴みかかる刀弥。けれども、シエナが表情を変えることはなかった。彼女はただ淡々と己の意見を刀弥へとぶつけていく。

「本当に全部？ 銃口、相手の視線や能力からの弾の軌道の予測。殺気や気配、動作から発射のタイミングを読むこと。そういうのも？」

「え、いや、それは……」

それはさすがに思いつかなかった。その指摘に逆に刀弥が面食らってしまう。

「反応できないなら、反応できるように鍛えればいい」
「無茶を言うな。銃弾に反応できる奴なんている訳ないだろう」

途方も無い話だとばかりに刀弥は呆れ返ってしまう。けれども、彼女の言葉は続いた。

「それはあなたが、限界をそこに設定しているから。確かに刀弥の世界じゃそうだったかもしれない。だけど、ここはあなたの世界じゃない。私は、そういうことをやってのける人を何度か見てきた。中には斬撃を飛ばす人さえいたわ」
「なんだと？」

その一言に刀弥は絶句せざるをえない。

「どうして？ どうして自分の力を信じられないの？」
「それは……」

その問いに刀弥は言いよどんでしまう。

「自分の力を信じられるのなら、どんなことがあっても諦めることなんてない。ただひたすら磨くだけ。私がそうだった。弾を弾くくらい硬い敵なら、僅かなズレもなく同じ所に狙い続ける術を。接近してくる相手に対抗するために銃を使った格闘術を。そうやって私は今までやってきた」

そうしていくうちに彼女は今の高みに辿り着いたのだろう。

「……………」

刀弥は何も言わない。いや、言えなかった。確かに彼女の言う通り、自分自身が己の剣術を信じきれない部分があったのは事実だからだ。

「刀弥なら自分の力を信じれば、きつともつと上へと昇れる」
「アレンは違うのか？」

今までのやられていたせいか、ついそんな意地悪を返してしまっ
た。

「アレンと刀弥じゃ行く先が違うから。刀弥は私と同じ方向」
「なるほど」

アレンの目指す先は技術分野だ。そちら方面に詳しくないシエナ
ではアレンの可能性はわからないと言いたい訳だ。

「……それじゃあ、そろそろアレンを起こす時間だから」
「ああ、いろいろ意見をくれて助かった」
「それは私も同じ」

そうして彼女はアレンのもとへと戻っていく。そんな彼女の後ろ
姿を刀弥はただ黙って見送るのだった。

「二章二話」不安と信じる答え「(5) (後書き)

08 / 18

文章表現の修正

二章二話「不安と信じる答え」(6)

「……それで、刀弥は最近様子がおかしかったんだ」

その日の練り歩いた後の夜、見張りの時間帯。

刀弥の打ち明けた心情を聞いて、リアがそう答えた。

シエナとアレンは後半の見張りのため既に眠りについている。そのタイミングを見計らって刀弥はリアに打ち明けたのだ。

銃に対して劣っているのではないかという不安、アレンの誓い、シエナの意志。思ったこと聞いたことを全て彼女に話した。

「悪いな。黙ってて」

そうして刀弥は謝る。

今まで彼女に何の相談もしなかったことに申し訳ない思いがあったからだ。

「まあ、他の人に悩みを打ち明けるなんて中々勇気があるもんね」

そんな彼女に対して、リアは下から覗き込むようにして顔を近づけてくる。

「でも、話してくれてありがとう」

そして嬉しそうな顔を刀弥に見せた。距離が近かったこともあって、その顔は刀弥の視界いっぱい広がっている。

顔が赤くなるのを自覚しながら、刀弥は気付かれない程度にリア

から少し離れた。

「で、刀弥の悩みだけど、私はもっと自信を持ってもいいと思うよ。確かに今の刀弥は銃とかに対応できてないのかもしれないけど、それを言ったら私だって旅の最初のほうは似たようなものだったし…

…」

「そうなのか？」

意外という顔を刀弥が浮かべる。刀弥の予想ではその辺りの弱点とかはリアが学院に通っている間に改善していると思っていたからだ。

「そりゃそうだよ。最初から完璧な人なんていないよ。自分で気付いたり戦いの途中で気が付いたり…もちろん、運が悪ければそれが理由で死んじゃうことだってあるよ。そういう意味じゃ、私は運が良かったのかもしれないけど」

そのときのことを思い出しているのか、一瞬目を瞑るリア。

「確かにそういう部分は早く修正しないといけないと思う。でも、すぐに結果が出るものじゃないし、焦らなくてもいいと思うよ」

そうして彼女は刀弥に諭すような口調で語りかけた。

彼女の言葉の意味は刀弥にもわかっている。しかし、悠長に待たてられない理由が刀弥にはあった。

これが自分一人の問題であれば、刀弥ももう少し楽観的に考えられただろう。だが、今刀弥は一人ではない。リアという共に旅をするパートナーがいるのだ。

もしそんな事態に陥れば、被害を受けるのは自分ではなく彼女かもしれない。彼はそのことを恐れているのだ。

そのため、意を決した刀弥はそのことを彼女に告げようとする。

「だが」

「第一、そういった欠点をフォローしあうのが仲間でしょ？」

だがしかし、リアの放ったその言葉に、刀弥は開いた口を閉じざるを得なかった。

「改善に時間が掛かるならその間、その部分を私が埋めてあげる。私は魔術師、刀弥は剣士。私たち相性いいんだよ？」

そんなことを言いながら、リアはウインクしてくる。

「私たちは二人なんだから、一人だけで頑張る必要なんてないんだよ。必要なら頼ってもいいんだから……」

「……そうだな」

僅かな沈黙の後、呟くような小さな声で刀弥はそう漏らした。

彼女の言う通りだ。自分はなんて愚かなんだろう。

彼女が言おうとしていること。それは刀弥が言おうとしていたこととは逆の意味を持つものだった。

刀弥は仲間故に迷惑を掛けないようにと考えていた。だけど本当の仲間なら互いに頼り、信頼しあってもいいはずだとリアは言っているのだ。

「悪い。リアの言うとおりだな。何かリアに迷惑を掛けてしまっじやないかと思っっている焦ってた」

「そうそう、遠慮しなくていいんだから」

表情を緩める刀弥にリアは満足気に頷く。

「まあ、今はシエナさんやアレンさんもいるし、思い切ってシエナの力を借りるのもいいんじゃないかな？」

そのアイデアに刀弥は少し考え込む様子を見せた。

「……駄目もとで頼んでみるか」

「うん、そうそう。その調子」

そうして彼女は刀弥を励ますのだった。

「シエナ、頼みがある」

見張りの交代の時間になりアレンとシエナを起こしたところで、刀弥がシエナに頭を下げてそう話を切り出した。

アレンは突然のことにびっくりし、シエナはただ無表情にそれを眺めている。

「……何？」

「遠距離に対抗するための修行に、手を貸してくれないか？ シエ

ナの見地からの意見が欲しいんだ」

頭を上げた刀弥は頼みごとの内容を説明する。その表情は真剣そのものだ。

確かに遠距離攻撃の専門家とも言える銃使いから意見を聞くことができれば、遠距離戦に対抗するための術が見つけやすくなるかもしれない。そうでなくても戦い方や思考パターンを知ることができれば、その経験は別の形で役に立つこともあるだろう。

「……いいわ」

「本当か!？」

彼女の返事に刀弥は喜びと驚きの混じった声をあげる。

「ええ」

「やったね。刀弥」

上手くシエナの協力を得ることができたことを、リアは自分のことのように喜んでくれた。

これで大丈夫とは言えないが、それでも多少は前進したと言ってもいいだろう。

「まあ、とりあえず良かったな。刀弥。それはともかく見張り交代の時間だ。その修行のためにも、今はしっかり休んだほうがいいんじゃないか？」

「そうだな。それじゃあ、アレン、シエナ。おやすみ」

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

「二人共おやすみ」

就寝の挨拶を述べた刀弥とリアは横になる。
そうしてから瞳を閉じると、うつらうつらと眠りの底へと落ちていくのだった。

「発射のタイミングを掴むのが遅い。もっと相手の全体をよく観察して」

耳に届いたシエナの警告。直後、透明の弾丸が刀弥の頭部にヒットした。

その攻撃を受け刀弥はバランスを崩し仰向けに倒れてしまう。

「っ!?!」

頭部の痛み思わず刀弥は声を出しそうになったが、どうにか堪える。

「……もう一度だ」

やがて、痛みが引くと彼はそれだけを告げて立ち上がった。

既にシエナはいつでも始められる状態だ。
そうして二人は再び相対を始めるのだった。

時間は朝、刀弥とシエナは昨晚の話の通り、遠距離に対抗するた

めの修行をやっていた。

基本的にシエナは止まったまま銃を撃ち、刀弥がそれを避けながらシエナに近づこうとする構図だ。

そんな二人の様子をリアとアレンはその傍で見学していた。

「アレンさんはどう思います？」

「そもそも、あれだけ動き回れる刀弥が俺には凄いな……」

彼の視線の先、刀弥は前へと進みながら左へと走っている。アレンの目から見たら、その速度は十分速いと言えるだろう。

しかも、彼はただ出鱈目に走っているのではない。彼の青い瞳は真っ直ぐシエナの動きを捉えていた。

彼女の両手の拳銃。それが刀弥を追うべく左へと動いている。刀弥はその銃口の射線上にのらないように動いているのだ。

射線に重なることがなければ絶対に当たることはない。単純な理屈だ。

射線にのらない以上、撃ったところで当たらないのはシエナも承知の上だ。けれども、その上で彼女は引き金を引き続ける。

理由はこの狭い洞窟だ。例えば射線から逃げ続けたとしても、いずれは壁に追い込まれてしまう。つまり、相手を追い詰めることが出来るのだ。

また、当たるタイミングでしか撃たないのと違って、攻撃が近づいてくるのを相手は視認できるので精神的に追い詰める効果も期待ができる。

そうしてシエナの目論見通り、刀弥が壁際に追い詰められた。銃

弾の線は徐々に彼に迫っていく。

では、刀弥がこの状況から脱するにはどうすればいいのか？
答えは決まっている。相手の連射の間を通り抜けるしかない。
しかし、弾と弾との間隔が狭い上に、弾の速度が速いため飛び込めば当たってしまう。と、なると弾をどうにかして対処する必要がでてくる。

そこで刀弥は刀で弾く術を選んだ。
けれども、今の刀弥では弾が撃たれてから反応するのは不可能。
そうなる弾が撃たれるタイミングを予測して事前に体を動かすしかない。

刀弥の両目は、シエナの引き金に集中していた。引き金を引くりズムから刀を振るタイミングを測っているのだ。

そうして刀弥は動き出す、と同時に彼は刀を振り始めた。

だが、刀弥が読んだタイミングよりも早いタイミングで引き金が引かれ、銃弾が放たれる。

銃弾は刀弥の刀が触れるよりも先に刀弥の右肩に着弾。刀弥の身が後ろへと吹き飛ばされた。

「相手の攻撃のリズムに頼りすぎると、今みたいにずらされる可能性もあるわ。気を付けて」

「ぐっ……」

シエナの指摘に対して刀弥は言葉を返す余裕もない。ただ黙って立ち上がるだけだ。

「やっぱり痛そうですね」

「まあ、非殺傷用の性質へ弾を変えたとはいえ、ダメージは確実にあるからな」

そう、シエナの銃弾が刀弥の身を貫かないのはアレンがシエナの拳銃にそういう設定をしたためだ。

どうやら昨日の見張りの時間の内に設定を変更したらしい。アレン曰く、術式回路を交換するだけだから分解する必要はないとのことだ。

とはいえ、あれだけの速度で飛んでくる銃弾をその身に受ければ、かなりの痛みとダメージを食らうことになるはずだ。

刀弥が弾を受けたのはこれで三三回目。修行を開始してから、かなりの時間が経過している。おかげで彼の体のあちこちに、擦り傷や怪我ができている。

「そろそろ時間だし、さすがに止めたほうがいいな」
「そうですね」

アレンの意見にリアは頷くと、彼女は立ち上がり本日の修行を終了を伝えにいく。

シエナは素直に、刀弥は不承不承に修行の終了を了承すると、刀弥はリアに言われるまま腰を降ろして一休みに入り、他の三人は朝食の準備を始めるのだった。

「はい。刀弥。あ〜ん」

刀弥の分の朝食をスプーンですくい、リアが刀弥の前に差し出す。

「いや、リア。別にそこまでしてくれなくても……」

嘆息混じりの声で刀弥はそれを遠慮しようとした。

体を動かそうとすれば、痛みは走る。けれど、動けないというほどではない。そのため、リアがこんなことをする必要は全くと言っていいほどないのだ。

だが、リアはやめる気はないようだ。先ほどの刀弥の声など聞こえていなかったかのように、スプーンを差し出したまま笑みを向けてくる。

仕方なしに刀弥は口を開いてそれを受け入れた。

今日の朝食は、豆と何かの卵を焼いて切り刻んだものを混ぜたご飯のようなものだった。豆の苦味と卵の甘みが口の中に広がってくる。

飲み込んだのを見計らって、リアが新たな分を差し出してくる。それも刀弥は食べる。

二人の様子をアレンは笑みを浮かべて、シェナはどこか羨ましそうに見つめていた。

彼らは何も言っていない。そのことが尚更、刀弥には気恥ずかし

かった。

「何も言わないんだな」

「何だ？ 何か言って欲しかったのか？」

ポツリと漏らした刀弥の言葉をアレンが拾う。

「い、いや、そういう訳じゃないが……」

慌てた様子で刀弥はアレンから視線を逸らした。

ちなみに、この間もリアの手による食事は続いている。刀弥は会話の隙間にそれを口にしていくのだ。

「まあ、俺も記憶にあるから……同情のほうが強いな……」

溜息をするアレン。それを聴いて、刀弥の視線は自然とシェナのほうへと向かった。

「……何？」

刀弥の視線に気が付いたシェナが、首を傾けてくる。

「いや、気にするな。それにしても今日は全然駄目だったな」

早朝の修行の内容を思い返しながら、刀弥は気落ちする。

結論から言えば、一度足りとも己の間合いまでシェナに近づくとはいけなかった。銃弾の雨をくぐり抜けることができず、銃弾を受けて倒れるというパターンを繰り返していたのだ。

「まあ、最初だから仕方ないんじゃないか？」
「そうだね」

すかさずアレンとリアがフォローした。

「少なくとも、銃口からの弾の軌道の予測は完璧だった」

シエナの口からは、そんな評価が語れる。

「だけど、相手の攻撃の軌道が真っ直ぐとは限らない」

けれども次の瞬間、シエナがそんな警告をしてきた。

シエナの忠告に刀弥も頷く。

攻撃の軌道は魔具、魔術によつては直進軌道とは限らない。その場合、銃口や攻撃の向きから軌道を読むことはできなくなる。

そうなる後は、相手の視線などから相手の狙いを推測する必要がでてくる訳だが……

「だけど、その辺りはもはや経験の領域じゃないか？」

「そうかもしれない」

アレンの意見にシエナは同意を示した。

確かに彼の言う通り、その辺の判断をしようとしたらそれを識別するための情報が必要になってくる。単純な知識だけでは見抜くのが難しい以上、残るのは経験だ。

「結局、最後にものを言うのは積み重ねることだね」
「だね」

「そうね」

「全くだな」

刀弥のその一言に一同は迷いなく賛同した。

「なら、毎日しっかり頑張らないとね」

「そうだな」

リアの激励に刀弥はそんな応答を返す。

やがて、朝食が終わり後片付けとなった。

さすがにこの段階まで来ると、刀弥も十分動けるぐらいまで回復しており後片付けを手伝う。

そうして出発の準備が整うと、四人は次の目的地へ早く辿り着くべく、急ぎ出立するのであった。

「二章二話」不安と信じる答え」(6) (後書き)

ようやく二章二話が終了しました。

書きたかった内容は上手く表現できたか不安ではありますが、それでも出せる力は出したと思っています。

次の三話の簡潔なプロットをさっさと書いて三話の物語をできるだけ早く書き始めたいと思っています。

ただ、いくつか文章が気になっていたりするのでその前に二章系は文章の見直しや修正も少し検討します。

どうかご了承ください。

08/18

文章表現の修正

「二章三話」襲撃「(1)」

「あゝ。ようやく昼ご飯か」

そう言つてテーブルに上半身を倒した刀弥が情けない声をあげた。彼の隣にはリア、向かいの席にはシエナとアレンが座っている。

四人がいるのは町の食堂だ。

昼の少し前に四人は町に到着した。その足で宿屋の部屋をとり、それから適当な食堂に入つて今に至る。

彼らの他にもたくさんの人々が食堂を利用していた。よく見ると、その多くは同じような服装をしている。

白い布地の生地を羽織るように着て腰から下、左右の布を重ねることで足元を隠している。その腰には細長い布地が巻かれており、布地が左右に開くことを防いでいた。

刀弥から見れば温泉とかにある浴衣のような格好だ。その格好は食堂の中だけでなく外でも見ることができた。

四人がいる町『セオン』は近くの山が火山ということもあって温泉が沸くらしい。そのため、町は温泉街となっていた。

結果、この町はこれまでの町と違い観光客がかなり多い。この町に来た時、四人はあまりの人の多さについて口を空けて呆然としてしまったほどだ。

恐らくラーマスからの客もかなりいるのだろう。

「今日の修行もご苦労様」

倒れる刀弥にリアが劣いの言葉をかけてくる。

「全く、シエナとの修行は疲れるな」

身を起こしながら刀弥はそんな感想を漏らした。

「でも、俺が見た限り、この短期間でかなり進歩している気がするけど……」

そのアレンの台詞に同調するように、シエナが首を縦に振る。

「今日はほとんど、刀の間合いまで入られた。弾道の読みも確実に良くなってる」

「だけど、そこから先は駄目だっただろ？」

刀弥は記憶を巡らす。

確かに二人の言う通り、刀の間合いまで近づくことはできた。

しかし、そこから先、接近戦ですらシエナに刃を届かすことができなかつたのだ。

こちらの攻撃は避けられたり拳銃で受け止められ、逆に相手の反撃に対処できずに倒されてしまう。そういう感じだ。

「なら、次はそこを頑張ればいいんじゃない」

「次って言うっても、後一日ぐらいだぞ」

励ますリアに刀弥はそう返す。その一言でリアはよつやくその「」とに気がついた。

対遠距離用の修行を開始してから、三日が過ぎていた。

その間に町を一つ通り過ぎ、ここが最後の町。ここで一晩休み翌日、出発すれば昼過ぎにはラーマスに到着する予定だ。

そうなれば、目的地が違うシエナやアレンとは別れることになる。

「そっか……そういえばもうすぐなんだよね」

寂しそうな顔を浮かべるリア。

「お別れ、残念」

「何て言うか。寂しくなるな」

それを聞いて、アレンもシエナも同じような顔を浮かべた。

「そうだな。だからこそ、シエナ。明日は悔いのないように全力でやらせてもらうぞ」

「けれども、刀弥だけはそんな宣告をシエナに突き付けて口の端を弛める。」

そんな彼の態度を見て、アレンが押し殺した笑い声を漏らしてしまった。

「だとさ、シエナ」

「それは私も一緒」

強気な声色でそう言い返すアレンのパートナー。こちらもやる気は十分のようだ。

「どうやら最後の修行はかなり楽しいものになりそうだ、と刀弥は明日のことなのに今から待ち遠しくなってきた。」

それはともかくとして最初の話題に刀弥は話を戻す。

「まあ、お互い動き回っている身だ、何かの拍子に会って可能性もあるだろう」

「それは言えてるな」

刀弥の意見にアレンが同意した。

丁度その時だ。四人のもとに注文した料理が届いた。

刀弥にはご飯と味噌汁に似たものに加えて焼き魚が、リアにはステーキとスープ、シエナとアレンにはスパゲッティのようなものが目の前に置かれていく。

そうして運んできた人が去ったのに合わせて、四人は昼食を食べ始めた。

「そういえば、刀弥が言っていたことだけど……実は案外よくある話なんだよな」

「そうなの？」

それを聞いたのはシエナ。途端、アレンの表情が険しくなった。

「何でお前が聞くんだ？」

「それは私が知らないから。当たり前じゃない」

何を馬鹿なことを聞いているのかという眼つきでシエナが答える。

「何で一緒にいるお前が知らないんだよー!!」

「知らないからに決まってるわ」

これ以上続けると、間違いなくヒートアップする。
そう判断した刀弥は事態を収集させるため、すぐさま二人の会話に割り込むことにした。

「まあ、二人とも落ち着け。さすがに騒がしいと言ってもこれ以上は目立つぞ」

「……そうだな」

刀弥の静止に我に返ったアレンは周囲の喧騒を聞きながら席に座り直す。

「それで、アレンは何が言いたかったんだ？」

「え？ ああ」

刀弥に促されアレンは先程、自分が自分が何を言おうとしていたのかを思い出そうと一瞬、視線を上に向ける。

そうして彼は内容を思い出すと、その話の続きを始めるため、えっと……と言って話を切り出したのだった。

「刀弥が『何かの拍子に会う』って言うってたけど、確かに俺たちも経験があるなって、それも結構な頻度で」

「そうなんですか？」

これにはリアが驚いて反応を返した。

「ああ、大体十度ぐらい記憶にあるな」

そう答えて、アレンはスパゲッティを口に運ぶ。

「思考が似てるのか、はたまた偶然なのか。旅先でばったりって感じだな」

「なるほど〜」

食事を続けながら、刀弥とリアはアレンの話に真剣に耳を傾けていた。

一方シエナはというと、食事を終えスパーサーから取り出した縫いぐるみを相手に遊んでいた。アレンの話聞く気はないようだ。

「そうになると、互いにそれまで何をしているのかとか、どこにいったのか、後は……」

そこまで言いかけてアレンが口を閉じてしまう。

刀弥とリアがどうしたのだろうと首を傾げて見つめていると、みるみるうちにアレンの顔が赤くなっていった。

「ま、まあそういう話をして同じ方向ならまた一緒に行ったり、違うならそこで別れたりって感じだな」

慌ててアレンが何かを誤魔化すかのように少し早口で説明している。

「どうやら何かの話を思い出して赤面してしまったらしい。」

「一体どういう内容だったのか気になるが、本人のために訊かないのがここでは正解だろう。」

「それで、これからどうするの?」

そうして話が終わると、それを見計らってシエナが今後の予定を

問い掛けてきた。

「折角だからいろいろ回ってみよ？」

「そうね。さつきも美味しそうなお店も見つけたし」

「シエナ。まだ食う気なのか……」

呆れてアレンが突っ込んでくるが、シエナは無視。

ともかく、昼食が終わった四人は町を回ることにしたのだった。

町は人々で賑わっていた。

町のおちこちで湯気が立ち上り、天井の岩が白で霞んでしまっている。
動き回っていると、ところどころに川のようなものがあった。そこから湯気がでてい

ることから温泉なのだろう。

温泉の川とは面白いと思いつつながら刀弥は小さな橋を渡っていた。

橋の向こうでは人々が靴を脱ぎ、川辺から温泉の川に足を浸けているのが見える。

「あ、私もやってみよ」

「じゃあ、私も」

女性陣二人が、その光景を見て橋の向こうへと走りだす。

一方の刀弥とアレンはというと女性陣二人を視界に収めつつも、

ゆっくりとした足取りで彼女たちの後を追いかけることにした。

川辺にやってきたリアとシェナはすぐさま靴と靴下を脱ぐと川辺に座り、その足を湯気が揺らめく川へと沈めていく。

「はあ、暖かい」

「ポカポカ」

それぞれが述べる感想を聞いて刀弥が苦笑したのは、丁度、二人の後ろまで追いついた時だった。

「うっかり、川に落ちるなよ」

「そんな間抜けなことしないよ」

刀弥の忠告にリアが振り返って答える。

「刀弥も浸かってみたら？ 気持ちいいよ」

「じゃあ、そうするか」

実際、刀弥も興味はあった。

リアの隣に座り彼女たちと同じように靴と靴下を脱ぐと、己の素足を川の中へと浸けていく。

「あ、これは確かに気持ちいいな」

「でしょ？」

湯の温度は熱すぎず丁度いい。自然と力が抜けて、足がダラリと下がってしまう。

リアの向こう側を見ると、アレンも同じようにシェナの横で

足を浸けているところだった。

「ねえ、刀弥。温泉に浸かると疲れがとれるなんて話を聞くけど、どう?」

「足を浸けただけじゃ、わからないだろ」

彼女の問いに刀弥は苦笑顔で応える。

「それじゃあ、今晚が温泉に浸かった後、感想を聞かせてよ」

「そういえば、俺たちが泊まる宿屋にもあるんだっけ?」

宿屋の看板に書いてあった内容を思い出す刀弥。

少し夜が楽しみになり、思わず笑みをこぼしてしまう。

「……うわぁ。刀弥、目が嬉しそう。そんなに温泉が楽しみなの?」

けれども、彼の顔を見てリアが非難するような視線を向けてきた。

「リア、何で怒ってるんだ? 温泉に入るだけだろ?」

訳がわからず、とりあえず刀弥はその理由を聞いてみることにした。

「え? ……もしかして刀弥、看板ちゃんと見てないの?」

そんな彼の問い掛けにリアが目を丸くする。

どういつことだと、その疑問を口にしようとした時

「刀弥、リア。そろそろ行くこうか」

アレンの声が聴こえてきた。
そちらを見てみると、アレンもシェナも既に上がって靴を履き終えた状態だった。

「「わかった」」

声を揃えて応えると、二人は川から足を抜いて靴下、靴と履いていく。

そして二人がそれらを終わると、シェナの先導のもと四人は歩き始めた。

次に足を止めたのはある屋台の前だった。

木と思わしき素材でできた屋台の向こう、店の人が丸の穴の空いた鉄板の上で何かを焼いている。

一瞬、たこ焼きを連想した刀弥だが、看板にはこう書かれていた。

『肉焼き』と……

「何の肉だ？」

看板を見て最初に浮かんだ刀弥の感想はそれだった。

「あそこにいる牛です」

彼の疑問に店の人がある方向を指差す。

店の人が指さす向こう、確かに牛の姿があった。こちらの視線に気がついたのか、牛は顔を上げて刀弥を見返してくる。

「あれが中身なのか」

そう呟きながら刀弥は今も焼かれている球体の食べ物へと視線を戻した。

「いかがいたしますか？」

営業スマイルで訊ねてくる店員。

折角なので刀弥は食べてみることにした。

「じゃあ、六つで」

「私も同じ」

刀弥とシエナがそれぞれ注文する。

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

そうして少し待った後、肉焼きはできた。

見た目はたこ焼きのような球体で、その上にソースとゴマのようなもののトッピングが施されている。

それらが六つ入ったパックのようなものを受け取り、四人は再び歩き始めた。

「ほら」

「ありがとう」

六つのうちの一つをリアに差し出すと、リアは礼を言ってそれを受け取った。

そうして二人は肉焼きを口の中に入れる。

辛めのソースとトッピングが口の中を刺激し、噛み砕いた肉から漏れる油がそれらと混ざる。その味は甘辛いと表現すべきだろう。

「ん〜」

隣ではリアが目を瞑ってそんなリアクションを見せていた。かなり美味しかったようだ。

「もう一個」

食べ終えた瞬間、そんなことを言って刀弥が持っているパックから、さらに一個摘んで口へと運ぶ。

元々、三個、三個で分けるつもりだったので刀弥は何も言わない。

「一個上げたからもう駄目」

「別にいいだろ。もう一個ぐらい」

前のほうでは、シエナとアレンが肉焼きを巡って言い争っていた。買ったのがシエナである以上、彼女がルールだ。で、ある以上刀弥は干渉する気はないのでほうっておく。

次に彼らが目をつけたのは、ある遊具施設だった。

施設はスライド式のドアのようで、それが全開で開け放たれている。そのため、多少離れていても施設の中の様子を伺うことができた。

中には九つのテーブルがあった。縦に三つ横に三つと並べられたテーブルの両端にはそれぞれ人が立っている。

彼らの左右それぞれの手には扇のようなラケットが握られており、彼らの間を卓球ボールくらいの大きさのボールが三つ両者の間を行き交っていた。

気のせいかわボールが左右からテーブルの外に出ようとすると、まるで壁にでもぶつかつたように跳ね返りテーブル内に戻っている。両者はそのボールを左右のラケットを使って打ち返していた。

「おもしろそう……」

「私たちもやってみようか」

白熱するそれらを眺めて、シエナとリアは興味を持ったようだ。彼女たちにせがまれて四人は中に入ると、丁度空いたところを使うことにしたのだった。

ルールは三つのボールのうち、一つでも相手の後ろにある線を通り過ぎれば一点。テーブルの左右には壁が設定されており、ぶつかればボールは跳ね返る。ボールは左右に持っているラケットで打ち返すというシンプルなルールだった。

テーブルは中央に白い線が引かれているだけの簡単なもの。全体の色はグリーンだ。

最初に始めたのは、やる気満々のリアとシエナ。ただ展開はシエナの一方的なものだった。

基本的に三つのボールをそれぞれ別の軌道で放つことで、結果、リアが全てに対応しきれず一つを返し漏らすというくり返し。結局、リアは一点も取れずに敗北した。

次にやったのは刀弥とアレン。これは純粹に身体能力差が出て刀弥の圧勝。

そして、その勢いそのまま刀弥とシエナの勝者同士の対決が行われた。

この対戦、序盤は刀弥が完全に押していた。二つのボールでシエナを誘導して三つ目のボールを届かないところに放つ、そういう戦い方だ。

この戦術にシエナは苦戦。中盤で何とか対応策と共に刀弥の戦術を取得し追い上げようとするが、それを見越していた刀弥の攻撃封じと心理戦によって、結局十対六で刀弥の勝利で終わったのだった。

「刀弥。対応が早すぎ」

ゲームが終わった後、どこか恨めしそうにシエナがそんな言葉を刀弥にぶつけてくる。

「なんていうか、一人だけゲームのコツをわかってた感じだったね」「確かに」

それに同意するかのようにリアが言葉を紡ぎ、それにアレンが相槌を打った。

「まあ、リアとシエナの対戦を見てたから、それで大体の勝手はわかったからな」

基本的に二つのボールで相手を崩し、三つ目のボールで決める。それがこのゲームの基本的な戦い方だ。

「でも、コツを掴むのが早すぎだったと思うよ。さっきの対戦、シエナさんが完全に置いてけぼりを食らってた感じだったし」

「刀弥のプレーを見て、どうにか対応できるようになった途端、別の戦い方をされた。ちょっと悔しかった」

リアの言葉に頷くように、シエナが先程の対戦の感想をこぼす。少し頬を膨らませているところを見ると本当に悔しかったらしい。

「まあ、そこは戦略だからな」

「つまり、予定通りだった……」

ジト目でシエナが睨みつけてくる。

どうやら刀弥の言葉を聞いて、余計に腹がたったようだ。

「そう言われてもな。それが戦いだしな」

目を逸らしながら頬をかく刀弥。

「……刀弥、明日の修行楽しみにしておいて」

「シエナ、修行に私怨を混ぜるな」

恨みがましく告げるシエナに、すかさずアレンが後ろからはたい
た。

途端に小気味いい音が施設内に響く。

「アレン、痛い」

「そんなこと言ってないで、ほらいくぞ」

頭を押さえるシエナ。その腕をアレンがとると、そのまま引っ張
るように施設の外へとつれ出していった。

刀弥とリアは笑みを交わしながら、その後を追う。

そうして四人は施設を後にしたのだった。

「二章三話」襲撃「(1) (後書き)

お待たせしました。

ようやく二章三話を投稿することができました。

一応、見直しはやってるのですが、見落としている可能性も否定しきれません。誤字脱字など気づいたことがあればお教えください。

二章三話「襲撃」(2)

四人が施設の外に出た直後だった。

突然、激しい轟音が町中に響き渡った。

耳を壊すような凄まじい音に窓やドアが揺れる。

音源を確かめるために周囲を見渡してみると、町を覆う壁の一角が砂煙を上げて崩れているのが見えた。

「一体、何？」

「どうなってるんだ？」

リアやアレンも含め、町に人たちが呆然とその光景を眺めている。

壁の崩落は大なり小なりの岩々を生み、それがさらに周囲の壁も巻き込んでいく。

崩落の連鎖だ。地面に落ちた岩は大きな音をたてて次々と砕け、割れていった。

その凄まじい音に思わず現場付近にいた者たちは耳を塞いでしまった。

やがて、音は小さくなっていき最終的には崩落も収まっていった。

耳を塞いでいた者たちは恐る恐るといった感じで耳から手を離すと、未だ砂煙渦巻く崩落現場へと視線を向ける。それは離れた所にいた人々も同様だ。

中には勇敢にも、ゆっくりとその砂煙に近づいていく者たちまでいた。

彼らは見えぬ砂煙の向こうをよく見ようと、目を凝らす。と、その時、彼らのうち一人が何かの影を捉えた。

「何かいるぞー!!」

その叫びに、他の者たちは近づくのをやめて砂煙が止むのを待つ。

そうして、砂煙が晴れていく。

おかげで彼らは砂煙に隠れていた者達の姿を見ることが出来た。

それはサソリのような生き物だった。黒い体と左右にある合計六つの足に二つのハサミ。けれども、尾はない。故にサソリのような生き物だ。

そんな生き物がゾロゾロと壁の割れ目から姿を現し始めた。

「エアゲイルだー!!」

一番先頭にいた男が叫び一目散に逃げ始める。それを見て周囲の者達がすぐさま続いた。

遠目から眺めていた者達は近づいていった者達が一斉に逃げ出すのを見て不安を感じ、つられるように逃げ始める。それを見てさらに遠くの者達が……といった感じで不安は次々と伝播していく。

混乱が混乱を呼び、町中がパニックに陥っていった。

人々は我が身可愛さにただ必死に走り、他のことなど目もくれない。途中、誰かとぶつかろうが踏もうがお構いなしだ。

そんな状況の中、刀弥たちは細い路地裏に集まっていた。通りには人々が溢れており、あのまま通りにおいては人の河に流されてはぐれてしまうと判断したからだ。

「で、どうする？」

今いる場所が安全であることを確かめてからアレンが刀弥とリアに問いかける。

彼の問い掛けに二人は顔を見合わせた。

「どうするって言われてもな」
「だよな」

現状の選択肢としては逃げる、戦うの二つがある。
一番安全なのは逃げることだが、隣町へ続く洞窟は現状どう考えても混んでいるだろに違いない。また、洞窟の外へ逃げるのも手だが外の環境が厳しい以上寿命を伸ばすという効果しかない。
つまり、簡単に言うると逃げるのは難しい。

「まあ、逃げれないなら戦うしかない」
「だね」
「まあ、そうだよな」

故に二人の出した答えは当然の結果だった。
二人の意見にアレンが諦めたように同意する。

「ところでシエナさんは？」
「そつえば、いないな」

リアの問いに、刀弥はようやく彼女の姿がないことに気が付いた。

ここに集まった時、シエナの姿は確かにあった。だが、今はない。それはつまり……

「あの馬鹿……」

悪態を吐いてアレンが通りに飛び出す。その後に刀弥とリアが続いた。

通りは今も人の姿があるが、先程と比べると遥かにマシだ。その間を彼らは縫うように逆走する。

「……いた」

刀弥の見つめる先、そこには桜色の尻尾が確かにあった。

尻尾は人々の隙間を的確に見極め効率良く進んでいた。そのため、両者の距離は徐々にだが離されていく。

「まずい。離されてるぞ」

「くそ!」

アレンの叫びが虚しく響く。何とかして追いつきたいが、その思いとは裏腹に両者の距離は遠くなっていき……

そして遂に、三人はシエナの姿を見失った。

シエナは逃げる人々の流れに逆らうように走っていた。

路地裏に集まろうとした時、シエナは偶然それを見てしまったのだ。

彼女が見たのは小さな足で必死に逃げる幼い兄妹達の姿だった。あの速度では、すぐにエアゲイルたちに追いつかれてしまう。だからシエナはアレンたちの話を聞かずにそのまま通りに飛び出してしまった。

彼女の中にある思いはただ一つ。助けたいという思いだ。

銃の腕を磨いている内に、彼女はいろいろな人を助けていった。最初はなんとなしだったのだが、そのうち感謝されるのが嬉しくなり、もっと皆の力になりたいと考えるようになった。それは旅に出ても変わらない。

アレンが大事なのは当たり前だが、場合によっては誰かを助けるという思いのほうに勝つときもある。今がそれだ。

そうしてシエナは人の波から抜けだした。

目的の二人は、すぐに見つけた。その傍にエアゲイルがいるのも。

迷わずシエナは拳銃を引き抜きその引き金を引いた。

銃口から透明な弾丸が飛び出し、エアゲイルの頭部を貫く。

崩れ落ちるエアゲイル。その間にシエナは子供たちの盾になるかのように前にでた。

「行って」

ただ短いその一言に兄妹は頷き、急いでこの場から離れようと再び走り始める。

逃げる獲物。エアゲイル達は逃さないとはかりに追おうとする。だが、シエナの銃弾がそれを阻んだ。

仕方なく兄妹を諦め、獲物をシエナへと切り替えるエアゲイル達。彼らは左右のハサミを開き、それをシエナへと向けた。

その行動にシエナは疑問を持つが、次の瞬間その理由が判明する。何と、エアゲイルたちのハサミから射撃が放たれたからだ。

咄嗟に飛んでその攻撃を避けると、反撃に射撃を撃ち返す。

見えた弾丸はシエナの拳銃と同じ透明。どうやら空気を圧縮して弾丸として放つ器官を彼らは持っているらしい。

ともかくエアゲイル達の数減らそうと、シエナは左右の拳銃を撃ち続ける。

そうしながら彼女は敵の射撃をかいくぐると、エアゲイル達の群れの中へと入り込んだ。

周囲に敵がいるというのは中々の恐怖だがメリットもある。普通、この状況では同士討ちを恐れた相手が攻撃の頻度を落とすのだ。

エアゲイルたちもそれを判断できるだけの知能を持っていたようで、射撃の頻度が目に見えて減少した。

それを好機と捉え、彼女は一気に反撃に入る。

そうして次の瞬間、戦場に弾丸の花が咲いた。

花の中心にいるのはシエナだ。花びらの正体は彼女が放つ、いくつもの銃弾。

前、後ろ、右、左、両手の拳銃を四方八方に動かしながら、シエナはただひたすらに引き金を引き続ける。

時に腕を振り回し、時に体を傾け、時に踊るように身を回しながら黙々と彼女は周囲のエアゲイルたちを撃ち倒していった。

そして銃音が止んだ。

音が止んだ時、その場に立っていたのはシエナただ一人。エアゲイル達かというと彼女の周囲で皆静かに横たわっていた。

ふと、先程の兄妹の事が思い浮かび、シエナは彼らが去った方を凝視する。彼女が見つめる先、そこには人の姿はどこにもない。

無事に逃げ果せたのならいいのだけど、そんなことを彼女は考えてしまう。

と、その時、新たな足音が背後から聴こえてきた。

とりあえずその心配を頭の片隅に置き、シエナは背後を振り返る。すると、そこには新たなエアゲイル達の姿があった。

拳銃を構えるシエナ。

エアゲイル達は銃口と言うべきそのハサミをシエナに向ける。そ

し……

突然、飛んできた風の矢に貫かれた。

それが『エアアロー』と呼ばれる魔術だということはシエナも知っている。

問題はこれを誰が放ったのかということだが、その点に関してはおおよその見当はついていた。

「シエナさん。大丈夫ですか？」

その予想通り、彼女の知り合いが駆けつけてくれたのだ。

「大丈夫。リア、助けてくれてありがとう」

リアに礼を言った後、シエナはその隣に立つアレンへと視線を向ける。

「全くお前は……」

「ごめん」

呆れを含んだその声に対して、シエナはただ一言そう謝った。

「お前が助けた兄妹なら、そのまま逃げていったから安心していいぞ」

アレンが返した言葉はただそれだけだった。

だが、それを聴いてシエナは安堵の表情を浮かべる。

と、その時だ。

人々の叫び声があちこちから聞こえてきた。まず間違いなくエアゲイルに襲われたのだ。

「どうする？」

刀弥の問いにリアが答える。

「一旦、別れて行動しかないかな。じゃないと助けきれないし」「本当はあまり良い提案じゃないんだけどな」

リアの提案に悩む顔を見せるアレン。
その意見に刀弥は内心で頷く。

確かに彼の言う通り、分散はかなりリスクが高い。同時に複数の箇所に向かえる代わりに、たった一人で敵集団と戦わなければいけないからだ。

しかし、叫び声は四箇所以上から聞こえている。固まって動いては間違いなく時間が掛かり、助けられない人達が出てしまう。

「時間がないな。分散でやろう」

「わかった。でも無茶はするなよ」

「うん」

「気を付けて」

そう言葉を交わすと四人は一斉に別々の場所に向かうのだった。

二章三話「襲撃」(3)

刀弥は走りながら周囲を見渡した。

エアゲイルたちの姿はいくつか見えるが、今は相手している時間が惜しい。そのまま走り抜ける。

叫びの主はすぐに見つかった。エアゲイルたちがその人物に向けて、攻撃を放っていたからだ。

その人物は男性でエアゲイルたちの射撃をやり過ぎすために建物の影に隠れていた。時折、少し頭を出してはエアゲイルたちの様子を伺っている。

刀弥の位置はエアゲイルたちの真後ろ。迷わず彼は接近した。

すれ違いざまにエアゲイルたちに一太刀浴びせながら、彼は群れの真ん中に飛び込む。先程のシエナと同じ狙いだ。

そうして相手の攻撃が少なくなったのを確認すると、そのまま周囲のエアゲイル達を斬り刻んでいった。

基本は相手に狙いをつけさせないように動き回り、発射口であるハサミ群をよく見て、射線上にのりそうになったらすぐさま移動。

攻撃は一撃離脱。可能な限り殺せる部分を狙い、無理なら相手の攻撃や移動を阻害できるところを狙う。極めて堅実な戦い方だ。

さらに反時計回りにエアゲイルたちを狩っていくことで、撃破の偏りをなくし出来る限り同士討ちになるように工夫も凝らした。

全てのハサミの射線を見極めれるかどうか多少不安もあったが、何とかこなせている。

シエナとの修行のおかげだ。

最初のほうは銃口を注視して何とか射線を読んでいた状態だったが、今では感覚で感じれるところまで上達することができた。それでもシエナ曰く『読みが粗い』とのことだが。

ともかく、その感覚が彼らの射線を教えてくれていた。それを頼りに刀弥はエアゲイル太刀を攻める。

胸を斬る、動く、足ごと斬り落とす、後ろへと飛ぶ、回りこんで刺す、繰り返される攻撃と移動。

時折、相手からの攻撃も飛んでくるが、射線上にいない以上当たることはない。

稀に当たりそうな攻撃もあるが、それ自体は事前に予測し、その部分に刀を動かすことで防いでいた。

と、刀弥は移動方向をいきなり反転させる。射線に身が重なるが、それも一瞬のこと。相手が撃とうとした時には、既に射線上にその姿はなかった。

そうして刀弥は相手に迫ると、足と足の隙間からエアゲイルの胸を斬り裂いた。

そしてバックステップで下がって移動を再開。縮地の連続移動でジグザグに進んで、別のエアゲイルの正面まで接近する。

刀弥に気が付いたエアゲイルがハサミを振ろうとするが、刀弥の左上から右下への振り下ろしのほうが早かった。顔を斬られ崩れ落

ちるエアゲイル。

刀弥は振り下ろした勢いを利用して時計回りに旋回、離脱する。

群れの中にいるため、周囲はエアゲイルばかり。気を抜けばその瞬間、エアゲイルたちの餌食となってしまうだろう。

体中に走る緊張感。けれども、それが心地よくもあった。

久々の感覚だと刀弥は思う。少し前まではそれを感じている余裕もなかった。それほど自分自身が悩んでいたということでもある。

そうして最後のエアゲイルを切り倒す。それから刀弥は周囲を見渡した。

他にエアゲイルたちの姿は、どこにも見当たらない。どうやらこの一帯は全て片付け終えたようだ。

「大丈夫か？」

溜息を一つ吐いた後、刀弥は男のほうへと振り返る。

「あ、ああ」

男は周囲が安全になったことを確認すると、恐る恐るといった様子で建物の影からでてきた。

そうして視線を巡らせながら急いで刀弥の傍まで走り寄ってくる。

「助かった。もう駄目かと思ってたところだったんだ」

「一人か？」

「もう一人いたんだが……」

徐々に尻すぼみになっていく男の返答。
その様子から刀弥はもう一人の末路を悟った。

その人物を救えなかったことに刀弥は無力感を感じてしまうが、
そんなことより現在に意識を向けることのほうが大事だ。

「とにかく早く逃げるんだ」
「あんたは？」

男の問いに刀弥はきっぱりとこう答える。

「他にあんたみたいな連中がいないか。探してくる」
「正気か！？ 向こうは結構な数がいるんだぞ」

信じられないという顔で男が驚いた。

男の驚きは当然だろう。これだけの数に襲われている状況なのだ。
他者にまで気を回す余裕など普通あるはずがない。

「その正気じゃない判断のおかげで、あんたは助かったんだけどな」

男の驚きに対して、刀弥はそんな台詞を返す。
それを言われてしまうと男としても黙るしかない。

「それじゃあ、気を付けろよ」

それを見計らって、刀弥は走りだす。男の呼び止める声が聴こえ
たが、聞こえない振りをしてそのまま刀弥は走り去った。

走っている最中、いくつもの戦いの音を耳に捉えることができた。見知っている音だけでなく聞きなれない音もそこにはある。

どうやら、自分たち以外にも同じようなことをしている人たちがいるらしい。

その事実 zu 若干、頬が緩んでしまつが、すぐに刀弥は氣を引き締め直す。

と、そこへエアゲイルに取り囲まれた女性剣士の姿が目に入った。どうやら少し女性剣士が不利のようだ。

刀を構え直した刀弥は彼女を助けるため己の走る速度を速めることにするのだった。

火球が爆ぜる。爆風が外殻を砕き、熱がその身を焼く。そうしてできた六つのエアゲイルの死体。

だが、リアはそれに目もくれない。すぐさま新たな魔術式を構築する。

見据える先にいるのは別のエアゲイルたち。

放たれる空氣の弾丸。彼女はそれを己の魔術で防いだ。

『ウォールストーム』

突然発生した竜巻の壁が相手の風弾をかき消した。

竜巻の中にいるリアはこの間に別の魔術式を構築、竜巻の解除と共に発動させる。

『ボルトハンマー』

雷の鉄槌を持って、彼女は先のエアゲイル達を叩き潰す。
光と音が咲き乱れ全てを飲み込んだ。

やがて、雷が止むとリアは周囲を見回す。

周囲にはエアゲイル達の姿はない。どうやら安全の確保はできたようだ。

「……うん、大丈夫かな。もう出てきてもいいよ」

そうして安全を確かめると、彼女は建物の影に向かって声を掛けた。

すると、建物の影から四人の子供達が姿を見せた。
年齢はバラバラのようだが、皆仲良く手を繋いでいる。

「それじゃあ、今の内に安全な場所に移動しようか」

微笑みながら語りかけるリア。それに対する返事として子供達は一斉に頷いた。

リアが先導し、その後ろを子供たちが付いて行く形で五人は町の中を進む。

辺りにエアゲイルの姿はない。一気に進むなら今がチャンスだ。

「走るよ」

そう考えたリアが子供達にそう指示すると、五人は一斉に走り出した。

遠くのほうで、いくつかの戦闘音が聞こえる。誰かが戦っているのだ。

ふいに刀弥のことが頭に浮かんだ。彼は大丈夫だろうか。

シエナとの訓練のおかげで、対遠距離戦は十分積んでいるので心配はないはずだが、それでも不安が込み上げてくる。

頼りになるパートナーであるのは間違いないが、必要であれば無茶をするところもある。その点が不安の原因だ。特にこういう状況であれば彼は尚更無茶をするだろう。

そんなことを考えながら、リアは子供たちを引き連れていた。

背後から人のものではない足音が複数聞こえてきたのは、そんな時だ。

「次の建物の影に隠れて」

リアの指示に従い子供達は建物の影に隠れた。それを確認しながら彼女は魔術式を構築、背後へと振り返る。

ほぼ同時、彼女のもとに空気の弾丸が飛んできた。だが、それは想定内だ。

『アースランス』

地より大地の槍群が出現し、その攻撃を防いだ。そのまま槍群は次々と姿を現しながら、追いかけてきたエアゲイルたちを刺し貫いていく。

けれども、リアはまだ気を抜かない。足音はまだ消えていないからだ。

「!?? そこ!?!」

音を頼りにリアはエアアローを飛ばし、建物の影から飛び出してきたエアゲイル達を串刺しにする。

耳を澄ましてみると、足音はもう聞こえない。どうやら今ので付近にいたエアゲイル達は全部倒したようだ。

そのことにリアは安堵を漏らすと、再び子供達を呼んで急いで彼らを安全な場所まで連れて行くことにするのだった。

「全く!?!」

アレンは引き金を引きながら、悪態を漏らしていた。

彼の攻撃を受け、エアゲイルが一体倒れる。

周囲には誰もおらず、漏らす声も小さい。そのため誰にも聴かれないことはない。もっとも、だからこそ彼はそんな独り言を漏らして

いたのだが……

「あいつはいつもいつも……」

走り込み建物の影に飛び込むようにして隠れるアレン。直後、彼のいた場所を無色の弾群が通り過ぎていった。

すぐさま、銃口を向けて反撃。いくつもの爆発が起こり三体のエアゲイル達はその爆発を受けて沈黙した。

「こつちが、どれだけ大変な目にあってるのかわかっているのか!!」

さらに懐から爆破の魔具を取り出して、投げつける。

目標は建物の向こう側。エアゲイルの足音がそこから聞こえたからだ。

爆発音が響き、それと同時にアレンは建物の影から飛び出す。

そうして丁字路に飛び出した瞬間、アレンは右側の通路にエアゲイル達の姿を見つけた。既にハサミはこちらを向いている状態だ。

「やばっ!?!」

迷わず、正面の家のドアを体当たりで破って攻撃を回避。

攻撃が止んだのを確認すると、即座に爆破の魔具をドアから放り投げる。

爆破の魔具は壁にぶつかって跳ね返り、相手の傍に落ちて直後、爆発。耳をつんざく音共に風が巻き起こった。

爆発が収まったあと、アレンはゆっくりと顔を入り口から出して

外の様子を伺う。

視線の先、爆発に飲まれたエアゲイルたちの死体を認めると、彼は周囲を警戒しながら家から出てきた。

遠くから戦いの音が聞こえている。誰かが戦っているのだろう。

最初はシエナや刀弥たちかと思ったが、音に聞き覚えはない。どうやら誰かを救おうとする物好きは自分達だけではなかったらしい。

「これで多少は楽になるな」

そんな感想がこぼれ、多少気が楽になった。

シエナのほうは大丈夫だろう。心配していないと言えば嘘になるが、彼女の実力を疑ったことはない。

それよりも自分の心配だ。彼女と違って自分はそれほど強くない。下手すればその瞬間、死ぬ可能性だってあり得る。

アレンとしても死ぬつもりはない。死ぬばシエナが哀しむからだ。そのためシエナほどではないが、それなりに戦い方は学んできいた。

アレンが心掛けている戦い方は、まず自分の身を安全な場所に置くという事だ。

四人の中で一番弱いのは自分だとアレンは自負している。

シエナのように広い視野を持っている訳ではない。刀弥のように動き回れる訳でもない。リアのように多数の魔術を扱いこなせている訳でもない。

そんなアレンが戦いの場で足手まといにならないようになるためには相手に守ってもらわなければならない状態になる必要がある。それ故の戦い方だ。

安全な場所にいるなら、味方は彼を守る必要がなく自由に動き回れる。

そうやって彼はこれまで戦ってきた。

「……また来たか」

少し考え事に気をとられていたせいだろう。

気が付けば、またエアゲイルたちの足音がこちらに近づいてきていた。

「さて、どうしたものか……」

アレンは少し考え込む。

彼がこの辺りで戦っていたのには理由がある。

この辺りにやって来たのは叫び声を聞いたからだ。行ってみると、そこにはエアゲイル達から逃げている一団の姿があった。

彼らを助けるために、アレンはエアゲイル達の注意を自分へと向けさせることにした。

試みは成功。ほとんどのエアゲイル達を引きつけることができた。恐らくその一団も逃げ延びているはずだ。

そのため、新たに来るエアゲイル達と戦う理由はない。だが……

「出入口に近いんだよな」

そう、アレンが今いる場所は出入口の洞窟に近い。時間を考えれば、出入口はまだ人で混み合っているはずだ。

ここでエアゲイル達を通してしまえば、そんな人々のところに彼らが殺到することになってしまう。

さすがにそれはまずいだらうとアレンは考えていた。

「仕方ない」

そう呟いて彼は懐から新たな爆破の魔具を取り出すと、彼らを奇襲するため、近くの建物の影に隠れることにするのだった。

「一章三話」襲撃「3」(後書き)

11 / 12

瞬歩を縮地に変更

二章三話「襲撃」(4)

風の如く少女が舞い、桜色の髪がその軌跡を描いた。
風の礫が敵に貫き永久の眠りを与える。

そうやってシエナは町中を駆け巡りながら、エアゲイル達を倒していた。

右、左、前。彼女が進む度にエアゲイル達の死体が作られていく。無論、相手も反撃してくるが、それらの攻撃がシエナを捉えることはない。逆に彼女の攻撃は確実に彼らを捉えていた。
これでは、どれだけ相手に数があっても意味を成さないだろう。

そうやって彼女が順調にエアゲイルたちを蹂躪していた。その時だった。

建物の角から飛び出し右へ視線を向けた瞬間、そいつはいた。

一人人を楽々挟めそうな、巨大な二つのハサミ。子供の体なら丸呑みできそうな大きな口。そして巨大な体。

巨大なエアゲイルの姿がそこにはあった。

鋭い視線を感じ、反射的にシヤナは来た道のほうへと振り返って
跳躍。

直後、爆発としか言えないような大きな音が、彼女の背後から響いてきた。

前転の要領で転がりながら、シエナは後ろへと振り返る。

すると、先程まで彼女が立った場所に巨大な穴ができていた。ま
ず間違いなく、先のエアゲイルが撃ったものだろう。

こいつは危険だとシエナの感が告げていた。このエアゲイルを放
つておけば、間違いなく他の人間に被害を及ぼすだろう。

だからこそ、そうなる前に自分の手で撃破すべきだと彼女は判断
を下す。

丁度、相手もシエナをターゲットに選んだらしく、ゆっくりとだ
が重い足音がこちらに近づいてきているのが聞こえていた。

狙うは相手の頭が建物の角から見えた瞬間だ。その瞬間、頭部に
接近して至近距離から左右の六連同時射撃を見舞う。

遠慮はいらない。ただ全力を持って相手を倒す。

そして、敵の頭が視界に映った瞬間、シエナは駆け出した。

迷いはいらない。怯える必要もない。ただ一秒でも早く辿り着く。
それができれば全ての問題は解決するのだから……

そうして彼女は巨大なエアゲイルの至近距離にまで近づいた。
手を伸ばせば、外殻に触れるほどの距離だ。

迷わず彼女は両の拳銃をその外殻に押し付けて引き金を引いた。

一瞬の内に左右の拳銃から六発の銃弾が放たれ、それが巨大なエ
アゲイルの外殻を貫く　　ことはなかった。

貫くことができなかつた銃弾は力の逃げ場を得ることができず銃口内で暴れまわり……結果、銀の拳銃はシエナの手から離れ宙を舞ってしまった。

二つの拳銃はクルクルと回りながら、放物線を描いて飛んでいく。銀のボディが太陽変わりの光を反射しキラキラと煌めいていた。

予想外の事態にシエナは反射的に拳銃の軌跡を目で追ってしまふ。

数秒にも満たないよそ見、それが隙となった。

次の瞬間、エアゲイルの左のハサミがシエナに迫った。

即座にバックステップで反応するが、完全には避けきれずハサミの外側で腹を殴打。その威力で彼女の身が吹き飛ばされた。

地面を何度かバウンドして、ようやく動きが止まる。

息が苦しい。腹に痛い。

だが、シエナはそんな体を無理矢理起こして飛ぶ。そうしないと危険だからだ。

その予測通り、彼女がいた場所で爆発が巻き起こった。爆発の正体は巨大なエアゲイルの放った射撃だ。

どうやらあの巨大なエアゲイルが放つ射撃は、かなり威力が高いようだ。直撃を一発でももらえば、ただでは済まないだろう。

巨大なエアゲイルは、そのまま彼女を始末しようと何度も攻撃を撃ってくる。シエナはただ避けることしかできない。

現在、彼女がとれる手段は二つ。

一つは、手放してしまつた拳銃を取りに行くこと。どこに飛んでいったかは目で追つていたので場所は大体見当がついている。設計上、あの程度で壊れるほど柔な武器でもない。

問題はこの攻撃を対処して、拳銃を取りに行かなければならないことだ。不幸というべきか、拳銃は巨大なエアゲイルのハサミで狙える範囲に落ちていた。拾おうと足を止めればその瞬間、奴に狙われてしまうだろう。

もう一つはテスト運用中の銃を使うことだ。何度か既にテストはしているので基本的な性能は大まかにだが把握していた。あの威力ならあの固い外殻も楽々破壊することができるだろう。

こちらの問題は、銃の安定性とスパーサーから展開するためにも少時間が必要なことだ。後者は建物の影に隠れて展開すればいいだけの話だが、前者はかなりの問題だ。

場合によっては不具合を起こし、さらにシエナを追い詰めることに繋がるからだ。

危険を承知で銃を取りに行くか、アレンの作った銃を信頼するか。どちらにするか。

シエナは即座に決断した。

彼女は建物の影へと急いで走る。彼女の選択は後者だった。と、いうよりも彼女にとってその選択肢が当然だった。

これが他の人物が制作した銃であれば違つただろうが、この銃を作つたのはアレンだ。ならば不安に思う必要などない。

本人が聞けば呆れるだろうが、知った事ではない。
信頼するパートナーが一生懸命に作った物だ。自分が信頼しない
でどうするというのが。そんな思いが彼女の中にはあった。

建物に影に飛び込むと、そこから彼女はさらに奥へと入り込む。
そして二度程曲がり角を曲がって安全を確認すると、彼女はスパー
サーからその銃を取り出すことにした。

巨大な銃がゆっくりとその身を彼女の前に晒していく。
白と金のカラーリングが施された巨大な銃身。その大きさから、
銃というよりも砲という言葉のほうがしっくりくる。そのせいかア
レンや刀弥はこれの事を『砲銃』と呼んでいた。

シエナはその砲銃のグリップを右手でしっかりと握る。
拳銃と違いずっしりと来る重量感。拳銃のように振り回すのは中
々難しいが、撃つだけなら何ら問題はない。グリップもしっかり手
に馴染んでいる。

大事なパートナーが自分のために作ってくれた物。その事実を思
い出す度にシエナの心の中で嬉しさが込み上げてくるが、とりあえ
ず今はそれを抑えこむ。

ともかく相手の位置を探るため、彼女は耳を澄ませた。
巨大なエアゲイルの足音は右後ろから右へと真っ直ぐ移動してい
た。丁度、右側に通りに出る道がある。

ならば、やることは一つ。先程と同じように相手が頭部を見せた
瞬間、この砲銃を放つだけだ。この砲銃なら、この距離からでも十
分仕留めれるだけの威力もある。近づく必要すらない。

故にシエナは構えた。構えは右腕を前にした半身の姿勢。バランスを取るために少し足を広げておく。

音は徐々に大きくなっている。確実に近づいてきている証拠だ。足音が一步また一步と近づくにつれ、シエナの感覚がどんどん鋭敏になっていく。

敵の到達まで三呼吸。

相手は警戒しているようだ。足音のリズムが若干固い。警戒で力が入っていると考えるべきだろう。

敵の到達まで二呼吸。

警戒しているせいか、相手は左右に顔を動かしているらしい。足音の位置が微妙に左右に動いている。

敵の到達まで一呼吸。

どつやらハサミは若干、引き気味に上げられていると思われる。一番前の足音が、他と比べて若干弱い。重心が少し後ろに下がっている証拠だ。至近距離で見つけた場合、ハサミを突くように降ろすつもりなのだろう。

そして到達。

遂に巨大なエアゲイルの頭がシェナの視界に現れた。そのタイミングでシェナは躊躇うことなく引き金を引く。

放たれたのは嵐だった。雷が先行し、その後を風が雷の軌跡を包みこむように追いかける。それらが通り抜けた後に残るのは、多数のスパークと暴風のみ。まさに嵐の砲撃と言えるだろう。

嵐の砲撃が向かう先には巨大なエアゲイルの頭部がある。狙いは正確だ。

そのまま嵐の砲撃は巨大なエアゲイルの頭部と衝突し

そのまま、その頭部を撃ち貫いた。

破壊は頭部だけでは済まなかった。吹き荒れる暴風が、嵐によって生み出された穴を瞬く間に広げていく。

嵐の砲撃は巨大なエアゲイルの頭部を抜けた後も向こう側にあった建物を更に貫通。己の気が済むまで、ただひたすら真っ直ぐに飛んでいったのであった。

頭部を失ったエアゲイルの体は力を失い、ただ崩れ落ちていくのみ。

そんな巨大なエアゲイルの死体をシェナは一瞥すると、すぐに拳銃の落ちている場所へと向かった。

拳銃を拾い念のため試し撃ちを試してみる。特に問題なく拳銃は動作した。

そのことに安堵しつつ、シェナは砲銃をスパーサーの中へと戻し

ていく。

その時、遠くほうで大きな音がいくつも響いた。

その音はシエナも聞き覚えのあるものだった。故にシエナはすぐに事態を把握する。

「もう一体!？」

そう、音の正体は巨大なエアゲイルの放つ射撃音。

その事実にはシエナは驚愕し、急いで走りだす。

射撃が放たれているということは、誰かがあれと戦っているという事だ。

間に合っつと心の中で祈りながら、彼女は全速力で音の聴こえたほうへと急ぐのだった。

二章三話「襲撃」(5)

傍にあった地面が爆ぜるように砂煙を巻き起こした。

だが、刀弥が視線を動かすことはない。よそ見をすればその途端に死んでしまうような気がしたからだ。

彼の視線の先には巨大なエアゲイルの姿がある。左右のハサミは刀弥を狙うべく攻撃を放ちながら常に彼を追いかけている。

ハサミの射線から逃れるため、刀弥は縮地で右へ左へと動き回りながら相手に接近しようとしていた。

相手の射撃の威力は高く、まともに食らえばその瞬間終わりとなってしまう。

防御はできない。一度でも防御に入れば相手の威力に足が止まり最悪、防戦一方になる可能性もあるためだ。

故に、生きるためには避け続けるしかない。

建物の影に隠れてやり過ごすという選択肢もない。

先程、刀弥が建物の影に逃げ込んだ際、相手がその強力な射撃を次々と撃ち込んで建物を崩壊させてきたからだ。おかげで刀弥は危うく、その崩壊に巻き込まれそうになった。

それにこんな危険なモンスターを放っておけば、他の人たちが危険に晒されてしまう可能性が高い。何としても、ここで叩いておくべきだと刀弥は考えたのだ。

透明の弾丸が左肩をかすめる。

その事実にはヒヤツとしながらも、彼は集中力を絶やさない。近づけば近づくほど、それだけ相手の攻撃が自分に届くまでの時間が短くなる。故に気は抜けない。

射線には乗らない。重なったとしても切り返しするときなどの一瞬だけだ。

相手は当たらないことに苛立ったのか、射撃をばらまくように撃ってきた。

ばらまくと言っても、シエナほど連射のある射撃ではない。そのため隙間を抜けるのは簡単だ。

念のため射撃のタイミングで射線に乗らないように気を付けながら、彼はさらに相手へ接近する。

僅かずつではあるが、距離を詰めていく刀弥。そして遂に刀弥は己の間合いまで近づいた。

攻撃が止んだのを見計らって、刀弥は一気に縮地で相手の目前まで迫る。

放つ一撃は己の体重を乗せた振り下ろし。狙う先は頭部。

だが、ここで驚くべきことが起こった。

何と巨大なエアゲイルが、六つの足を器用に使って後ろへと飛んだのだ。

予想外の行動に刀弥は相手を追いきれず、彼の攻撃は巨大なエアゲイルの目を斬るだけに留められた。

さらに相手は後ろへ飛んだと同時に彼に向けて左右両方のハサミから射撃を放つ。

攻撃に集中していた刀弥は相手の射線を意識していなかった。

攻撃は彼に直撃するコースで飛んでくる。

咄嗟の判断で刀弥は縮地で後ろへと飛ぶ。

だが、逃げ切れない。地面を蹴った左足が僅かばかり巻き込まれた。

バランスを崩して刀弥は地面に倒れる。

「ぐっ!？」

左足に激痛が走る。見ると、左足の靴やズボンがその威力に裂け、そこから血が流れているのが見えた。

だが、じつとはしていられない。こんな状態、敵からすれば格好の的だ。

悲鳴をあげる体を叱咤して、彼は飛ぶ。飛んだ直後、彼のいた場所に敵の射撃が着弾した。

痛みを堪え立ち上がった刀弥は再び、相手へと近づこうとする。

だが、左足が痛みで言うことを聞かない。必然的に左足で行う縮地の速度や移動距離が落ちる。

これでは射線から逃げ続けるのは難しい。ならば……

刀弥は覚悟を決めた。

それまでの射線から逃げ続ける戦い方から、弾が来た瞬間だけ射線から離れることで相手の攻撃を回避する戦い方に彼は切り替えることを決心したのだ。

無論、これはかなり難しい。刀弥がこれまで射撃に対処できたのは、当たらない場所に居続けたことと当たるであろう場所を事前に予測し対策をたてていたからに過ぎない。

だが、今からする戦い方には相手の射撃のタイミングを見極める

能力が必要になる。

タイミングを間違えて回避が遅れば、攻撃を避けきれず死亡。

まさに刀弥は己の命を賭けて、この難題に挑まなければならないのだ。

もっと集中を……

心の中で呟くようにその思考を唱える。

見つめるのは正面のみ。周囲は気にしない。他のエアゲイルの気配はないのだから気にする必要がないからだ。

足を止め敵を見据える刀弥。

相手の様子が変わったことに気が付いたのか、巨大なエアゲイルが動きを止め刀弥の出方を伺うように身構えた。

睨み合いは一瞬。次の瞬間には刀弥が傷ついた足で歩みを進ませていた。

直後、巨大なエアゲイルの射撃が放たれる。放ったのは右のハサミからの一発。

射撃の直前、僅かに揺れていた相手の右のハサミが一瞬止まったのを刀弥は見逃さなかった。それ同時に彼は右足の縮地で左へと移動する。

回避は成功。敵の攻撃が彼の右側を通過していく。

間髪入れずに相手は左のハサミで攻撃を放つが、これも刀弥は右へと飛んで避けてしまう。

再び、攻撃を放つ敵。今度は右、左の連続攻撃。右の攻撃は刀弥のやや右側。左の攻撃はそれより二歩分左。まるで左へと避ける刀弥を狙ったかのような射撃だ。

だが、射線が感覚でわかる刀弥には通じない。彼は右へと縮地で移動して攻撃から逃れると、さらに前への縮地で一気に距離を縮めた。

誤って左足で縮地の静止をしまい激痛に顔をしかめるが、その足が止まることはない。

そうして刀弥は一步一步確実に相手に近付いていった。

巨大なエアゲイルの透明な弾群がそれを阻もうと飛んでくるが、それらが彼に当たることはない。全て彼の傍らを過ぎていくだけだ。

気が付けば足の痛みを忘れていた。それほどまでに刀弥は目前の戦いに集中していた。

巨大なエアゲイルは攻撃の当たらぬ刀弥に怯えたのか、徐々に攻撃の頻度を上げていく。

だが、当たらない。刀弥は攻撃を悠々攻撃の間を通り抜け、巨大なエアゲイルに迫っていく。

その様はまるで風のようにだった。

風は遮られても僅かな隙間から抜け出してしまう。今の刀弥はまさにそれを体現していた。

後退る巨大なエアゲイル。

一方の刀弥はと言うと、左足を負傷しているにも関わらず、かなり体の調子がよかった。もしかしたら、怪我を負う前よりも遙かに調子がいいくらいだ。

世界が今まで以上に広く感じる。

それは極限の集中力がもたらした情報収集能力故の感覚だった。

生と死の境界線上にいることにより、生きようとする彼の思いや本能がより一層の集中力を体から引き出そうとする。

そうして引き出された高い集中力がより詳細な情報を拾い上げること、彼はこれまで以上に詳細な世界を認識することができるようになった。

普段では拾うことすら難しい僅かな動き、音、振動を今、彼は拾うことができる。それらの情報を元に彼はさらに相手を知っていく。結果、刀弥はさらに相手の動きを見切る能力が上昇した。

先程よりも、早い段階で動き出す刀弥。おかげで攻撃を余裕をもって避けることができた。

この変化に怯えた巨大なエアゲイルは本能的に逃げ出そうと、先の時と同じように後ろへと飛ばうと足に力を込める。

しかしその瞬間、巨大なエアゲイルの頭部に何かが刺さった。

刺された痛みで巨大なエアゲイルはもたえ苦しむ。

巨大なエアゲイルの頭部に刺さった物。それは刀弥の刀だった。相手が飛ぶことを僅かな動きから予知した刀弥が直前に己の刀を投げたのだ。

刀弥は相手がもだえている間に、接近。浅く刺さっていた刀を引き抜くと、それを片手で持ち、腰を回して放つための力を引き絞る。

風野流剣術『一突』いっとう

強い踏み込みと腰のバネによる突きの力を持って、刀弥は再びその頭部に刀を突き刺した。

硬い手応えが返ってくるが、ロックスネークの硬さと比べれば全然柔らかい。

そうして刀は相手の脳天を刺し貫いた。

巨大なエアゲイルは大きく身を仰け反らせ足掻こうとするが、最後はただゆっくりと力を失って倒れていく。

しばらく眺めた後、相手が動かないことを確認すると刀弥はゆっくりと近づき頭部に刺さった己の刀を抜いて腰の鞘へと戻すのだった。

刀が鞘に収まる音が鳴り響いた途端、彼は左足の激痛を思い出し膝をついてしまう。

「っ！？　そういえば左足、怪我をしてたんだっ たな」

戦いの最中、足の痛みを忘れていたせいでそのことがすっかり抜け落ちていた。

とりあえず周囲を見渡し、耳を澄ましてみる。

どうやら付近に他のエアゲイルの姿も足音もないようだ。

その事実にも刀弥は安堵の息を吐く。

安全であるなら、ここで少し休んでもいいだろう。

そのまま座り込んだ刀弥は少しの間休むことにした。

戦いの音自体、小さくなっている。どうやら大半は倒し終えてしまったようだ。

そんなことを考えていると、やがて誰かの走る音が聴こえてきた。音のほうへと目をやると、やってきたのはシェナだった。

「そっちは終わったのか？」

刀弥が声を掛けると、シェナは驚いた表情で刀弥と巨大なエアゲイルの死体を交互に眺めた。

「これ、刀弥が？」

「ああ、どうにかって感じだけど」

苦笑混じりの声で刀弥は答えるが、シェナは驚いたままだ。

実のところ、シェナは刀弥に感心していた。

武器や戦い方による相性があるとはいえ、あの攻撃を抜けて近づくのは中々大変だったはずだ。

けれども、彼はそれをやり遂げた。

やはり彼は自分と同じ、戦いに関しての才能があるのだとシェナは確信する。

「刀弥」

「何だ？」

名前を呼ばれ反応する刀弥。

「刀弥は強くなりたいの？」

突然の問いに刀弥は目をパチクリとさせるが、それから少し考え込むそぶりを見せる。

そうしてしばらくした後、顔を上げた彼はこう答えた。

「そうだな。守りたい人を守れるようになるくらいには……」

「そう。なら、それを忘れないで。刀弥は自分の願いを叶えるだけの力を持っているから……」

かつてアレンからプレゼントを受け取り、彼のためにも上手くなりたいと願った自分のように……

そんな話をしていると、リアやアレンの姿が遠くのほうから見えてきた。

リアは刀弥の左足の怪我に気が付いた途端、急いで駆け寄ってくるとキュアでその傷を治し始める。

「もう、また無茶して」

「悪い」

そうやって怒るリアに、刀弥が素直に謝った。

「他に怪我はない？」

「他は大丈夫だ。そういうリアこそ怪我はないのか？」

「見ての通り、大丈夫」

そう言っただけリアは笑みを浮かべて、無事な様子アピールして
く。

一方、シエナとアレンのほうでも似たようなやり取りをしていた。

「アレン、お疲れ様」

「全く、本当疲れた」

シエナとタッチを交わしながら、アレンが疲れた顔をする。

「疲れてるの？」

「ああ、相手が洞窟に行きそうだったからな。結構大変だったよ」

そんな応答をしながら、アレンは座り込んでしまう。

そんな彼を見てシエナは何を思ったのか、突然、アレンの後ろに
回り込んだかと思うとそのまま彼女は肩たたきを始めてしまった。

「気持ちいい？」

「……あー、もうちょっと右だな」

アレンは何か言おうとしたようだが、結局そのまま彼女の厚意に
甘えることにしたようだ。

「わかった」

アレンに指示したがって叩く場所を動かすシエナ。

その後、誰かが知らせにいったのだろう、逃げ出していた町の人
や観光客たちが戻ってきた。

町長は刀弥達を始め町の人を助けたりエアゲイルたちを退治して
くれた人達一人一人に感謝の言葉を言い回った。

そして、町の無事と彼らの活躍を称えるためにその日、夜通しの祭りを開くことを決めてしまふ。

町中が騒ぎ始める中、疲れていた刀弥達はおとなく宿屋へと戻ることにしたのだった。

「二章三話」襲撃」(5)(後書き)

2章も次の最後の予定です。

また、2章3話の見直しをしながら、3章のプロットを練る作業が始まります。

誤字や感想、評価がありましたら是非ともお願いします。

11/12

瞬歩を縮地に変更

二章三話「襲撃」(6) (前書き)

後一回で終わらせるつもりだったんですが、思ったよりも話が伸びそうなので分割することになりました。

今度こそ次の話で二章三話を終わらせませす。

二章三話「襲撃」(6)

「疲れた」

部屋に入った途端、そう言ってアレンがベッドに倒れ込んだ。

刀弥とアレンの部屋は標準的な部屋で壁は白色、天井は黒鳶色に葡萄色の床という色合いだ。

窓の外ではお祭り騒ぎの様子が未だ続いている。

人々の中で歓迎されている人達がいるが、恐らく自分達以外のエアゲイルを退治していた者達だろう。皆元気に騒いでいる。

あんな後なのに元気だなと、少し刀弥は感心してしまった。

「温泉には入らないのか？」

「今はいい。明日起きたときに入ることにする」

刀弥の問い掛けにも顔も上げずに億劫そうに答えると、そのまま彼は寝入ってしまった。

どうやら本当に疲れていたようだ。

それを見て刀弥はもう一つのベッドに座ると、今日の出来事を思い返す。

確かに、今日の戦闘は刀弥もかなり疲れた。

ただその一方で、言い知れぬ充実感があつたのも事実だ。

特に大きなほうとの戦いでは、今までと違う世界が見えた。

あの力を自由に引き出せるようになれば、もっと強くなれるは

ずだ。

自然と刀弥はそんな予感を感じた。

そのためには、今以上に己を磨かなければいけないだろう。

まずは明日だな。

明日はシエナとの対遠距離の修行の最終日。

教えてくれた彼女のためにも、これまで培ったものや今日の戦闘で得たもの全てをぶつけていくつもりだ。

シエナのほうもかなり本気でやるつもりのようにだし、気を抜けない。

そのためにも早めに寝たほうがいいだろう。だから、刀弥はその前に温泉に入ることにした。

宿屋の人の話だと、泊まりの客は自分たちを除いていないそうだが、それならばゆったりと温泉に浸かれるだろう。

部屋に備えられていた浴衣のような衣服　宿屋の人によるとカターヤというらしい　を手に取ると、刀弥はアレンを起こさないよう極力音を抑えながら静かに部屋から出ていくのであった。

温泉は露天風呂だった。と言ってもここは洞窟の中なので空を見上げることはできない。

ただ、それでも建物の中では味わえぬ開放感を味わうことはできた。

縁は岩で囲み、床は岩を加工したような大小のタイルが一面に敷き詰められている。温泉は月白色に染まった濁り湯。

入ってみると湯は熱いが、十分浸かれる温度だった。

そのまま肩まで浸かって縁に背を預けると、刀弥は思いつきり伸びをする。それから彼は自分の左足をさすった。

左足の怪我はリアの魔術のおかげで傷自体は塞がっている。けれども、ダメージ自体をなくならないので痛みは残ったままだ。

といつても動く分には問題ない。明日になれば痛みは完全に引いているだろう。

そんな考え事をしていると、誰かが浴室に入ってきたようだ。足音が聴こえてくる。

恐らくアレンだろう。どうやら結局、目を覚まして風呂に入ることにしたようだ。

「なんだ。結局、入ることにしたのか？」

そう言って振り返る刀弥。

すると、そこには何故かリアが立っていた。

時間が静止したかのような静寂が辺りを漂う。

幸い、リアは胸の辺りから足元まで隠れるくらい長いタオル巻いていた。おかげで彼女の裸体を見てしまうことはない。

そのことにほっとしながらも、刀弥は己の疑問を口に出してみる。

「……何でリアがここに？」

問われた側のリアは事情を把握しているらしく、溜息を吐きながらも刀弥にその理由を説明してくれた。

「……この温泉、混浴だよ？ 看板の隅のほうに書いてあったんだけど……」

「……そうなのか？」

全く気が付かなかった。記憶を掘り返してみるが隅の方まで思い出せない。

「やっぱり、気付いてなかったんだ」

「……悪い」

知っていれば確認をとるなどで回避できた事態だけに、悔やまれる。

「まあ、わざとじゃないのはわかったから許してあげる」

そう言いながら温泉に入ったリアは、そのまま刀弥の左隣に並んだ。気のせいか頬が若干赤い。

このまま彼女を見ているのもマズイかと思い、刀弥は視線を外して天井を眺めることにした。

そのまま気まずい沈黙が続く。

「そ、そういえば刀弥。左足は大丈夫？」

「え？ あ、ああ……少し痛みはあるけど、十分動ける範囲だ」

突然、話しかけられ戸惑いながらも刀弥はリアの問いに答えた。

「本当に？」

心配そうな声でそう問い掛けながら、リアは己の手を刀弥の左足へと伸ばす。

彼女の柔らかい手が自分の左足に触れた途端、刀弥の鼓動は大きく跳ねる。

「痛くない？」

「じ、十分我慢できる範囲だ」

刀弥の左足に触れながらリアがそう訊ねてきた。それに刀弥はドギマギしながらも答える。

実際、左足が伝えてくる痛みはその程度のもので彼女が心配するほどの事ではないのだ。

「なら、いいんだけど……刀弥つてときたま無茶するから、ちょっと不安になっちゃうんだよね」

目を細めリアは憂いの表情を作る。

「……悪いな」

「刀弥、謝ってばかりだね」
「……………」

もはや、謝ることもできず黙るしかない。
そんな刀弥の様子に思わずリアは失笑するのだった。

謝ることができず黙るしかない刀弥が可笑しくて、ついリアは失笑してしまった。

そんなリアの反応を見て、刀弥の顔が拗ねたような顔つきに変わる。

あ、こういう可愛いところもあるんだ。

新たな一面の発見にリアは内心喜んだ。

真面目で冷静かと思えば、時折熱くなって無茶をする。

それがリアの目の前の少年に対する評価だった。

無限世界とは繋がっていない閉鎖世界クローズワールドの住人。

代々剣術を教えていた家の人間だけあって、それなりに戦う術を身につけてはいたが、実戦経験は皆無。

それでも彼は今日まで何とかやってきた。

足りないものを戦いの中で見つけ出し、可能であれば戦いの中で編み出す

剣士としての才能もあるのだろう。特に分析力は眼を見張るものがあつた。

慢心はなく、実戦経験が少ないことを自覚しているおかげか戦闘時に気を抜くこともない。

明るいと性格とはいえないが、それでも優しい部分があるのは確かだ。でなければ一人の少女のために危険な戦いに行こうとはしないだろう。

己の悩みを内に抱え込む悪い部分もあるが、それは時間が解決してくれるはずだ。

まだお互いを完全に信頼し合うには、まだ時間が短すぎるというのは彼女も理解している。

未熟な部分もあるが、それは自分も同じだ。だからこそお互いで補い合うことができればいいなとリアは考えていた。

ただ、一番の不安はやはり無茶をすることだ。

これまでの戦いは彼の成長もあってかどうにかできているが、それがこの先も続く保証はない。

リア自身一人旅のときは出来る限り無茶をしないようにしてきた。可能ならしっかりと準備を整え、危険だと判断すれば逃げたり一度引いて態勢を立て直してから再度挑戦する。そんな堅実な方法をとってきたのだ。

しかし刀弥の場合、その選択肢を選ばず己を高めることで事態を解決しようとしているところがあつた。まるで強い敵を求め、その中で強くなるうとする戦闘狂達のように……

もう一度、リアは刀弥の左足を見る。

宿屋への帰りの最中に聞いた話によると、刀弥の負傷は大型のエアゲイルとの戦闘で得たという話だ。

シエナの証言だとかかなり手強かったらしい。

そんな相手と刀弥は戦ったのだ。左足の怪我だけで済んだのは幸いだといえるだろう。

「前から思ってたんだけど、刀弥って強い敵を求めてるってことはないよね？」

「どついう意味だ？」

意味がわからず刀弥は首を傾げた。

その反応にリアは溜息を一つ吐いて言葉を続ける。

「なんていうかな。刀弥って厳しい戦いの中に身を置くことで、強くなるうとしてるんじゃないかなって思うときがあるの。ロックスネークや今回の戦いとか……」

「……別にそんなつもりはないんだけどな」

困ったような顔を浮かべて刀弥はそう否定する。

「強くなりたいという思いはあるけど、それも普通の範囲でっていう意味のつもりだし……」

「そう」

ひとまずその返答にリアは安堵した。

少なくとも刀弥自身はそちら側へ落ちるつもりはないようだ。で、あるなら話は早い。

「刀弥」

リアは両手で刀弥の頭を挟みこむようにして優しく掴むと、上を見ている彼の視線を自分のほうへと向けさせた。

「リ、リア？」

無理やりリアのほうを見ることになった刀弥は顔を赤くし慌ててしまっている。

けれども、リアはそんなことにも目もくれず真剣な眼差しで彼を見据えていた。

「あのね刀弥。私これでも刀弥のこと心配してるんだよ？」

「あ、ああ。それはわかってる……」

戸惑った声で刀弥がなんとかそう答える。そんな彼の反応を見て、リアはつい可愛いと思ってしまった。

死んで欲しくない。そんな感情が彼女の中に渦巻く。

だからこそ、リアはその言葉を彼に告げることにした。

「だったら、約束して絶対に死なないって」

「……………」

その途端、刀弥の瞳が見開いた。

彼の視線を感じながらリアは思考する。

もはや、何を言ったところで刀弥が必要と判断すれば彼は無茶をするだろう。

それが無意識なのかどうかはわからない。けれども、どちらであろうと彼が無茶をすることに変わらない。

止めることは不可能。ならば、後は生きる可能性を上げるしかない。

そのための約束だ。こんな約束でも胸に刻んでくれれば彼はしっかりとその約束を果たそうとしてくれるだろう。

それでどの程度、生きる可能性を上げるのかはわからない。ひよっとしたらほとんど意味がないかもしれない。

けれど、僅かでも可能性が上がるのであればする意味はあるとリアは考えていた。

「……わかった。約束する」

一旦目を瞑った後、刀弥は静かに頷いた。

「うん。約束だよ」

「ああ」

その言葉にリアは笑みを見せると、それ見て刀弥もまた笑みを返してくる。

そうして二人は一緒に笑い出した。

「……で、そろそろ手を離して欲しいんだけど……さすがこれ以上はマジマジと見られるのも恥ずかしいだろ？」

「え？ ……あ！？」

刀弥に言われ、ここが温泉だということを出すと、リアは急いでその手を離れた。

すぐさま刀弥はあさっての方向へと視線を動かす、リアは刀弥のほうへ背を向ける。

濁り湯と頭を抑えていたおかげで、刀弥が見れる範囲などたかが知れていたはずだ。だが、やはり見られたという事実は恥ずかしい。

「じゃあ俺、先上がるから。おやすみ」

やがて、気まずい空気に耐えられなくなったのか、そう告げて刀弥が温泉から立ち上がる音が聞こえた。

温泉から上がり彼はそのまま男性の更衣室のほうに向かったようだ。

ドアが閉まる音が聞こえると、思わずリアはほっと胸を撫で下ろしてしまう。

そうしてしばらくして、彼女は恥ずかしさから立ち直ると急いで温泉から上がりカーターヤに着替える。

そしてリアはシェナの眠る部屋へと戻ると、そのままベッドになり安らかな眠りの中へと落ちていくのであった。

「二章三話」襲撃」(6) (後書き)

すいません。今回で終わらせるつもりだったんですが結構ページ数が伸びたので分割して出すことにしました。

次こそ二章編を終わらせてみせます。

二章三話「襲撃」(7)

薄明かりが騒ぎの終えた町々を静かに照らしていた。
あちこちの温泉からは湯気が立ち上り、岩盤の天井を白に染めていく。

それは四人がいる河原も同様だ。
河原では刀弥とシエナが武器を持って互いに向かい合っていた。
それをリアとアレンが斜面に腰かけて眺めている。

よく見ると刀弥は以前と少し違う衣服を着ていた。
ズボンは黒緑色^{くろみどりいろ}。素材は柔らかさそうだが、足元の口が少し広いのが特徴だ。

一方の靴は黒色で履き口部分が大きく開いたタイプ。ちなみに靴下も新しくなっている。

どちらも、フォレストウルフを倒した町で刀弥たちが購入していた物だ。非常用ということであめのものを選んでおり、着てみた感想として若干不満が残っている。

とはいえ、元のズボンや靴は左足部分が裂かれてしまっている以上、これで我慢する他はなかった。

「とりあえず『エンクロージャーウォール』を発動させたから、周囲に被害が行くことはないかな」
「助かった。リア」

二人に対してそんな説明を入れるリアに刀弥は礼を言う。

リアが展開した『エンクロージャーウォール』は本来、攻撃を遮る力場で全方位を囲む防御を目的とした魔術だ。

しかし、範囲を広くしその中に対戦者を入れることで、周囲に被害が及ばないようにするバトルフィールドとして活用することもできる。

おかげで、刀弥とシエナは何の気兼ねもなく戦うことができる訳だ。

「じゃあ、刀弥は準備はいい？」

「ああ、いつでもいい」

シエナの問いに刀弥が構え、返事を返す。

「それじゃあ、始めましょ」

その瞬間、シエナの腕が上がり、いくつもの銃弾が刀弥に向けて放たれた。

即座に縮地で左へと移動。銃弾の範囲から逃れる。だが、刀弥の後をシエナの銃口が追いかけてきた。

刀弥は反時計回りに回りこむような形で、シエナに近づこうとする。

しかし、近づくよりも先にシエナの射線が刀弥に追いついた。

刀弥の行き先に射線先回りさせた上で引き金を引く。

銃弾が真っ直ぐ飛び、その線上に刀弥が飛び込んだ。

けれど、刀弥は構えていた刀を僅かに動かし防御。と、同時に走る速度を緩め、先回りされた射線から逃れようとする。

攻撃を止めたシエナは銃口を動かし刀弥を追う。

銃弾を撃つてないので反動がない分、撃ちながら動かすよりも動きは遥かに速い。加えて撃ちことに意識を回す必要がないので、かなり繊細に銃口を合わせる事ができるのだ。

今までの修行の時は基本、撃ちつばなしだったのは刀弥に射線を把握させるためと同時に射線の移動速度を刀弥の能力に合わせるためだったのだろう。

どうやら今回は本当に本気で戦っているようだ。それを嬉しく思いつつ、刀弥はどう対処するかを考える。

射線から逃げ続けるのは、もはや難しい。となると撃たれた瞬間、それに合わせて射線から逃れることで攻撃を回避するしか方法は無い。

判断は一瞬、すぐに刀弥は決断を実行に移した。

それまでやっていた回り込みを刀弥は中断すると、今度は一直線にシエナのほうへと突っ込んだのだ。

当然、刀弥に射線を合わせたシエナが連続で射撃を放ってくる。

けれど、刀弥は引き金を引く直前の僅かな指の動きを見極め、発射と同時に射線から外れ次々と攻撃を回避する。

まだ巨大なエアゲイルとの戦いで見せた領域には至ってはいない。それでも、現状の力でシエナの発射タイミングを見極めることはできた。そのことに刀弥は内心安堵する。

刀弥の新たな動きに、シエナはもちろん見学していたリアやアレ
ンも目を見開いた。

すぐさまシエナは発射の頻度を多くして攻撃の数を増やす。しか
し、それでも刀弥は彼女の攻撃を避け続けた。

そうして、その攻撃と回避の果てに両者の距離が最初の半分を切
った。

と、同時にシエナが刀弥から距離をとろうと、後ろへと飛んだ。

どうやら逃げながら撃つつもりのようなのだ。

動きながらの射撃は体の揺れや動かすことに意識が向く分、射線
が揺れ乱れやすい。仮に安定させるとしても時間が掛かるだろう。

つまり、今がチャンスだという事だ。

しかし、代わりに向こうも後ろへと下がっていくのが問題だ。何
故なら、その分追いつくまでに時間が掛かるからだ。下手をすれば
逆に距離を離されてしまう可能性もある。

刀弥からすれば距離を離されるわけにはいかない。故に逃がさな
いとばかりに刀弥は前進の速度を上げようとした。

しかし、飛んでくる銃弾が彼の侵攻を阻んだ。

必然的に刀弥は回避と防御に集中せざるをえず結局、前進の速度
を上げることができなかった。

そんな状況ではあるが、それでも両者の距離は徐々にだが確実に
縮まっていく。

そして遂に刀弥は己の間合いまでシエナに接近することに成功し
た。

接敵と同時に刀弥は突きを放つ。狙いはシエナの右肩。

けれども、この攻撃をシエナは右の拳銃で防ぐと、そのまま腕を外へと動かし刀弥のバランスを崩した。

そうした上で彼女は左の拳銃で刀弥を仕留めようとする。

だが、ここまでの流れは刀弥も想定内。外に運ばれていく刀から左手を放すと、それを左の拳銃へと伸ばし銃口を己の外へと向けさせる。

そうしてから左足を前に出して相手の足を踏もうとした。相手を逃さぬためだ。

咄嗟の判断でシエナはバックステップ。下がりながらも両の拳銃を中へと戻し、刀弥へと狙いを定めようとする。

と、その時、刀弥の身が前へと崩れ落ちた。左足の力を抜いたことで支えを失った体が前方へと倒れたためだ。

突然のことにシエナは驚き戸惑ってしまうが、すぐに気を引き締め直し狙いを修正する。

けれども、倒れていく刀弥はそのまま己の体重で左足を曲げると、その左足を使って強く踏み込み相手に急接近。速度を乗せた一撃を放つ。

風野流剣術『疾風』しつぷう

刃の狙う先は彼女の足元。右から左への水平の一閃だ。

刀弥の攻撃に気が付いたシエナは、すぐさま右へと飛んで疾風から逃れた。

そして、左の拳銃で技終了直後の刀弥を狙い撃つ。

しかし、それは刀弥も予測済みの展開だ。右足を軸に振り抜いた勢いを利用して反時計回りに身を回し、刀の刃で銃弾を防ぐ。

視界の先、シエナの右の拳銃も刀弥を捉えようと動いていた。

それを見て刀弥は動く。狙う場所はシエナの背後だ。

回転した力を利用して左足を強く踏み込み『縮地』を繰り出す。

行き先に気付いたシエナが急ぎ体ごとを見を回そうとするが、刀弥の到着のほうに僅かに早い。

ただ、問題は刀が今、刀弥の体の左側にあるという事だ。シエナの位置は刀弥の右側。今から振り抜いてはシエナの旋回が間に合ってしまう。

けれども、方法はあった。故に刀弥はその選択肢を繰り出す。

刀弥が選択した攻撃。それは右肘による打撃だった。

鈍い音が響き、シエナが一瞬呼吸を止めてしまう。

さらにその衝撃で彼女の体が僅かに離れた。そこに片手の刀による一撃が襲いかかる。

高峰流剣術『連爪れんそう』

格闘術と剣術を融合させた高峰流。連爪れんそうは持ち手側の肘打ちから片手による斬撃へと繋げる二連攻撃の剣技だ。

とはいえ、刀弥自身、この攻撃を連爪とは思っていない。本来、この技はもっと短い時間で繋げなければいけない。そこまでいって、

ようやく技と呼べる領域だ。

見よう見まねで行った刀弥ではそこまで行くことはできない。

だが、この状況では有効の攻撃手段だと判断した。

そしてその判断通り、刀はシエナの左脇へと迫り

当たる直前にその刃をピタリと止めるのであった。

「私の負け」

残念という顔を浮かべて、シエナが勝負の結果を告げる。

「それでもどうにかって感じだけだな」

それに刀を収めながら、刀弥が答えた。

少し疲れたのか息が乱れている。

「お疲れ、刀弥」

「残念だったな、シエナ」

そこにリアとアレンが歩み寄ってきた。

「ようやく勝てたね」

リアは刀弥の傍までやってくると、そう言って刀弥の勝利を喜ぶ。

「まあな」

「途中、今までと違った動きをしてたけど、あれはいつ覚えんたんだ？」

アレンが言っているのは間合いに近づく途中、一直線にシエナに突っ込んだ時のことだろう。

「大きなほうのエアゲイルとの戦闘のときにな」

「なるほどな。それを使って倒したわけだ」

納得するアレン。

一方のリアは呆れ顔だ。

「もう本当に無茶ばかりしてるんだから」

「それはもう諦めるしかないわ」

そんなリアの肩にシエナが手を置く。

「シエナ。それは遠まわしに俺にも諦めると言いたのか？」

彼女の言葉を聞いて、アレンがジト目でシエナに訊ねた。

「どうしてそうなるの？」

不思議そうにシエナが首を傾げる。どうやら本当にわかっていないらしい。

「えっと、そんなことより早く出発しませんか？」
「……そうだな」

慌てて間に入ってくるリア。

それにアレンは溜息混じりに頷いた。どうやらこれ以上言ったところで無意味だろうと判断したようだ。

予定ではこのままラーマスへ出発して、昼頃に到着する運びとなっている。

ラーマスに到着したらずくに刀弥のメイン用のズボンと靴を買うつもりだ。

さすがに非常用のズボンや靴のまま旅をする気は刀弥にもない。それからすぐにシエナたちは出立。つまり向こうに着いて、刀弥のズボンや靴を購入したらずくにお別れということになるのだ。

「それじゃあ、さっさと行くか」

刀弥のその言葉に他の三人が頷く。

そうして四人はラーマスに向かうべく、急ぎその場を後にするのだった。

四人がラーマスに到着したのは、彼らの予想通り昼頃だった。そのまま四人はその足で服屋へと向かい、刀弥のズボンや靴を購

入。

それが終わるとすぐに四人は店を後にしたのだった。

「満足できるのがあってよかったな」

服屋を出てすぐに先頭を歩いていたアレンが刀弥の方へと振り返る。

「そうだな」

彼の感想に刀弥は頷き、己の足元へと目を向けた。

脛すねの中間辺りまで伸びた黒いブーツと黒いズボン。

特にズボンは前のズボンと比べて使われている素材がかなり違っていた。

前のズボンはデニム素材だったため少々固めだったが、今着ているズボンはかなり柔らかく動きやすい。

着心地は落ち着かないが、それは単に着慣れていないせいだ。時期に慣れるだろう。

「でも、本当によかったの？ 前のズボンや靴を手放しちゃって」

一方、店を出たリアは納得しきれないという表情を浮かべていた。

彼女の言う通り、刀弥は前のズボンや靴をもう使えないということを手放すことにしたのだ。

最初は捨てるつもりだったのだが、偶然その話を聞いていた店の人がズボンや靴の素材に興味を持っていたこともあって話し合いの

結果、その店に売るということで決着がついた。

「どうやらリアはそのことが不満なようだ。」

「使えないものを持っていたも仕方ないだろ？」

「でも、あれは数少ない刀弥の世界の物なんでしょ？ そんな簡単に捨てちゃっていい物なの？」

やり切れないといった様子でリアが必死に問う。

その言葉でようやく刀弥は彼女がなにを気にしているのか理解した。

彼は頬を緩めて、リアを話し掛ける。

「気にするな。物は他にもあるしな。第一、あのズボンにそれほど思い入れもない」

刀弥がこの世界に来た時に持っていたのは衣服を除けば、財布、携帯電話とストラップとなっているお守り。そして直前に買ったライトノベル。それらはスパーサーの中に入っている。

そういう意味では自分の世界と繋がる物品はまだ残っているのだ。

「それに衣服に関しては消耗品だし、その覚悟は前々からしてたつてもあるしな」

今回のような戦闘で破れるときもあれば、使いすぎで布地が薄くなって破れることもある。それは物として避けては通れないことだ。故にそうなった際は、捨てようと刀弥は心に決めていた。

「そうなんだ。じゃあ、これ以上言ってもしょうがないね」

刀弥のその言葉にリアは肩をすくめる。どうやら納得しれくれた

らしい。

「それじゃあ、俺たちもこの辺でお別れだな」

「いいのか？ 向こうの出入口まで見送らなくても」

そんな刀弥の問いにアレンが首を振る。

「大丈夫だ。そっちだってまだやることはあるんだろうし。それじゃあな」

「じゃあね、刀弥、リア」

「シエナさん、アレンさん、ここまでありがとうございます」
「元気でな」

そうやって別れを交わし、アレンとシエナは去っていった。
残されたのは刀弥とリアの二人のみ。

「行っちゃったね」

「そうだな」

二人を見送った後、リアが呟き刀弥がそれに相槌を返す。

「とりあえず、昼飯を食べて、それから両替とかいろいろ準備をしないとな」

「うん」

そうすれば、後はゲートを通ってリアフォーンに行くだけだ。

「リアが自信を持つ根拠。楽しみにしてるからな」

「それはこっちの台詞。刀弥の顔がどうなるか楽しみなんだから」

そう言い合って、二人は互いに笑みを浮かべる。
そうして二人は昼ご飯を食べるべく、どこか良さそうな店を探し始めるのであった。

二話終了

「二章三話」襲撃」(7) (後書き)

ようやく2章3話が終了し、2章も終りを迎えました。

さて、次の3章に向けてまたプロットを作っていきたいところですが。

その間にまたまたというべきか改稿作業もしていくつもりです。

実を言えば気になった文章があったら、細々と修正とかは入れたりします。

「ここはこう書いたほうがいいんじゃないか？」とか考えちゃって文章とは難しものだと実感します。

ともかくこれから続きますのでどうぞ応援よろしくお願いします。

11/12

瞬歩を縮地に変更

三章一話「観光」(1)

青い空の河の上を白い雲が流れていた。

太陽は天高く昇り、眩しい日差しが眼下の世界に降り注ぐ。

眼下の世界にはいくつかの色があった。

森と平原が作る緑色。大地が作る茶色。川や水が作る青。そして

……遙かなる昔に生み出された建造物が作る紺色。

それがこの世界の色だ。

そんな世界のある場所に一台の馬車が走っていた。

馬車の中では二人の人間が向い合い話し合っている。どちらも若く、少年と少女と呼ぶべき年頃だ。

「リアフォーネはね。ゲートが通じたときは誰もいない無人世界だったの。だけど、どという訳か人口の建造物があちこちにいくつもあってね。それがリアフォーネを遺跡世界と呼ぶ所以という訳」

そう説明するのは赤銅色の長い髪をした少女だった。席に座る膝の上に金色の杖を載せている。

「どづいうことだ？　なんで誰もいないのにそんなものが建ってる？」

その説明に疑問を返すのは黒髪の少年だ。彼の腰には刀の収まった鞘が吊り下げられている。

「それがリアフォーネ最大の謎なの。今もその謎を解こうと調査隊が遺跡を調査しているって訳。でも、この世界がゲートに繋がって

から一〇〇年以上過ぎてるけど、未だ解明できずの状態」

少女、リア・リンスレットはそう言うと同時に両手を上げてお手上げのポーズを示した。

「解明はできなくても、いくつか説ぐらいは出てるんだろう？ どういう説があるんだ？」

少年の名前は風野刀弥。彼はリアの話聞いてそんな質問を返す。

「えつとね。一つ目は自分たちの文明が原因で絶滅しちゃったっていう説。二つ目は空に上がったって説。で、三つ目はゲートでどこかに行つてそのゲートが閉じたという説」

覚えのある説を上げながら左手の指を折っていくリア。それを聴いて、刀弥が反応を返す。

「ここの遺跡って最初の説がありえそうなくらいレベルが高いのか？」

「うーん。どうなんだろう。私も初めてくるし、話も他の人から聞いた程度だから詳しくはわかんないし」

刀弥の問いにリアは考え込むが、わからない以上答えなど出るはずもない。

「それで、今はどこに向かつてるんだ？」

こちらに辿り着いて早々、リアが刀弥を引つ張つて駆け出し、気が付いたら馬車の中に連れ込まれていた。

この馬車が一体、どこに向かつているのか刀弥は全く知らないの

だ。

「この馬車はワートってところに向かっているの」

「ワート？ どういうところなんだ？」

刀弥の疑問にリアは待つてましたとばかりに笑みを浮かべる。

「ワートはすっごい高い塔の遺跡なの。聞いた話じゃ最上階は一帯の景色を一望できるんだって」

「高いつてどれくらいなんだ？」

刀弥では精々、自分の国にあるテレビ塔程度の高さしかイメージできない。

「うーんとね。あれくらい」

そう言つて彼女は馬車の窓を指差す。

それに従つて刀弥が馬車の窓へと顔を向けると……

雲にまで届こうかというくらい高い塔が窓の向こうに映っていた。

「……………」

想像以上の高さに刀弥は絶句してしまう。
そんな彼を見てリアが彼の耳元で囁いた。

「どっつ？ 驚いた？」

そうして馬車が塔の手前に到着すると、二人は馬車を降りた。

改めて塔を見上げる。

塔は円柱形で壁の色は紺色。それが遙か上のほうまで伸びている。よく傾かないと変な感心が刀弥の頭を過ぎった。

「ほら、早く早く」

リアの声に気付いて視線を前に戻せば、彼女はかなり先から刀弥を呼んでいた。まるで初めて海に来た子供のようだ。

早足で彼女のもとに向かう。

そうして二人は塔の中に入った。

中は結構広い空間だった。

壁が紺色なのは変わらないが、天井は高く、柱一つない。

唯一の例外は中央にある細長いもの。それが天井へと伸びていた。

しかし、それはエレベータのようだ。その証拠にドアが開き、そこから人が出てきた。彼らが出ていくと今度はそれを待っていた人たちが中へと乗り込んでいく。そうして全員が乗り込むとドアが閉まった。

「あの中央の上へ行くのか？」

「うん。あれでそれぞれが望む階へ転送するの」

「ふうん」

彼女の説明を聞いて刀弥が相槌を打つ。

しかし数秒後、彼女の説明にあった意外な言葉によつやく彼は気が付き、戸惑いの声を上げた。

「……待て。今、転送って言ったか？」

「うん。言ったよ」

首肯するリア。どうやら聞き違いではなかったらしい。

エレベータでなく転送装置とは、さすがに刀弥も予想していなかった。

「……凄いな」

頭に浮かんだのはそんな一言だけだった。それだけ彼にとって驚愕の事実だったのだ。

「そうだね。魔具や魔術でも人を別の場所に転送させるなんて事は無理なのに、ここの文明はそれを叶えてるんだもん」

一方のリアは、かなり興奮しているらしい。どこか熱の籠った口調で刀弥に語っている。

「という訳で、まずは最上階に行こっか」

「……当然、あれでだよな？」

中央の転送装置を指さす刀弥。

「もちろん。どんな風に転送されるのか楽しみだね」

笑顔を浮かべて、心躍らせるリア。
一方の刀弥は不安を感じていた。

「刀弥、どうしたの？」

「あ、いや……」

目聡く気付いたリアが尋ねてくるが、刀弥は言葉を濁すだけでそのことを語ろうとしない。

けれども、彼女はわかつたしまったようだ。突然、ニヤニヤと笑みを浮かべて刀弥に語りかける。

「さては、ゲートのときみたいに心配してるんでしょ？」

「……ああ、その通りだ」

もはや誤魔化しても仕方ない。素直に刀弥はそのことを認めた。

「大丈夫だって、本当に問題があるんだったら、そんなのに人を乗せないだろうし」

「あえて、不祥事を隠すところもあるんだがな……」

安心させるように言ってくるリアに、刀弥がそんな皮肉を返す。

「ええと……と、ともかく、長年使っていて何も問題が起きてないんだから大丈夫だって……」

「……そうだな」

刀弥としても先の皮肉は冗談のつもりだ。長年、やっていて悪い噂がないというのであれば信用しても大丈夫だろう。

とはいえ、頭で理解していても感情まではどうすることもできない。それで不安な心情が消えるという訳ではないのだ。内心ドキドキしながら、刀弥はリアと共に転送装置の中へと入っていく。

やがて、他の人たちも乗り終わり、ドアが閉まった。すると、それと同時に床から光が溢れ出してくる。

光の色は翡翠色。それが徐々に室内を満たしていく。

一瞬、刀弥の顔に緊張の色が走るが、その瞬間リアが刀弥の腕を掴んだ。

刀弥が彼女の顔を見ると、彼女は彼を安心させるように笑みを見せてくる。

それで若干の緊張がとれた。と、同時に光が部屋を埋め尽くす。眩しさに目を瞑る刀弥。

やがて、何かが開く音と共に人々の歩く音が聴こえてきた。

「着いたよ」

それと同時にリアが声を掛け刀弥の腕を引く。

それで刀弥はまだ腕を掴まれていることに気が付いた。

慌てて目を開けて腕を振りほどくが、周囲の人たちが送ってくる生温かい視線についつい顔が赤くなってしまふ。

ともかく刀弥は転送装置から出ることにした。

そんな刀弥の後をリアが笑いながら付いてくる。

「笑うなよ。リアが原因なんだから」

「まあまあ、それより早く行こ」

怒る刀弥をリアがなだめながら、二人は進む。

そうして二人は部屋の端まで来た。しかし、そこにあるのは紺色の壁ではなく透明な壁だ。

「うわあ……」

「絶景だな……」

感嘆の声を漏らす二人。

二人の目の前には、まるで天から世界を見下ろしているかのような景色が広がっていた。

雲が手を伸ばせば届きそうなくらい近い。眼下には茶色と緑色の混じった大地がこれでもかというくらい広がっている。

「凄い凄い!!」

そんな光景を見てリアは興奮した様子で叫んだ。

「落ち着けて。他の人たちが見てるぞ」

その声で周囲の視線が自分たちに向いたことに気が付き、慌てて刀弥が彼女を注意する。

「あ、ごめん」

刀弥の言葉によやくリアも周囲の視線に気が付いた。恥ずかしがりながら彼に謝る。

「でも、凄いやね」

「それに関しては同意だな」

叫ぶのはどうかと思うが、彼女の心情に関しては理解できる。それだけこの光景に感動したということだ。

「折角だから、オーシャルで撮ったらどうだ？」

「そうだね」

刀弥の言葉にリアはそう返事を返すと早速、首元に下げているオーシャルを取り出し、撮影を始めた。

「撮れてよかったな」

撮影が終了すると、刀弥がそう言ってリアに声を掛ける。

「うん。あ、見て。あそこに絵や写真を売っているところがあるよ」

彼女が指し示す先、確かに絵や写真を並べて売っている露店があった。

リアには風景の絵や写真を集める趣味がある。そんな彼女からすれば、さぞ興味のある店だろう。

予想通り彼女はその店に向かって駆け出していった。そんな彼女の後を刀弥はゆっくりと追いかける。

刀弥が追いついた頃には既にリアは何か買った後だったようで、

お金を店の人に支払っているところだった。買った物は既にスピーサーの中に入れてしまったらしい。

「いいのがあったのか？」

「うん」

満面の笑みでリアが頷く。どうやらかなり良い物があったようだ。

「それじゃあ、次は地下に行こうか」

「地下？ ここには地下もあるのか？」

高さだけでもこれだけ高いのに、さらに地下まであるという事実
に刀弥は驚くしかない。

そんな彼の反応を見てリアは微笑を浮かべた。

「うん。地下は、かなり広いみたい」

「広いつてこれ以上に広いつてことか？」

それに対してリアがコクリと首を縦に振る。

正直に言つて刀弥としてはここや一階でも十分広いと感じていた。
にも関わらず、さらに広いとなると一体どのくらい広いのかイメ
ージすることもできない。

「……行ってみるか」

結局、刀弥は想像するのを諦め実物を見ることにした。

「それじゃあ、行こー！ー！」

それにテンションの上があったリアが応え、二人は地下へ降りるため転送装置へと向かうのだった。

「……広すぎだろ」

それが刀弥の目の前の現実に対する正直な感想だった。

刀弥の目の前には膨大な空間が広がっていた。

ドーム状の壁と天井。塔の一階や最上階と比べてみても、広さでは間違いなくこちらが上だろう。

「本当、広いね」

そう言いながらリアはオーシャルでこの光景を撮ろうとしている。それを視界の片隅に収めつつ、刀弥は辺りを見回した。

ドーム状のこの空間の中には、いくつもの建物らしきものが建っていた。

町みたいなところだな。

それが刀弥のここを見た印象だ。

ふと気付くとリアの姿がない。視線を巡らしてみると、遠くのほうにそれらしい姿があった。どうやら撮るのに夢中で刀弥のことを

忘れてるらしい。

仕方なく彼女の後を追いつながら、建物を眺めていく。

建物は外から見る分には構わないが、入るのは禁止されているようだ。入り口と思わしき部分には紐やテープらしき物が張り巡らされていた。

加えて周囲には係員と思わしき者の姿もある。これではまず侵入するのは無理だろう。

「ただいま」

しばらくすると、撮り終えて満足した様子のリアが戻ってきた。

「十分撮ったのか？」

「もちろん」

ご機嫌な声でリアが返事を返してくる。その態度から十分満喫したことが伺えた。

「そうか」

そんな彼女を見て、つい刀弥も顔をほころばせてしまう。

「ねえ、刀弥はここを見てどう思った？」

すると今度はリアがそんなことを訊ねてきた。

「そうだな……俺は町みたいなところだなって思ったな」

周囲に視線を巡らしながら、刀弥は己の感じたことを正直にリア

に話す。

「町？ こんな地下に？」

その内容にリアが反応を示した。

「まあ、俺にはそんな風に見えただけの話だ。そう言うリアこそ、ここを見てどう思ったんだ？」

その問いにリアが考え込むそぶりを見せる。やがて彼女は苦笑と共にこう答えを返してきた。

「ごめん。凄いつていう感想しか思い浮かばなかった……」

「いや、別に謝らなくてもいいだろう」

別に彼女の感想に刀弥はケチを付けるつもりはない。どう感じたかなんて人それぞれだろう。

改めて刀弥は建物を見る。塔の壁と同じ素材を使っているのか、建物は塔と同じ紺色をしていた。

これが本当はどういう建物なのか刀弥としても興味がないわけではない。

これだけの建物だ。まず間違いなく建てた存在がいる筈だ。にも関わらずその痕跡は未だ見つかっていない。

中々面白い話だと刀弥は思った。

建てた者がいるはずなのに、その建てた者がいないという矛盾。この謎はかなり強烈だ。

なにせ当たり前であるはずのことが否定されているのだ。興味の

ある者ならこの謎を解こうと躍起になるだろう。

それが遺跡を調べている人たちの原動力なのかもしれないなど、そんなどうでもいいことを刀弥は考えていた。

「さてと、時間も時間だし、そろそろここを出て町に行こうか」

そんなことを考えていると、リアがそう言って町に行くことを提案してきた。

「ああ」

刀弥としてもそろそろ町へ行つて、宿屋で休みたいと思っていたところだ。

そうして二人は転送装置で一階に戻ると、エルゲスという町行き
の馬車に乗ってワートから去っていくのだった。

三章一話「観光」(1)(後書き)

ようやく3章の開始です。

読んでくださる皆様。また、よろしくお願ひします。

三章一話「観光」(2)

「……町も遺跡なんだな」

それが町を見た刀弥の最初に出てきた言葉だった。

刀弥の目の前にはエルゲスという町の光景が広がっていた。

町のほとんどは紺色の建物で、人々はそんな建物の中で生活していた。稀に木や別の材質を用いたと思われる家なども見られるが、それは極少数だ。

床も同じ素材なのか、紺色の床が一面に広がっている。

「うん。ゲートのあったラーネスみたいに、新しく町を作ったところのほうがこの世界では少数らしいよ。大半は調査済みの遺跡を拡張するような形で町にしてるんだって」

「へー」

そんな言葉を漏らしながら刀弥は床を見る。そこには紺色の床があった。この床がある範囲が遺跡のあった場所なのだろう。

そんなことを考えながら彼は視線を正面へと戻す。

すると、目の前を奇妙な物が通りすぎていった。

人ではない。それほど大きくないので当然だ。大体、刀弥の腰くらいの高さだろうか。

体は紺色でそれが光沢を放っていた。全体的に体が大きく手足が短い。顔と思わしき部分には大きなレンズのような一つ目が付いていた。

「なんだ？ あれ」

何気なく出てきたそんな言葉。そんな彼の疑問にリアが応える。

「ゴーレムだね。一般的な定義としては体内に動力を貯める機関と思考する機関を有する人工物がそれになるかな。動力がマナでもそれ以外でも名称は変わらないよ」

つまり、鳥や猫の姿をしていても、その機関があるならゴーレムと呼ばれるわけだ。

目の前のゴーレムは積み重ねた本を両手に持って歩いていた。察するに、お使いでも頼まれたのだろう。

「凄いな。こんな物もあるのか」

「リアフォーンの遺跡はゴーレムがガーディアン守護者として警備してたみたいだよ。今のはその技術を使って作った奴かな？」

そのゴーレムは少しの間まっすぐに進むと、やがて曲がり角を曲って見えなくなってしまった。

それを見送って再び二人は歩き始める。

町中を歩いていると、兵士と思わしき鎧を着た人達がところどころに立っていた。

それぞれ建物の入口などに立っていることから重要施設を守っているのだろう。

そんなことを考えながら歩いていると、隣にいたリアが何かを見つけたのか突然、走りだした。

彼女の行く先、そこには露店があった。露店にはワートの時と同じく絵や写真が並んでいる。おかげで刀弥はすぐに事情を理解できた。

程なくしてリアが戻ってくる。

「また買ったのか？」

さすがに今回は刀弥も呆れ気味だ。

「だつて〜」

そんな彼の反応にリアが何か言い訳しようとするが、その口を刀弥は人差し指で抑えこむ。

「言い訳は別にいい。それよりも……」

宿屋を早く見つけようと言いかけたところで、刀弥の言葉が止まった。

リアがどうしたのかと思い、彼の視線の先を見ると、そこには本屋らしき店がある。

「悪い。寄り道していいか？」

「いいよ。私ばかり買い物してまし」

リアがそう返答し、二人は本屋へと入っていった。

店自体はそれほど広くはない。けれども、肝心の本は三つの棚の両面にびっしりと収まっていた。

刀弥はその中から好みの本があるか確かめるために、抜いては読んで戻すという作業を何度も繰り返す。

その間、リアは適当に本を物色していた。

やがて刀弥が二つの本を持ってカウンターに向かっていく。

刀弥が本を買い終え、それをスパーサーに入れたのを見計らってリアが彼の傍まで寄ってきた。

「待たせたな」

「ううん。全然」

そうして二人は宿屋探しを再開するために、本屋から出ていくのだった。

二人が見つけた宿屋は遺跡の建物を利用したものでなく、後から建てた建物だった。

白い壁と木の床。刀弥の感覚ではありふれた建物だ。

そんな光景に刀弥はわけもなく落ち着いてしまった。紺色の建物や床が異質な物に見えるせいか、どことなく落ち着かなかったのも

理由としてはあるのだろう。

カウンターに行くと言った店の主人が二人を出迎えた。

「すみません。部屋は空いてますか？」

「二人部屋なら空いてるよ。他は満杯だ」

打てば響くように、すぐさま主人が返事を返してきた。

「どうする？」

「……ここにしよう」

少し悩んだ後、刀弥はそう返答した。それに、リアが僅かばかり目を見開く。

「ご、誤解するな！？ ……正直、ここが一番落ち着きそうな気がして他のところに行きたくないだけの理由だ」

そんな彼女の反応に慌てて刀弥がその理由を答えた。
なるほどとばかりにリアが頷く。そうして彼女は早速その部屋をとることにした。

鍵を受け取り、二人は部屋へと向かう。

中に入ってみると、素朴な感じの部屋が二人を出迎えた。

白い壁と木の床。窓の外には紺色の町並みが広がっている。

「明日はどうするんだ？」

そんな情景をひとしきり眺めた後、刀弥がリアのほうへと振り返って訊ねる。

「明日はリアクスっていう遺跡に行こうと思ってる」
「また遺跡か」

呆れた声を出す刀弥。けれども、その顔は少し笑っていた。
どんなところかは聞かない。そのほうが楽しみが増えるだろうと思っただからだ。

「あ、そうだ。リア」
「なに？」

と、ここで刀弥はある事を思い出し突然、リアの名前を呼んだ。
呼ばれたリアが応答を返す。

「明日の朝。稽古に付き合ってくれないか？」
「いいよ。対魔術師の修行？」
「そんなところだな。人によるんだろうけど、少しでも慣れておきたいから頼む」

刀弥が思い出した事。それは対魔術師用の修行だった。
刀弥にとっては全く未知の術。これまではモンスターとの戦いが多かったが、最初に出会った盗賊のような連中だって旅を続ければ出会っただろう。その中には魔術師だっているかもしれない。
そんな者達と戦えるように刀弥としてもある程度、魔術師との戦闘に慣れておきたかった。

もちろん、使う魔術が人によって変わる以上、リアで通じた戦い方が他の魔術師に通じるとは限らないだろう。

ただ、魔術師の戦い方とて、いくつかのパターンに分けることは可能だろうし魔術特有の特徴もあるはずだ。彼女と稽古することで、

なにかしらの成果は必ずあるはずだと刀弥は考えている。

「手法はシェナさんがやってた感じのほうがいい？」

「できればそのほうがいいけど、無理か？」

その確認の問いにリアは首を横に振って答えた。

「うん。学院にいたときに非殺傷設定の魔術式をいくつか組んでるから、それを使えば大丈夫かな」

「なら、頼む」

それを聞いて刀弥は少し安堵の顔を見せる。

「うん。任せて……とここでさ、お腹も空いてきたし、そろそろ晩御飯を食べに行かない？」

と、話が一段落した所でリアが晩御飯の話振ってきた。

確かに彼女の言う通り、刀弥のお腹もまた空腹を訴えている。

「そうだな。俺もお腹が空いてきたし外で何か食べるか」

宿屋には食堂もあつたが、折角なので外で何か食べたいと思ったのだ。

「刀弥はどんなのがいい？」

「できたら、この世界ならではのものを食べてみたいな」

どこか余裕のある笑みを見せる刀弥。

それにリアが笑みで応え、二人は晩御飯を食べるために部屋を後にするのだった。

鳥の囀りが朝の到来を知らせ、日差しが地平線より登り始めた。紺色の壁や床が日を浴びて眩しく煌めき、その輝きが光を隅々にまで行き渡らせる。

そんな目覚めを迎えた町の外。そこに二人の人間が向かい合っていた。

刀弥とリアだ。二人は武器を構えていた。昨日、刀弥の言っていた稽古をするためだ。

「それじゃあ、いくよ」

「ああ、いいぞ」

そんなやり取りを交わした後、リアが『フレイムボール』で炎の珠をいくつも生み出す。

「一応、非殺傷用に魔術式は組んでるけど当たれば痛かったりするから、刀弥は頑張っつて対処してね」

「善処はする」

「じゃあ、いくよ」

その言葉を合図に炎の珠の群れが刀弥のもとへと迫った。

すぐに左へと飛ぶ刀弥。だがその直後、炎の珠の群れが右と左、二手に別れて曲がる。

「飛ばす方向は別にまっすぐだけじゃないのか」
「構築した魔術式にもよるけど、無茶な軌道じゃない限りは、事前に軌道を設定することはできるよ」

今回の場合、刀弥が避けることを予期して事前に曲がるように軌道を設定していたということだろう。ただ、どっちの方向かまでは予測出来なかったので右、左とそれぞれ二つに別けることにしたよ
うだ。

ともかく今は対処に集中する。

先の話通りなら軌道設定は基本的に事前に行う必要があるらしい。ならば、彼女の狙いを読み切れれば、後はその読みから脱するだけで軌道から逃れることは可能になるということだ。

恐らく、炎の珠の軌道変更はこれ以上ないと考えていいだろう。
故に刀弥は炎の珠の群れへと飛び込んだ。

炎の珠の間は人がどうにか通り抜けるだけの隙間がある。そこに刀弥は己の体を入り込ませたのだ。

そうして炎の珠を通り抜けた刀弥。

そんな彼に今度は『エアアロー』が飛んできた。

さすがに風というだけあって速度は速い。飛んでくる風の矢の数は九本。それが刀弥を包みこむような軌道でやってくる。

「フレイムボールと違って軌道の変更が緩くないか？」

それを見抜き刀弥は矢群の中央に飛び込んだ。

浅いカーブの軌道で飛んでくる風の矢は彼を捉えることができずに次々と彼の横を通り過ぎていく。

「それがその『エアアロー』の軌道の限界って言えばいいのかな？ さつきも言ったよね。『無茶な軌道じゃない限りは』って」
「……ああ、そういうことか」

つまり可能な軌道は構築した魔術式によって異なるということだ。その辺も上手く見極めれるようになれば、魔術師との戦いが楽になりそうだなと刀弥はそんなことを考える。

「っということであつと注意点」

そう言つと同時にリアは再び風の矢を放ってきた。

しかし、気のせいだろうか先程よりも遅い。

飛んでくるのは左から右への浅い横カーブを描いた軌道。狙いは刀弥は左側。

そのため、刀弥は右前へと飛び込むように動いた。だが、そんな彼の行動を予測してたかのように風の矢が急激にその軌道を変える。

「な!？」

これには刀弥も驚いた。

先程のエアアローはこんな軌道をとっていなかった。リアも言っていたはずだ。『それがその『エアアロー』の……』

そこまで思い出して刀弥はあることに気が付く。とはいえ、まずは目の前の事態に対処するのが先決だ。

風の矢は刀弥の目前まで近づいてきている。右や左に飛ぶ暇はない。

だからこそ、刀弥は後ろへと倒れることを選んだ。

風の矢群は刀弥の腰よりも上、胸の辺りの高さを飛んでいる。結

果、倒れていく刀弥の目前を風の矢が次々と通り過ぎ去っていく形となった。

地面に倒れたと同時に受身を取り、すぐさま刀弥は起き上がる。そして、先程の疑問を解決するため、確認の問いをリアへと投げるのだった。

「なあ、リア。ひよっとして魔術の名称って近似の現象なら全てその名称に一括りされてるのか？」

その確認は正解だったらしい。それを聞いてリアが笑みを返す。

「そうだね。魔術式の内容問わず、ある程度近似の現象ならその名称で一括りにされてるの。一つ一つに名称つけてたら面倒だから。まあ、人によっては独自の名称を使っていたりするけど。だから、同じ『エアアロー』でもその魔術式によって多少の違いがあるの」

先程のもそういうことなのだろう。最初の『エアアロー』を普通の『エアアロー』とするなら、二度目の奴は速度を落として代わりに深い軌道をとれるように魔術式を弄ったものなのだろう。

一つを見極めたと思って油断していたら、足元をすくわれるぞというリアからの警告だ。これには感謝しないといけない。

「ほら、次いくよ」

そう思っていると、既にリアが次の魔術を起こしていた。今度は雷の球体が単体で現れる。

『ボルトシューター』

雷の球状にして放つ魔術だ。

「この系統は私、あまり得意じゃないんだけど……」

独り言とも言える小さな声でリアがそうこぼす。その直後、雷の球体が刀弥に向かって放たれた。

今までのことを考えると、フレイムボールやエアアローと同じな
んてことはまずないはずだ。

なにか起こるのか、その球体に集中しながら、ともかく攻撃から
逃れるために刀弥は右へと飛ぶのだった。

すると、彼の後を追うように雷の球体も右へとその進路を変える。
刀弥の動き読んでリアが事前に軌道を設定していた可能性もあり
得るが、それだと最初のフレイムボールと同じだ。

もしかやと思い、刀弥は再び右へと飛ぶ　と見せかけて左へと飛
んだ。

そうすると、雷の球体は右へと行こうとしたが、刀弥が左へ飛ん
だのに合わせて急いで左へと向きを変えた。

ちらりとリアのほうを見ると、彼女は慌てた顔を浮かべながらじ
っと刀弥のことを凝視している。

おかげで、この魔術のことが少しわかった。

「これは発動後も操作できるタイプか」

「正解。そういう風に魔術式が組まれてる。ただ、操作に集中し
ないといけないから結構大変なの。私じゃ一個でも無防備になりや
すいし……」

つまり扱いの難しい魔術ということだろう。
ともかく、この攻撃に対処しなければならぬが、雷なので斬つて破壊するという選択肢は有り得ない。と、なると……
その思考と共に刀弥は足元から小石を拾うと、なんとそれをリアのほうへと投げつけた。

「え？」

思わずそんな声を漏らして、慌てて小石を避けるリア。その隙を突いて刀弥は雷の球体の横を突破した。

思った通り、他のことに意識を大きく取られると操作ができないらしい。後は視界を奪うなどの方法もありだろう。見たところ、操作はリアの視覚が頼りのようだ。

リアは雷の球体の操作を諦め、新たな魔術式を構築している。どうやら雷の球体で追いかけても間に合わないかと判断しようだ。

リアが新たに発動した魔術。それは以前フォレストウルフたちと戦ったときに自分たちを守ってくれたあの魔術だった。

『ウォールストーム』

リアの周囲に竜巻の壁が現れ刀弥の侵攻を遮る。

フォレストウルフがどうなったかを知っている刀弥としては、足を止めてそれを眺めるしかない。

「魔術式によっては発動中、体内で生成されているマナを常に供給できるように組んでいる魔術もあるの。その場合マナ切れで消えることはないから……」

「術者の精神力次第ってことか」

「そういつこと」

刀弥の返事にリアが笑みを浮かべて頷いた。

だが、そうなると九ティム 約三〇分程 ぐらいはこの状態が続くことになる。しかも気を抜くこともできない。気を抜けばその瞬間、リアが『ウォールストーム』を解いて攻めてくるだろう。

もつとも、三〇分近くずっとこの状態はまずないだろう。そんなれば不利なのは精神的に弱ったリアなのだから、必ずどこかで隙を突いて攻めてくるはずだ。

とはいえ、リアが攻めてくるとしたら、それは彼女が有利になる状況だろうから主導権は以前、彼女が持っているままだと言える。

それが嫌ならなんとかして刀弥から攻めないといけないが、残念ながら刀弥にこの竜巻を突破できる力も術もない。

そうなると残るのは竜巻が切れた瞬間を狙うことだけ。攻撃を誘うという手も浮かんだが、それだけでは弱い。他にないものかと刀弥は考え込む。

竜巻の高さはおよそ刀弥の身長之三、四人分。近くに高い木もないので上から飛び込むという手も使えない。

「……穴を掘って下からなんてのは無理だしな」

そう呟きながら刀弥は地面を見る。と、刀弥の目に小さな小石が映った。

それを見て刀弥は先程の雷の球体での対処を思い出す。あの時は小石を投げて意識を雷の球体の操作から逸らした。

今回はそちらの効果は薄いだろつが、攻撃手段としては有効的かもしれない。

「やってみるか」

そうして彼は適当な石を拾うと、それを空高く目掛けて投げつけた。

石は放物線を描きながら、高くまで上がっていく。そうして頂点まで辿り着くと後は重力に引かれ下へと落ちていった。落ちた先にあるのは竜巻の縦穴。

「痛っ!?!」

石は見事にリアに当たったらしい。竜巻の中から声が返ってきた。その調子で刀弥は石を何度も投げ続ける。

「ちょ、ちょっと、刀弥。痛い、痛いって」

「と、言ってもこれでも一応攻撃だからな」

一つ一つのダメージは微々たるものだろう。とはいえ、それを何度も食らえば、さすがにまずいだろつし、もう少し大きな石ならかなり効くはずだ。

「~~~~!! わかった。降参。降参」

その言葉と共に『ウォールストーム』が解かれ、そこから頭をさすったリアが姿を現した。

「刀弥の意地悪」

「仕方ないだろ。あれしか手がなかったんだから」

恨みがましい目を向けてくるリアに刀弥がそう弁明する。

「……まあ、そうかもしれないけど」

理解はするが感情は別ということなのだろう。まあ、それは仕方がない。

「まあ、今日はこれで終了だな」

「そうだな」

遠出もする以上、これ以上の疲れを残すのは避けたほうがいいだろう。

「とりあえず汗を流して出発かな？」

「そうだな」

そうして二人は汗を流すために、自分達が泊まる宿屋へと戻るところにしたのだった。

三章一話「観光」(3)

「それで、これに乗るのか？」

目の前にある乗り物を眺めながら、刀弥はリアにそう尋ねる。

二人がいるのは湖だった。目前の乗り物はその湖の上に浮かんでいる。

「うん。リアクスはこの湖の底にあるの。だから、これに乗ってそこまで行くんだって」

「なるほどな」

刀弥は頷きつつ改めてその乗り物を見上げた。

かなり大きく上から見れば角を丸くした二等辺三角形みたいな形状をそれはしていた。真ん中辺りが楕円状に盛り上がっており、そこが人の乗るスペースとなっている。刀弥からすれば船のように見えるデザインだ。

色は青色。人の入るところはガラスのようなドーム状になっており、恐らく水中の様子を一望できるようにしているのだろう。

「ほら、早く乗ろ」

外から眺めるのに熱中しすぎたようだ。

いい加減焦れたリアがそう言っつて刀弥の手を引く。腕を引かれた刀弥はそのまま彼女と乗り物の中へと入っていった。

中に入ってみると思ったよりも中は広々だった。席は二列の席が右、中央、左の三つに列をなして分けられている。

刀弥達はそのうちの左側の列の席に座った。リアが外側で刀弥が

内側だ。

周囲を見渡してみると、自分達以外にも大勢のお客が席に座っていた。皆、乗り物が出発するのを今か今かと首を長くして待っている状態だ。

やがて出発時間が訪れ、乗り物がゆっくりと動き始めた。

動き始めた乗り物はゆっくりと己を湖の中へと沈めていく。徐々に上がっていく水面の境界。その様子を刀弥たちは静かに眺めていた。

そうして乗り物全体が遂に湖の中へと沈んだ。沈み終えた乗り物はそのまま目的地へと向かっていく。

乗り物が湖に潜れば、当然外に映るのは湖の景色だ。

水の中から見上げる太陽。そして湖の中を泳ぐ魚や生き物たち。まるで彼らが空を泳いでいるかのようだ。

「わあ、綺麗〜」

そんな光景にリアも刀弥も思わず見惚れていた。

しばらくの間、乗り物はそんな湖の空を泳いでいた。しかし、それも時期に終わりを迎える。乗り物の進行方向の先に目的地が見えてきたからだ。

「あれが……」

刀弥の見つめる先、そこには確かに建造物の姿があった。

色はやはり紺色。遠目から見える形状は菱形に近い。

見えてきた目的地に乗客たちは皆、感嘆の声をあげる。

そうして、乗り物はその建物の中へと入っていくと空気のある場所へと浮かび上がった。

案内に従い、乗り物から降りる刀弥達。

人の流れに従い乗り場から移動すると、多くの人達が行き交う通りに辿り着いた。

天井には湖の情景が映し出されている。けれども、刀弥の記憶が正しければ屋根に透明な部分はどこにもなかったはずだ。

「ってことは、映像か？」

そんなことを呟きながら、二人は通りを歩いていた。

湖を通して降り注ぐ蒼の光が通りを明るく照らしている。

通りの人々は大半が上を見上げて歩き、時折小さな子供が地面に映る魚の影を追いかけたりしていた。

通りには左右にいくつもの部屋があった。ドアの種類はスライド式の自動ドアらしい。

時折、ドアの上に看板が掲げられているところはお店のようだ。

ドアが横にスライドし、そこから人が出入りでかいしているのをたびたび見掛けた。

無論、絵や写真を取り扱う店もあり、そこでまたまたリアが買い物をしたの言うまでもない。

「昨日の奴とかと合わせると、かなり使ったんじゃないか？」

呆れ顔の刀弥が買い物直後のリアにそう訊ねた。

「あははは……実は刀弥の言う通り、予定以上にお金使っちゃいました」

乾いた笑いを出しながらリアが答え、舌を出す。

「お前な……」

「でも、この気持ち、いつか刀弥にだってわかる日が来るよ！」

「……できたら分かりたくないな」

苦し紛れに言い放ったリアのその言葉。

その言葉に対して刀弥は彼女に聞こえないように小さな声で感想を漏らすのだった。

そんなこんなで通りを歩いていると、二人は広い空間に辿り着いた。

あちこちに置かれたテーブルと観葉植物。天井だけでなく壁にまで映しだされた湖中の風景。そして数々の飲食店。

どうやらこの広場は休憩所も兼ねて飲食店街らしい。部屋を改造したお店や露店、屋台、様々な店が立ち並んでいる。

「そついえはそろそろ昼頃だな」

「じゃあ、折角だし……ここで食べていこうか」

その意見に刀弥が反対する理由はない。迷わず彼は頷く。

そうして二人はまず席を確保すると、それぞれ適当な食べ物を買って周辺を散策する事にしたのだった。

それから少しして、二人が席に帰ってくる。

二人共いろいろと買ったようで、それぞれ両手いっぱい昼食となる食べ物を抱えられていた。

それをテーブルに並べ早速、二人は昼食を食べ始める。

二人が確保した場所は壁に近く、それ故に自然と二人の視線はそちらの方に向けられた。

壁には湖の生き物たちの泳ぐ姿が映し出されていたからだ。

「まるで水族館みたいだな」

「水族館？」

ポツリとこぼした刀弥の感想にリアが反応を示す。

「ん？ ああ、俺の世界にある水に関わる生き物を鑑賞できる娯楽施設のことだ」

「へ〜。刀弥の世界じゃ、そんなものまであるんだ」

刀弥の説明を聞いて感心するリア。

「ちなみにどんな生き物があるの？」

「ん？ 基本は魚だけど、哺乳類もそれなりにはいるな」

そうして二人は刀弥の世界の話で盛り上がっていく。

基本的にリアが尋ね、それに刀弥が己の記憶を頼りに答えるという形式だ。

時折、壁の映像に生き物が現れると二人は話を中断してそれを眺め、いなくなるとまた話を再開させるといふ形を何度も繰り返す。

その度にリアがさも自分の知識のようにその生き物を紹介するが、実際はテーブルに貼られている紹介内容を読んでいるだけだ。

もちろん、オーシャルにすっかり収めることも忘れてはいない。

そうやって二人は楽しい昼食時間を過ごしたのだった。

昼食を終えると、二人は来た道とは違う通りで乗り場へと向かうことにした。

「この後はどこに向かうんだっけ？」

その途中、通りを歩きながら刀弥がリアに次の目的地を訊ねる。

「フォーネスっていうリアフォーネスの首都のほうに行こうかなって思ってる。遺跡研究の中心で、いくつかの調査結果や資料を一般公開しているところがあるんだって」

「なるほどな。今日は寝て明日巡るって感じか。それが終わったらどうするんだ？」

その問いにリアは少し悩むような顔を見せた。

「実を言うと、それで行きたいところは全部済む感じかな。その後どうするかは、まだ決めてないの」

「そうなのか？」

驚く刀弥にリアがコクリと頷く。

「刀弥は行きたいところある？ もちろん適当な世界のイメージでいいから。もし、そういう世界があったらそこに行こ」

「随分と適当な選び方だな」

彼女の提案してきた選び方を聞いて思わず刀弥は苦笑してしまった。

「特に行きたい場所がないなら適当でもいいと思うけどな」

「まあ、そうかもしれないけど……」

それにしても適当な世界のイメージで選べは意外だった。それだけいろいろな世界があるのだからと刀弥はつついそんことを考えてしまう。

「まあ、無理に急ぐことはないしね。なんならもう少しこの世界に留まってもいいし」

それを聞いて、そうだなと刀弥は納得した。

無理して出発する理由などどこにもない。行きたいときに行けばいいだけだ。

旅をすることに義務感みたいなものを感じる必要など全くない。自由気ままに望むときに望む場所へ行く。それが旅なのだから。

「まあ、その辺は宿屋なり馬車なりの落ち着いたところでゆっくり考えるか……それにしてもこの遺跡はなんでこんな湖の底に建てたんだろうな」

それを可能とした技術も凄いが、その理由も刀弥としては気になるところだった。

わざわざ湖の底なんかこんな物を作ったのだから、ここでなければいけない何らかの理由があったはずだ。

「そうだね。なんだろう？」

彼の疑問にリアも同意し考え込む。

想像しても意味のないことではあるのだが、やはり刀弥としては

色々想像してしまう。

「湖の調査用の施設？」

「湖の生き物の研究用施設とかもありそうだけど」

そうやって二人は自分たちが思ったことを次々と口に出しながら
歩を進めていく。

やがて、二人は乗り場のところまで戻ってきた。

二人が戻ってきた時には丁度、乗り物が出発する時間だったようだ。もう時期出発する旨の案内が二人の耳元にまで届く。

それを聞いて二人は急いで乗り物に乗り込んだ。

そうして乗り物が出発。一旦、水の中へと沈むと湖の傍にある乗り場へと向けて己を浮上させていくのだった。

三章一話「観光」(3) (後書き)

ということでもたまたま、観光の話です。

といっても、それも今回まで次回は少しバトルありの予定です。

今のままなら一話ラストになるとは思っているのですが、果たしてどうなることやら…… (おい)

三章一話「観光」(4)

首都フォーネス。リアフォーネに一番最初に建てられた街で、全てのリアフォーネの情報が集約された遺跡調査の中心部といえる場所だ。

街並みはエルゲスと同じで遺跡と人工物の混合だが、人の数や規模でいえばやはり首都だけあってこちらのほうが大きい。

そんな首都の街並みの中を刀弥とリアは歩いていた。

オーシャルで街並みを撮影するリア。刀弥はそんな彼女の後ろ姿を眺めている。

「しかし、首都だけあっているいろいろあるな」

「そうだね。ゴーレムの姿も結構見るし」

そう言いながら見渡す刀弥と彼の言葉に反応を返すリア。

確かにリアの言う通り、周囲には人々だけでなく様々なゴーレムの姿もあった。

エルゲスで見たような小さいものから自分たち以上の大きなもの、中には人型でないものまである始末だ。

それぞれ、荷物を持ったり荷台を引いたりしている。基本的に人の仕事を手伝うのが主な目的らしい。

元々は守護者ガーディアンだったことを考えると、戦闘用のゴーレムも当然いるのだろう。ひよっとしたら今手伝っているゴーレムの中に混じっているのかもしれない。

リアの態度からタイプは違うが、ゴーレムの存在そのものは珍し

い存在という訳でもないらしい。

その辺あたりのことについて刀弥が聞こうとした時だ。

突然、遠くのほうから騒ぎ声が反響こだました。

「なんだ？」

突然聞こえたその声二人は驚き、声の聞こえた方を目を向ける。すると、騒ぎの音と共に何か巨大なものがこちらに向かって走ってくるのが見えた。

人を吹き飛ばしながら走るそれを見て人々は驚き恐れ、その進路上から逃げ出していく。おかげで、刀弥達はその正体をじっくりと眺めることができた。

身長は刀弥の大体二倍くらいだろうか。結構大柄な体格で、手足も人の体並みの太さを持っている。頭の部分は鎧の甲冑みたいなデザインで目の機能は恐らくその向こう側に隠されているのだろう。

ゴーレムだ。巨大なゴーレムが刀弥たちのほうに向かって走ってきているのだ。

人々は暴走だ、逃げろなどと叫びながら走っている。

そのため刀弥達もそれに習って脇に退こうとした。

だが、ゴーレムは刀弥たちの付近で止まったかと思うと、巨大な腕を振り回して周囲を薙ぎ払った。

すぐさま刀弥はリアの頭を抑え伏せる。

薙ぎ払ったおかげで周囲にあった屋台や露店の商品や破片が舞い散り吹き飛び、それが人々を傷つけることになった。

幸い、刀弥達は怪我を負うことはなかったが、こんなものを放っておけば周囲の人々にさらなる被害をもたらすに違いない。

刀弥は壊すことを決心する。

「リア。壊すぞ」

それだけ告げて刀弥は暴走ゴーレムに向かって走りだした。

まずはゴーレムの装甲の硬度を確かめるために体に刀を斬りつける。

しかし、予想通りだったというべきか、刀は甲高い音をたてて弾かれてしまった。手応えからしてどうやら硬さはロックスネークよりも上らしい。

暴走ゴーレムは攻撃をしてきた刀弥を敵と定めたようだ。

顔をまっすぐ彼に向け、大ぶりの右拳を放ってきた。

当然そんな攻撃、刀弥に当たるはずもない。すぐさま懐へと飛んで避ける。

と、その時、暴走ゴーレムの胴部分が開き、そこから大量のレンズのような物が現れた。

直感からの警告に従い間髪を入れず右へと飛ぶ刀弥。直後、彼がいた場所を光弾の群れが通り過ぎた。

標的を逃した光弾はそのまま奥の紺色の建物に着弾。着弾音が周囲に反響した。

「射撃か」

胴を動かし刀弥を追うゴーレム。刀弥はただ走って逃げるだけだ。面のような範囲で連射される光弾。発射の予兆を見抜ききれてな

い現状、かいくぐるのは難しいし、そもそも突破する理由もない。射線にのらないように逃げるだけで十分だ。

攻撃は彼女に任せればいいのだから……

その直後、暴走ゴーレムに襲いかかるものがあつた。それは氷の鎖だ。

氷の鎖が暴走ゴーレムを縛り上げ、縛った箇所を起点にそのボディを凍らせていく。

『アイスチエーン』

氷の鎖で相手を束縛する魔術だ。

暴走ゴーレムは巻き付いた氷の鎖を力尽くで破ろうとする。

たちまち氷の鎖は引き千切れ砕けた。だが、それでも十分な時間、相手を止めることには成功した。

既に刀弥は暴走ゴーレムの傍、死角となる背後に回っている。

相手の装甲が硬いは先程の攻撃でわかつている。だが、それでも攻撃が通る部分はある。

装甲と装甲の間隙だ。刀弥はそこを狙う。

狙う箇所はその巨体を支える足。相手の動きを封じるためだ。そこに刀弥は水平の一撃を放つ。

刀は振り抜かれ、見事暴走ゴーレムの巨体と左足を分けることに成功した。

左半分を支えるものを失い、暴走ゴーレムは左へと傾いていく。

なんとか暴走ゴーレムは左腕で己を支えるが、再び接近した刀弥

によってそれも断たれてしまう。

今度こそ支えを失った暴走ゴーレムは為す術なく地面に倒れた。

巨体が倒れたことで大きな音が辺りに響く。

しかし、巨体が倒れたにも関わらず、地面に穴が空くことはなかった。そのことに刀弥は戦闘中であるにも関わらず驚いてしまう。

倒れた暴走ゴーレムはそれでも敵を排除しようと胸部の発射口を刀弥に向けようとするが、リアのアイスチェーンが再び暴走ゴーレムの体を拘束。暴走ゴーレムを地面に抑えつけて凍りつかせていった。

「これで大丈夫かな？」

「たぶんな」

呟くりアに歩み寄る刀弥。

この時、二人は戦いが終わったとばかり思っただけを抜いていた。だが、それが油断となってしまう。

突如、暴走ゴーレムがまだ凍りきっていない右腕を二人の方へなにか向けると、なんとその右腕を飛ばし放ってきたのだ。

リアは視界で刀弥は音に反応して、これを回避する。しかし回避するのに精一杯で自分達の後ろがどうなっているのか確認するのを怠ってしまった。

「な!？」

右腕の行く先に驚く刀弥。あろうことか右腕の進行方向には一人の小さな女の子が立っていたのだ。

女の子は事態を理解してないのか、呆然とした表情で迫る右腕を

見ている。

刀弥は急ぎ追おうとするが、間に合わないのは本人が一番わかっていた。それでも彼は全速力で走ろうとする。だが、その時だ。

突然、何かが右腕を横から貫いた。

攻撃は複数。それがほぼ同時に右腕に穴を空ける。その攻撃で右腕は進路を変え、女の子の横を通り過ぎていった。

結果、右腕は遺跡の家に衝突。凄まじい打撃音と共に停止したのだった。

すぐさま、刀弥は暴走ゴーレムのほうへと振り返る。

暴走ゴーレムは完全に氷漬けになっており、さすがにこれ以上なにかができるとは思えない。

続いて刀弥は攻撃が飛んできたと思わしき方向を見る。すると、そこには一人の男性が立っていた。

柿茶色の髪の毛と常盤色とまわいろの瞳、ナイスミドルという言葉がぴったりと似合うような顔立ちだ。

服装は茶色と深緑の色をした革の上着と白のシャツに栗梅色くりうめいろのズボン。

男の右手には細身の剣レイピアが握られていた。先程の攻撃から考えると、魔具の可能性が高いだろう。

男は右腕にレイピアを持ったまま、二人のもとに近付いてくる。

「二人共大丈夫かい？」

そうして男は二人に声を掛けてきた。

「は、はい」

「見ての通り、大丈夫です」

リアが頷き刀弥が答える。

二人の返事に男は笑みを浮かべて頷いた。

「それよりもこちらのミスをフォローしてもらってすみません」

「ん？ ああ、なに気にするな。本来であれば君たちがしていたことは私たちの仕事だ」

男の返答に二人は首を傾げた。

「仕事ですか？」

リアの呟きとも言える言葉に、男は自分が何者か名乗っていないことに気が付いた。

「ああ、失礼。私はカイエル・ブラット。リアフォーネの軍に所属している人間だ。よろしく」

そう言っつて、カイエルと名乗った男は笑みを浮かべるのだった。

— 話終了 —

三章一話「観光」(4)(後書き)

これでよろしくやう三章一話の終了です。

ご覧くださってありがとうございます。

三章一話まで少々お時間を頂きますのでしばらくお待ちください。

三章二話「斬波」(1) (前書き)

三章二話これより開始です。
どうぞお楽しみください。

三章二話「斬波」(1)

暴走ゴーレムの右腕を破壊して逸した男の名前はカイエルというらしい。

とりあえず相手が名乗ったということで、刀弥たちも名乗り返すことにした。

「風野刀弥です」

「リア・リンスレットと言います」

「よろしく。なんにしても助かったよ。被害が拡大する前に止めることができたのは君たちのおかげだ」

そう言っただけカイエルは氷漬けとなった暴走ゴーレムのほうを見る。

「ですけど、そのせいで一人の女の子を危険な目に合わせました」

あれは自分の油断だと刀弥は思っている。気を抜かず相手の動作をしつかりと見ていれば、何かしらの対処はできたはずだ。

「まあ、そんなに責めるな」

そんな彼にカイエルが肩を叩いて励ました。

「実を言えば私自身、君たちが戦っている間にここには着いていた。ただ下手に割り込むとややこしくなりそうだったので様子を見ていたが、なにかあればフォローするつもりではあったんだ。つまり、多少のことならどうにかなっていたんだ。そう思えば少しは気を楽しませてくれるかな？」

とはいえ、刀弥が油断していた事実は変わらない。そのことを考
えるとあまり明るくはなれなかった。

表情の変わらない刀弥を見てカリエルが肩をすくめる。と、その
時だ。

駆ける足音と共に一際大きな声が彼らの耳に届いた。

「ああ！？ 私のガーデイちゃんが！！」

その声に刀弥もリアもカリエルも声のほうへと振り向く。振り向
きざま、カリエルの表情が呆れの顔になっているのに刀弥は気が付
いたが、それがどういう意味を持っているのか彼にはわからなかつ
た。

大声の主は女性だった。

髪は空色のサイドポニー、瞳は青色で丸縁の眼鏡をかけている。
服装は白衣と灰色のタイトスカート。なんというか、研究者だとい
う雰囲気が見てすぐわかるような人物だった。

「むう。装甲と装甲の隙間を斬られてる。これじゃあ重装甲にする
意味が無いわね。多重装甲で隙間を作らないようにするか？ ある
いはいつそ、硬さを捨てて機動力に走るといふ手も……」

「その前に暴走しないゴーレムを作ってください。博士」

呆れた表情のカリエルが女性に話し掛ける。

その途端、女性がピタリと動きを止めた。そして恐る恐るといっ
た様子でカリエルの方へと顔を向ける。

「あ、カリエルさん……」

「全く……これで何度目ですか？　今回は被害はそれほどでもありませんでしたが、これだけ続くとさすがに私も笑ってはいただけませんよ」

「う……すみません」

そう言っただけで彼女は頭を下げる。

その様子を刀弥とリアは傍はたから見ていた。

どうやら彼女がああなる暴走ゴーレムの持ち主のようだ。しかも、先の会話によると何度か同じようなことをやらかしているらしい。

「それとこの二人にも謝ってください。あなたの後始末をしてくれたのは彼らです」

「……はい。すみませんでした。いろいろ手間を掛けさせてしまったようで……」

再び頭を下げる彼女。それに対し刀弥とリアはどう返せばいいのか悩んでしまった。

「彼女の名前はリリス・カナルム。この街に住む研究者だ。博士、彼らは風野刀弥とリア・リンズレット。旅行者……で、いいのかな？」

「あ、はい。それで問題ありません」

その問いにリアが笑顔で返事を返す。

「なんにしても博士。後で部下をよこしますので、今回の暴走の原因しっかりまとめおいてください」

「……わかりました」

リリスの顔は若干涙目だ。まあ、どう考えても自業自得なので刀

弥もフォローする気にはなれなかった。

「そういえばカイエルさんに聞きたいことがあるんですけど、よろしいでしょうか？」

そうして話が一段落した所で、刀弥はずっと気になっていたことについてカイエルに聞いてみることにしたのだった。

「ん？ なんだね？」

刀弥の問いにカイエルは質問の続きを促す。

「先程の右腕への攻撃はどうやったのか気になって……そのレイピア、魔具なんですか？」

言葉と共にカイエルの持つレイピアに視線を向ける刀弥。その視線を追ってカイエルもリアもレイピアを見る。

「なるほど。それが聞きたいことか。残念ながらこれは魔具ではなく普通のレイピアだ。特別な能力などなにも持ってはいないよ」

「じゃあ、先程の攻撃はどうやって？」

その返事に刀弥はさらに質問を重ねる。心なしかその声には興奮の色が混ざっているように聴こえた。

「ああ、それはちょっとした技を使ったんだよ。私の知り合いの間では『斬波』と呼んでいるんだが、空気中の物質に剣や拳などの威力を全て伝えそれを飛ばす技なんだ」

「なるほど」

それを聞いて刀弥は頷くとしばらくの間、考え込む。

「刀弥？」

そんな彼の様子を不思議に思い、リアが声を掛けてきた。

すると、それまで考え込んでいた刀弥は顔を上げてリアのほうを見ると、突然次のようなことを言ってきた。

「なあ、リア。少し我儘をしてもいいか？」

「えっと……我儘？」

疑問を返すリアだったが、刀弥の目がカイエルに向かうのを見て彼の我儘の内容を瞬時に理解する。

「……ああ、そういうことか。いいよ、別に。さっきも言ったけど予定もないし」

「助かる」

感謝の言葉を彼女に述べて、刀弥はカイエルのほうへと向き直った。

そして次のような頼みごとを彼に願い出る。

「カイエルさん。できればその技を教えてくださいませんか？」

ぴしつと足と揃え、手を体の横に置いて頭を下げる刀弥。その仕事草からかなりの真剣さが伺えた。

それはカイエルも感じ取ったらしく、自然と彼の顔が真顔に変わっていく。

「……理由を尋ねてもいいかね？」

そう聞いてくると彼はまっすぐ刀弥を見据えてきた。

その視線に刀弥は一瞬、たじろいでしまふ。だが、すぐに気持ちを切り替えるとカリエルを見つめ返しこう答えた。

「強くなりたいたからです。守りたい人を守れるように……」

カリエルが用いた技。あれを取得することができれば、戦いにおいてかなり有利になるはずだ。

単純に遠距離からの攻撃を得られるだけではない。迎撃、牽制、連携、反撃。思いつくだけでも様々な戦術の幅が増える。

どんな相手がいるのかわからない世界の旅である以上、出来る限り選択肢は増やしておきたいのだ。

刀弥の言葉にカリエルはしばらくの間黙考^{まじっこう}。やがて目を開き刀弥のほうへと視線を戻すと、彼の頼みに対してこう返してきた。

「ふむ。君の思いは分かった。だが、あの技はかなり難しく取得は簡単ではないぞ？ それでも構わないかね？」

「はい」

迷いのない即答。そのことにカリエルは気分を良くする。

「わかった。まずは取得できるかどうかを確認するために、実力を確かめさせてもらおうか」

「わかりました」

まずはチャンスを手掴んだといったところか。この機会を逃さぬようにしないと刀弥は気分を引き締める。

「まあ、ともかく先にこの件からだな。二人には、まだいくつか聞きたいことがあるから本部まで同行してもらっても構わないだろうか？」

「構いません」

「はい」

刀弥とリアはそれぞれそう答えて頷いた。

「博士はまっすぐ家に帰って暴走の原因をしっかりとまとめておいてくださいね」

「わかりました」

消沈した声でそう答えると、リリースはとぼとぼと歩き始める。若干、足取りが重いのは叱られてへこんでいるせいだろう。

「それじゃあ、私たちも行くのでしょうか」

そうしてカイエルが歩き出し、その後を刀弥とリアが付いて行くのであった。

三章二話「斬波」(2)

そうして刀弥たちは街の外にいた。

あれから本部に辿り着いた二人は暴走のゴーレムの件についてカイエルからいくつか質問を受けた。

正直に答えていると二人に関する要件はあつという間に終わり、カイエルから先にここに行つててくれと簡単な地図を渡された。それが今二人のいる場所だ。

見るからに草原のと真ん中で街から適度に離れている。ここなら誰かを巻き込むこともないだろう。

既に空は赤に染まっている。おかげの漂う雲もその影響を受けてやや赤みを帯びていた。

そうやってしばらく待っていると、カイエルがこちらにやってくる姿が刀弥の目に止まった。

「悪い。待たせたね」

「いえ、お仕事もあるのにわざわざ付き合ってもらっているので、謝るとしたらこちらです」

そんな言葉を一通り交わし、両者は位置につく。リアはそんな二人から距離を置いて遠くから眺めていた。

そうしてカイエルがレイピアを抜き、刀弥は刀の取っ手に手をのせた。

「抜かないのかね？」

刀弥の構えにカイエルが疑問を飛ばす。

「これが自分の構えなので」

「そうか」

刀弥がそう返すとカイエルは納得し、それ以上は何も言わなかった。

「それでは始めるとしようか。いつでも掛かってきてくれたまえ」

笑みを浮かべ左手で手招きするカイエル。しかし、刀弥は動こうとはしない。

彼の中の感が迂闊うかつに動くなと警告を促してきたのだ。

一見、飄々ひょうひょうした態度を見せているが、相手は間違いなく強者だ。選択を間違えればあっという間に負けてしまうだろう。しかしだからといってこのまま相手の攻めを待っていても刀弥が押し切られるだけだ。

思考は一瞬、それだけの時間を持って刀弥は駆け出した。

狙うは短期決戦。自身の動きを見切られる前に一気に決着を付ける腹だ。

故に刀弥の最初の動きは己の身を前に崩すことから始まった。やり方としては前に出していた右足の膝の力を抜くだけだ。それだけで体は前へと傾いていく。傾いていく際に力を抜いた右足は前へと押し出す。

重力を利用しているため、この動きに動き出しはない。そのため相手は感知できず反応が遅れてしまいやすいのだ。

だが、それで稼げるのは一步分だ。それでは相手には届かない。なので、刀弥は二歩目を踏み出す事にした。使うのは押し出した右足。己の体重によって膝は曲がっている。それを使って刀弥は地を踏み込む。

風野流剣術『疾風』

現状、刀弥が出せる最大の速度と振りをカリエルに向かって放つ。移動先はカリエルの右側、狙いは彼の足下だ。そこなら彼のレイピアも届かない。

けれども、刀弥は気を抜かない。もし相手が刀弥の想定したレベル通りの実力ならば、この攻撃を対処してくる可能性は十分にあり得るからだ。

そしてその直後、刀弥の想定した通りの事が起こった。

カリエルが選択したのは回避だった。上へと跳躍することで刀弥の攻撃を飛び越えたのだ。

刀弥の攻撃は空を切り、そのまま両者はすれ違う。けれど、カリエルの行動はそれだけでは終わらない。

なんとカリエルは身を回し刀弥のほうへと振り返ると同時にその勢いを利用した突きを繰り出してきた。

当然、すれ違い離れ始めていた刀弥にそのレイピアは届かない。しかし、刀弥はレイピアの剣先から大気の揺らぎが放たれたのを見た。

先の暴走ゴーレムで見せた斬波という攻撃だ。

刀弥は左足が地面に付いたと同時にバランスを右へと無理やり傾

ける。それを持って彼はカイエルの攻撃を避けたのだ。

そのまま転がって起き上がろうとする刀弥。その時、彼の左足に痛みが走った。無理にバランスを崩したせいで左足を捻ってしまったようだ。そのまま、痛みを堪えて彼は起き上がろうとする。

そこにカイエルが接近してきた。

近づいてきた彼は突きのラッシュを見舞ってくる。

速い。そう思えるほどの連続攻撃だ。咄嗟の判断で刀弥は後ろへの縮地を使い、一気にレイピアの間合いから逃れる。

その速度にカイエルが驚く顔を見せた。が、それもすぐに平静に戻り遠距離からの突きを刀弥に目掛けて飛ばしてきた。

それを避けた刀弥は再び地を強く踏みしめ縮地。カイエルに接近しようとする。だが、そこにカイエルの攻撃が飛んできた。

縮地は一步の移動距離を伸ばす移動だ。そのため一度踏み出せば地に足を付けるまで止まることも方向を変えることもできない。それをわかった上での攻撃だ。

反射的に刀弥は刀で防ぐ。

そうして地面に足を付けば、カイエルとの距離は目前だ。

飛び込み刀弥は水平に斬りかかる。

カイエルはその攻撃を伏せることで躲し、レイピアを突いてきた。狙いは左肩。即座の反応で刀弥は後ろへと下がりレイピアの範囲から離れようとする。

しかし、そのレイピアから突きの斬波が放たれた。

後退を予測していたのだろう。刀の防御は間に合わない。

そのまま突きの斬波は刀弥の左肩にぶつかるといった。

「大丈夫かい？ 一応、威力は抑えたから肩を貫いたということはないはずだが……」

戦いが終わり、カイエルが刀弥に歩み寄ってきた。

「はい。大丈夫です」

そう返事を返しながら刀弥は立ち上がる。

確かに彼の言う通り、痛みこそあるものの刀弥の左肩に怪我はない。

それを確認すると刀弥はある方向へと視線を向けた。

「だから、リアも慌てて走ってこなくていいぞ」

その言葉に走り寄ってきたリアが足を緩める。

「全くお前は心配しすぎだ」

「あはは……でもやっぱり、いろいろと心配しちゃうんだよね。刀弥って危なっかしいから」

呆れる刀弥にリアがそう弁明してきた。
そんな彼女の話聞いて刀弥は内心嬉しくなってしまう。

「まあ、心配してくれるのは嬉しいんだが時たまオーバーじゃないかってくらい反応するからな」

「あ、ひどーい。あれは実際に怪我を負った刀弥が悪いんじゃない」

照れ隠しについそんなことを言ってしまう、それを聞いてリアがむくれてしまった。

そんな二人のやり取りを見てカイエルが笑い声を漏らす。その声に二人はようやくカイエルの存在を思い出した。

「あ、すみません」

「いやいや、気にしないでくれ。私も中々初々しいものを見て面白かったし」

自分たちのやり取りをそんな風に言われ、二人は自然と顔を赤くしてしまう。

「で、だ。先程の応酬を見る限り、問題ないだろう。約束通り斬波のこと、しっかり教えてあげよう」

「ありがとうございます」

それを聞いて頭を下げる刀弥。そんな彼を眺めながらリアもまた自分のことのように喜ぶ。

「ただ、先に言っておきたいことがある」

けれどもその直後、カイエルが真剣な顔で言葉を放ってきた。

その雰囲気思わず刀弥とリアも真剣な表情を作る。

「我々の本分は間合い内の接近戦だ。故にこの技はそれを助けるための補助程度のものだと思っていてくれたまえ。これを得たところで、遠距離戦では魔術師やそういった魔具使いのほうが有利であることに変わりはない。そのことは忘れるな」

「わかりました」

カリエルが先に言っておきたかった事。それは斬波に対する注意だった。

確かに彼の言う通り、バリエーションでは魔術師には叶わないだろうし、遠距離の魔具使いに対しても己が主に戦う領域の分、基本的に向こうが上手になるだろう。

その注意を刀弥は真摯に受け止める。

「まあ、先の戦いを見る限りでは大丈夫だと思うが一応な」

そう言ったときにはカリエルの表情はいつもの柔らかな顔に戻っていた。

その変わりの早さに刀弥とリアは少しの間呆然としてしまう。

「あ、後、私も仕事があるので基本的な部分は教えるが、基本は自主練になってしまふ。そのことは理解しておいてくれ」

「わかった」

申し訳なさそうに告げるカリエルに刀弥は頷きながらそう答えた。仕事が忙しい中で教えてもらえるだけ御の字なのだ。それだけでも十分感謝すべきだろう。

「まあ、今日は疲れただろうから、明日ここに来てくれ。時間も時

間だしな」

言われて空を見ると、既に夕日が沈んでおり紺色の景色が空を染め始めていた。

「わかりました」

「では戻ろうか」

それを合図に刀弥たちは街へと戻っていく。

そんな彼らを夜空の星々がそつと見下ろしていたのだった。

三章二話「斬波」(2) (後書き)

11 / 12

瞬歩を縮地に変更

三章二話「斬波」(3)

そうして斬波の修行を始めて、かれこれ一四日ほどが経過した。

刀弥が今いるのはカイエルと戦ったあの草原だ。

彼はそこで斬波の修行をしていた。

刀弥は今、刀を両手に持って構えている。向かい側には岩があり、その上に拳ほどの大きさの石が載せられていた。

彼は今、斬波でそれを斬ろうとしているのだ。

まずは深呼吸して心を落ち着ける。そしてゆっくりと目を開けると彼は正面の目標を見据えた。

そして次の瞬間、刀弥は刀を大きく振り下ろした。

風切り音が草原を走る。

けれども、岩にあった石は断たれるどころか揺れることすらなかった。失敗したのだ。

「わかつてはいたが、やはり難しいな」

そうこぼして彼は背伸びをする。

修行を始めて一四日が経過しているが、斬波に関して言えば進展らしい進展はなかった。

別に刀弥に才能がない訳ではない。

最初の日に聞いたカイエルの説明によると、最初の習得にはかなり時間が掛かるという話だ。ちなみにカイエルは三十日ほどで発動させるところまではいったそうだ。

刀弥自身、現状としてはまずは発動までは漕ぎ着けたいと考えている。そこからは旅をしながら自己流で鍛錬していく予定だ。

カイエルにもそのことを話してみたら、それがいいだろうと答えが返ってきた。リアのほうもそれで構わないそうだ。加えて焦る必要はないとも言われた。

その話を思い出して刀弥は苦笑する。リアが以前ファルセンで言った言葉が彼の頭の中に思い返されたからだ。

『改善に時間が掛かるならその間、その部分を私が埋めてあげる。私は魔術師、刀弥は剣士。私たち相性いいんだよ?』

『私たちは二人なんだから、一人だけで頑張る必要なんてないんだよ。必要なら頼ってもいいんだから……』

今回は素直にその言葉に甘えようと刀弥は考えていた。その分、この借りはどこかで返したいと思う。

そのリアは今、傍にいない。彼女は現在、街の方に出かけている。彼女の発案で夕食をここで取ることにしたからだ。

自分の世界の屋外でもできる料理を振舞ってくれるらしい。正直言ってどんな料理が楽しみだ。

それまでは斬波の修行だな。

まだ教えてもらった技術部分が再現しきれていないのが、失敗の原因であることまではわかる。

問題はどこをどうすれば成功まで行くことができるのかが、わかっていないことだ。

斬波で使う技術は刀弥の世界では全く思いつかなかった技術で行われている。そのせいかここをこうすれば成功するという当たりが予想できないのだ。

「…… 武術もまだまだ奥が深いな」

自然とそんな呟きが口から漏れる。

シエナの話聞いた時からそんな感想は漠然と持っていた。だが、今回のカイエルを見てその感想がより鮮明になったのだ。

それは驚きでもあり、喜びでもあった。

当然だろう。剣術に思い入れを持っていた刀弥からすれば限界だと思っていた武術にはまだまだ上があったというのだから……

そうして刀弥は奮起して立ち上がると、修行を再会するために再び岩と向き合うことにしたのだった……

しばらく修行を続けていると、リアが帰ってきた。

「どじょ？」

その問いに刀弥は肩をすくめて答える。

「全然だな。まあ、気長にやるさ」

「そうそう。それでいいと思うよ」

笑顔でそう答えながら、リアはスパーサーから荷物を取り出していった。

「もう夕食を作るのか？」

時間としては夕方だが、夜まではまだ十分時間がある。

この時間から夕食を作るのは少し早すぎなのではないかとそう思った刀弥は首を傾げ彼女に訊ねた。

彼のその疑問にリアはこう答える。

「ちょっと、準備に時間が掛かるからね」

「ああ、なるほど」

そうして彼女はスパーサーから食器や調理道具なども取り出すと早速夕食の準備に取り掛かった。

そんな彼女を眺めながら刀弥は修行を続ける。

刀を振る刀弥と材料を切るリア。風を切る音とリズム良い音が青々とした草原に響き渡る。

その音を音楽にしながら、二人はそれぞれの作業に集中していた。

やがて、下ごしらえを終えたリアはそのまま調理へと移行。魔術も利用しながら順調に料理を続けていく。

一方の刀弥はというと相変わらず成果は表れていなかった。それでも、彼はめげることなく試行錯誤を繰り返していく。

見覚えのある顔がやってきたのはリアの料理が終盤に差し掛かって空が暗くなり始めた、そんな時だった。

「あー！！ 本当だった！！」

その声に二人は声の聞こえた方へと顔を向ける。

二人の視線の先、そこには一人の女性が二人の元へ歩いてくるどころだった。確か暴走ゴーレムの持ち主で名前はリリス・カナルムという名のはずだ。

「おお！？ しかも随分と豪勢な夕食を作ってるじゃない」

そのリリスはリアが料理を作っている事に気が付くと、驚き思わずヨダレを垂らしているところだった。

「あの……よかった一緒に食べますか？」

そんな彼女を見てリアがリリスを夕食に誘う。

「え！？ いいの？」

リアの誘いにリリスは嬉しそうな表情のまま確認の問いを返してきた。

「はい。一応、量は多めに用意してるので大丈夫です」

「じゃあ、喜んで一緒にしちゃおっかな」

笑みを見せてリアがそう返答する。すると、その返答にリリスは笑みを浮かべながら席に着いた。

「夕食はもうすぐでできます。だから刀弥、そろそろ切り上げてくれる？」

「ああ、わかった」

それを聞いて刀弥は修行を切り上げて席に着く。

「それじゃあ、盛り付けるね」

そう言っただけでリアは自分が作った料理を皿やお椀に盛り付けていった。

たれに浸けた野菜や肉を焼いたものやそのタレで作った煮込み料理など、多種多様な料理が刀弥の目の前に並べられていく。

いい匂いと色とりどりの料理に刀弥は自然と空腹感を自覚した。

「美味そうだな」

「いくつかの材料は別の材料で変わりにしてるけど、美味しいはずだよ」

そんなことを言いながらリアはリリースの前にも料理を置いていく。

やがて夕食の準備が整った。

「それじゃあ、食べようか」

「んじゃ、いただきます」

「いただきます」

そうして早速、三人は夕食を食べ始める。

「美味し〜い」

最初に感想を口にしたのはリリースだった。

その言葉の通り、彼女は美味しそうな表情で次々と料理を食べて

いく。

それは刀弥も同じだ。特にタレにつけて焼いた肉と野菜の味は彼的に好みど真ん中だった。

「確かに上手い。特にタレにつけて焼いた肉や野菜とかいい感じだな。どうやって作ったんだ？　そういえば何か魔術とかも使ってたな。その辺も関係あるのか？」

「それはひ・み・つ。何にしてもこれだけ好評なら作ったかいいがあつたかな。どう刀弥、元気でた？」

元氣出たかどうかを刀弥に訊ねるリア。

その一言で刀弥は何故、彼女が手料理を振舞ったのか、その理由に気が付いた。進展のない刀弥のためにリアは彼女なりに元氣づけようとしたのだ。

「本当に借りを作りっぱなしだな。そのうち返せないくらい膨れそうな気がしてきた」

「気にしない。仲間なんだからこんなの当たり前だよ」

「仲間と言うより恋人がしそうな行動な気がするけど……」

そんな二人の会話に突然リリースが割って入ってくる。

彼女の指摘に二人は慌ててしまい、互いに顔を赤くしてしまった。

「そ、そういうばはなにか用があつてここに来たんじゃないんですか？」

顔が赤くなつた事を誤魔化すために刀弥はリリースに用件を訊ねる。ここに来た時の最初の台詞。あれは誰かに刀弥のことを聞いた上でなければ出ない。

恐らく、刀弥達に何か用事があってカイエルに居場所を尋ねたの
だろう。

彼の問いでリリースはようやく本来の用件を思い出したらしい。両
手をポンと叩いた。

「ああ！？ そうだった。すっかり忘れてた。二人に用事があつた
んだった」

「なんですか？」

その言葉にリアは首を傾げる。

「うん。実はね。二人にもう一度ガーディちゃんと戦ってもらいた
いのよ」

「ガーディちゃんってあの暴走したゴーレムのことですよね？」

確認するように訊く刀弥。

「もちろん」

それにリリースが笑顔で返事を返した。その返答に思わず刀弥は天
を仰いでしまう。

「理由を訊いてもいいですか？」

もはや投げやり気味の声で刀弥が理由を訊いた。

「無論、この間のリベンジよ！！ あれから改良に改良を重ねたん
だから」

当然とばかりにリリースは胸を張って答える。
しかし、何故か刀弥は彼女のそんな態度に胸中、不安を覚えてしまった。

「始めて会った時、カイエルさんが言っていました。リリースさんって結構ゴーレムを暴走させていますよね？ 今度は大丈夫なんですか？」

「もちろんに決まってるじゃない!!」

それは『何故そんな事を問うのか？』と暗に言っているじゃないかとばかりの強気な返事だった。

けれどもどうしてだろうか。彼女が自信満々に言えば言うほど刀弥の中の不安がどんどんと大きくなっていく。

「ちなみにその台詞。過去に何度か言いましたか？」

「さあ、そんなの覚えていないわ」

考える素振りも見せなかった。

間違いない。刀弥は心の中で断言する。

この人は過去の失敗からなにも学ぼうとしないタイプの人間だ。

と、いうことはその新しいガーディちゃんもまた暴走する可能性は十分あり得る。

一瞬、断ろうかとも思ったが、よく考えれば既に完成している以上、暴走は時間の問題だ。

ならば、ここは挑戦を受けることでさっさと破壊するのが最善かもしれない。

「あ、もちろんこっちからの依頼だから報酬は出すわよ」

さらに報酬まで出るのだから断る理由もないだろう。

修行のほうは煮詰まっている状態だ。気分替えに違うことをするのもいいかもしれないとそんな思考が刀弥の頭に浮かぶ。

「後、カイエルさんから伝言。『気分を変えるには丁度いいだろう。是非、受けてみたらどうだ？ 私もそのほうがいろいろ助かる』って言うってたわ」

どうやらカイエルのほうも同じ事を考えていたらしい。危惧している点まで同じだったことに刀弥はつい苦笑してしまった。

「わかりました。明日でいいのでしょうか？」

「ええ、明日迎えに行くわ。どこに泊まってるのか教えてもらっていいかしら？」

「それじゃあ、今日はこれで帰りますのでその時に」

本来であれば、夕食後も修行を続けているのだが明日のこともある。早めに切り上げて休むべきだろう。

「リア、片付けでなにか手伝えることはないか」

立ち上がりがてら、刀弥はリアにそんな事を尋ねる。

料理は全てリアに任せてしまった。だからこそ、その分の借りを返そうと思ったのだ。

けれども、それに対しリアは首を横に振って応える。

「食器洗いとかは魔術でやるから、特にはないかな」

「そうか」

それを聞いて刀弥は少し気落ちしてしまった。
そういう理由なら仕方ないのだが、ただそれでも刀弥的には残念
という思いが心の中に浮かんでしまう。

そんな彼の心情に気付いたのだろう。リアが言葉を続けこう言っ
てくる。

「代わりにというか。宿屋に戻ったらマッサージとかお願いしてい
いかな？」

「ああ、いろいろと世話になってるからな。それくらい全然構わな
いぞ」

いろいろと助けられている身としては、むしろそれぐらいお安い
御用だ。

「うん、じゃあお願い」

そう言うと彼女は後片付けを始めた。
手の空いてしまった刀弥は手持ち無沙汰だ。そこで片付けが終わ
るまで、リリースと会話をすることにした。

「リリースさんってお仕事はなにをしてるんですか？」

「え？ ああ、遺跡の研究よ」

問われたリリースは刀弥の方へ視線を向けつつそう答えた。

その返答に刀弥は目を丸くする。

暴走ゴーレムの件で、てっきりゴーレムに関係する仕事をしてい
ると人だと思いついていたからだ。

「もしかしてゴーレム関係の研究者だと思った？ まあ、遺跡研究だからその辺も含まれているといえば含まれているけど。でも、私の仕事はそれも含めた遺跡の文明技術、及びその歴史の解明なの。ちなみにゴーレムの開発は私の趣味」

「趣味であの規模ですか……」

どうやら実力だけならかなり優秀な人間らしい。その分、反省がないおかげで近隣の被害も増大しているのだろうか……

ともかく刀弥は彼女の仕事について少し考えてみることにした。文明技術と歴史の解明。確かにこの世界の謎について知ろうとすればそういうことを知る必要がでてくるだろう。

技術を知ることによって彼らの力を知り、歴史を知ることによって彼等の生活を知る。そうして得た推測の情報からさらに新たな情報を推測する。そうやってこの世界の謎を解明していくのだろう。そういう意味ではこの世界に合った仕事だといえた。

「なにかわかつていることはあるんですか？ もちろん教えられる範囲で結構です」

刀弥としても少し興味がある。だからこそ、そんな質問を口に出してしまった。

「それじゃあ、とりあえず教えられる範囲で答えちゃおっかな」

彼の問いにリリスはそう応じると、リアフォーネについての説明を始めるのだった。

「刀弥君は、この世界の遺跡の動力が何かわかる？」
「動力ですか？」

問われ刀弥は考えてみる。

最初に浮かんだのは一般的と言われるマナだった。だが、この問いの雰囲気からしてそれは違うようだ。

と、なると刀弥の頭で思いつけるのは化石燃料や風、地熱、川の流れ、太陽光などの自分の世界にあった動力だけだ。

放つたらかしの状態で長年動くなら燃料的なものはまず候補から消える。川の流れもダムみたいな遺跡について、なにも言われていなかったことから存在しないのだろう。故にこれも消える。

残るのは風、太陽、地熱。この中で安定的なのは地熱だ。そのため、刀弥はそれを解答とすることにした。

「地熱ですか？」

彼の答えにリリスは目を見開く。どうやら正解だったようだ。

「よくわかったわね。その通りよ。各遺跡にはかなり地下深くまで伸びた部分があってそこには地熱を利用した発電機関が搭載されているの。遺跡はそれを利用して動いているというわけ」

と、いうことは、この世界は自分の世界と同じ電気を主動力としている訳だ。

意外なところで共通点があった事に刀弥は驚きと同時に嬉しさを感じてしまう。

「ってことはこの世界で作られているゴーレムも電気を動力にして

「るんですか？」

「そうね。遺跡の電力を設備を使って補給している感じね」

「そうなんだ。面白い話だね。刀弥」

そこに後片付けの終えたりアがやってきた。

「どうやら後片付けをしながらもしっかり話を聞いていたらしい。」

「それじゃあ行くか」

「うん。リリースさん、帰りにもさっきの話の続き聞かせてください」

「いいわよ」

そうして三人はこの世界についての話に耳を傾けながら、宿屋へと向かうために足を進ませるのだった。

三章二話「斬波」(4)

リリースがやってきたのは翌日の朝一番だった。

彼女の背後には巨大なゴーレムが立っている。これが昨日彼女の言っていたガーディちゃん二号なのだろう。

通りを歩く住人たちは皆不安そうな表情でリリースとそのゴーレムを見ていた。どうやら彼女の被害は街ではかなり有名ならしい。皆、また街に被害をもたらさないか内心ヒヤヒヤしているのだろう。

そんな状況の中、突然リリースが驚くべきことを口にした。

「それじゃあ、早速始めましょうか」

「って、ここで始める気か!？」

さらりと出てきたそんな言葉に思わず刀弥は突っ込みを入れてしまった。あまりにも予想外過ぎたせいで、丁寧語にするのも忘れていたほどだ。

彼女の言葉は付近にいた街の人たちにもしっかり聞こえていたよ
うで、皆驚愕の顔で彼女のほうを見つめていた。

「え？ そのつもりだったんだけど」

何故、そんなことを言うのかというような顔でリリースが答えを返す。どうやら周囲に被害をもたらす可能性を全く考えていないらしい。

そんな相手の反応に刀弥は思わず嘆息してしまった。

「……昨日の草原でやりましょう。あそこなら最悪の事態になっても被害はありませんし」

とりあえず刀弥はそう提案してみる。すると、それを聞いて街の人々の間から感心の声が漏れてきた。

「まあ、それがいいなら」

彼の提案の意味をあまり深く考えていないのか、不思議そうな顔をしながらモリスは彼の提案を了承し三人と一体は草原へと向かうことになった。

歩きながら優也は彼女の後ろを歩くゴーレムを見上げる。

大きさは前回の暴走ゴーレムよりも少し大きいくらいか。いろいろと装甲が増えているので、以前彼女が言っていた多重装甲のほうを採用したようだ。恐らく装甲と装甲の隙間を狙ったとしても仕込まれた装甲に阻まれてしまうだろう。

加えて、さらにいろいろと武装追加したらしい。胸部だけでなく肩部、背中にまで火気らしきものが搭載されていた。

一体、なにと戦うつもりでこんなに武装を追加したんだ？

少なくとも、ただの人間相手にここまで火力を充実させる意味はないはずだが……

ともかく草原で戦うことを選んだのは正解だったようだ。こんなのと街中で戦えば街の被害が計り知れないことになっていたに違いない。

「なに？ 『ガーディちゃん二号』がそんなに気になるの？」

そんなことを考えていると、刀弥の視線に気が付いたリリスがニンマリと笑みを浮かべて訊ねてきた。

「一体、なんでまたこんな重武装にしたんですか？ 今日の相手はたった一人の人間なんですけど……」

そんな彼の問いにリリスは次のように返事を返す。

「ん、もしかして死なないか心配してるの？ ああ、安心して。一応、各武装は非殺傷設定にしてるから当たっても死なないから……たぶん」

「それじゃあ、安心できませんよ……」

不安を感じて刀弥が叫ぶが、リリスはどこ吹く風とばかりに聞いていない。

それを見て彼は肩を落として溜息を吐いた。

「と、刀弥。元気出して」

そんな彼を見てリアが励ましてくる。

「ああ、ありがとう」

完全に復帰はできなかったが、それでも少しは元気はでてきた。

改めて刀弥は『ガーディちゃん二号』を観察し直す。

装甲や武装を追加したため、重量が増えたのだろう。足音がかな

り大きい。加えてその分の巨体を支えるためか足もかなり太くなっている。

「っていうか、これだけ重くしたり武装を加えたりして動力機関の出力は足りるんですか？」

「ん？ ああ、出力を上げたからね。まあ、おかげで稼働時間が短くなっちゃったけど。だけど、それも勝つためには致し方なし！」

力を込めて叫ぶりリス。

その様子を刀弥は呆れた顔でリアは苦笑を浮かべて眺めるのであった……

草原に辿り着くとすぐさま刀弥は周囲を見渡した。

風に揺れる草以外は特に気になるものはない。どうやら大丈夫そうだ。

「それじゃあ、ここで始めますか」

「待つてましたー！」

それを聞いてリリースが張り切りだす。最も戦うのは彼女自身ではなく彼女の連れているガーディちゃん二号なのだ……

「さあ、ガーディちゃん二号。準備なさい」

その言葉と共にリリースに後ろに立っていたゴーレムが前に出た。

刀弥も腰の刀に手を掛け、いつでも始められる態勢だ。

そんな両者を見て、リアが両者の中間位置に立つ。

「それじゃあ、合図は私がするね」

その確認の問いに刀弥もリリースも共に頷く。

「それじゃあ……………始め!!」

そう言ってリアが開始の合図を宣言した。

その合図と同時に、ゴーレムの両肩、胸部、背中ハッチが一斉に展開。光弾が一気に放たれた。

この展開を予測していた刀弥は開始と同時に縮地で右に移動。彼が最初に立っていた場所は光弾の嵐によって跡形もなく吹き飛ばされた。

「本当に非殺傷設定にしてるのか？」

呆れにも似た疑問を呟くが、その声は爆発音でかき消されてしまふ。

ともかく攻撃を回避した彼は縮地を使い一気にゴーレムの傍まで接近。抜刀の一撃放った。

狙った場所は装甲と装甲の隙間。

しかし、予想通り隙間には別の装甲が仕込まれており、それによって刀弥の刀は弾かれてしまふ。

最も刀弥としてもそれを確認するための攻撃だったので、驚きは

ない。

すぐさま体勢を立て直すと、彼は回避のために後退を始める。直後、先程までいた場所に敵の光弾が殺到した。

光弾の爆発を抜け、回り込む刀弥。その僅かまの間に彼は思考する。

確かに多重装甲のおかげで隙間を狙われるという弱点は消えた。だが、多重装甲はゴーレムにメリットだけをもたらしたという訳ではない。

その例の一つ目が装甲追加による重量の増加だ。重くなっているため動きの初速が遅く、静止するにも時間が掛かる。

つまり、制動性能が悪くなっているのだ。

二つ目は多重装甲によって可動部分の可動域が狭くなっていること。

特に足の範囲が狭くなっているのは大きい。

それはつまり、一度に動ける距離が減少していることを意味しているからだ。

先の二つの理由のおかげで刀弥は易々とゴーレムの背後をとることができていた。

だが、それだけで勝てるほど簡単ではない。その辺りをフォローするのが今回追加された武装だ。

特に背中の武装は一度上昇した後に落ちるように放たれるので、平面で見ると三六〇度どこへでも撃つことができる。攻撃自体に死角はない。

その攻撃が再び放たれた。打ち上がった光弾が刀弥の元へと降り注ぐ。

すぐさま刀弥は走りだした。彼は光弾の雨を潜るように走り抜ける。

そうして光弾を突破した刀弥はゴーレムに接近。足元に近づくとそこに目掛けて水平に刀を斬りつけた。

けれども、やはり装甲に阻まれてしまい攻撃が届くことはない。

そこへゴーレムが拳を振り下ろす。旋回と同時に右腕を大きく振ったの攻撃だ。

動き出しの時点で気付いた刀弥はすぐさま後退して離脱。拳が地面に刺さったのを見計らって反転すると、それを足場にゴーレムの上半身へと駆け上る。

そうして登りきると同時に彼はゴーレムに向かって攻撃を見舞った。

刀による斬撃ではない。なんと彼は走りの勢いをのせて飛び上がると、ゴーレムの頭部目掛けて飛び蹴りを放ったのだ。

その勢いにゴーレムはたたらを踏んでしまうが、すぐにバランスを取り体勢を立て直す。

「あれじゃあ、崩れないか」

相手の転倒を狙ったの攻撃だったが、思いの外相手のバランス制御は優秀だったらしい。

「と、なるか……」

そう呟きながら刀弥は光弾を右へと飛んで避ける。
そうしてから彼はゴーレムの背後に回り込むと、そこから一気に
距離を詰めた。

狙うは足首、穿つは渾身の突き。

風野流剣術『一突』

速度と腰のバネ。二つの力を乗せた突きがゴーレムの足首に繰り
出される。

だが、結果は今までと同じ甲高い音を出すだけで装甲を貫くこと
はなかった。

しかし、構わず刀弥は同じ所に攻撃を続ける。今度は身を回して
の水平斬り。無論。この攻撃も装甲に阻まれる。

「無駄よ。ガーディちゃん二号の装甲にはかなり頑丈な素材を使っ
てるから、切断しようと思ったら何百回と斬りかからないといけな
いわよ」

余裕だろうか。リリースがそんな忠告をしてきた。

確かに彼女の言う通り、今のままだと斬るまでにかかなりの回数を
要するだろう。けれども、他に手が無いのならやるしかない。

それに決して無謀な挑戦というわけでもないのだ。
装甲の突破こそできていないものの、逆に相手の攻撃に対しては
しっかり対処ができています。十分勝算のある戦い方だ。

「じゃあ、言葉通り何百回と斬ってみるか」
「……正気？」

そんな刀弥の応答にリリスが疑うような眼差しを向けてきた。

「他に方法がないのならやってやるさ」

そう言って刀弥は笑みを浮かべる。

そうして彼は刀を構え直すと、刀を振るうため再びゴーレムのほうへと駆け出していくのであった。

「……まさか、本当に有言実行するとは……」

そう言ってリリスが呆れた顔を見せる。

彼女の視線の先には片足を斬られ、うつ伏せに倒れた彼女のゴーレムの姿があった。

ゴーレムは動かない。思考機関が壊れたのだから当然だろう。

ゴーレムは片足以外にも頭部と背中に傷を負っていた。どちらも刀傷の痕で、その傷口から傷ついた中身を見ることができず。

どちらも刀弥の手によって付けられた傷だ。

「合わせて三〇〇回以上の攻撃。よくやる気になったわね」

「ゴーレムが遅いおかげで攻撃の薄いところに移動するのは楽でしたから。背中の兵装も打ち上げれば発射方向の再設定ができないの

「がわかれば避けるのは簡単でしたし」

「攻撃を避け続けられる自信があったからこそその戦い方という訳ね。参ったわ……」

そんな感想を漏らしながらリリスは視線を刀弥の方へと戻す。

刀弥はと言うと岩場に腰下ろして水を飲んでいた。

やはり、疲れているのだろう。あれからそれなりに時間が経っているにも関わらず、呼吸が若干乱れている。

まあ、無理もない。何百回と攻撃と回避を繰り返したのだ。誰だって疲れもするだろう。

そんな彼のもとにリアが近寄ってきた。

「お疲れ様。なんて言うか……かなり強引な手段だったね」

「確かにそうかもしれないな」

「……認めちゃうんだ」

そう答える刀弥にリアは苦笑いを返す。

そんなやり取りをしている二人の元へリリスは向かうことにした。傍までやってくると、彼女は両手を上げて降参のポーズを示す。

「完敗ね。まさか、多重装甲のデメリットを利用されるとは思わなかったわ。あくやっぱり、機動力を上げたほうがよかったのかな」

「そのときはそのときで戦い方を変えるだけですよ」

リリスの言葉に刀弥がそう応える。

それを聞いて彼女は大きく溜息を吐いた。

「まあ、今回は相手を褒めるべきか。あなたもそう思うでしょ？」
そう言ってリリースはリアに問い掛ける。
彼女の問い掛けにリアは大きく頷いた。

「私もそう思います」

「別に褒められる程のことじゃないだろ？」

彼女たちの称賛に刀弥がそう謙遜する。

褒められてくすぐったいのだろう。リリースが目を合わそうとしても、すぐに視線を逸らしてしまうのがその証拠だ。

「十分凄いと思うわよ。普通はあんな強引な手、ゴーレム相手にやるうなんて思わないだろうし」

「それよりも、それができると判断した刀弥の判断力と分析力が凄いと私は思うかな」

己の感想をそれぞれ口にするリリースとリア。

「だから、刀弥は自信を持っていいと思うよ」

「そ、そうか？」

それを聞いて刀弥の頬が若干赤くなる。そんな彼の様子を見てつりリアは笑いを漏らしてしまった。

そんなやり取りをリリースは目を細めて眺める。

「まあ、ともかく今日はありがとね。報酬は明日家に案内するから、そのときに渡すね」

「え？ ああ、わかりました」

そうしてその日は解散となるのだった。

三章二話「斬波」(4)(後書き)

11 / 12

瞬歩を縮地に変更

三章二話「斬波」(5)

翌日の昼過ぎ頃、刀弥とリアはリリスに案内され彼女の自宅にや
つてきていた。やってきていたのだが……

「……酷いな」

そう呟いて呆れる刀弥。

それが彼女の家を見た彼の感想だった。

今、彼の目の前にあるのはリリスの家の玄関　のはずだった。
はずと付いたのは書類やパーツなどがそこら中に散らかっている
せいで、足元が見えないためだ。

彼女の家の中は酷い有様だった。

そこら中に物が溢れかえっており、もはや足の踏み場もない。

異臭がないのは不幸中の幸いだが、むしろなんでないのかと逆に
疑問を抱いてしまつくらい酷い惨状だ。

「ちょっと、散らかってるけど、気にせず上がって〜」

己の自宅の惨状に自覚がないのか二人の唾然とした表情すら気に
せず、リリスはそう言つと己が作った障害物と軽々と避けていく。
どうやら自然と体が覚えていているらしい。

とはいえ、刀弥達にそんなスキルはない。当然のように障害物を
避けるのに四苦八苦する羽目になった。

「ぎゃっ！？」

「つと！」

書類を踏み、足を滑らしたリア。そんな彼女を刀弥が支える。

「大丈夫か？」

「うん」

「紙の下にも何かあるかもしれない。気を付けて歩かないといけないな」

溜息と共に刀弥はリアに注意を促すと、一人先に進んだ。

「俺が先に歩くから、リアは俺が踏んだ所を歩いてくれ」

「わかった。ありがとう」

笑みを浮かべたリアはそうお礼を言って、刀弥の言った通り、彼が踏んだところを歩いて行く。

そうしてようやく二人はリビングに辿り着いた。

「リビングに来るのにも一苦労だな」

「え？ そう？」

意外という顔を見せるリリス。それに対して刀弥は睨みつけたい衝動に駆られるが、なんとか自制を効かせて嘆息で我慢する。

それに気が付かないリリスはそのままソファーまで近づくと、その上に載っていた物を床に落としていった。

「じゃあ、ここに座って待ってて」

そうして彼女は二人に着席を促すとリビングのさらに奥へと入っていく。

それを追いかける気にもなかった二人は彼女に言われた通りソファに座って待つことにした。

しばらくしてリリスが戻ってくる。

「おまたせ。はい。これが報酬」

そう言っただけで彼女は布袋を差し出してきた。

すぐさま刀弥は中身を確認してみる。すると、かなりの金額が布袋の中に入っていた。

「確かに。でも、なんでまた自宅なんですか？ 報酬を渡すだけなら宿屋に来た時でもよかったような気がしますか？」

布袋を閉じながら首を傾げる刀弥。

それは昨日、話を聞いた時から思っていたことだった。

昨日はゴーレムとの戦いで疲れていたこともあつて尋ねなかったが、やはり気になる。

故に、今尋ねたのだ。

そんな彼の疑問にリリスは苦笑交じりに答えを返した。

「まあ、そうなんだけどね。でも、それでお別れもなんか寂しいかなと思つて……いろいろと話聞いてみたかつたし」

その答えに刀弥は納得する。

恐らく本音は後半部分なのだろう。

リアの方を見ると彼女は『どうするの?』という感じの視線を刀弥に向けて投げ掛けていた。

その視線に刀弥は肩をすくめて答えると、そのままソファーにもたれる。リリスの招待を受け取ることにしたのだ。

それを見てリアもまたソファーに体を預ける。

「それで、お茶くらいは出てくるのを期待していいんでしょうか?」

「……ああ!？」

どうやら忘れていたらしい。再びリリスは奥へと走っていく。

そんな彼女を見て、刀弥はリアと顔を見合わせ微笑み合うのであった。

「ごめん。おまたせ」

しばらくして、リリスがカップを載せたお盆を持って現れた。

そのまま障害物をないかのように歩き抜けると、お盆に載せていたカップを二人の前に差し出す。

そうしてから彼女は向かい側のソファーに回り込むと、そのままそのソファーに座り込むのだった。

「で、なにが聞きたんだ?」

「ぶつちやけると他の世界の文明かな？　どんな仕組みなのか知っているなら、なおいいわね」

どこかワクワクした様子を見せるリリス。かなりこちらの話を楽しみにしているようだ。

「そうなるとリアに頼むしかないな。俺が知ってる世界はここで三つ目だしな」
「だね」

刀弥の言葉にリアが同意した。

そんな二人のやり取りにリリスは首を捻る。

「どういうこと？　刀弥君って旅を始めてそんなに経ってないの？」
「えーと……まあ、そうですね」

一瞬、渡人のことを言おうかとも思ったが、なんだか変に食いつかれそうな気がしたのでそのまま黙っておくことにした。

「それじゃあ、リアちゃん。お願いね」
「はい」

笑みを見せて応えるリア。
そうしてリアの話が始まった。

リリスの要望通り、各種の文明の特徴や仕組みなども覚えている限り彼女は話していく。

刀弥としても面白いと思える内容で、自然と気になったことや疑問に思ったことをリアに尋ねていた。

リアは丁寧な推測や私見であることを断った上で答えていく。時たま、自分の出会った出来事などを話しては二人を楽しませた。

かなり話し上手だ。彼女の話を聴きながら刀弥はそう思った。性格が明るいだけでなくここまで話し上手だとこれまで彼女が出会った人たちは皆、彼女に好意を抱いただろう。

無論、男女間という意味でなく他者への評価という意味でだ。最もそういう感情を持った人がいないとは言い切れないが……無意識のうちに刀弥は複雑な表情を浮かべてしまう。

そんなこんなで時間が過ぎていき、リアの話も終わりを迎えた。

「以上が私が話せる全部です」

「ありがとね。リアちゃん」

手を合わせてリリースがリアに感謝する。

「いえ、どういたしまして」

そんな感謝をリアは笑顔で受け取った。

「俺としても面白かったな。しかし、やっぱりゴーレムはいろいろなタイプがあるんだな」

マナで動く物、電気で動く物、液体燃料で動く物から、術式回路を用いた思考機関、無論、電子的な機関ももちろん存在する。

広い世界故に様々な物が生まれ利用される世界。改めて刀弥はその世界の広大さを実感した。

それはリリースも同じだったようで、何度も頷きつつ口を開く。

「私としても興味深かったわ。あまり外のことには興味なかったけど、私の夢のためにもいろんな知識をつけておくべきなのかもね」
「夢、ですか？」

彼女の漏らしたその言葉にリアが反応を示す。

「そう、夢。私の夢はね、この世界の謎を解いてみせるっていう夢なの」

そう語るリリスは声色はどこか熱を帯びており、その夢を本気で叶えようとしていることが二人にもすぐわかった。

「私ね。小さい頃からわからないことがあつたら、自分で調べて答えを見つけてきたの。魔具の仕組みとかゴーレムで使われている機関の構造とか……」

と、そこまで話したところで、リリスは一旦カップに口を付けてお茶を飲んだ。そうして一息ついた後で彼女は話を再開させる。

「でね、ある日自分の世界について知りたくなつたの。でも、調べても調べても答えが見つからない。当然よね。その時、何にもわかってなかったんだもの。それでね、思ったの。『なら、このわからないことは私自身の手で調べて解いてやる』って」

「それ以来、ずっとその夢を叶えようとしていたんですか？」

その問い掛けにリリスが頷きを返した。

「私の努力のおかげか、ある程度は前進はあつたのよ？ ただ、全てがわかったわけじゃない。だから、まだ夢は叶ってないと言える

かな」

「……なんて言うか、素敵な夢ですね」

笑顔でそんな言葉を返すリア。その返答にリリスは少し恥ずかしくなったのか少しだけ顔が赤に染まった。

慌ててそれを隠すように彼女は新たな質問を投げ掛ける。

「そう言う二人の夢は何？」

それにいち早く答えたのはリアだった。

「私はいろんな世界を巡ることですね。見知らぬところを旅するのが好きなので」

「へへ。旅人らしい夢というべきなのかな？ すっごく楽しそうな夢ね」

「リリスさんの夢には負けますよ」

そんなやり取りで話が盛り上がっていく二人。

それを刀弥はなんとも言えない顔で見つめていた。

正直に言えば、刀弥は夢を抱いたことがなかった。

元の世界にいたとき、将来は剣術を活かせる道に就きたいとは思っていたが、刀弥にしてみればそれは将来的な打算であり夢とは違うという意識を持っている。

そもそも刀弥にとって夢とは現実性のない過大な願いみたいなものと思っていたので、それを真面目に考えたことなど一度たりともないのだ。

ただ、楽しそうに夢について語る二人を見てると少し、ほんの

少しだけ夢を持つ二人が羨ましいと思ってしまった。
と、その時、リリスが刀弥の方を見る。

「で、刀弥の夢は？」

「え？ ええと……」

突然、振られたその問いに刀弥は我にもなく戸惑ってしまった。
夢を持っていない以上、ないと言えないはずだ。
けれども、先程の二人を見ていて、そう答えることに何故か刀弥は躊躇いを覚えてしまっていた。

「……すみません。正直に言えば、夢と呼べるようなものを持った
ことはありません」

散々迷った後、結局刀弥は正直に告げることにした。告げる顔に
はどこか申し訳なさそうな感情がある。

彼の答えを聞いたリアとリリスはすかさず刀弥にフォローを入れ
てきた。

「謝らない謝らない。気にする必要なんてないんだから」

「私もリリスさんと同意見かな。夢なんて、意識して見つけるもの
じゃないし」

リリスの告げたその言葉にリアが同意を入れてくる。

「そうそう。夢なんて、勝手に抱くものだもの。さっきの私の夢だ
って最初は私自身の夢だなんて全く思っていなかったしね」

「私もそうだったな。両親やお婆様の旅の話を聞いて私もいつか
行ってみたいという思いが募って、それが夢になった感じだね」

「……なるほど」

彼女達の口から次々と出てくるそんな言葉を聞いて刀弥は頷いた。確かに夢がないからと言って、無理矢理夢を持つというのもおかしな話だ。ここは彼女たちの言う通り、あまり気にしない方がいいのかもしれない。

「まあ、それは置いて……ところで二人共、夕食はここで食べていけない？」

そんな彼の内心を知ってか知らずか、リリースがその話を横に置く。そうした上で彼女は唐突にそんな提案をしてきた。

「……で、ですか……」

お茶程度なら我慢できるが、さすがにここで夕食というのは何と申すかいろいろと避けたい。

と、いつか客人を招くなら掃除ぐらいはしろと刀弥は心の中で注意を入れる。

「いえ、折角なので外で食べませんか？　少し気になるお店を見つけたので……」

とりあえずリリースの提案にそう返す刀弥。

完全に作り話という訳でもない。気になる店があったというのは本当のことで、折を見て行ってみようという思いは確かにあった。折角なのでそれを利用することにしたのだ。

「じゃあ、そうしましょうか」

しばし考え込んだ後、リリスは刀弥の提案を了承することにした。

「それじゃあ、早速行きましょう」

そうしてリリスはすぐさま立ち上がると、そう言っただけで一人さっさと家の出口へと向かうのだった。

「客人を置いていくのかよ。っていつか、無用心に俺たちを家に残すほうが問題だろうが」

既におらずに相手にそう愚痴をこぼしつつ、彼女の後を追いかける刀弥。その後ろをリアが付いて行く。

こうして三人は夕食のためにリリスの自宅を後にするのだった。

「ん〜。ようやく終わったか」

書類仕事が一段落し、背筋を伸ばすカイエル。

窓から差し込む星と月の明かりが優しく彼を労う。

彼が今いるのは軍の本部だ。彼がいる部屋は他に誰もおらず、あんなにいくつもの家具だけだ。

よく見ると部屋の中にある家具類は高そうな物で構成されており、

そのせいか部屋はかなり特別な雰囲気を作り出していた。

そこに部屋の外からノックの音が反響する。

「入ってきたまえ」

「失礼します」

その言葉と同時にドアが開き、そこから一人の若者が入ってきた。服装はカイエルと同じ茶色と深緑の色をつけた革の上着と白のシヤツに栗梅色のズボン。

部屋に入るとすぐさま若者はカイエルに敬礼を見せた。

「司令。リアクスのほうから緊急連絡です」

「緊急連絡？」

連絡と同時に手紙を渡してくる若者に司令と呼ばれたカイエルは疑問を返す。

「なんでも研究情報の盗難騒ぎのようすで、こちらも気をつけよということのようです」

「なるほどな」

手紙を開き、詳細を確かめるカイエル。一方の若者は敬礼だけ見せると、すぐさまその場から去っていった。

「……ふむ、これは中々厄介な事態だな」

手紙を一通り読んだ後、カイエルは目を細めてそんな呟きを漏らした。

手紙によると狙われた研究情報は主に遺跡の技術に関連する情報が主だったようだ。

当然、そういった情報は兵器などに転用される可能性が高いので、かなり厳重に管理されているはずなのだが、相手はそれを易々と突破したことになる。かなり実力のある相手に違いない。

「急いで各所に連絡を入れて警戒を促さなければいけないな」

念のため自分が直接行ったほうが説得力が増すだろう。そう考えるとカイエルは溜息を吐いた。

やることがまた増えてしまい、忙しくなってしまった。これでは刀弥の修行を見に行くのはまたお預けになるかもしれない。

「この埋め合わせはいつかしないといけないな……」

そうこぼして彼は窓の外の日を見上げるのだった。

一一話終了

三章三話「盗人」(1) (前書き)

さて、三章三話の開始です。

リアフォーネでの物語はこれで終了の予定となっております。

三章三話「盗人」(1)

日は沈み、星と月が姿を現す夜。気温は適度に冷えているが、実際のところそれほど寒さを感じることはない。

時間も時間のせいか人通りの少ないフォーネスの通り。そこを三人の人物が歩いていった。

刀弥とリアとリリスだ。彼らの腕の中には紙袋が抱かれていた。中身はマスクや袋、雑巾用の布などの掃除用の用具だ。

「それにしても今から私の家を掃除するなんて……」

涙目状態のリリスがそんな嘆きを漏らす。

だが、そんな彼女の台詞を刀弥がバツサリと切り捨てた。

「そもそも、ことの始まりはリリスさんがまた家に招待してきたことが原因なんですけどね」

それを聞いて、リリスはうっとうしく声を漏らし目を逸らす。

彼の言う通り、ことの始まりは斬波の修行をしている刀弥たちのところにリリスがやってきて再び家に招待してきたことが原因だった。

あの家に行くのを躊躇う刀弥たちに、リリスが何故悩むのか理由を訊ねたのだ。

それでその理由を話し、気が付いたらあの家を掃除、整理することになっていた。

刀弥たちがあの家を訪れて七日ほど経過しているが、下手したら

記憶にあるあの光景以上の惨状になっている可能性も否定できない。隣を歩くリリスに視線を向ける。彼女は刀弥が自分を見ていることに気が付くと、少し萎縮して苦笑いを浮かべた。

それを見て刀弥はなんとなく溜息を吐いてしまう。

「まあまあ、刀弥」

そんな彼にリアが話しかけてきた。

「リリスさんもあれで少しは懲りてると思うよ。でなきゃあ、刀弥相手に萎縮なんてしないだろうし……」

「明日には忘れてそんな気がするけどな」

その言葉にリアはあくと言って困った顔を浮かべてしまう。どうやら刀弥の言葉を否定出来なかったようだ。

リリスが刀弥に対して萎縮しているのは、彼が理由を説明する際の態度に原因があった。彼は彼女の悪い点を一例一例上げながらもどくと非難していったのだ。

終いには整理整頓以外のところにも話題が波及しようとしたのだが、そこでようやくリアが待ったを掛けた。

「どうやらあれのせいでリリスは刀弥に対して苦手意識を抱いたようだ。」

「まあ、何にしても掃除と整理だけじゃなく、物の片付け方も教えておかないとな。じゃないとまた酷い惨状の繰り返しだ」

「まあ、そうだね」

頬を掻きつつ同意するリア。

そんな二人の会話を聞いてリリスは少し目を潤ませてしまう。

「うづ。 厳しい」

思わずそんな呟きを漏らす彼女だった。

リリースの家を訪れてから七日ほどの日にちが経過した。

彼女との交流のおかげか、斬波に関しては少しだけ前進があった。

一応、空気中の物質に力を伝えれるようになったのだ。

ただ、完全に力を空気中の物質に伝えきれないなのでその威力はかなり低い。だが、それでも前進は前進だ。

後はしつかり力を伝えきるようになれば完成となる。今はそのための試行錯誤に時間を割いている状態だ。

極小の物体に力を全て伝えるのは当然、難しい。

刀弥としてはカイエルからその辺のヒントを聞きたいところだが、彼は最近顔すら全く見せにこない状態だ。

まあ、仕方ないと刀弥は考えている。街で聞いた噂だと、別の街で研究情報が盗まれるという事件が次々と発生しているらしい。

この世界では軍が警察の機能を持っている以上、軍が忙しくなるのは当然の話だ。無論、そこに所属しているカイエルもまた、忙しい日々を送っているのだろう。

そういう事情である以上、刀弥としても文句を言うつもりはない。元々こちらから無理に頼んだことだ。仕事優先なのは仕方ないだろ

う。

「盗難騒ぎか……」

ポツリと漏らす刀弥。

そんな彼の独り言をリリスが拾った。

「最近、街で噂になってるよね。軍も大変そうね」

「一応、リリスさんにも関係ある件だと思うんですけど」

どうしてもよさそうな彼女の態度にリアがすかさず突っ込みを入れる。

すると、その突っ込みにリリスはこう答えた。

「だって、解明済みの遺跡に関する情報は軍が施設で一括管理してるもの。自宅にも一応情報とかがない訳じゃないけど、それは未解明の情報。奪ったって解明できなきゃ意味ないじゃない」

「まあ、確かに」

故に彼女にとっては他人ごとなのだろう。

刀弥がそんな風に結論をまとめていると、リアがリリスに新たな問いを投げ掛ける。

「リリスさんは自分の努力が産み出した研究情報が盗まれることについてはどう思ってるんですか？」

さっきの反応だと、それすらも思い入れがなさそうな気がしたが刀弥も問い掛けられた相手のほうを見る。

すると、彼女は刀弥にとって意外な返事を返した。

「当然、許せないわよー!!」

「さっきまで、どうでもよさそうな態度をとっていたと思ったんですけど……」

眉を寄せて声を荒げるリリス。そんな彼女の態度に思わず刀弥は疑問を飛ばしてしまう。

「情報の管理は軍の責任だからね。それは気にしても仕方ないじゃん。でも、私の努力の結晶を無断で使おうとするなんて研究者として許せるわけじゃないの」

「はあ……」

つまり、管理については他人ごとだが、盗む相手に対しては一応の怒りはもっているということだろうか。ちよつと理解出来ない感覚だ。

その事に微妙な感想を抱きつつも、とりあえず刀弥は彼女の台詞に相槌を打った。

「もし盗賊が目の前に現れたら、私の秘密兵器でギッタギタにしてやるんだけどね」

そう言っつて不気味な笑いを漏らすリリス。どうやらかなり本気のようにだ。

つい、周囲の被害を心配してしまうのは彼女の性格を把握しているせいだろうか。

見るとリアも同じ事を考えてたのか、視線が周囲の住居辺りを彷徨っていた。

そのことに笑みを漏らしつつ、刀弥は視線を前方に戻す。

「しかし、考えてみるとリリースさんの家ってあんな惨状じゃ、盗賊が入っても絶対気づかないでしょう?」

ふと、彼女の家の光景を思い出し、その事を問い掛ける刀弥と、彼の問いにすぐさま当の本人が反論を繰り出してきた。

「そんなことないわよ!!　そもそも入るだけでも一苦労するはずだし」

「……どういう意味ですか?」

嫌な予感を感じ、すぐさま刀弥が尋ね返す。

すると彼女は胸を張って次のような答えを返してきた。

「私の自宅の周囲には自家製のトラップが仕掛けられてるの。無理に入ろうとすれば侵入者をすぐさま補足して迎撃するはずよ。一度そういう騒ぎがあったんだけど、なんでか私に苦情が来たのよね。悪いのは侵入してきた相手のはずなのに」

納得行かないという顔を浮かべるリリース。

一方の刀弥達はどうとこの話を聞いて、なんともいえない顔になってしまった。

恐らくそのトラップが強力すぎて近隣に被害が及んだのだろう。つくづくはた迷惑な人だと二人はリリースについて再認識したのだった。

「あ、あれを見て」

そんな二人の内心を知らないリリスは何かに気がついたのかある一点を指差す。

二人が彼女の指差す先をへ目を動かすと、そこには大きな建物があった。

「あそこは遺跡情報統合管理局。遺跡に関わる全ての情報を管理している施設なの」

「ってことはこの街で狙われるとしたらあの施設になるってことですか？」

リリスの説明を聞いて刀弥は改めてその施設を見つめる。

建物は遺跡を利用したのではなく、新たに建てた建築物だった。かなり巨大な建物で、そのせいかかなり威厳のある雰囲気漂っている。

「当然、警備はかなり厳重なんですよね？」

「当たり前じゃない。それに今はあの噂もあって、かなり警備に力が入ってるんじゃないかしら」

そう言っただけでリリスもまた刀弥たちに向けていた視線を建物へと向ける。

確かにその通りだ。あんな噂がある以上、警備もまた通常以上に力を入れているだろう。それこそ不審者を見つけたらすぐにでも拘束するくらいの。

リリスがいるとはいえ、あまり変に見つめていたら警備の人間に咎められるかもしれないな。

そんなことを考えて刀弥は自嘲じぢやうした。その時だ。

突然、遺跡情報統合管理局の中から一際大きな音が響き渡った。

三章三話「盗人」(2)

突然の轟音に三人の視線は自然と遺跡情報統合管理局のほうへと向けられる。

「リリスさん。音に心当たりは？」

念のため確認を取る刀弥。

リリスの返答は刀弥の予想通りのものだった。

「もちろん、ないわ」

きっぱりと告げるリリスは未だに遺跡情報統合管理局の建物から視線を外さない。

それは刀弥もリアも同じだ。

三人とも建物に視線が釘付けになっていた。

そこに再び大きな音。今度は複数の叫び声も聞こえてきた。どうやら警備の人間に被害が出たようだ。

刀弥がそう思った直後、突然建物の入口が粉々に吹き飛び、そこから一体のゴーレムが何かを持って姿を現した。

形状は人型。長身でスラリとした細身の装甲だった。デザイン的には騎士の甲冑のようにも見える。

色は漆黒で目立たないようにかボディになんらかの処理がされているらしく、その装甲が夜の光を反射することはなかった。

飛び出したゴーレムは、そのまま刀弥たちがいる方向とは逆方向へと走りだす。警備の人間が追いかけてくる様子はない。

「待ちなさい!!」

反射的にリリスがそう叫んでゴーレムの後を追いかけた。それを見て刀弥たちもゴーレムを追いかけることを決心する。

駆け出す三人。ゴーレムはすぐに見つかった。

そのまま三人はゴーレムを追走する。

「リリスさん」

その最中、刀弥がリリスに声を掛けた。

「……何？」

走るのに必死なリリスは苦しそうな表情を浮かべながら返事を返す。

「あのゴーレムに見覚えは？」

「……ないわね。ボディのデザイン的にこの世界産じゃないのは確かだけど、さすがに中身までは……」

「そうですか。では、リリスさんの知識では、あのゴーレムにはどんな装備が施されていると推測できますか？」

それを聞いてリリスは必死な形相を浮かべたまま考え込んだ。
しばらくして彼女は答えを返す。

「さっきの音からかなり強力な武装は持っているのはわかるわ。でも、電力を動力とする場合、装備にはそれ相応の大きさが必要になってくる。でも、あのゴーレムはそんな大きさの物を持っていない」
「……つまり、マナを動力とし武装として体内に術式回路備えてい

る可能性のほうが高いということですか？」

「まあ、そうなるわね」

刀弥の出した推論に同意するリリス。

「そうなるとどんな術式回路を備えているかになるのよね……私、そっちのほうはそんなに詳しくないし……」

「でも、あれはリリスさんのゴーレムみたいに硬さやパワーで戦うタイプじゃないですよね」

そんな二人の会話にリアも混ぜてきた。

「どっちかというと機動力で相手を翻弄するタイプになるのかな？」

「そうね。そっちに近いかもしれないわね。だから、装甲もそれ程頑丈でもないだろうし厚くもないはず」

「なら、俺の刀でも十分斬れるか」

そう言って逃げるゴーレムを見据える刀弥。

スムーズな動きと高い脚力。確かに機動力は高そうだ。

術式回路の武装がわからないため攻撃手段は不明だが、離れた位置から攻撃できる手段を持っていると想定しておいたほうがいいだろう。

そう考えて刀弥は斬波のことを思い返す。

完成していれば迷わず使うところなのだが、未完成である以上下手に使う訳にはいかない。ないものとして戦いを組み立てるべきだろう。

「それにしてもあのゴーレム。どこまで逃げるつもりなのかしら？」

そんなことを考えていると、ふと、リリスがそんな言葉を漏らした。

「主のところまでだと思えますけど……」

何を言ってるんだとばかりに刀弥がそう返す。

すると、リリスが少し怒った顔でこう返答してきた。

「それはわかってるわよ！！ 問題はその主がどこにいるのかよ！」

その指摘に彼らは顔を見合わせる。

「普通に考えたら街の外か？」

「まあ、そうだね。合流したら街から離れるだろうし……」

「なら、少しおかしくない？ 外に出るならさっきの大通りをそのまま進んだほうが早いわよ？ こんな細い道をわざわざ選ぶ必要は

」

リリスがそんなことを言った、その時だった。

刀弥の目が細道の屋根の上から飛び降りる影たちを捉える。

「リリスさん、止まって！！」

叫びと共に腕を上げ彼女を止める刀弥。

直後、三人の目前で音が響き渡った。

破片と砂埃が撒い、三人のもとに押し寄せてくる。

それを手で防ぎ、止むと同時に視界の向こうを見る三人。

見ると三人の目前を二体のゴーレムが遮るように立っていた。どちらも人型で大きさも標準的な大きさだ。

色はこちらも黒。ただし各部分が丸みを帯びたデザインで顔も丸い視覚装置があるだけの簡素なデザインのゴーレムだ。

「足止めか」

二体の奥を見ると先程のゴーレムがそのまま逃げ去って行くのが見えた。恐らく追いかける刀弥たちを足止めするためにこの道を選んだのだろう。

「さっさと倒して追いつくしかないか」

そうこぼして刀の取っ手に手を掛けようとする刀弥。しかし、それをリアが止める。

「待って、刀弥」

「どうして止める？」

現状戦う以外選択肢のない以上、早く敵を倒すしか方法がないはずだ。なのに何故止めるのか。刀弥にはそれが不思議でならなかった。

そんな彼にリアが一つ問いを投げ掛けてくる。

「ねえ、刀弥。刀弥ならあの二体を抜いて、さっきのゴーレムを追いかけることはできる？」

「……絶対とは言い切れないが、一応できると思っ」

恐らく相手は先のゴーレムと同じくマナを動力としているタイプ。そうなるとう撃手段は体内に仕込んである術式回路だからどんな攻撃が飛んでくるかわからない。

だが、不思議なことに刀弥の中にある感が彼らを抜くことは不可能ではないと告げていた。

「じゃあさ、刀弥はあいつら突破して先に行つて。私たちはあいつらを倒してから追いかけるから」

「……」

彼女の言葉に内心刀弥は驚く。が、彼は抗議の言葉を何とか飲み込むと、そのまま目線で彼女に続きを促した。

「さつき、追いかけていた時もそうだけど、刀弥は全速力で走つてないよね？ たぶん、私たちが心配して合わせてくれてたんでしょ？」

確かにリアの言う通り、刀弥は全速力で走っていない。走れば追いつくことも可能だったが、その際にはリアとリリースを置いていくことになってしまう。

相手の攻撃手段がわからない以上、盗品の奪還よりもリリースたちの安全の方を優先していたのだ。

「心配してくれるのは正直言えば、ちょっと嬉しい。でもね、少し悔しかったりもするの」

笑みか苦笑かわからない表情をリアが浮かべる。

だが次の瞬間、彼女はゴーレムたちに向けて杖を構えた。

「だからね、刀弥。私を信じて先に行ってくれないかな？」
「……わかった」

刀弥はそれ以上は何も言わない。リアが信じてと言ったのだ。ならば、もう信頼するしかない。

「無茶だけはするなよ」

「刀弥にだけは言われたくないな」

その会話の終了がスタートの合図だった。

終了と同時に刀弥が走りだす。狙うは二体のゴーレムの隙間。

当然、彼の行動に二体のゴーレムたちも反応し妨害を行った。

ゴーレムたちは火球の群れが生み出し、それを刀弥に向かって放ったのだ。

刀弥はそれらの軌道を見極め最小の動きで回避。火球群を抜ける。それを見て右側のゴーレムが接近を選択。右腕を振りかぶり、拳を放ってきた。

その瞬間、刀弥は抜刀。拳と刀がぶつかり合う。

刀がぶつかったのは拳の外側だった。正面ではなく横からの力の衝突だ。故に拳は刀弥から見て右側へと逸れていく。

刀弥はそのまま刀を相手の右腕に引っ掛けながら腕を振りぬき加速。まずは一体目を突破する。

それを見て後ろに控えていたほうのゴーレムが再び火球を生み出し刀弥に放とうとした。だが、刀弥はそちらのほうを見ていない。

彼が見ているのはその先、逃げたゴーレムが走った道筋だ。

もう一体のほうは気にしない。なぜなら、既に相棒が何らかの対処をしているはずだからだ。

その信頼の通り、既にリアはそのための行動を起こしていた。

リアが行ったのはアイスチェーンによる鎖の壁。

刀弥が回避した火球の流れ弾もこれで対処し、今度はそれを刀弥と二体目のゴーレムとの間に向けて伸ばしたのだ。そのついでに一体目のほうも縛るのは忘れない。

鎖の壁が火球の猛攻を変わりに受ける。火球は鎖に衝突と同時に爆発。火球が刀弥に届くことはなかった。

そのまま刀弥は一気にゴーレムの傍を通過。逃走した騎士型のゴーレムの追走に入る。

急いで二体目のゴーレムがそれを追いかけようとした。けれども、その行動をリアが妨害する。

『フレイムボール』

今度は逆にゴーレム達が火球の群れに襲われた。

刀弥を追いかけようとしていたゴーレムは、これに対応しきれず着弾。爆発の音が狭い道に響き渡った。

舞い上がる土煙。

しかし、リアは油断しない。音の手応えからまだゴーレムが健在であることはわかっていたからだ。

故に彼女は追撃の一手に出る。

『アイスランス』

彼女の付近に槍状の氷が二つ出現。それぞれが別々の標的に向かって狙いを定めると次の瞬間、それらは高速で飛翔した。

土煙の向こうから音が響く。一つは貫いた音。だが、もう一つは違った。

その判別と同時にリアは防御を選択。

『リフレクト』

前方への力場を一定範囲に展開することで相手の攻撃を防ぐ防御系魔術。それをリアは自分たちの前方にやや斜め上を向かせた形で展開させる。

直後、二人のもとへ炎の砲撃が飛んできた。

砲撃は力場と衝突。力と力がぶつかり合う。

力場を強引に貫こうとする炎の砲撃とそれをさせまいとする力場の盾。両者の力比べはすぐに決着がついた。

砲撃が上へとその軌道を変え、その後盾が壊れたのだ。

とりあえず攻撃を凌いだリア。彼女は杖を構えたまま前方を見据える。

砲撃もあつてか、土煙も晴れていく。

土煙の晴れた視界の向こう、そこにはリアに構えを見せるゴーレムの姿があった。

どうやら刀弥を追いかけるのは諦め、先にこちらを倒すことにし

たようだ。

「リリースさん。下がっててください」

そうリリースに警告し、リアは一步前が出る。

「すぐにあれを倒しますので」

そう宣言すると、すぐさま彼女は攻撃を放つのだった。

三章三話「盗人」(3)

リアが放ったのは『エアアロー』。風の矢群による集中攻撃で一気に相手の装甲を貫くつもりだ。

彼女が狙うのは早期決着だった。理由は二つある。一つは早く刀弥と合流するため、もう一つは周囲に被害を広げないためだ。

向こうが使用してきた術式回路は『フレイムボール』と『フレイムブラスト』の系統。どちらも被害が広がりやすい魔術式だ。

時間を掛ければその分が被害が増える。故にできる限り早く撃破しなければならぬのだ。

風の矢が群れをなし正面からゴーレムに迫る。

ゴーレムがいるのは狭い通路。攻撃を避けるのは難しい。

だが、ゴーレムが選んだのは接近だった。矢群に向かってゴーレムは突っ込むように走ってきたのだ。

その途中、ゴーレムはある物を拾った。それはリアによって倒されたもう一体のゴーレムの残骸。

なんとゴーレムは拾ったその残骸を矢群に目掛けて投げつけたのだ。

投げつけられた残骸はたちまち風の矢群に飲み込まれていく。装甲のあちこちを貫かれ、瞬く間に残骸は原型を失っていった。

結果、残骸は大破。だが、そのせいで風の矢群はその大半を失い、残ったものも威力が落ちてしまっていた。

僅かに間もできたため、ゴーレムは矢群を避けつつ避け切れないものは腕を使って防御。リアの攻撃を突破した。

そうしてリアに近づいたゴーレムは右腕を振りかぶり、彼女に向かって拳を放つ。

それを後ろへと下がって逃れるリア。だが、ゴーレムはそんな彼女を追って、さらに踏み込み今度は左拳を打ち放った。それをリアは右へと体を傾けて避ける。

どうやら相手は接近戦を選んだようだ。確かに魔術師を相手にするならばそれが一番有効な手だといえる。

魔術式の構築には時間が掛かる以上、攻撃の到達時間の早い接近戦は魔術では対応しきれないのがその理由だ。

相手のゴーレムが再び右腕を振るう。

だが、リアはそれに反応して杖を横からぶつけた。力こそ弱いが無横から加えられた力によって拳の方向が意図した方向から僅かにずれていく。

その方向とは反対の方向へとリアは己の身を動かす。

そうして攻撃を対処したリア。だが、そこに左膝蹴りが飛んできた。

「うっ!？」

思いがけない連続攻撃にリアは対処できず、攻撃を食らってしまった。

一瞬、呼吸ができなくなり腹から無理矢理息が吐き出される。

次の瞬間、息を吸うことしか頭にはなかった。魔術式の構築も、相手の前だということも忘れてしまっている。

その隙を狙って振り下ろすような右拳の一撃がリアに迫った。

「危ない!!」

その叫びにリアは辛うじて反応。後ろへと飛んで攻撃を避けた。

「すみません。リリスさん」

礼を言いながらリアは顔を上げ、相手を見据える。

ゴーレムは下がったリアを追うために駆け出し、接近。今度は左の拳を振り抜いた。

リアは後ろへと下がることで回避。再び魔術式の構築に入る。しかし、それを止めるためにゴーレムが右腕を構える。

先程と同じ対処はできない。すればまた、先程の流れの繰り返しだ。

故に今度は杖を構え防御の姿勢を見せた。そこにゴーレムの拳が迫る。けれども、リアの狙いは防御ではない。

なんと彼女はゴーレムの拳が杖にぶつかる直前、それに合わせて後ろへと飛んだのだ。

同じ方向へ移動したことで拳の威力が軽減。さらにその威力によってリアの後退距離が伸びることになった。

両者の距離が開く。

急いでリアに迫ろうとするゴーレム。だが、それよりもリアの魔術の発動のほうが早かった。

再び、『エアアロー』。生まれでた風の矢の大群がゴーレムに押し寄せる。今度は盾になりそうな物はなにもない。

そのままゴーレムは風の矢群によって串刺しにされ破壊されたのであった。

「……ふう」

戦いが終わり、大きく息を吐くりア。そんな彼女にリリスが近付いてくる。

「ちよつと、大丈夫なの？」

「あ、はい」

彼女の呼び掛けにリアはそう答えるとニッコリと笑みを見せた。左膝蹴りはかなりまともを受けたが幸い、それほど大きなダメージではない。十分走れるだけの力はまだ残っている。

「それじゃあ、早く刀弥を追いかけましょうか」

「そ、そうね」

戦いを眺めるのに夢中ですっかり忘れていたらしい。リアの言葉にリリスが少し焦っていた。

そのことに笑みをこぼしつつ、リアは前を向く。

刀弥のほうはどうなっているだろうか。

今のゴーレム程度の強さであれば……まあ、大丈夫だろう。少なくとも死ぬことはないはずだ。

ただ逃げたゴーレムは今の奴とは違うタイプ。だからこそ楽観で
きなない。

無事だよな？

一瞬、浮かんだ不安を打ち消すように首を振るリア。

そうして彼女たちは急いで刀弥の後を追いかけるのであった。

暗闇の街の中を走る二つの黒。黒いゴーレムとそれを追いかける
刀弥の姿だ。

刀弥の目がようやく逃げるゴーレムの輪郭を捉えた。

先程の足止めでかなり距離を離されてしまったが、それも徐々に
縮まってきている。

やはり、他者を気にせず全力で走れるのが一番大きい。ただ全力
で追うことだけに集中できる。

逃げる相手の背中を見ながら刀弥はふと、なんで自分はこんなに
一生懸命になって追いかけているのだろうかと考えた。

正義心がない訳ではないが、それだけではここまでいかないだろ
う。

いろいろと考えてみた結果、リリスの盗賊への感想が頭に浮かんだ。

自分の努力を積み重ねてきたものを奪われ、許せる人間はそうそういないだろう。

しかも、それを目の前で行われたのだ。そういう意味では相手の逃走直後のリリスの反応はおかしなことではない。

ひょっとしたらそんな彼女の想いに当たられたのかもしれない。

そんな自分に苦笑しつつ、刀弥はゴーレムを追うことに意識を向けていった。

相手は刀弥を振り切り切りたいのか、様々な道を走っていった。場合によっては道でない場所まで行く始末だ。

だが、刀弥はしつかり付いて来る。

どんな障害物があるうが、どんな悪路であろうが関係ない。邪魔があるなら登り、飛び越え、避けて走り抜ける。ただそれだけだ。

やがて、両者は街の外に出ることになった。この時点で両者の距離は体三つ分。刀弥が追いつくのも時間の問題だった。

ここまで来ると刀弥としても逃がすつもりは毛頭ない。体が動く限り追いかけて続けるつもりだ。

そのまま両者は草原を突き抜けると、森の中へと入っていく。

木々と茂みに囲まれた森は天然の障害物だらけだ。

不安定な足場、巨大な木、視界を遮る茂み。

ゴーレムはそれらを利用して刀弥から逃げきろうとするが、刀弥の速度は落ちる気配がない。

足の動きにも不安定なところはなく、しっかりと踵から石を腐った木を踏みしめ力強く蹴り抜いていた。

やがて、遂に相手は逃げるのを諦めたらしい。足を止めて刀弥の方へと振り返る。

それを見て刀弥も足を止めた。

慎重に出方を伺う両者。刀弥は刀に手を伸ばし、ゴーレムは右半身を前に出した状態だ。

よく見るとゴーレムの左腕には何かを抱えられていた。紺色の寶石のような球体、恐らくあれに研究情報が入っているのだろう。

ならば、刀弥の目的はあの球体を取り戻すことだ。ゴーレムの破壊はそのついでに過ぎない。

一方のゴーレムの目的は己を確実に逃がすために刀弥を追いかけられない状態にすること。

刀弥とゴーレムは互いに睨み合ったまま動かない。不動のまま、その目はただ相手のみに注がれている。

だが、その睨み合いも長くは続かない。

次の瞬間、いきなり両者の戦いが始まりを迎えるのだった。

三章三話「盗人」(4)

先に動いたのは刀弥だった。彼は前へ前へと一気に駆け抜ける。理由は簡単、己の攻撃方法が近接しか手段がないからだ。相手のことはわからないが、遠距離攻撃の手段もあると見たほうがいいだろう。

それに対する対処はできる。だが、どのみち、刀弥が仕掛けるには相手に近づかなければならない。ならば、先に動いたほうが有利なのだ。そういう判断で彼は動いた。

対し、相手は後ろへ身を引く。距離を詰められる時間を引き伸ばすつもりのようなだ。ならば、相手の次の行動は見当が付く。そして、それは予想通りだった。

次の瞬間、風の矢が群れとなってゴーレムの周囲に展開した。そして、ゴーレムの着地と同時に放たれる。

襲いかかる風の矢群。間を見つけて通り抜けることも考えたが、ここは慎重に行動すべきだ。

その判断に従い、彼は右へと方向転換する。するとその直後、矢群が彼の曲がった方向へ向きを変えた。

一瞬、動きを読まれたのかと刀弥は考える。だが、彼の感がそれを否定した。

この感が正しいと仮定した場合、考えられる可能性が一つある。

そこでそれが正しいか確かめるため、刀弥は自分の背中に矢群が回ったのを見計らって、右と見せかけて左へと曲がった。

すると、彼の動きに矢群がつかれる。それを見て優也は確信した。

発動後も操作できるタイプか。

ゴーレムの方を見ると、相手は動きを止めて優也のほうを見ていた。まず間違いないだろう。

それならばと、刀弥は走りながら手近な小石を拾っていく。そしてある程度数が揃うと、彼はそれを左手でゴーレムに向けて弾くように放った。

それに対してゴーレムは動かない。効かないと判断したのだろう。回避もせず攻撃を受ける。そして、やはりというべきか、小さな音を立て小石は装甲に弾かれてしまった。

だが、それで構わない。そもそも避けないことも、装甲に弾かれることも想定済みだ。

こうなればいくら小石を撃ったところで相手は動かないだろう。

そうやって動きを止めたところで、優也は今度は小さな小石をゴーレムの頭部目掛けて連射した。

狙うのは頭部にある隙間。その奥にある目の機能だ。

破壊は難しいかもしれないが、いきなり眼前に何かが入ればゴーレムも事態把握のために急いで正体を見極めようとするだろう。そうなれば思考の大半を割かなければならなくなり、後方の風の矢群も乱れるはずだ。

ただ何分、狙いが小さい上に動きながらだ。絶対に入る保証はない。そこでその部分は数でフォローすることにした。

幸い、小石の一つが入ったようで、ゴーレムが驚いたような挙動を見せる。

それに合わせて刀弥は走るを方向を変えた。

制御を失った風の矢群が彼を追いかけずに背後を過ぎ去っていく。矢群は乱れ、地面に落ちたり矢同士がぶつかり合って消滅。

刀弥はそのまま相手に接近する。

すぐさまゴーレムは隙間から入った小石を外に出すと、迎撃のために氷の剣を右腕から伸ばすように創りだした。

甲高い音。

刀弥の刀とゴーレムの氷の剣がぶつかり合った音だ。

ぶつかり合った反動で後ろに下がる両者。だが、すぐさま両者は再接近。再び刃と刃を結び合う。

繰り返される刃の応酬。時に刃を盾に、木を障害物に、足を武器にしながら両者は森の中を走り抜ける。

著しく入れ替わる攻撃と防御。攻めを崩しての反撃、反撃を避けての攻撃、それを防ぎ押し返しての攻め。それは互いに持てる手を尽くしての攻防だった。

ゴーレムの氷の剣はかなり硬い。さすが魔術の系統の力だ。形状を維持する力も働いているのだろう。

と、少し走ったところで、ゴーレムが刀弥から距離をとり右腕から氷の刃を消した。

そして、今度は氷の塊を右腕の前に生み出すと、なんとそれを刀弥に目掛けて連続で撃ってきたのだ。

いきなりの射撃に刀弥は右へと身を倒して回避。続く攻撃は縮めた右足で地面を蹴ることで避けた。

そのまま、相手の射撃を避け続ける刀弥。

どうやら攻撃は真っ直ぐ飛ぶ直線軌道でしか撃てないようだ。

しかし、代わりに恐ろしく攻撃間隔が短い。息をつく暇もなく氷の射撃が飛んでくる。

次々に飛んでくる氷の弾丸。刀弥はその射線に乗らないように気をつけながら走り続けるしかない。

時折、両者の間に木々が挟まれるが、氷の弾丸はそれらを軽々と撃ち貫いていった。

貫かれた木々は己を支えきれず、次々と軋みを上げながら倒れていく。

そんな森の悲鳴を耳にしながら、刀弥は対抗策を考えていた。

今までのやり取りで、敵が見せた攻撃手段は三種類。

一つ目は風の矢群。二つ目は氷の剣。三つ目は氷の射撃。

だが、この三つでは遺跡情報統合管理局の入り口を粉々に吹き飛ばすことなどできるはずもない。

つまり、まだ見ぬ四つ目の攻撃があるということだ。

どういふ攻撃かはわからないが、威力が高いのは間違いない。ともかく気を付けると己に注意を促しながら、彼は森の中を走り抜ける。

既に近づく算段は思いついていた。後は実行に移すだけだ。

そして、大きな木が刀弥とゴーレムの視界を遮った瞬間　刀弥は動いた。

彼は木の影で足を止めるとすぐさま身を伏せる。

直後、彼の頭上を氷の弾線が通り抜けた。それが通り過ぎたのを見計らって彼は立ち上がると倒れようとしている木に蹴りを入れる。

蹴りを受けて木は蹴られた方向とは反対　すなわちゴーレムのいる方　に倒れていった。

ゴーレムがいる場所は木が落ちる範囲。すぐさまゴーレムは範囲から逃れるために範囲外までの距離が短い左へと動く。

だが、そこに刀弥が先回していた。彼は地を強く蹴り、一気にゴーレムとの距離を詰める。

風野流剣術『一突』

速度を乗せた突きの狙う先はゴーレム左腕。肩と胴との間にある隙間だ。

だが、この一撃は避けられてしまった。

刀弥の攻撃に気付いたと同時にゴーレムは身を反時計周りに回し

て避けたのだ。

マズイ。

そう思うが、既に身を飛ばしている刀弥はどうすることもできない。

そのままゴーレムは身を回した勢いに乗って右腕を振ってきた。拳の行き着く先は刀弥は左脇。

咄嗟に刀弥が空いていた左肘を動かしたのは、ほとんど反射的な行動だった。けれども、それが功を奏す。

動かした左肘がゴーレムの右腕とぶつかったのだ。ぶつかった反動で拳の軌道が変わり、刀弥はさらに前へと進む。結果、ゴーレムの右腕の攻撃は彼の背後を掠めるに留まった。

紙一重で重症を避けた刀弥。だが、その本人は顔をしか顰めていた。

刀弥は軽く左肘を動かしてみる。すると、その途端、左肘に痛みが走った。

先程、ゴーレムの拳とぶつけた時にできたものだ。

動かせないほどではないが、これではいつも通りの振りをすることはできない。おかげで攻撃の面で若干状況が悪くなってしまった。

そこへゴーレムが再び氷の射撃を放ってくる。

痛みに気が向いていた刀弥は気が付くのに一瞬遅れ、氷の弾丸が彼の頬を掠めた。

そのまま彼を追う射線から逃げる刀弥。彼は逃げながらゴーレム

から距離をとる。態勢を整えるためだ。

と、その時ゴーレムの攻撃が突然止んだ。いきなり攻撃が止んだことに刀弥は疑問を覚える。見るとゴーレムの眼前の空間に風が集まり始めていた。

この現象に刀弥は見覚えがある。すぐさま彼は全力で走りだした。もしこれが予想通りの攻撃であるなら、じつとしている訳にはいかないからだ。

彼の予想は当たっていた。直後、風の砲撃が刀弥に向けて放たれるのだ。

風の砲撃が刀弥の傍を通り抜ける。

間一髪のところまで直撃は避けたが、それでも砲撃の余波で体が宙を漂うことになってしまった。

吹き飛んだ体は、しばらくして大きな木にぶつかる。

「ぐっ！！」

ぶつかった拍子にうめき声を漏らす刀弥。そのまま彼の体は地面へと落ちていく。

だが、ゆっくりとしている訳にはいかない。

痛む体を叱咤して彼は倒れるようにその場から動く。直後、彼が居た場所を氷の弾幕が襲いかかった。

危ないところで攻撃を避けた刀弥はそのまま一気に走りだす。

彼を追いかけてくる氷の射線。それを目で確認しながら、刀弥は己の状態を確認していく。

体中が痛む。おかげで動きがかなり悪くなっていた。

左肘の怪我もあり、長期戦は刀弥の方が不利だ。そうすると、一気に決着をつけにくいしかない。

先程と同じ手は通じないと考えておくべきだろう。これまでの戦いからして、かなり賢いのは間違いない。

しかし、そうなると現在刀弥の頭の中にある手段は一つ。それもかなりのリスクの高い手段しかなかった。

何故なら、その手段を行使するためには未完成の斬波を成功させなければならぬからだ。

どうする？

迷う刀弥。だが、そんな彼の元に向かって氷の弾丸が飛んできた。思考に集中して注意を怠ったせいだ。

咄嗟の動きで頭を動かす。氷の弾丸が彼の頭スレスレを掠めて通り抜けていった。

すぐに射線から離れる刀弥。その最中、彼は自分の頭から血が垂れていることに気が付いた。どうやら掠めた時に出来たものらしい。

下手をすれば先の攻撃で死んでいたかもしれない。

そう考えた時、ふと、リアの顔が頭に浮かんだ。

ここで死ぬ訳にはいかない。

あの時の約束が思い出される。

絶対に死なない。

そう彼女と約束した。大事な相棒との約束だ。破る訳にいかない。

おかげで刀弥の腹は決まった。

まずは斬波を撃つための時間を作る必要がある。

そのため、刀弥の反撃のための最初の行動として移動を開始した。それを逃さないとばかりに射線が彼の後を追いかける。

追いかけてくる射線から逃げるようにして刀弥はゴーレムの周り一周回った。おかげで多くの木々が氷の弾丸を受け倒れていく。

散らばる木ノ葉こは。それがゴーレムの周りを漂うように舞い落ちる。そのタイミングを持って彼は倒れた木々の影に隠れた。

ゴーレムが一瞬、刀弥を見失う。

そのタイミングを持って、刀弥は斬波の構えに入った。

彼は思い出す。カイエルから教わった技の原理を、体の動きを、力の流れを。

今、彼は己の体を動かすことに全神経を集中させていた。筋肉の動き、各部の連動とタイミング、教わった知識を元に彼は体を動かしていく。

そして彼は刀を振り抜いた。

瞬間、彼の眼前の空間から力が走った。力の形は斬撃。それが木々を断つて真っ直ぐゴーレムの方へと向かう。斬撃は成功したのだ。走る斬撃は止まらない。木ノ葉であれ石であれ、進路上に存在する全てを切り裂いて進んでいく。

そうして、遂に斬撃がゴーレムの眼前まで迫った。だが、その攻撃をゴーレムはあっさりと右へと飛んで避けてしまう。

真っ直ぐに飛んできた攻撃だ。故にゴーレムとしては反応できた時点で避けるのは簡単な事だった。

避けたゴーレムは刀弥を狙い撃とうと、右腕を攻撃を飛んできた方向へと向ける。相手に止めを刺すためだ。

だが、その最中、ゴーレムは認識した。攻撃が飛んできた方向、そこに狙うべき目標の姿がなかった事に。

刀弥は斬撃を撃った直後に回りこんで接近。既に縮地を使えば斬りかけられるだけの間合いにまで迫っていた。

ここで刀弥は一気に勝負をかける。

風野流剣術『疾風』

強い踏み込みで彼は一気に近づく。

ゴーレムは足音から刀弥の位置を認識したようだ。己の向きを迫る彼の方へと変えていく。

だが、ゴーレムにできたのはそこまでだった。

既に刀弥は目前に迫り、攻撃の態勢に入っている。彼は引いた刀

を振り始め

そのまま、速度を乗せた一撃を敵のゴーレムの胴に目掛けて放ったのだった。

確かな手応えと共に上下真つ二つとなったゴーレムが地面に倒れていく。

地面を鳴らす二つの音。その後あとに小さな音が周囲に響く。小さな音は研究情報の入った紺色の宝石のような球体が落ちた音だ。

上下に真つ二つにされた相手は足掻くように動いていたがそれも暫くの間だけ。

やがて、動力が止まったのか、ゴーレムは物言わぬ瓦礫と化したのだった。

三章三話「盗人」(5)

「ふう」

ため息を吐きながら、刀弥は宝玉を拾った。

一応、あちこち見回してみるが、傷が付いている様子はない。どうやら大丈夫なようだ。

拾ったそれをとりあえず刀弥は上着のポケットにしまいこむ。重みで上着がずれるが気にしない。

そのまま彼は傍に倒れるゴーレムのほうに視線を向けた。

「どうにかうまく言ったな」

斬波が成功して、ほっとする刀弥。

もし、失敗していたら森の中に倒れていたのは刀弥の方だったかもしれない。そう考えると、少しだけ体が震えだしてしまう。

そういえばリアたちの方は無事だろうか？

ゴーレムを彼女たちに任せて追いかけたので、あの後どうなったのかはわからない。

リアなら大丈夫だと思う一方、やはり不安もある。ともかく早く戻ろうと刀弥が歩き出そうとする。

「あれ〜？ もう帰っちゃうの？」

陽気な声が森の中に反響したのはそんな時だった。

その声に刀弥は声の聞こえた方、即ち上を見上げる。

彼の視線の向ける先は木の頂上、そこには一人の少年が立っていた。

山鳩色の短い髪と青緑系の瞳。衣服は葡萄色と黒を基調としたタキシードのような衣服を着ている。

外見は10歳ぐらいだろうか。無邪気そうな笑みを浮かべており、ただ見ているだけならどこにでもいるような少年に見える。

だが、身に纏う雰囲気はどこか歪で、どういつ訳かズレのような違和感を刀弥は感じてしまっていた。

「誰だ？」

身を低く構えながら尋ねる刀弥。

その問いに少年は笑みを見せる。

「初めまして。僕はルード・ネリマオット。そのゴーレムの飼主だよ」

「……は？」

堂々と宣言する少年ルードに刀弥は呆けてしまった。

言葉の意味は理解している。彼は己こそがこの盗難騒ぎの犯人だと告白したのだ。

だが、問題は何故、このタイミングでその事実をこちらに告げたのかという理由。それがわからず刀弥は呆けてしまったのだ。

そんな彼の顔を見て、ルードの表情がさらに満面の笑みに変わる。

「いいね。その顔。とてもいいよ」

「ふざけてるのか？」

陽気そうな声に刀弥は少し苛立ち、怒気を含んだ声で言葉を返す。

しかし、ルードはそんな刀弥の態度を何処吹く風とばかりに気にしない。

「相手が驚いたり、目を丸くした瞬間って楽しいよね。それが自分の狙った通りだったらなおさらだよ。うんうん」

そう何度も頷きながら、彼は刀弥のことを見下ろしていた。

そんな彼の態度に刀弥は気が立つが、その一方、内心では冷静に状況を分析していた。

現在、ダメージを負っている自分に対しては相手は一〇歳代の少年。だが、武器や戦闘能力は未知数だ。

そして先程の言葉を信じるなら、昨今の研究情報盗難の犯人は彼ということになる。と、なると目的は刀弥が回収した宝玉に違いない。

刀弥の下した判断は逃走だった。とりあえず逃げて宝玉を安全な場所まで運ぶ。わざわざ不安定な体で戦う必要はない。そう判断したのだった。

すぐさま逃走のために彼は動き出そうする。しかし

「おっと、逃さないよ」

その言葉と同時、ルードの周囲から何かが姿を現した。

「な!？」

それを見て刀弥は驚く。

なんと、大小様々なゴーレムの大軍が突如として刀弥の目の前に現れたのだ。

冷たい汗が刀弥の頬を伝う。

さすがにこの数を一人で、しかもダメージを受けている状態で相手にするのは無理だ。

どうにかして逃げないと……

だが、彼の考えを読んだのか、ゴーレムたちは姿を現すと同時に散開。刀弥を逃がさないように取り囲んだ。これでは逃げるできない。

「くっ……」

周囲を警戒しながら、刀弥はどうやってこの状況を脱するかを考えようとす。だが、妙案は出てこない。

それでも諦めずに考えようとす。だが、表情は時間に比例して厳しいものになっていった。

「早速、ピンチだね? どうする? どうする?」

そんな彼の状況をルードは楽しそうに眺める。

彼は器用に頂上に腰掛け、足を組んでいた。

余裕のあるルード。それに対して刀弥は余裕がない。

絶体絶命のピンチ。死への想像が幾度も頭の中を過るが、それを彼は何度も否定する。

まだやりたいことがある。まだ見てみたい景色がある。そして、何より死なないと誓った約束がある。

故に、彼は生きるために覚悟を決めた。

狙うのは大軍を突き抜けての脱出。相手の攻撃を全て見極め避けて、邪魔な敵を倒す。

そのための一歩を彼が踏み出そうとする　その時だった。

「やけではなく、生きるために覚悟を決める……か。この追い込まれた状況でそう思って戦う姿勢は見事だな」

突然、見知った声が刀弥の耳に届いた。

これには刀弥だけでなくルードも驚く。

すぐさま声の聞こえた方を振り向く二人。するとそこには予想通りの人物が歩いてくるのが見えた。

「なんだ。来ちゃったのか。カイエル・ブラット」

驚きを隠すように笑みを浮かべ、新たな登場人物を歓迎するルード。だが、気のせいかな声に余裕がないように聞こえる。

「少し前から様子を見させてもらっていたけど、さすがにこれ以上はマズイだろうから私が相手をさせてもらおうよ」

そう言いながらカイエルは刀弥の傍までやってきた。

「し苦勞だったね」

「……以前もそうでしたけど、覗き見が趣味なんですか？」

以前の街中でのゴーレム戦を思い出しながら、刀弥は一応文句を言ってみる。

「ははは……まあ、そう言われても仕方がないな。ただ、折角頑張ってるんだ。一人でやれるなら、やったほうが君の経験になるからな。だから、隠れていた」

笑顔でそう答えるカイエル。そんな彼を見て刀弥は溜息と同時に肩を落とした。

「そう言うと思いました」

「まあ、後は任せてくれ。この程度私なら余裕だ。君はそこでじっと見学していてくれ。いろいろと参考になるだろうしな」

どこか余裕を感じさせる声色でカイエルはそう言うと、腰からレイピアを抜き構える。

その瞬間、空気が変わるのを刀弥は感じた。

「では、こちらから行かせてもらおうよ」

そう告げるカイエル。

次の瞬間、彼の右腕一瞬消失した。

その直後、カイエルの眼前にいたゴーレムの大軍が吹き飛んだ。ほとんどのゴーレムがボディに穴が開いたり、手足を離された残

骸状態で落ちてくる。

あつという間の出来事に刀弥は驚く事しかできない。

一方のカイエルはそれを見送ることなく、次の攻撃に入っていた。今度はカイエルの右側の集団が攻撃を受ける。状況は先程と同じだ。

ここでようやく敵のゴーレムたちが動き出した。一斉にカイエルを囲んで襲いかかる。

対して、カイエルはそれらの攻撃を楽々といなして反撃していた。

拳を避け腕を斬り、相手の体を足場にして反対側のゴーレムを飛び越え、すれ違いざまに首を斬り飛ばす。

着地間際、左右から光弾のような攻撃を見舞われるが、それらは斬波で迎撃、と同時に反撃。攻撃を放ったゴーレム二体は斬波による突きのラッシュによって全身穴だらけとなった。

さらに斬撃の斬波を放つカイエル。斬撃は一体のゴーレムを縦に両断。しかし、それだけでは終わらず、なんと斬撃が軌道を曲げたかと思うと別のゴーレムまで斬り裂いた。

その後も次々とゴーレムたちが襲ってくるが、カイエルは見事に対処、破壊を繰り返していく。

「……………」

そんな光景を刀弥はただ呆然と眺めていた。

強い。

そんな感想しか思い浮かばない。

一度に複数の斬波を放つだけでなく、その軌道すら自在に変える。斬波の種類も様々だ。斬撃、突き、旋回切り、場合によっては蹴りや拳すら飛ばしている。

完全に斬波を使いこなしている者の使い方だった。

無論、斬波だけに頼っている訳でなく、通常の斬撃もまたかなり凄かった。

一瞬の交差の間に装甲と装甲の隙間に刃を突き入れる精確さと素早さ。

短い間に幾度となく放たれる突きの連続攻撃速度。どれをとっても見事な技量だ。

そんな彼の戦う様をしっかりと記憶に刻もうと刀弥は見学に集中していく。

戦いの主導権は常時カイエルが握っていた。

彼は積極的に自分から動くことで、場をコントロールしているのだ。

位置取り、攻撃タイミング、倒す順番、対処の手法。それらの動きを持って敵の動きを完全に制御していく。

刀弥では、まだすることのできない領域の戦い方だ。

こんな強い人物が存在する。そのことに自然と刀弥は感動を覚えた。

これが……世界の広さか。

この世界に来てよかったとそんな思いが浮かび上がってくる。

やがて、カイエルは敵ゴーレムの大軍を殲滅し終えた。

彼の体に傷は一つもない。完全に圧勝だと言える状況だった。

「やっぱりやるね。さすがは『千針の剣手』。リアフォーネ軍の司令の実力は伊達じゃないね」

感心した声でルードが感想を漏らす。

そんな彼の言葉に刀弥は驚いた。

軍人だという話は聞いていたが、まさか司令とまでは思わなかったからだ。

「さて、どうするかね？ 『遊滅の人形遣い』」

そう尋ねながらレイピアの剣先をルードに向けるカイエル。

「……はあ、しょうがないな。今日は帰ることにするよ」

肩をすくめてそう言うルード。

直後、彼の傍に巨大な鳥型のゴーレムが出現した。ルードはそのゴーレムの背に飛び乗る。

「それじゃあね。また」

そう言い残すと鳥型ゴーレムは翼を大きく羽ばたかせ空高く舞い上がった。

鳥の影はどんどん小さくなっていき、やがて消えていく。

カイエルと刀弥はそんな空をただじっと見上げているのだった。

三章三話「盗人」(6) (前書き)

これで三章はラストです。

三章三話「盗人」(6)

「そういえばカイエルさんはどうしてここに？」

ルードが去つて一安心したところで、ふと、そんな疑問が刀弥の頭の中に浮かんだ。

恐らく逃走したゴーレムを追ってきたのだろうが、どうしてここにいると思つたのかわからない。

彼の疑問に対してカイエルはこう答える。

「何、逃げた方角から逃走に都合のいい場所を推測し、そこに向かうただけの話だ」

ニヤリと口の端を歪めカイエルは笑みをみせてきた。彼の返答に刀弥はなるほどばかりに納得する。

「それにしても軍人とは言ってみました、司令だとは……」
「すまないすまない。言うのをすっかり忘れてたよ」

そう言つてカイエルは刀弥に謝つた。

その謝罪を受取る刀弥。だが、彼の頭の中では別の可能性が頭をちらついていた。

ひょっとしたら忘れたのではなく、あえて言わなかっただけなのかもしれないという可能性だ。

性格的にもお茶目そうな人ではあつたし、可能性としてはあり得るだろう。

そう考えて刀弥は肩をすくめる。

ただまあ、それ自体は刀弥にとってはどちらでもよかった。確かめる気もない。

それよりも気になることがある。

「後、さっきの奴と知り合いなんですか？」

それが刀弥の気になっている事だった。

先程の会話は、まるで互いの事を知っているような内容だった。で、あるなら、相手の事について少し知りたいと思ったのだ。

彼の問いを聞いたカイエルの返答は首を横に振るものだった。

「いや、噂を知っているぐらいだ。恐らく向こうも似たようなものだろう」

「噂ですか？」

彼の言葉に刀弥が疑問を返す。

「ああ、彼は『遊滅ゆうめつの人形遣い』と呼ばれている者でね。今回のように技術情報を盗んだり、状況を引つ掻き回したりすることで有名な人物なんだ」

「できれば関わりたくない相手ですね」

個人の欲求で状況を引つ掻き回されるのはどう考えてもいい気分はしない。恐らく、そんな反応を楽しむ嫌な性格なのだろう。

可能なら再会したくない相手だ。

「ただ問題なのは、彼が保有している戦力だ」

「戦力ですか？」

意味がわからず首を傾げる刀弥。

カリエルが戦闘能力と言わず戦力と言ったのを不思議に思ったのだ。

「ああ、彼はアーティファクトと呼ばれる古代に作られた強力な道具を保有している。彼が保有しているアーティファクトの効果は言ってしまうえばスパーサーの格納容量を莫大にしたものでね。先程も見たと通り、そこに大量のゴーレムを保管しているのだ」

「ああ、あれですか」

先程の光景を思い起こす。

確かにいきなり大量のゴーレムが現れたのには驚いた。あれらは全部彼のアーティファクトに保管されていたという訳だ。

「ちなみに先程出てきた数など、まだほんの一部だ。噂では四、五桁は保有しているらしい」

「そんなに!？」

あまりの数に思わず刀弥は地の口調で叫んでしまった。

けれども、だとすると、かなりやっかいな相手だ。

「まあ、それだけの戦力を持っているんだ。国や軍の間では要注意事項としてかなり警戒されている。だが、にも関わらず彼はその警戒を掻い潜り侵入してくる。今回もそうだ。全く厄介だよ」

そう言っただけカリエルは溜息を吐く。

確かにそれだけのことをやってくるのであれば、十分警戒の必要な相手だ。国や軍としても早期に発見し、どう対処するか慎重に考えたいところだろう。

「と、いうことは先程のは彼にしてみれば遊んでいる程度の感覚と
いうことですか？」

「まあ、間違いではないな。少なくともその気になればあれ以上の
戦力呼び出すことは出来たはずだ。最も、そうなたとしても私
は負けるつもりはないがね」

華麗にウインクを決めるカイエル。そんな彼を見て刀弥は苦笑し
てしまった。

「……さて、君の戦いを見た感想を言おうと思うのだが……正直言
えば驚いた。大体、二〇日で斬波を完成させるとは思わなかったよ。
案外才能があるのかもしれないね」

「……ありがとうございます」

正直、褒められたのは嬉しかった。だが、あれだけの戦果を見せ
られた後だと自分がどれほど才能があるのかと疑問を覚えてしまう。

俺はあの領域ほどまでに強くなれるのだろうか。

そんな複雑な心境を彼は抱いていた。

その事を知ってか知らずか、カイエルが言葉を続ける。

「ともかくは第一段階は完了というところだな。後は自分でいろいろ
創意工夫などを施していけば自然と使いこなしていくだろう。後
はそうだな……刀弥君の剣術はどこかで教わったものなのかい？」

「はい。自分の家に伝わっていたものです」

それを聞いてカイエルは数度軽く頷いた。

「なるほど。君の世界は無限世界と繋がって間もないとかということはないかな？」

「実を言えば渡人ですけど……」

「ああ、それでか」

その返事で何か得心がいったらしい。

「あの……何か？」

一体何に得心がいったのか気になり、刀弥は尋ねてみる。

「いや、なに君の剣術を見ていて、いろいろと足りないなと思ってな。なるほど、閉鎖世界の剣術なら当然だな。こちらの世界に合った剣術であるわけがないのだから……」

「足りないですか」

確かにカイエルの言葉の通り、刀弥の剣術は自分の世界の戦いに対応するために考え、編み出されたもの。

この世界で戦えるように考えられたものではない以上、対応できない部分や足りないところがあるのは当然といえば当然だ。

「まあ、だからこそ、君は今の剣術をこの世界に対応できるように進化させていく必要があるとそう言いたかったのだ。足りないところの改善だけじゃない。今ある技術の応用、新たな技術の取得、融合……やれることはたくさんあるはずだ」

「なるほど」

問題点の改善はやっていくつもりだったが、彼の言う通り、今回

のような新たな技術の取得なども意識してやっていったほうがいいのかもれない。

「わかりました。ありがとうございます」

そう礼を言っつて刀弥が頭を下げる。その時だ。

「あ、いた!!」

聞き慣れた声が遠くの方から聴こえてきた。

声の方へと目を向ける刀弥。すると、そこにはこちらへとやってくるリアとリリスの姿があった。

どうやらゴーレムを倒して追いかけてきたらしい。

「……リア」

「刀弥。大丈夫？」

やってきて早々、リアは刀弥に容態を尋ねてきた。

「最早、定番と言える言葉だな」

その言葉に苦笑を浮かべる刀弥。

そこにカイエルが割って入り、刀弥の代わりに彼の状態を伝える。

「かなりダメージは受けているが、時間が経てば治る程度のものだ。心配するほどではないよ」

それを聞いてリアはほっと胸をなでおろした。

「よかった」

「そう言う、そっちはどうだったんだ？」

見たところ、少し怪我はあるようなので刀弥としては少し心配だ。

「ちょっと攻撃を受けちゃったけど、平気。心配しないで」

そんな彼の心配にリアが元気そうな声で答えた。どうやら本当に大丈夫らしい。

そんな彼女を見て刀弥は安堵の表情を浮かべる。

「それで、研究情報は取り戻せたの？ 後、なんでカイエルさんがいるの？」

そこにリリースが矢継ぎ早に質問を浴びせてきた。

「連絡を受けて逃走者の逃げた先を予測してここに来たんだ。それと刀弥君。そろそろその研究情報を渡してもらってもいいかな？」

「あ、はい」

よく考えれば、軍人である彼にすぐに預けてしまってもよかったのだ。

すっかりそのことを忘れていたことを己に叱責しつつ、刀弥はカイエルに宝玉を手渡す。

「確かに。では、これは私の手で届けておこう」

「お願いしますね。カイエルさん」

「ともかく街に戻るか」

「そうだね」

……
そうしてそんな会話をしながら四人は街へと戻っていくのだった

そうして事件から数日が経過した。

あれ以降、盗難事件は起こっていない。

カイエルの話だと、ルードの奴は飽きて別の所に行ったのだろうということだ。

適当に世界をさすらいながら状況を荒らし楽しむ。確かにハタ迷惑な存在だ。それが強力な戦力を保有しているだけに国や軍にしてみれば余計にたちが悪い相手だろう。

一方の刀弥たちの方はというと、旅の準備をしながらゆっくりと日々を過ごしていた。

カイエルから斬波に関して問題ないというお墨付きをもらい、留まる理由を失ったため、別の世界へ行くことにしたのだ。

ところが、目的地がないことを知ったりリスがお遣いを頼みたいから数日待つてくれと頼んできた。

目的地もすぐ出る理由もない二人はそれを承諾。かくして二人は準備を整えながら観光を楽しんだり、散策をしたりとゆったりと楽しく数日を過ごしたのだった。

そして本日、二人はリリスの家にやってきていた。

「これをサグルトという世界にあるコローンネスにいる知り合いに届けて欲しいのよ」

「……槍ですか」

目の前に出されたそれを見て形状を口にする刀弥。

彼の言葉の通り、目の前にあるそれは槍だった。

銀と紺碧色こんぺきを基調とした色合い。柄は細身だが、その分しなりも良さそうだ。

持ってみると少し重たいが、つまりそれは振れば高い攻撃力を持つことを意味していた。

「そう、槍。偶然、あつちに用事があつて出かけた時に酒場で知り合った友人がいるんだけど、その時に酔った勢いで約束しちゃったのよ。『よっしゃー!!! じゃあ私が最高の槍をあなたにプレゼントしてあげちゃう。何？ 槍なんて作ったことないんでしょ？ 舐めないで!!! 私を誰だと思ってるの!!!』って……不慣れで大変だったけど、幸いガーディアンの中にも槍を使う奴がいたおかげでどうにか完成することはできたわ」

つまり、ゴーレム開発で培った技術や遺跡で発見された技術を用いて作られた槍という訳だ。

「……なるほど。それで代わりに届けに行つて欲しいと」

槍を元の場所に戻しながら、刀弥が用件を反芻する。

「そういうことね。あ、報酬は先に渡しとくから。届けたらできたら手紙か何かで知らせて頂戴。他に聞きたいことは？」
「届け先の名前は？」

それで相手の名前を言っていないことにリリスはようやく気づいた。

「ああ、ごめんごめん。いい忘れてたわ。レン・ソウルベツサー。年齢はあなた達と同じぐらいだったかな。銀髪の短い髪の女性だから。宿屋は確か『夢の語り場』っていう名前だったかしらね」

それだけ情報があればどうにかなるだろう。

「わかりました」

「それじゃあ、お願いね」

そうして槍をスパーサーの中に格納し、報酬を受け取った二人。

「じゃあ、二人共元気でね」

「ああ、はい。リリスさんもお元気で」

「では失礼します」

そう言って二人はリリスの自宅を後にした。

外に出ると時間は昼ごろだということもあって、太陽は高いところにある。

そんな陽の光が落ちる通りを二人は歩いた。

「もう出発する？」

「そうだな……カィエルさんには先に別れの挨拶は済ませてるし、荷物の準備も終わってる。後は昼飯を食べたら出発できるな」

そうやって忘れていないかを確認していく刀弥。そうして問題がないことを確かめると、彼はリアに頷いた。

「じゃあ、食べたら出発だね」

「そうだな」

まず目指すはサルネスという街。そこにサグルトへ繋がっているゲートがあるのだ。

サグルトは砂漠が大半を閉める大陸の世界らしいので、そこで砂漠向けの準備をすることになるだろう。

特に刀弥にとっては初めての砂漠だ。しっかりと気を付けて準備をしなければいけない。

「それにしても……結構の時間滞在したな」

ふと、刀弥はこれまでの滞在を思い返す。大体二〇日と数日。かなり長期の滞在だ。

「まあ、修行があったからね」

「悪いなリア。時間が掛かってしまって」

そう言って謝る刀弥。けれどもリアはそれに対して首を横に振った。

「気にしない気にしない。私も結構楽しんだし……」

「まあ、確かにな」

元々、彼女が望んできた場所だ。最初の数日の観光はリアが一番

楽しんでいたのを刀弥も覚えている。

「それは刀弥が修行の最中も一緒。あれはあれで結構楽しんでたんだから。だから、そんなに気にする必要はないよ」

「そうか」

ならば、あまり気にしないほうがいいだろう。

そう思うと、まず刀弥は深呼吸をして気持ちをリセットすることにした。

息を吐くと同時に、少しだけ気持ちが落ち着いてくる。

すると、そのタイミングでリアが新たな話題を投げてきた。

「ともかく、まずは昼ご飯だね。何にする？」

「そうだな……それじゃあ、あそこにするか」

目に止まった店に指を指す刀弥。

そこには確かに飲食店が立っていた。まだ入ったこともない店だ。

「わかった。じゃあ、競争ね。負けたほうが奢るってことで」

そう言い終わると同時、いきなりリアが走り出した。

「あ、それはずるいだろ」

慌てて、刀弥も走り出す。

「だって、普通に競争したら私が負けるに決まってるもん。ハンデくらい構わないでしょ？」

「いきなりルールを決めておいて、よくそんなことが言えるな!!」

言い合いながら走る二人。青い空と白い雲はそんな二人を天上より優しく見守っていたのだった。

二話終了

三章終了

三章三話「盗人」(6) (後書き)

これで三章は終了です。

ありがとうございます。

只今、次のプロットを構想中です。

また、しばらくお待ちください。

短章三章〜四章「花と式とプレゼント」(1)(前書き)

はい。そういう訳で修正地獄を抜けて、ようやく新しい話を始めることができました。

今回は短編です。

大体、量としては一話分を予定しております。
それではどうぞお楽しみください。

短章三章〜四章「花と式とプレゼント」(1)

その街に辿り着いた時、思わず刀弥とリアは感嘆の声を上げてしまった。

今、二人の目の前には様々な色が咲き誇っていたのだ。
白、黄色、紫に赤、青に黒。それ以外にもいろいろな色があり、中には刀弥も目にしたことのない色まである。

二人の目の前に広がっていたのは花だった。
色とりどりの花が街中に咲き乱れていたのだ。

二人は今、リアフォーネのサルネスという街にいた。

リリスの頼みでサグルトという世界のコーネスという街を目指す二人。その世界に行くにはここにあるゲートを通る必要があったためだ。

「すごい！！ そこら中にお花があるね」

街の光景を見て感激したのか、テンションの高い声でリアが語りかけてくる。

「そつだな」

その声に刀弥は辺りを見回しながら首肯した。

道路だけではない。建物の壁や屋上。目に映る殆どの場所に花が咲いている。中には花を使って絵や看板を作っているところまであ

る始末だ。

「さすがは花の街というところか」

来る前に聞いた話を思い返しながら、刀弥がそんな呟きを漏らす。

『花の街サルネス』

リアフォーネ内では有名な花の名産地でリアフォーネの各地や隣の世界に花を出荷しているそうだ。

そのせいか、花の育てるだけでなく花を用いたアートも行なっているらしい。

街の光景もその一環だという話だ。

「だね。本当に驚いちゃった」

彼の言葉にリアが振り返り頷いた。

「とりあえずここで昼食をとるか」

「そうだね」

時間としてはもう時期お昼時だ。当然、この街に辿り着いたばかりの二人はまだ昼食をとっていない。

で、あるなら二人の思考がそこに行き着くのは当然の結果だ。

「どこにするんだ？」

「え〜と……あ、あそこにしよ。丁度、街の光景が見渡せるし」

そう言っただけリアが指差したのは三階にテラスのあるお店だった。

テラスには食事をするためのテーブルと席がある。

確かにあそこならいい景色が見渡せそうだ。

「確かにな。じゃあ、あそこにするか」

そうして二人はそのお店に向かうことにした。

店は店頭で注文した食事を受け取り、好きなところで食べる方式だった。刀弥の世界ではファーストフードなどで用いられているありきたりな方式だ。

注文した食事をお盆に乗せ、三階に上がる二人。予想通り、三階から見下ろした街の光景は絶景だった。

三階のテラスからは色とりどりの花で飾られた街が広がっていたのだ。

大半の建物が二階までのおかげで視界を遮るものはほとんどない。おかげで街中の花を眺めることが出来た。

ふと、街の中央のほうを見る。すると、そこには花で飾られた大きな時計があった。花時計だ。

花時計は時計の円の部分を赤い花で、針の部分を白花で飾っていた。ちなみに円の縁の部分は黄色の花だ。

そして、花時計の白い針は半分程回っていた。ここの世界の一日は三三〇タイム（約二〇時間四〇分程）　花時計にもその数字が黒い花で書かれている　なので現在の時間は大体一六五タイムぐらいだという事だ。

そんな花時計を見て、話し合う通行人の姿が幾人か見える。恐ら

く、昼になったがどこかで食べるかとそんな類の話をしているのだろつ。

ともかく刀弥達も適当な席を確保しようとテラスを歩き回る。その時だった。

「あら？ リア！！ リアじゃないですか！！」

突然、リアを呼ぶ声が二人の耳に届いた。

二人は声の方へと視線を向ける。

すると、驚きの表情を見せた女性が席から立ち上がり、こちらを見ているのが見えた。

年齢は刀弥よりも一回りくらい上だろうか。淡紅藤の長い髪と紫水晶の色をした柔らかそうな瞳が特徴的で服装は白董色を基調としたピッチリとしたスーツのような服と月白色のタイトスカートというこの世界では珍しいもの。

「……リネル？ もしかしてリネル！！」

彼女の声を聞いて少しの間考え込んでいたリア。だが、すぐに思いついたのか、大きな声を出して大急ぎで彼女のもとへと駆けていった。

「わあ、こんなところで会うなんて。偶然ですね」

「リネル。久しぶり〜」

そうして抱き合う女性たち。二人共かなりハイテンションだ。

「リネル。落ち着きなつて……ほら、リアも」

そんな二人を新たな人物が諫めた。

こちらは男性で年齢は先程の女性と同じくらい。金髪の髪と青い瞳をしており、服装は青いマントに黒いシャツとズボン、そしてその服の上に着た銀色の鎧。

男性の声に二人は我に返り慌てて周囲を見渡す。

すると、当然の如く、ほとんどのお客達が彼女達を見ていた。

「あ……す、すみません」

「ごめんなさい」

皆の注目に気が付いた二人はすぐに頭を下げ始める。

そんな二人の謝罪に人々は笑みを浮かべると、すぐに彼らは食事と観賞へと戻っていった。

やがて、二人は一通り謝り終わると、顔を上げすぐに話を再開する。

「でも、本当偶然だね。リネル。エスト。二人共元気だった？」

「ああ、見ての通り元気だ」

「はい。そういうリアは？」

そう答えリアに問い返すリネルと呼ばれた女性。

その問いにリアはようやく自分の相棒の存在を思い出した。

「え？ あ！？ あれ？」

慌ててリアはその相棒を探し始める。
その相棒はというと、丁度、彼女の傍までやってきたところだった。

それに気が付いたリアは刀弥に謝り始める。

「あ、御免。知り合いに再会しちゃって、つい……」

「いや、別に気にしてないから」

友人に再会したのだ。驚き、はしゃぐのは無理ないだろう。

まあ、できれば場所に気を配るべきだったが、刀弥が抱いた感想はその程度だ。放って置かれた事については全く怒っていない。

そんな二人のやり取りをリネルとエストと呼ばれた二人は興味深そうに眺めていた。

「ねえ、リア。その人は？」

どこかワクワクした様子でリアに尋ねるリネル。
それにリアは答えた。

「えっと、今、一緒に旅をしている風野刀弥って人なの。刀弥。こっちはリネルト・トリキニアとエストハルト・ライエントっていうの。愛称はリネルとエスト」

「よろしくね。刀弥」

「よろしく」

そう言ってリネルトとエストハルトは挨拶をしてくる。

「よろしく」

それに刀弥は応えた。

「とりあえず席に着かないか？ 丁度、椅子は二つ分あるし……」

エスハルトの提案を聞いて刀弥が彼らが座っていた席を見る。確かに彼らのテーブルには二人分椅子が空いていた。

「じゃあ、そうしよっか？」

「ああ、そうだな」

折角のリア達の再会だ。断る理由もない。

そうして刀弥とリアはエスハルトに促されるまま、二人の座っていたテーブルに席を着く。

「それにしてもリアが男の人と旅をしてるなんて……」

席を着いて早々、リネルトが意味深な笑みを浮かべリアの方を見た。

明らかにその事だからかう気満々な様子だ。

彼女の言葉にリアは困った顔を浮かべながらこう返す。

「えっと、彼、渡人だから、この世界の事を全く知らなくてね。それで出会った縁もあって一緒に旅してるの」

その返答にリネルトもエスハルトも目を丸くし、反射的に刀弥の方へと視線を向けた。

彼らの反応に刀弥は思わず怯んでしまう。

「そうなんですか？」
「えっと……まあ、その通りです」

見開いた瞳を刀弥に向けながらリネルトは質問する
そんな彼女に刀弥はたじろいでしまいが、それでも何とか質問に
は答えた。

すると、先程までの驚きはどこへやら、今度は珍興味津津な様子
でリネルトは刀弥を眺める。

「へ〜。渡人なんて初めて見ました。あ、もしかしてその服とかも
その世界の物なんですか？」

「え〜と、まあ、そうです。下の奴はいろいろあつて捨てましたが
……」

「そうなんですか。あ、そうだ。名前の字体を見せてもらってもい
いですか？ どんな風に書くか興味がありますので……」
「いいですけど……」

そうして矢継ぎ早に質問をしてくるリネルト。それに刀弥はタジ
タジだ。

リアとの知り合いだからだろうか。向こうには遠慮がない。興味
のあること、気になったことを次々と訊いてくる。

一方、刀弥の方はというと、相手の事を全く知らないのどう対
応していったらいいのかわからず困惑していた。

興味を持たれるのは仕方がないとしても、その質問が次から次へ
と飛んでくるものだから正直、たまったものではない。

どこかで間が欲しいのだが、遠慮気味に言っ通じるのか、強気

に出て大丈夫なのか、その辺りがわからないので言い出しづらい。
それ故に彼は困っていたのだ。

そんな彼をエスハルトが助ける。

「リネル。少し落ち着け。彼も困ってるようだし」

「え？ あ……」

彼の言葉でようやくリネルトは刀弥の困惑に気が付いたようだ。
ようやく質問のラッシュが止まった。

「あ、えーと、ごめんなさい」

「い、いえ……」

詫びてくるリネルトに刀弥はそう返す。

別に謝られることではないが、間ができた事に関しては正直助かった。

刀弥は視線でエスハルトに礼をする。

彼の視線に気が付いたのかエスハルトの顔に笑みがこぼれた。

「リネル。リアと違って彼は初対面なんだから、もうちょっと遠慮したほうがよかったな」

「だね」

エスハルトの意見にリアが同意する。

しかし、刀弥の記憶が正しければ、彼女は困惑していた自分を楽しそうに眺めていたはずだ。

そんな彼女が同意してもなとは思うが、あえて口には出さない。

「そういえば、お二人はここにはどういった理由で？ やはり、サ
グルトへ？」

ともかく刀弥は新たな話題を出すことで彼女達の意識を自分から
別のところへ向けさせることにした。

彼の新たな話題にリアも便乗する。

「あ、それは私も気になるかな」

興味津々という顔でリネルト達を見るリア。

恐らく同じ方角であるなら、一緒に行かないかと誘うつもりなの
だろう。

刀弥の問いに答えたのはエスハルトだった。

彼は少し頬を赤く染めながら口を開く。

「えっと……実はここで式をあげるんだ」

恥ずかしそうな声で彼は刀弥達にそう告げたのだった。

短章三章〜四章「花と式とプレゼント」(2)

「へ〜。ここで式を挙げるんだ……」

式を開く建物を見上げながらリアが口を開く。

現在、刀弥とリアの二人はリネルトとエスハルトが式を開く場所を見学していた。

エスハルトから式の話聞いた刀弥とリアはすぐさま二人に祝福の言葉を送った。

それを笑顔で受け取るエスハルトとリネルトの二人。

それから二人は刀弥達もよかつたら式に参加してくれないかと頼んできた。式は明日の昼過ぎらしい。

そんなにならりリスのお遣いにも支障はでないだろう。

そのため、刀弥とリアはすぐに参加することに決めた。

それから後はリネルトの提案もあって式が行われる場所を案内してもらい、そうして現在に至るのである。

「これは……教会か？」

リアと同じ建物を眺める刀弥。彼の目には驚きの色があった。

純白の壁と黒い屋根。相反する二つの色は清潔さと質素さを作り出し、どこか静かな雰囲気周囲に与える。屋根の上には金色に光

る鐘。鐘は風に揺られており、金色の楽器からは小さな音が漏れていた。

入り口の壁には『ファートウム』と読める文字のオブジェ。どう見ても教会にしか見えない。

「ファートウム教の教会だね」

「ファートウム教？ 宗教か？」

初めて聞く名前に首を捻る刀弥。そんな彼の疑問に頬の端を緩めながらリアが答える。

「うん。無限世界で一番大きい宗教で『出会いという運命』を信仰しているの」

「……なんだそりゃ？」

リアの答えに思わず刀弥は呆れた言葉を返してしまった。

てつきり、無限世界を作った神様とか、何かを成した英雄などを予想してただけにその内容は刀弥にとって予想外のものだったのだ。

「元々は世界と世界が出会った運命に感謝し敬おうという考えから始まったんですけど、そこから転じて人や出来事との出会いの運命という身近なものに変わったんです」

「まあ、無限世界内にある宗教の中でも特殊なのは確かだ。最もその分、身近に信仰されたりするんだけどな」

「はあ、なるほど」

刀弥としてはまだよくわかっていなかったが、とりあえず、そういう宗教だということに納得するしかなかった。

ふと、教会の周囲を見渡すと、街の人々が飾り付けをしたり、荷物を運んだりしている。どうやら式の準備をやっているようだ。

「式の準備とかは街の人達がやるんだな。俺の世界の結婚式はそれを仕事にしている人に準備とかは頼むんだけどな」

「あ、私のところに似てますね」

そんな様子を見て、自分の世界の結婚式を思い出しながら感心する刀弥。

そんな彼にリネルトが反応を返してきた。

「私のところもそれを生業としている人達に頼みます。ただ、外から来た人の場合、祝う人達は周囲に住んでいる人達に頼むことになりですけど」

「無限世界の旅人とかじゃあ、知り合いが遠すぎて呼ぶにもかなり時間が掛かるからな。だから、代わりに街の人達が見届け、祝う役をするのさ」

「ああ、なるほど」

これは刀弥もすぐに理解できた。

確かにエスハルトの言う通り、知り合いを呼ぶのはかなり大変だ。かなり遠くの世界なら、呼んで移動するだけでも多くの日数が掛かってしまう。それは招待した側だけでなく、された側にとっても大変だろう。

さらにアレンとシエナのような旅人を招待したいのなら、その難易度はさらに跳ね上がる。

で、あるなら必然的に見届け役と祝福者は近場の者に頼むしかない訳だ。

そういう意味では二人の知り合いであるリアが偶然とはいえ、通

りがかったのは二人にとっては嬉しいことだろう。式の参加を進めてくる気持ちもわかる。

「それにしても皆、明日のために頑張ってるな」

そんな事を考えていると、準備をしている街の人達を眺めていたリアが不意にそんな事を言ってきた。

「本当にありがたい思いで一杯です」

「と、同時に申し訳なくって『何か手伝いましょうか？』って言うてみたんだけど」

「『主役は手伝ったら駄目』とか言われたんでしょ？」

エスハルトの言葉を引き継ぐように、リアが相手の言うてきた内容を口にする。

リアのその言葉にリネルトとエスハルトの二人は共に頷いた。

「まあ、そういうことだな」

苦笑を浮かべるエスハルト。

その会話に刀弥も混ざる。

「なんかそういうジnkクスというか、決まりでもあるのか？」

「別にそういう訳じゃないよ。ただ、祝われる側が祝う準備を手伝うのもおかしい話だろっていうこと」

言いたい事はわからないでもない。だが、刀弥としてはエスハルト達側の感情も理解できた。

「まあ、リネル達の気持ちはわかるけどね。旅に出る前に一回だけ知り合いの式の準備を手伝ったことがあるんだけど、やっぱり、お二人ともそんな感じだったし……」

ウインクを見せ、リアが微笑する。

そんな彼女の話聞いてリネルトとエスハルトは苦笑を浮かべるのだった。

その後、リネルト達と別れた刀弥達は宿屋で部屋をとった後、買い物に出かけた。

サグルトに向かうための準備のためだ。

店の人に砂漠に必要な物を尋ねながら、買い物を進める二人。

店の人によると、慣れない人はガイドというその場所に関するしつかりした知識を持つ案内人を雇って移動してるらしい。

何分、二人共砂漠は初めてのため、その選択肢は考慮したほうがいいだろう。

宿屋までの帰り道はその点についての相談だった。結局、二人はガイドを雇ってコーネスへと向かうことにした。

これで自分達に関する用事は終わり、後は明日の結婚式に参加すれば出発できる状態だ。

式が終わると軽い立食パーティが行われる。それに軽く参加した後、二人は発つつもりだった。お使いを頼まれた手前、あまり長居

するわけにはいかないからだ。

既にリネルトとエスハルトにはその旨は伝えてある。二人共、忙しいのに参加してありがとうとお礼を返してきた。

しかし、よく考えるとは式は昼過ぎ、つまり午前中は暇だということになってしまう。

さすがに明日はリネルトもエスハルトもいろいろあるらしい。

さて、どうやって時間を潰そうかと刀弥がそんなことを考えていた時だった。

「あの二人が結婚か」

ふと、リアがそんな台詞を口から漏らした。

「どうしたんだ？」

それを聞いて刀弥は足を止めて振り返る。

二人が今いるのは宿屋の前。実際、刀弥は中に入ろうと扉に手を伸ばしかけていたタイミングだった。

「ん？ 前からお似合いだなって思ってたんだけど、ようやくなんだなって思ってたね」

「前からって……リアが二人と出会った時の話か」

そういえばその辺りの話を全く聞いていないことに今更ながら刀弥は気付く。

せつかくなのでその辺りの話をリアに聞いてみることにした。

「どういふ縁で出会ったんだ？」

「え〜とね、一人で旅をしていた時に男の人達に絡まれてね。それを二人に助けてもらったの。で、しばらく間、一緒に旅してたって訳」

なんとなく情景はイメージできる。下心のあった男達がリアに近づき、それを二人が撃退したのだろう。

「俺は会ってそれ程時間が経ってないからわからないけど、二人はどんな人なんだ？」

服装などから二人がシエナやアレンのような同郷の間柄でないのはなんとなくわかっていた。だが、性格などまではまだこの程度の付き合いでは計り切れない。

「え〜とね。エストは見ての通り剣士。性格は真面目でしっかりしてるんだけど、ちょっと真面目すぎる所があったかな。当時は不意打ちとかは卑怯みたいな考え方持ってたし……リネルは普段は明るくて素敵な女性なんだけど、興味があることには刀弥も知ってる通り、かなり積極的になるのが難点かな」

「だな」

苦笑いを浮かべて返事を返す刀弥。

今、彼の頭の中では矢継ぎ早に質問をしてくるリネルトの姿が思い出されていた。

興味津々な顔で尋ね、答えると嬉しそうな表情を浮かべる。

悪い人ではないのだが、あの状態の彼女は刀弥としては少し苦手だった。

「あ、後、魔具じゃない銃を使うの。電気が動力で引き金を引くと

光弾が飛び出すんだよ」

「……どこの未来系アニメだ」

リアに聞こえないよう小さな声で刀弥は呟く。
こんなところでそんな道具にお目にかかれるとは思ってみなかった。

しかし、よくよく考えてみると、剣に、魔術に、魔法系道具に、思考するロボット、そして果ては未来系銃まであるときた。本当に、なんでも有りである。

とんでもない世界だな。

そんな思考が頭をよぎった。

これは有り得ないのを探すほうが大変かもしれない。
いつその事、それを楽しみにするのもありかもなとそんな考えが
浮かんだ所で、刀弥はリアの話へと集中し直す。

幸い、リアはそんな刀弥に気付かないまま話を続けていた。

「でね、一緒に旅をしてただけど、リネルが首を突っ込んで、それをエストがフォローするってパターンが多かったなあ」

懐かしむように過去へと意識を向けるリア。

「シエナとアレンのような関係ってことか」

「そうそう、それぞれ。あゝ、どうしてあの二人と出会った時に思い出さなかったんだろう」

どこか悔しそうな声色で彼女は声を上げた。

そんな彼女の様子に刀弥は肩をすくめる。

「まあ、たまに真面目なエストがトラブルを生むってパターンもあったんだけど、その時はリネルがアイデアを出したりしてフォローとかしてたかな。最も、大半の事件はリネルがきっかけだったけどね」

「なるほどな」

どうやらアレンとシエナの様な片方がもう片方をフォローする関係ではなく、双方が双方をフォローし合う関係だったようだ。

リアに借りを作りっぱなしの自分もいつかそんな関係になれるのはだろうか、ふと、そんな思いが刀弥の脳裏をかすめる。

「大体、そんな感じかな。他に聞きたいことはある？」

「二人に関しては特にないな。それ以外なら当時のリアの事とか聞いてみたいな。何か失敗とかあるのか？」

「もう、刀弥ったら……」

からかい半分の口調でそう言ってみると、少し顔を赤くしてリアが抗議の声を返してくる。

その反応から、何か失敗があるのは容易に想像できた。

「まあ、その話は明日の午前中にでもするか。どうせ暇だしな。それよりも、そろそろ宿屋に入ろう。時間も時間だしな」

上を見ると空は星と夜色に染まっている。話し込むのに夢中になったせいで、結構な時間が経過していたのだ。

「うわぁ、本当だ」

刀弥と同じく空を見て、時間の経過に気付くリア。
刀弥はというと宿屋の扉に手を伸ばし、扉を開いていた。

「ほら、入れ」

「あ、ありがとう」

そうお礼を言ってリアは宿屋の中へと入っていく。
彼女が宿屋の中に入っていくと、その後刀弥が続き扉を閉めた。

「それじゃあ、刀弥。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

そうして各々の部屋に辿り着くと、互いにおやすみの挨拶を交わし部屋へと入る。

部屋は白い壁と赤色の床というたって普通の部屋だった。

家具もタンスとベッド、机など、どこにでもありそうな物だけ。

色とりどりの花の存在はどこにもない。

唯一ある花は窓辺に置かれた花壇のみで、それも暗色系の色の花があるだけだ。

カラフルな花が部屋になかった事は意外だったが、実のところ刀弥は少しホッとしていた。

もし色とりどりの花が部屋のそこら中に飾られていたら、さすがに目が痛くて堪らなかつただろう。下手しあら落ち着いて眠ることもできなかつたはずだ。

その辺の気遣いはできていたらしい。

ともかく、寝る前に刀弥は風呂に入る。

浴室に入ると、黄色の花が刀弥を出迎えた。

どこにでも花があることに頬を緩めつつ、彼は風呂の時間を楽しむ。

そうして、風呂から上がり服を着ると、彼はそのままベッドに倒れるようにダイブした。

フカフカのシートと暖かな布団。それに満足しつつ刀弥は目を閉じる。

やがて、暖かな気分に包まれた彼の意識は緩やかな眠りの中へと落ちていくのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7367t/>

無限の世界

2012年1月14日01時12分発行